SD 85 06

MOROCCO SPAIN PORTUGAL

PARKER AND SCOGIN ARCHITECTS, INC.
1365 PEACHTREE STREET, N.E.
ATLANTA, GA 30309
404-873-4445

特集

モロッコ, スペイン, ポルトガル
〈いえ〉と〈まち〉調査紀行

•

論文:

文化としての住まい　鈴木成文

野蛮な形に可能性を見た　服部岑生,——他

MOROCCO:

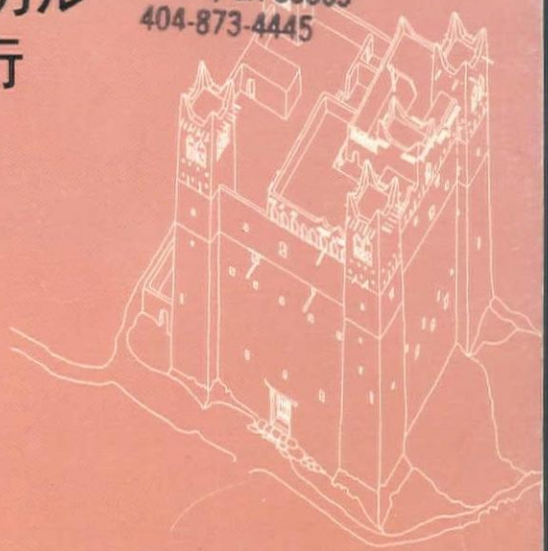
アグルムース, アイト・ベンハドウ, アイト・リディ, アスニ, フェズ,
グルミマ, マラケシュ, ティネリール, 他

SPAIN:

アルチドーナ, カサレス, チンチョン, コルドバ, グァディス,
モンテフリオ, セテニール, 他

PORTUGAL:

アルファマ, カスカイス, ナザレ, オビドス,



ISSN 0563-0991

スペースデザイン都市・建築・芸術の総合誌
第249号昭和60年6月1日発行毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第3種郵便物認可
昭和59年10月9日国鉄首都特別扱承認雑誌第7825号





荻須高徳　ポスターのはられた家 50P

galerie taménaga

荻須高徳近作展

東京　6月24日(月)～7月6日(土)　日曜開廊
大阪　8月1日(木)～8月14日(水)　日曜閉廊
AM 10:00～PM 7:00

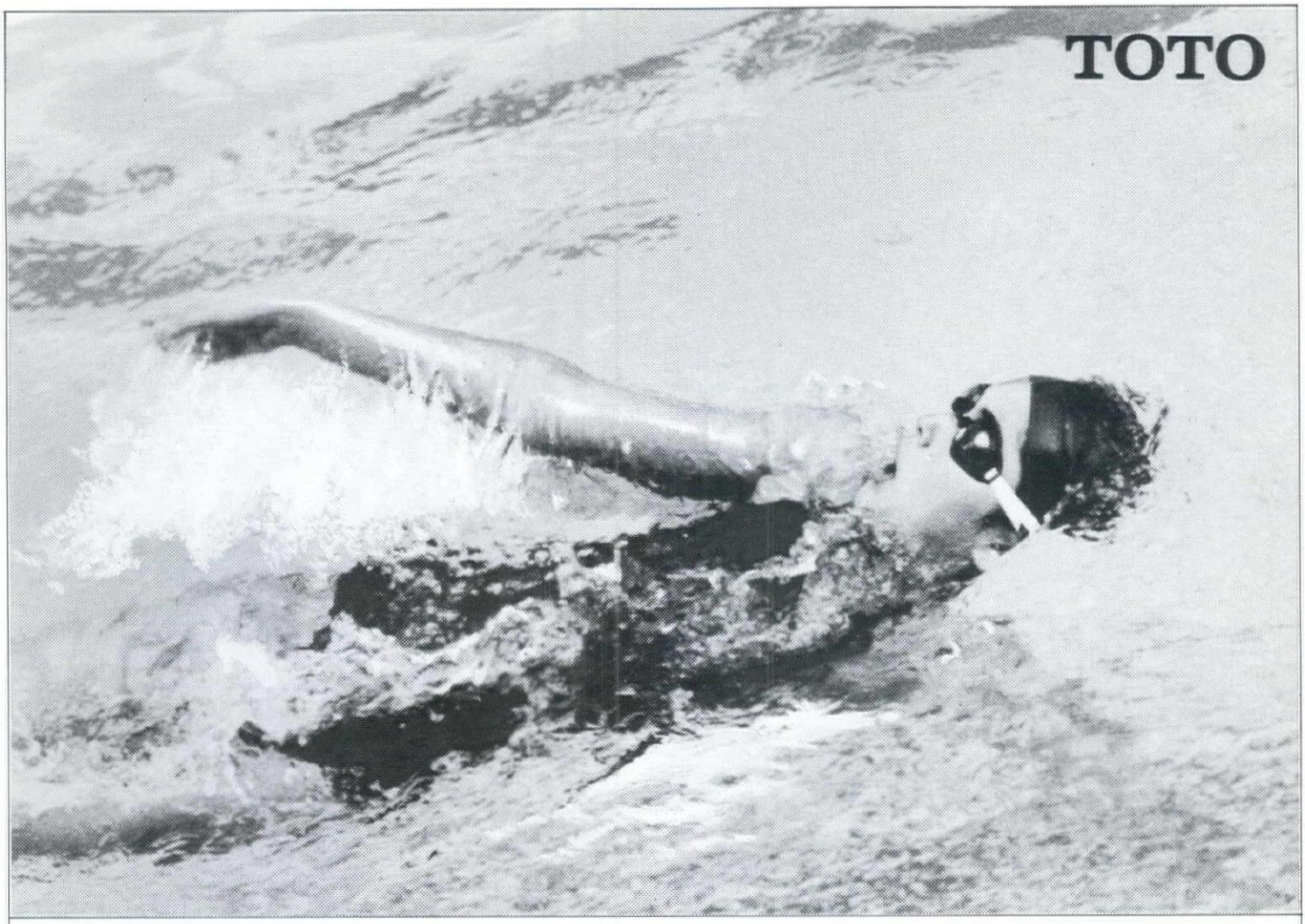
日仏画壇の接点となる“ためなが グループ”

契約作家：Paul AIZPIRI　Bernard BUFFET　Eugène BABOULÈNE
André COTTAVOZ　Jean FUSARO　Paul GUIRMAND
Michel RODDE　Claude WEISBUCH　Takanori OGUISS

ギャルリー　ためなが
東京　東京都中央区銀座７－５－４　TEL：03-573-5368
大阪　大阪市東区道修町４－７　TEL：06-202-3434
パリ　18, Av. MATIGNON, 75008　PARIS, FRANCE
TEL：266-61-94

tac 東邦アート株式会社
東京　東京都中央区銀座８－９－13　TEL：03-573-5377
大阪　大阪市東区道修町４－７　TEL：06-202-0852

パリでのお買上げの作品はご帰国後日本で円払いの便宜もございます。



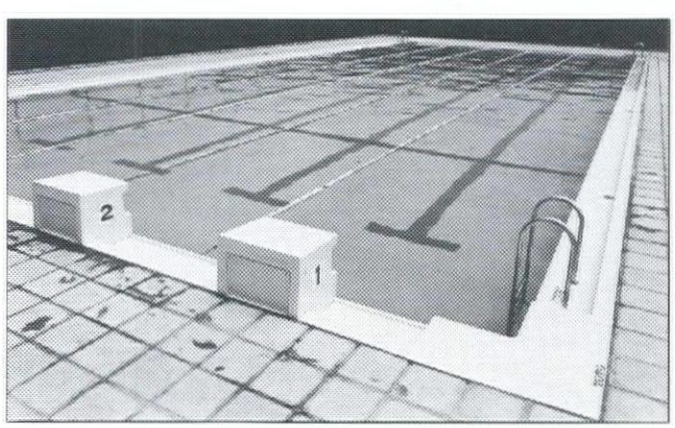
主流、FRP

いま、プールはFRPの時代。

TOTOが、FRPの世界をひろげました。既にご好評を頂いておりますポリバス・Pタンクなどの FRP製品。TOTOがこうした豊富な経験と実績に基づき、先進の技術と斬新なアイディアを駆使して開発したのが"FRPプールです。FRP製品には、浴槽・水槽・ボートなどがあり、プールの素材としても理想的なものです。これからはプールもFRPが主流の時代です。

TOTO FRPプールは……

- ●耐食性に優れています。
- ●強度・耐久性も抜群です。
- ●施工期間が短縮できます。
- ●設置方法は幅広く対応できます。
- ●維持管理が容易にできます。
- ●安全性への配慮も十分です。



TOTO FRPプール

東陶機器株式会社 ●本社／〒802 北九州市小倉北区中島2丁目1番1号 ☎(093)951-2293
資料をご希望の方は、ハガキに住所・氏名・職業・電話番号をご明記の上、上記広告宣伝部までご請求ください。

技術にこころをこめて75年

HITACHI



知能は鋭敏
動きは柔軟

先進16ビットマイコン搭載。
知能群管理エレベーター
(CIP-52000)新登場。

待ち時間の少ない経済性・信頼性にすぐれた効率のよいエレベーター……このテーマにチャレンジしつづける日立が自信をもっておすすめする知能群管理エレベーター(CIP-52000)。この知能群管理エレベーターは、従来の群管理制御系に加えて、新たに「学習機能系」と「知能系」として、それぞれ16ビットマイコンを搭載。群管理プログラムの自動修正を可能としたものです。すなわち、ビルの個性(用途・立地条件など)、季節、曜日などによって変わるあらゆる利用状況の変化に、自ら適応していく能力を持っています。いわば、自ら「考え、そして成長する」能力を備えたオフィス、ホテルの機能をグンとアップします。

知能群管理(CIP-52000)の特長

- 変化する利用状況に的確に対応します。
- 混雑も未然に防止できます。
- 特別行事に対してもあらかじめ行事予約ができます。
- 知らず知らずのうちに効率的に節電できます。
- 予約精度を99%以上に高めました。
- 戸の開閉時間を状況に合せ自動調整し無駄をなくします。
- 稼動状況のモニターも可能です。

日立知能群管理エレベーター(CIP-52000)

株式會社 日立製作所

お問い合わせは機電事業本部/営業本部 〒101 東京都千代田区神田駿河台4-6 電話 東京(03)258-1111(大代)または最寄りの支店へ
大阪(06)203-5781・福岡(092)741-5831・名古屋(052)251-3111・札幌(011)261-3131・仙台(0222)23-0121・富山(0764)33-8511・広島(082)223-4111・高松(0878)31-2111

National

エネルギーの効率利用と設備工事の合理化には、ビル空調も個別方式をおすすめします

ナショナルのビル個別空調システム

イニシアルコスト13%減※
ランニングコスト22%減※
ともに有利な個別方式

省エネルギー関係法令の公布に見るまでもなく、建築物にとっての省エネ対策——特に空調エネルギーの効率化は、ビル建築計画にとって重要テーマです。

住宅と異なり、ビル空調に個別方式が主流となりえなかったのは、設備費と機能の対比（コスト・パーフォーマンス）や、工事・メインテナンスに問題があったようです。

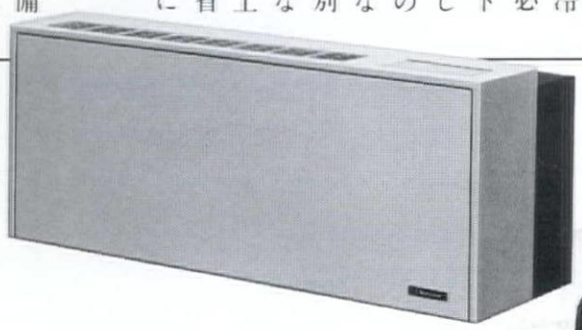
これらの問題を解決したのがナショナル・ビル個別空調機——大幅なコストダウンを可能にした省エネタイプの個別空調システムです。

※弊社計算による

多機能で、しかも簡単な操作
工事の合理化と省スペースにも

冷房・暖房・換気・除塵・外気冷房・熱回収など、ビルの空調に必要なほとんどの機能をコンパクトにまとめていますが、負荷に応じた冷暖切替を自動化していますので、操作はまったく簡単で特殊な技術を必要としません。また個別方式ですから、冷凍機・ボイラーなどの大型機器や、複雑なダクト工事が省略できますので、工事の省力化、ビル本体の省スペース化にも役立ちます。

あらゆる面で有利なナショナル・ビル個別空調システムを、皆様の設備計画・設計に、ぜひご採用ください。



エアーバランサー

室内の汚れた空気の強制排気が可能な、全電気ヒートポンプ方式。

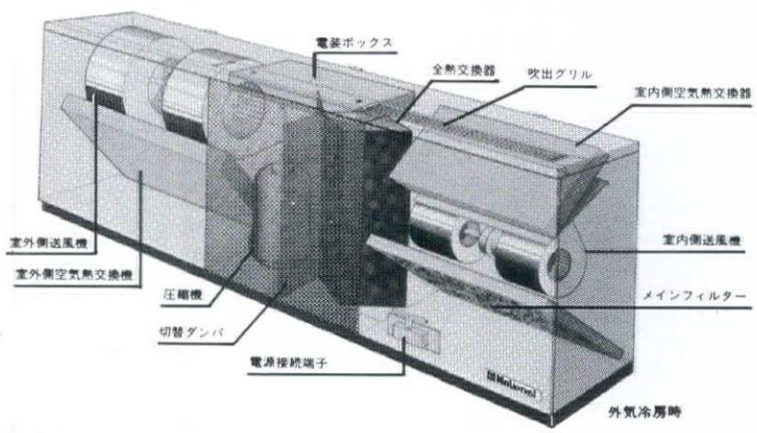
- 大口径シロッコファンにより高静圧を得ています。外風の影響を受けず安定運転が可能。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 半導体ヒータを補助として採用、暖房の立上り特性がよく、吹出温度を自動的に一定化。
- 2段サーモスタットによる節電運転。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



パコスメイク

熱交換により排気熱を回収、エネルギーを有効に利用する全電気ヒートポンプ方式。建築モジュールに合わせた施工により、内・外観ともにシンプルに納まるスルー・ザ・ウォールタイプ。

- 全熱交換器による冷・暖房の排気熱を回収。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 3段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 高性能カートリッジ形フィルター内蔵による高い空気清浄力。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



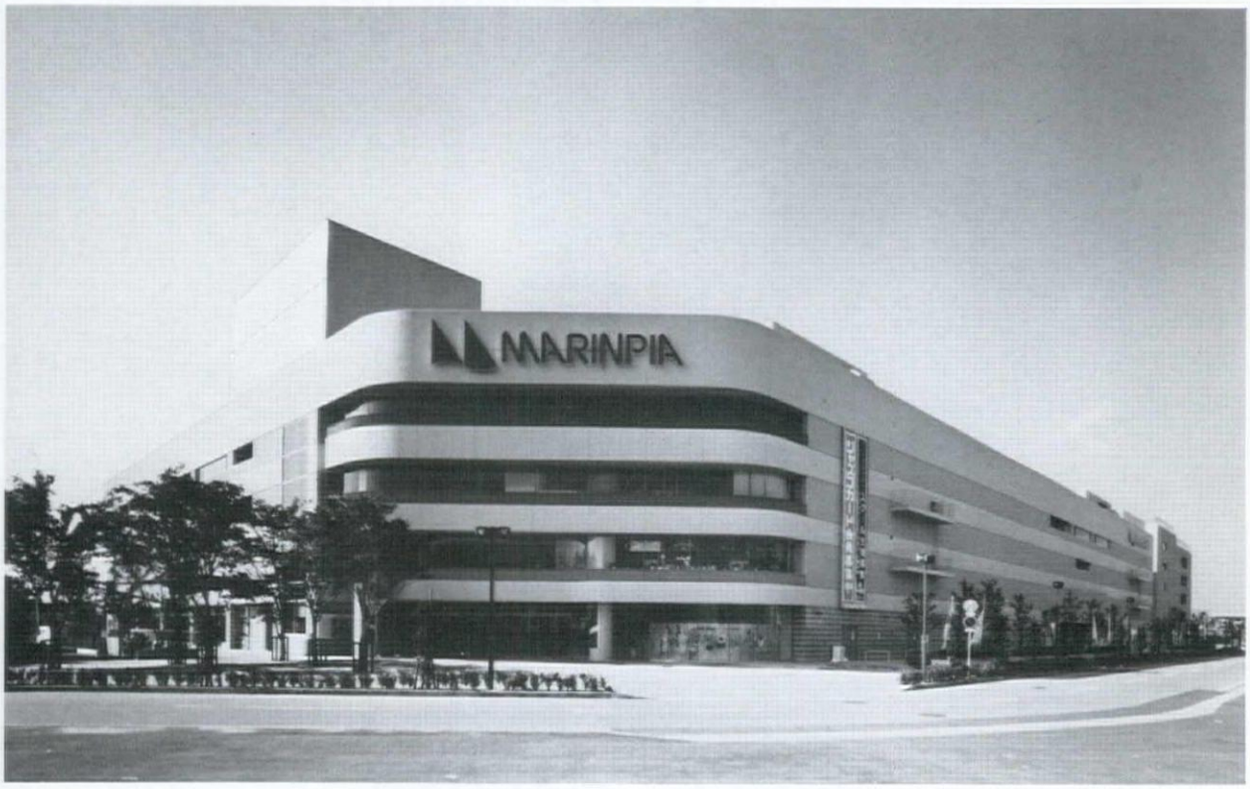
松下電器産業株式会社
松下精工㈱冷暖送風事業部
〒251 藤沢市辻堂元町6丁目4番2号 TEL(0466)34-2111(代)

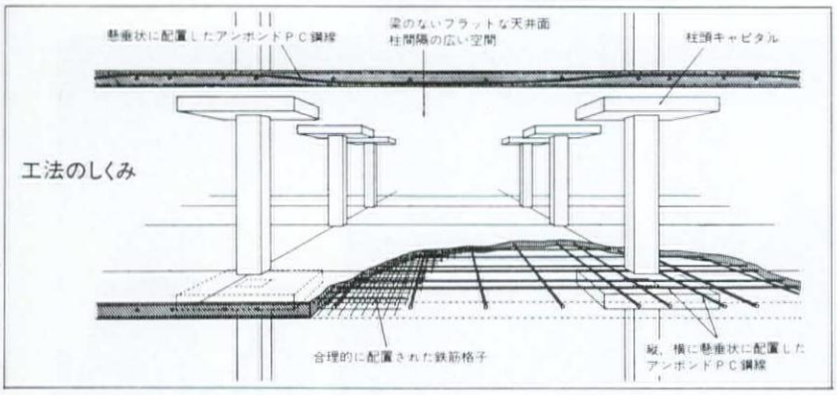
カジマ フラットスラブ 工法

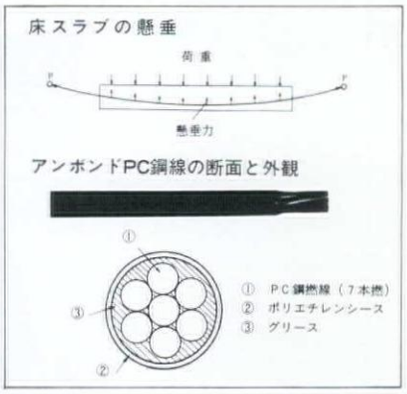
特許出願中

アンボンドPC鋼線を用いた中低層RC造建築に最適な工法

カジマ フラットスラブ工法は、梁がなく、床スラブを柱で直接支える構造で、電算による精密な応力解析により強度設計を行い、床板にプレストレストを導入して撓みを防止しています。　このためスパンの大きな梁型の出ない空間を極めて経済的に建設することが可能です。梁がないため鉄筋工事の省力化や型枠工事のシステム化が図られ工期短縮と品質の向上も併せて達成しており、ショッピングセンターや倉庫、工場などの中低層RC造建築に最適な工法です。







■カジマ フラットスラブ工法のメリット〈構造・工法の特徴〉

- 型枠、鉄筋工事の大幅な省力化による工期短縮とコストダウン
- 床スラブの性能が向上するので柱間隔を広くできます。
- 梁がないので配管、ダクト計画が容易で、施工性が向上します。
- 階高を低くできるので日影上有利で、また階段面積を減らせます。
- 型枠、鉄筋の施工精度が高く躯体が高品質です。

■実　績

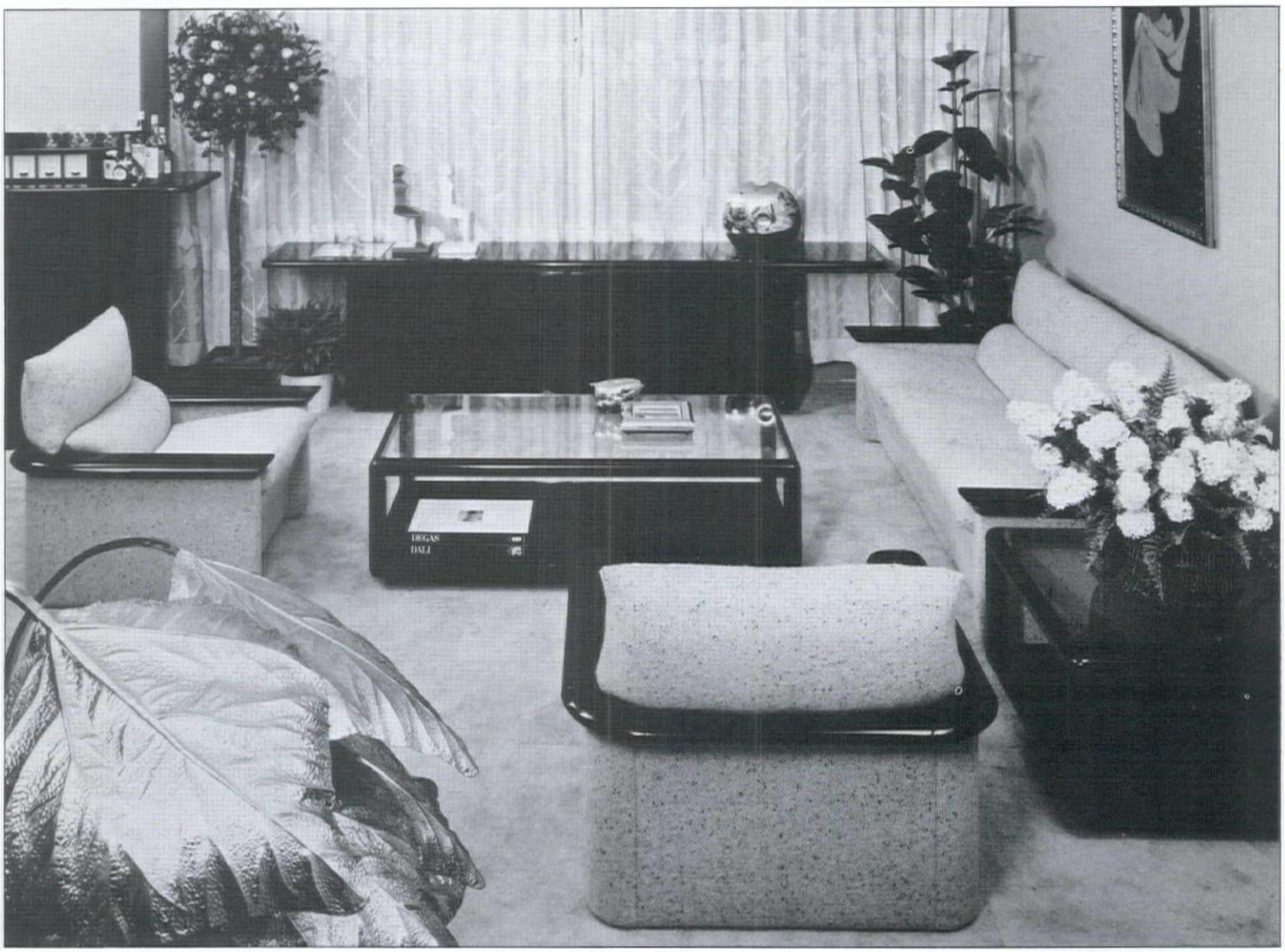
- 店舗　・京浜急行上永谷SC(1982)
  - ・三井不動産八幡宿SC(1983)
  - ・西友ストアー大森店(1983)
  - ・ダイエー海老名SC(1984)
  - ・稲毛海浜ニュータウン商業施設"マリンピア"(1984)
- 倉庫　・三菱倉庫大黒埠頭倉庫(1983)
- 流通　・ダイエー千葉食品センター(1983)
- オフィス　・中国電力可部営業所(1980)
  - ・日本総合建物第2ビル(1983)
  - ・ナチュラルハウスビル(1984)
- 研修所　・ヤマハピアノ技術研修所(1980)
- 病院　・愛誠病院(1981)
  - ・長田病院(1983)
- ハウジング　・第一ホテル エンタープライズ
  - 平塚ガーデンホームズ(1983)

デミング賞
〈実施賞〉受賞企業

鹿島建設
KAJIMA CORPORATION
本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7 お問合せ先 建築技術部(03)404-3311

Tecno

EXCELLENT FURNITURE FROM ITALY



sofa set TS11 table TX17

mobilia

モビリア 株式会社

東京都港区麻布台2-3-5 〒106 ☎03 582 3341
大阪市東区安土町2-30 大阪国際ビル 〒541 ☎06 261 9951
名古屋市中区丸ノ内2-20-19 名古屋東京海上ビル 〒460 ☎052 221 6393

The Tecno Collection

Tecno/Milano

テクノ社の製品は、総てイタリアを代表する家具デザイナー、オズワルド・ボルザニとヴジェニオ・ジェルリを中心とするデザインチームによって設計されています。直線と曲線の組合せによる独自の三次元フォルムは、場所を選ばない、用途の広いモダン・ファニチュアとして、広く世界で愛用されております。

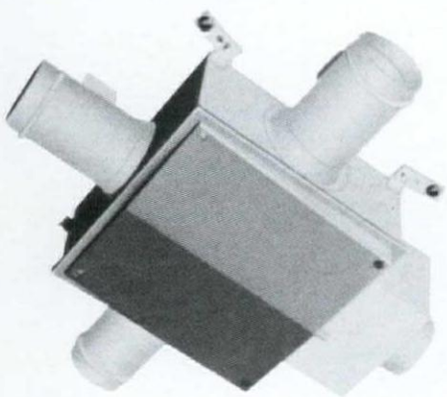
広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

先端技術で省エネルギーに大きく貢献!

旭電業のエレクトロニクス製品

中間ダクト用ファンコントロールシステム

(風量制御電動ダンパー付中間ダクト用ファン)



ファンコントロールシステム付
STF-16MDL4

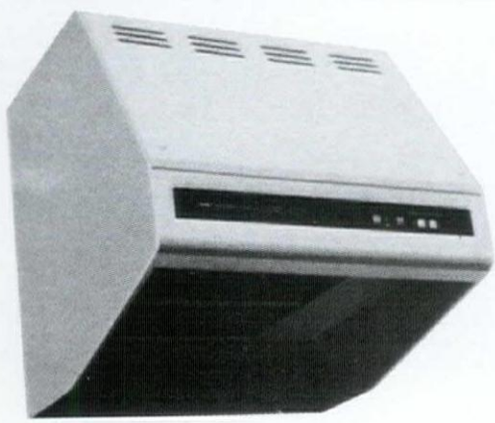
弊社で開発したこのシステムは、電動機の速度の切換えと、ファンの各々の吸込口に接続される電動ダンパーの組合わせにより、各部屋の使用状態に適した換気を行うという画期的な装置です。

① 用途により各部屋の必要換気量は異なりますが、使用状態に適した換気を行うため、常に3室(2室)合わせた換気量でファンを運転していた従来のシステムに比べ、運転電力の無駄がありません。

② 使用状態に合わせた換気量ですから、騒音も大幅に押えることができます。

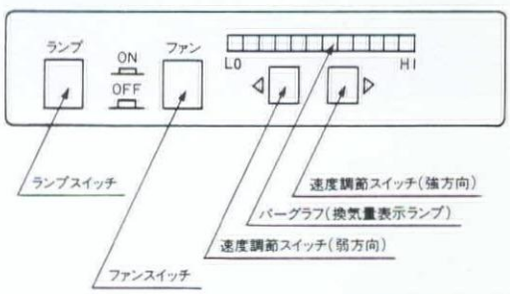
③ 2室・3室用の中間ダクトファンに装備可能です。

無段変速型レンジフードファン AR-35TS·AR-35NS



特 長

1. 速度制御(換気量制御)の方法は、当社独特の電子制御方式です。
2. 超低速より無段階に速度調節できます。
3. 騒音、振動、電波障害が全くありません。
4. 低速運転が可能ですから、省エネルギーの効果が大いに期待できます。



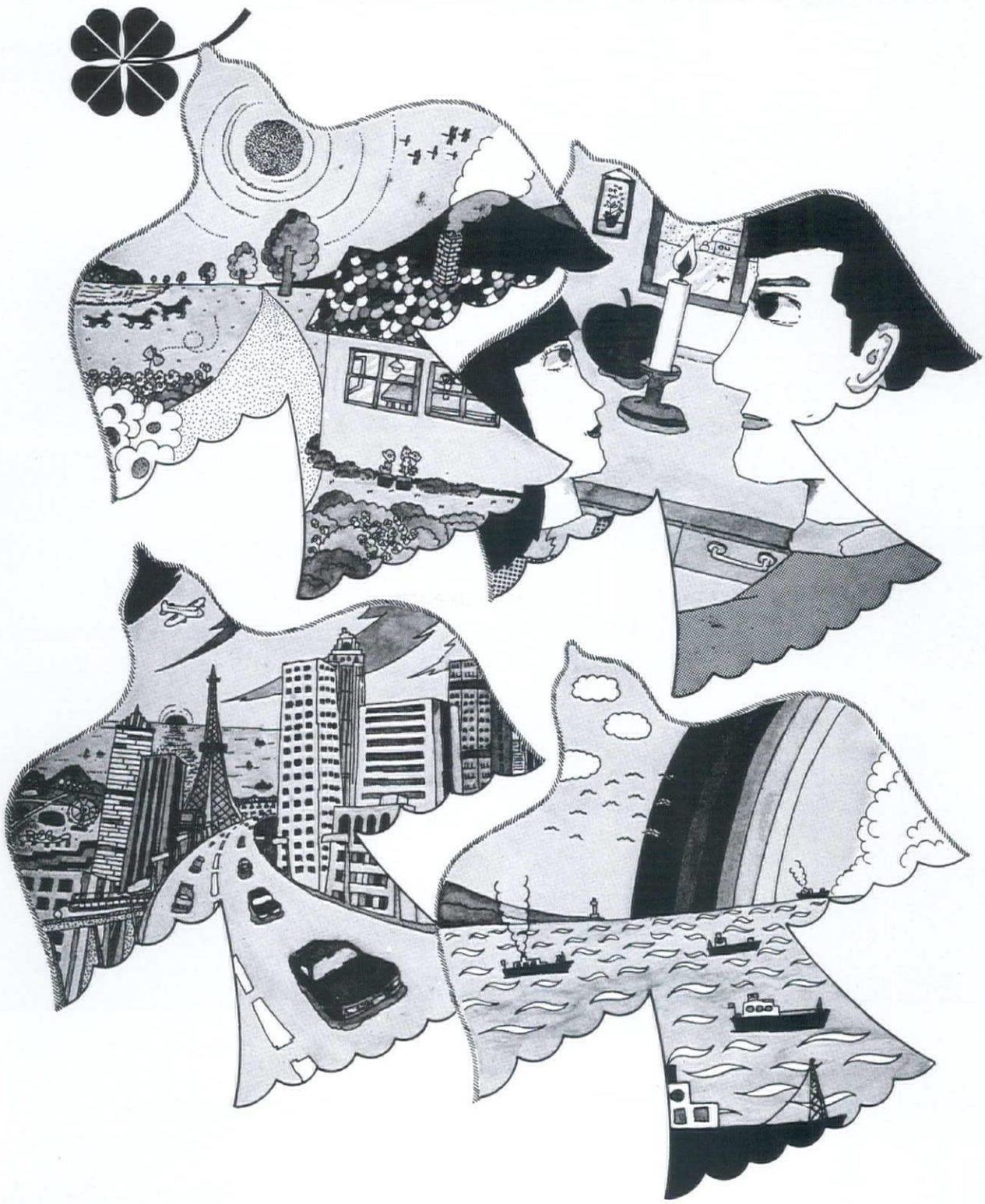
ASAHI Tomy

旭電業株式会社

本　　社　埼玉県浦和市南浦和2－12－17　電話0488(82)2288代　〒336
FAX　0488(82)3150
東京事務所　東京都中央区八重洲2-11-2(城辺橋ビル4F)　電話 03(273)1981代　〒104
大阪営業所　東大阪市長田東5－44(新栄ビル3F)　電話 06(744)1882　〒577
埼玉工場　埼玉県熊谷市大字小曽根字北浦599　電話0485(24)1196代　〒360

カタログご請求下さい。

豊かな人間生活と
明かるい光の創造に

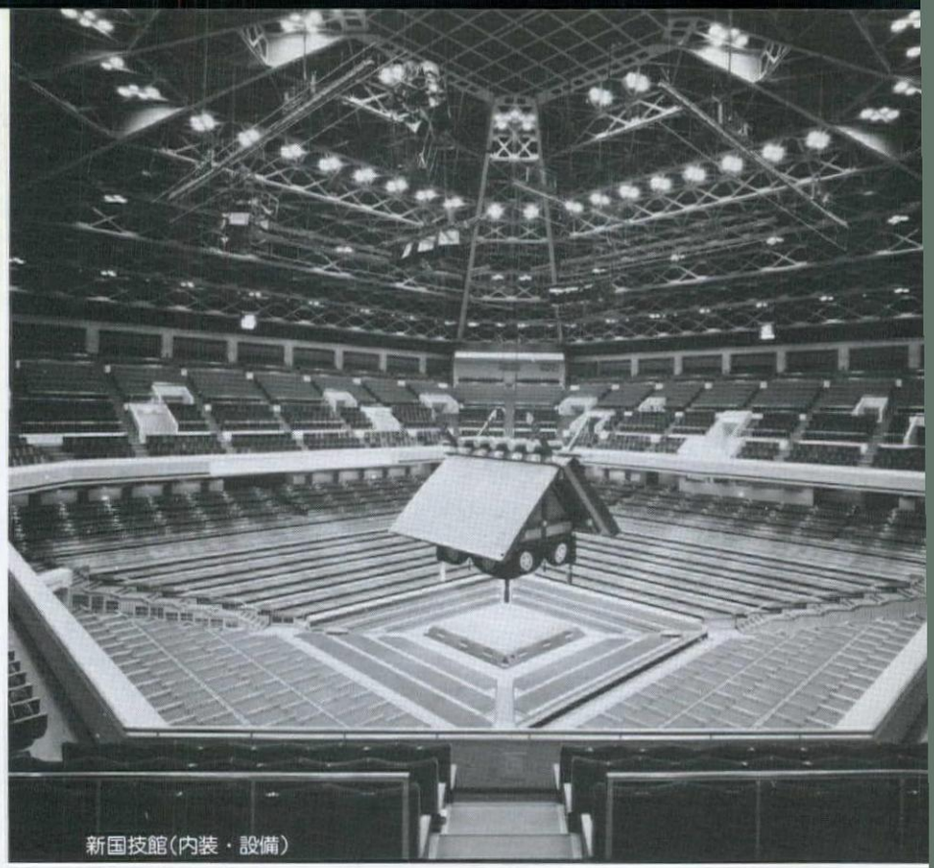


中立電気株式会社

取締役社長　斎　藤　　勲

本　　社　〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号　☎東京(356)2511(代)
山梨支店　〒403 富士吉田市下吉田町2005番地　☎吉田(0555)(2)3258(代)
大月出張所　〒401 大月市大月町2丁目10番地14号　☎大月(05542)(2)1013
笛吹川事務所　〒405 山梨市小原西1118番　☎山梨(05532)(2)6651





新国技館(内装・設備)



赤坂プリンスホテル レストランブルーガーデニア(内装)

営業種目

○建設資材

鉄鋼及び加工製品・鉄鋼仮設材・一般仮設材・セメント・生コン・コンクリート二次製品・防水養生剤・内外装材etcの販売及び賃貸

○建設工事

鋼管杭・H形鋼・シートパイル・PCパイル各種打込工事・現場造成杭工事・ウェルポイント薬液注入工事・内外装仕上工事・サッシ・シャッター工事・パーティション工事・耐火被覆工事・断熱吸音工事・ALC材工事・スパンクリート工事・インターロッキングブロック工事・外壁調査及び改修工事etcの施工

○建設機械・工具

測量機器・ブルドーザー・掘削機械・積込機器・基礎工事用機械・クレーン・リフト・せん孔機械及びトンネル掘進機・締固め機械・骨材生産機械・コンクリート機械・空気圧縮機・送風機・ポンプ・原動機・完成部品及び特殊機械器具etcの販売及び賃貸
スリップ・トルクコンベヤ及びスインガー(米国シャトルワース社提携)の販売

○設備機器・工事

空調設備機器・給排設備機器・電気設備機器・昇降機エスカレーター工事・駐車設備工事・ゴンドラ設備工事・厨房設備工事・ユニットバス、キッチンユニット、洗面化粧台工事・防災設備工事・水処理設備工事etcの販売及び施工

○輸出入業務

大理石・御影石・磁器タイル・合板型枠・機械工具類その他各種建設資機材の輸出入業務の取扱い及び施工

○インテリア

家具・応接セット・スチール棚・保管庫・移動書庫・ロッカー・各種施設用品etc

○一級建築士事務所

計画・基本設計・実施設計・工事管理・構造物のチェックと対策etc

あらゆるニーズにお応えできる建設の総合商社

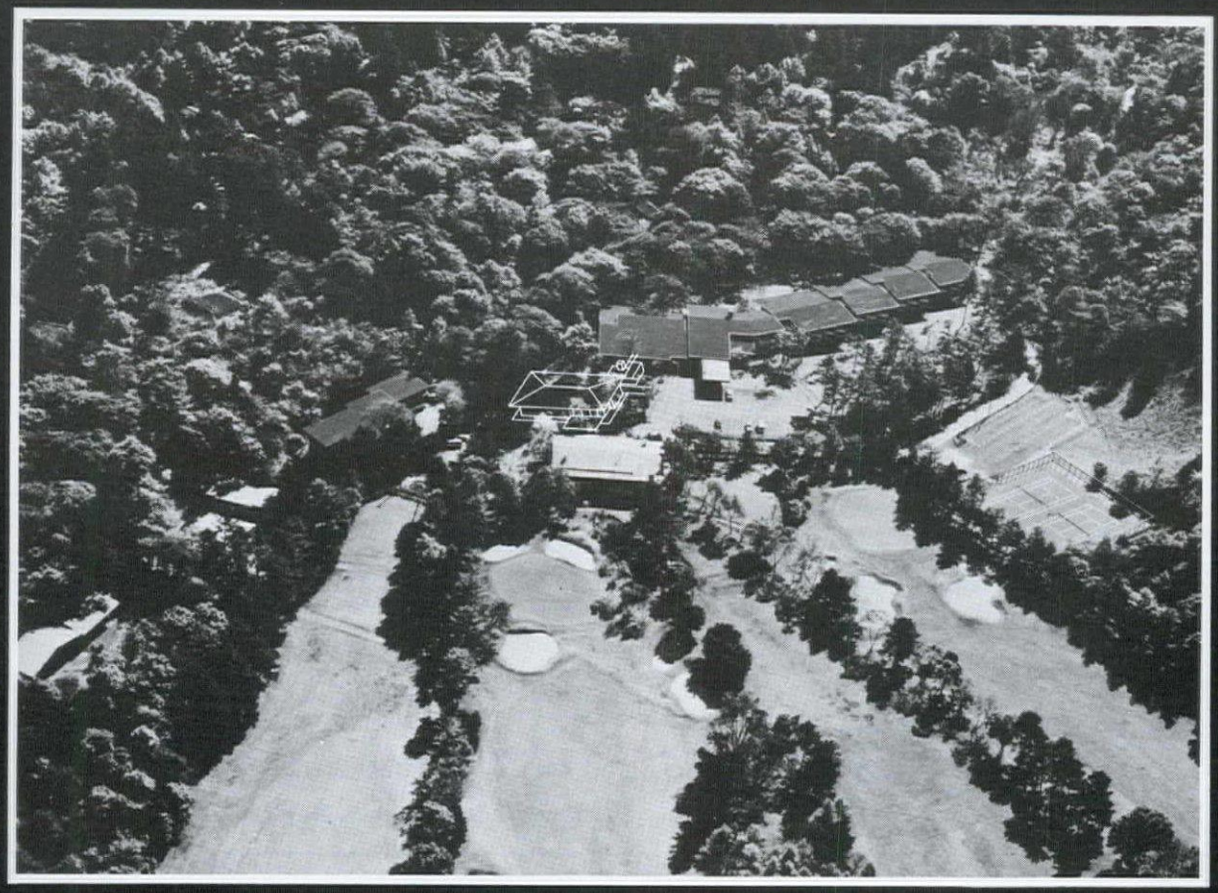
大興物産株式会社

会長　渥美健夫　　社長　柴田銀造

本　社　〒107 東京都港区元赤坂1―6―4　安全ビル7・8F ☎(03) 423―2511
札　幌　〒060 札幌市中央区北三条西3-1-4　北三条三井ビル ☎(011)231-6481～2
仙　台　〒980 仙台市二日町1―27　鹿島建設ビル ☎(0222)61-4141～4
東　京　〒107 東京都港区元赤坂1―6―4　安全ビル7F ☎(03) 423―2511
横　浜　〒231 横浜市中区弁天通り6―79　ハリマヤビル ☎(045) 212―3925
北　陸　〒950 新潟市万代1―3―4　鹿島建設ビル ☎(0252)47-2286～7
名古屋　〒450 名古屋市中村区名駅南1-24-21 名古屋三井ビル別館 ☎(052) 551―2131
大　阪　〒540 大阪市東区谷町5―27上町ビル ☎(06) 762―5661
広　島　〒730 広島市中区中町6―13鹿島建設ビル ☎(082)249―9221
高　松　〒760 高松市亀井町1―3鹿島建設ビル ☎(0878) 39―3191
福　岡　〒812 福岡市博多区博多駅前3-12-10 鹿島建設ビル ☎(092)441-2624～5

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

HOTEL KAJIMA NO MORI



軽井沢

Seminar
&
—Golf・Tennis—

鹿島ノ森ホール

- ■セミナー：108人、16㎜映画映写装置、2ヶ国語同時通訳
- ■結婚式：教会・神式、ご披露宴
- ■展示会場　■パーティー会場

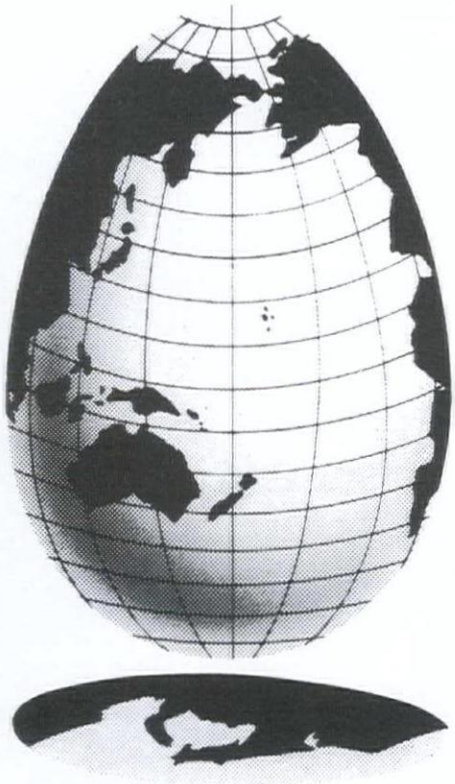
《鹿島建設グループ》

株式会社　ホテル 鹿島ノ森

ホテル　オークラ チェーン

●ご予約・お問い合せ：**ホテル鹿島ノ森予約係**　長野県北佐久郡軽井沢町離山　〒389-01　☎02674-2-3535(代) TELEX 3328676

明日を生み出す東海電工。



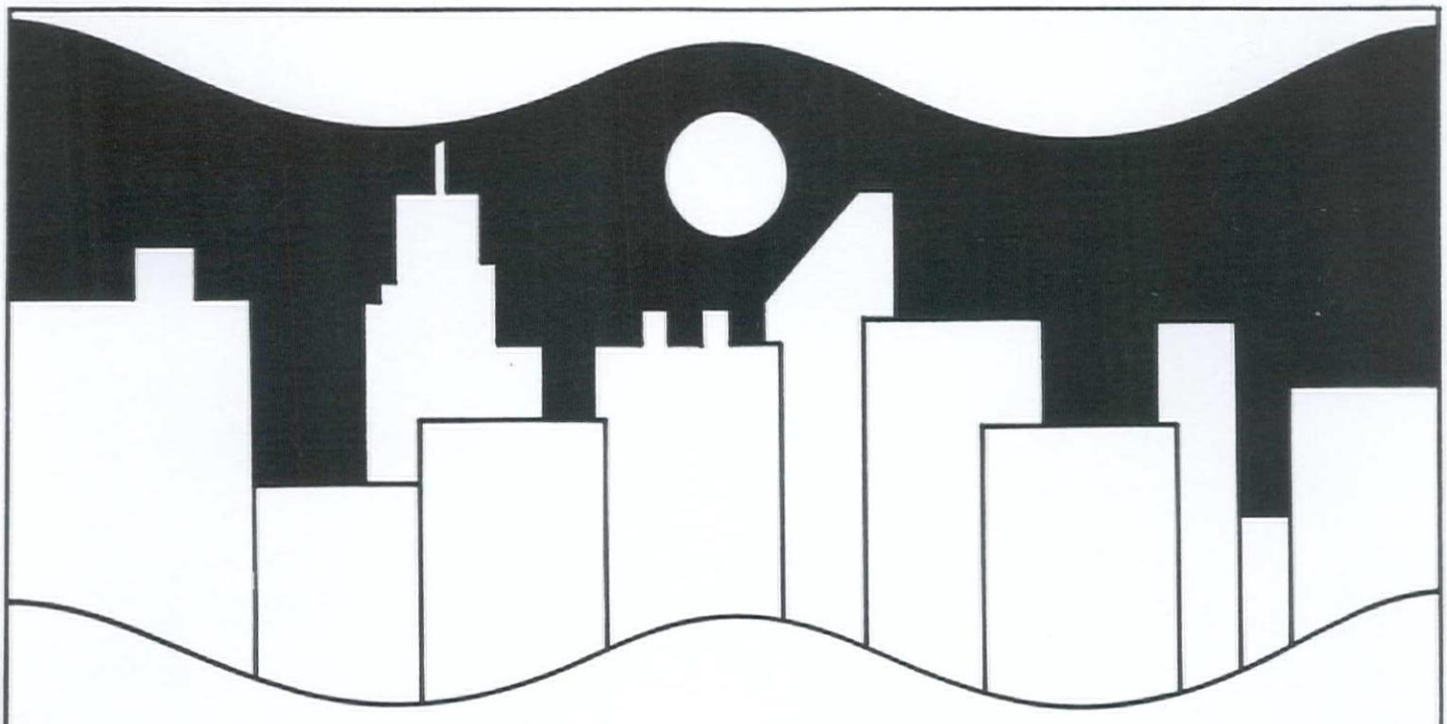
東海電気工事は「安全と責任ある工事」を信条として豊富な経験と高度な技術をもって電気設備工事全般から冷暖房工事、計装防災工事に至るまで総合設備工事業者として社会発展のため貢献いたしております。

東海電気工事株式会社

取締役社長　井上丈太郎

本社／名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎<052>221-1111

支社／名古屋・岡崎・静岡・津・岐阜・長野・飯田・東京・大阪



HEATING
REFRIGERATING
VENTILATING &
AIR CONDITIONING

未来をひらく技と心

五建工業

東京都千代田区内神田一丁目16－3

電話　東京03(292)3201(代表)

東京・札幌・大阪・仙台・茨城・埼玉・四国・鎖路・旭川・帯広・広島・福岡



石の心と樹々の精に，

新たなる生命を語らう，自然の造形

岩城造園株式会社

取締役会長　岩城亘太郎

取締役社長　岩城庄次郎

東京都世田谷区深沢8丁目9番12号 TEL(03)703-1311

広告については出版その他の際は<SDを見て>と御明記願います

創エネルギー
YAZAKI

ビルの冷暖房は
マイコン空調へ、NEWアロエース。

冷凍成績係数 (Fシリーズ・Gシリーズ) 0.95



Gシリーズ



Eシリーズ (7.5～20RT)　Fシリーズ (15～40RT)　Gシリーズ (30～150RT)

この4つの特長が、話題を呼んでいます。

①吸収冷温水機として、世界で初めてマイコンを採用。②重量で35%、設置面積で35%もスリムに(Fシリーズ)。③矢崎独自の自動冷媒比例制御方式で、さらに省エネ(F・Gシリーズ)。④消費電力を大巾に減少。アロエースは常に先んじています。

二重効用形吸収冷温水機

NEW アロエース

矢崎総業株式会社

本　社：〒108東京都港区三田1-4-28三田国際ビル17F☎03(455)8812
エネルギー機器事業部：〒435静岡県浜松市子安町1370☎0534(61)5111

「NEWアロエース」のお問合わせは

札幌支社 ☎011(852)2914
仙台支社 ☎0222(84)9115
東京支社 ☎03(767)4782
名古屋支社 ☎052(833)8415
大阪支社 ☎06(458)4825
北越支社 ☎0764(41)6516
中国支社 ☎0829(23)2115
四国支社 ☎0878(33)3336
九州支社 ☎092(411)4835

SD (Space Design)
Back Issues and Price Lists
Price includes seamail postage fee.

SD Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.
5-13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107 JAPAN

"SD" (Space Design) made its debut in 1965 as a comprehensive monthly magazine on architecture, urban problems and fine arts which was unique in the world and led the modern design. Since then "SD" has been highly praised by many people in every quarter of society and now established an unshakable standing in the fields of architecture and design.
It seems to be attributed to overwhelming support of the wide-ranged readers who strongly sympathize with the magazine's original policy and novel editing — a posture to pursue untiringly and comprehensively the design problems of now-a-days demanded by the age of dynamic urbanization.
"SD" tries to advance further by making its articles richer in contents which focus their attention on the methodological, technological and aesthetic themes of modern architecture, city and fine arts.
The text of "SD" is in Japanese but carries summary in English of some feature articles, too.

○ Selected back issue

8401 Arata Isozaki 1976-1984 Sold out
23 works including Tsukuba Center Bldg. by Isozaki, with notes by the architect. Full English texts.

8402 The Arts and Crafts Movement and Late Nineteenth Century British Architecture ¥2500

8403 Two Pillars of German Industrial Design : D. Rams and F.A. Porsche ¥2500

8404 Gardens : Wonderland of Contrivance and Illusion ¥4300
All the major gardens in Europe and U.S.A. English texts.

8405 L.A. Modernism ¥2500
Including the interview with E. McCoy. English text.

8406 The Artist Le Corbusier : Lithographs and Etchings ; Columbus, Indiana : Museum of Modern American Architecture ¥2500

8407 Art Nouveau : Capturing the Magic of Dim Space ¥4000
All the major Art Nouveau architectures in Europe. Photographs by Keiichi Tahara, 116 pages including 48 color pages.

8408 Mario Botta ¥2500

8409 Hisao Kōyama : The Three Books of Architecture ¥2500
Hisao Kōyama's Composition Book introducing his works. English text.

8410 James Stirling : New State Gallery Stuttgart ; Robert Venturi : Vehturi Collection of Knoll International ¥2800
English texts by James Stirling and Robert Venturi.

8411 Achille Castiglioni ¥2500
Recent Projects by Kohn Pederson Fox Associates.

8412 "SD Review, 1984" ¥2500
18 regular entries, 1 special entry.



8504 Itsuko Hasegawa



8505 Adolfo Natalini, Teruaki Ohashi

8501 HIGH-TECH ¥4300
Introducing the prominent persons and works in HIGH-TECH architecture, including C. Eames, J. Prouve, F. Otto, B. Fuller, R. Piano, N. Grimshaw, T. Farrell, R. Erskines, etc. English texts.

8502 FRANCE : A New Generation of French Architects ¥2500
23 architects and designers of Post-Modernism. English texts.

8503 Global Art Deco in the Twenties and Thirties : ¥3000
Art Deco in L.A., Miami, Nice Shanghai, Paris, Moscow, London, Tokyo.

8504 Itsuko Hasegawa ¥4300
Selected works of I. Hasegawa, a young popular Japanese female architect. Full English texts.

8505 Adolfo Natalini 1979-1983 ¥2500
The Furniture of Teruaki Ohashi English Texts.

Overseas Subscription

Name

Profession

Address

Signature

The amount is being sent in advance by :

☐international money order

☐enclosed check

☐bank transfer

Please enter my subscription to

Space Design (SD)

Starting in_____ 1985

☐new subscription

☐12 issues ¥30,000 (seamail postage included)

☐24 issues ¥50,000 (seamail postage included)

Please register my order for the following back issues of SD :

Overseas Subscription

SD Space Design

●Hardcover edition

Seiichi Shirai ¥4500
7 great works of Seiichi Shirai, a great master architect of Japan.

Arata Isozaki ¥4500
28 great works of Arata Isozaki with notes by himself. Chronological review. Writings by H. Hollein.

Arata Isozaki 1976-1984 ¥5300
23 works including Tsukuba Center Bldg. by Isozaki, with notes by the architect. Full English texts.

Kisho Kurokawa ¥4500
Extensive works of Japanese metabolist, with writings by C. Levi-Strauss, etc. Full English texts.

Fumihiko Maki ¥4500
Selected works—architecture and urban design—of Fumihiko Maki, with writings by Philip Drew, Maki, etc. Full English texts.

Kenzo Tange ¥5000
58 architecture and urban designs of Tange, selected by himself. 202 pages. Full English texts.

Kenzo Tange 1977-1983 ¥5300
1977-83, 21 architecture and urban designs of Tange.
218 pages. Full English texts.

Masako Hayashi ¥4500
All works of Japanese female architect. Full English texts.

Kiyonori Kikutake ¥4500
All the major works of Japanese metabolist Kikutake and his writing. Full English texts.

Tadao Ando ¥4500
Selected works and drawings of popular Japanese young architect, Writings by Y. Futagawa, T. Ando, etc. Full English texts.

Shin'ichi Okada ¥4500
The Supreme Court, Metropolitan Police Department, etc.

Sutemi Horiguchi ¥4500
Organization of architecture and garden. Major works of Japanese pioneer of modern architecture. English texts.

●Hardcover edition

This is a *de luxe* edition for keeping of the feature part reproduced from the regular edition of "SD" magazine.



●Arata Isozaki 1976-1984



●Kenzo Tange 1977-1983

■Extra edition

This is a *de luxe* edition for keeping of the feature part reproduced from the extra issue (with a summary and explatory comments in English) of "SD" magazine.



■Space Design for Commercial Facilities



■Space Desigh for Commercial Facilities ❷

Alvar Aalto ¥4500
All the major works including Finlandia Hall, Villa Carre etc. Writings by Juhani Pallasmaa, Michele Merckling. With English summary.

Carlo Scarpa ¥4500
Great work of Italian maestro covering architecture, furniture, and industrial design. With English summary. 162 pages.

Kim Swoo Geun ¥4500
All the major works of distinguished Korean architect. English texts.

Andrea Palladio ¥4500
31 works of Palladio by color photos and drawings. I Quattro Libri dell' Archittetura. 170 pages. English summary.

Gio Ponti ¥3500
Special issue edited by Lisa Ponti in memory of her father. Writings by L. Ponti, Allessandro Mendini, etc. Full English texts.

I.M. Pei & Partners ¥4500
28 great works of I.M. Pei & Partners including the Design Process of National Gallery of Art. Full English texts.

The Whirlpool : ¥4500
Post-Modernism-Young American Architects.
Works and projects of 50 young American architects.

Erik Gunnar Asplund ¥5000
All the major works including Woodland Crematorium. Cinema《Skandia》, Gothenburg Law Courts, etc. With English summary.

Art Deco in New York ¥5000
About 80 Art Deco architecture. The Art Deco architectural map and list of New York City.

Gardens : Wonderland of Contrivance and Illusion ¥4700
All the major gardens in Europe and U.S.A. including Villa d'Este, Versailles, Schloβ Schonbrun, Alhambra, Stourhead, etc. English texts.

Please register my order for the following hardcover/extra edition of **SD** :

U.S. dollars, Sterling pounds, West German marks, Swiss francs and French francs equivalent to the above Japanese yen prices are acceptable.

Payment should be made in abvance by mail transfer to our bank :
The Shinbashi Branch of the Kyowa Bank, Co., Ltd.,
account number 514836 in the name of Kajima Institute Publishing Co., Ltd.

The amount is being sent in advance by :

☐international money order

☐enclosed check

☐bank transfer

Send your payment made payable to :
Subscription Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
5-13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107, JAPAN

SD 85 06

スペースデザイン
第249号
昭和60年6月号

5 特集=
モロッコ, スペイン, ポルトガル
〈いえ〉と〈まち〉調査紀行

6 論文
●

6 文化としての住まい
鈴木成文

12 異文化を訪ねる
鈴木成文

40 スペイン・モロッコのこどもたち
小川信子

42 パティオ考——個の原理と集合の型について
畑 聰一

72 野蛮な形に可能性を見た
服部岑生





スペイン 50
●●●

中世の肉・太古の血——チンチョンのマヨール広場 50
林 章

砦の残るまち・崖に潜るいえ——モンテフリオ・アルチドーナ・セテニール 52
植松貞夫

連続する部屋——カサレスの家 58
笠島 泰

クエバスの生活——グァディス 60
峯 成子＋曾根陽子

ポルトガル 62
●●●●

斜面に刻まれた生活のリズム——アルファマ 62
畑 聰一

古い村々と時代の流れ 69
——カサレス・ナザレ・オビドス
笠島 泰

13 モロッコ
●●

13 クサール——モロッコの砦型集落
曾田忠宏

21 メディナ断章
長沢 悟

28 スーク——モロッコの市
斉木崇人

30 様式の持続——ベルベルの住宅
初見 学

39 ムーレイ・イドリスの家
笠島 泰



建築家によるテーブルウェア 77

P.A.キング&S.ミランダの最新作:
マルカトレ・ショールーム 80

連載=フランク・ロイド・ライトの呪術の空間❶
壊れた魔法円
草森紳一＋大倉舜二 85

ニュース
第5回PA家具コンペ 97

トピックス
戦い済んで, 日が暮れて:
ラ・ヴィレット公園コンペのカタログ刊行 99

記事・書評 103

海外建築情報
鳩よ! 詩的建築が始まる!
DUCTSPACE=編 109

国内建築ノート 磐音洋
イマい建築とイモい建築 117

発行人●河相全次郎
編集人●長谷川愛子
発行所●鹿島出版会
〒107 東京都港区赤坂六丁目5番13号
電話(03)582—2251(代)
振替 東京6—180883番
編集長●伊藤公文
編集スタッフ●吉田雅彦
相川幸二
水越 裕
浜地三千世
伏見佳子
アート・ディレクター●工藤強勝
デザイン・レイアウト●上田宏志
釣巻敏康
デザイン実験室
印刷・製本●凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区志村1—11—1
電話(03)968—5111(案内)
取次店●東販・日販・大阪屋
栗田出版販売・誠光堂
鈴木書店・西村書店・中央社
定価● 1,500円
年間直接購読料●20,000円
(特別定価号＋送料込み)

表紙写真●アイト・ベンハドウのクサール



5 **SPECIAL FEATURE**
Houses and Towns of
Morocco, Spain and Portugal: A Travelogue

6 **Articles**
●

6 The Culture of Dwelling
by Shigebumi Suzuki

12 The Purpose of Our Travel Study
by Shigebumi Suzuki

40 The Children of Spain and Morocco
by Nobuko Ogawa

42 A Study of the Patio
by Soichi Hata

72 Lessons Leaned from Crudeness
by Mineki Hattori

SPAIN 50
●●●

The Plaza Mayor of Chinchon 50
by Akira Hayashi

Montefrio, Archidona and Setenil 52
by Sadao Uematsu

Houses in Casares 58
by Yasushi Kasajima

Guadix 60
by Shigeko Mine+Yoko Sone

PORTUGAL 62
●●●●

Alfama, Lisbon 62
by Soichi Hata

Cascais, Obidos and Nazare 69
by Yasushi Kasajima

13 **MOROCCO**
●●

13 The Ksar: Morocco's Fortress Villages
by Tadahiro Soda

21 Odd Impressions of Médina
by Satoru Nagasawa

28 The Souk: Markets of Morocco
by Takahito Saiki

30 Dwellings of the Berber People
by Manabu Hatsumi

39 A House in Moulay-Idriss
by Yasushi Kasajima

Architect-Designed Objects for the Home 77

Recent Work of P.A. King & S. Miranda 80
The Marcatré Show-room

SERIAL PRESENTATION 85
〈Frank Lloyd Wright's Enchanted Spaces〉⑪
Fading Magic of the Circle
by Shin'ich Kusamori+Shunji Okura

News 97
The P/A 5th Annual International Furniture Competition

Topics 99
The Long-awaited Parc de la Villette
International Competition Catalog is Out

Informations 103

Eminent Works Abroad 109
Poetic Architecture
by DUCTSPACE

Domestic Architectural Notes 117
Sei-Go-Hyoh
What's "In" and What's "Out" in Architecture

SD 85 06

Space Design
No.249
June 1985

A Monthly Journal of Art and Architecture

Publisher●
Zenjiro Kawai
Executive Director●
Aiko Hasegawa
Editor●
Kobun Ito
Associate Editors●
Masahiko Yoshida
Koji Aikawa
Yutaka Mizukoshi
Michiyo Hamaji
Yoshiko Fushimi
Art Director●
Tsuyokatsu Kudo
Design, Composition●
Hiroshi Ueda
Toshiyasu Tsurimaki
Design Laboratory
Published by
Kajima Institute Publishing, Co. Ltd.©
5-13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107 Japan
Telephone: (03) 582—2251
Printed in Japan
Overseas●
This copy: ¥2,500
(including seamail postage)
Subscription Price
¥30,000 a year
¥50,000 two year
(including seamail postage)
Order form: pp. 1-2

Cover Photo●
Ait-Benhaddou

MOROCCO SPAIN PORTUGAL

特集

モロッコ,スペイン,ポルトガル
〈いえ〉と〈まち〉調査紀行

MOROCCO	SPAIN	PORTUGAL
Aguelmouss	Archidona	Cascais
Ait-Benhaddou	Casares	Lisbon(Alfama)
Ait-Ridi	Chinchon	Nazare
Asni	Cordoba	Obidos
Fes	Guadix	■
Goulmima	Montefrio	■
Had-Zerektèn	Setenil	■
Maadid	■	■
Marrakech	■	■
Midelt	■	■
Moulay Idriss	■	■
Tinerhir		



文化としての住まい

■

鈴木成文





●グルミマ（モロッコ中部）の町の小食堂にて

◉苛酷な大地

ポルトガル，スペイン，モロッコを真夏に歩いてみると，やはりこの地域は真夏にこそ訪ねるべきだと実感される．　気候が住居の形を左右することは昔から言われているが，この暑さを体験することによってそこの住居を肌で理解できるし，同時に数々の疑問も湧いてくる．

はじめに訪ねたポルトガルは意外に涼しくさっぱりしていた．　海に面して過ごし易い気候なのである．　一方，スペインの内陸部，マドリッドからアンダルシアへの旅はそれこそ灼熱であった．　麦畑もオリーブ畑も精気がなく，照りつける太陽の下で町は静まり返る．　上から照らされるだけでなく，地面も建物も空気も完全に熱せられ乾ききって，まるでオーブンの中に入れられた感がある．　但し，流れる汗はない．汗はかくそばから蒸発して，肌はいつもさらさらしている．

こうして南スペインの町々を廻った後，モロッコへ入ったのであるが，ここではまた違った光景が展開した．　カサブランカ空港からは，往年の名画でなつかしいボガード，バーグマンのカサブランカの街は全く通らず，バスで一気に南モロッコの旧都マラケシュへ向かった．　これがよかった．地中海岸のヨーロッパ化したモロッコを見ずに，一足とびにモロッコそのものに突入したのである．

これは全く興奮する風景であった．　走るバスの中からでは良い写真は撮れないと承知しつつも，ついカメラを向けてしまう．それほどの気持の高まりであった．

何に興奮したかといえば，乾いた荒れた大地とそれに耐えて土と一緒に生活する人間の姿にである．　モロッコが乾燥酷暑の土地だということくらい百も承知である．それにもかかわらず，ほとんど地平線まで何もない赤茶けた大地を見せつけられると，頭の中の知識とは無関係に感性は興奮するものらしい．　国道沿いにはそれでも細々と並木らしいものが植わっている．　しかしやがてそれも途切れ途切れになる．　道路に沿って幅50cm程度の水路が掘られている．　この乾燥しきった大地を何とかして緑化しようと，懸命なしかし果敢な努力を注ぎ込んでいるように見える．

モロッコの地も昔は緑野だった．　もっとも紀元前3000年の頃までである．　地球上の気象の変化によって砂漠化が南から押し寄せ今日の姿になったのだという．　とするとこれは，乱伐によって禿山になったのとは違い，地球そのものの条件の変化によるのであろう．　これを現代の技術でどこまで恢復できるだろうか．　途方もない大自然の力に対して米粒ほどの人間が営々と実らぬ労苦を注ぎこんでいる様に見える．南下するにつれ，その様相はいっそう甚だしくなる．　土が，何千年もの間太陽と風にさらされて，かさかさに乾き赤くなっている．　見渡す限り赤い大地というのは異様である．　そのところどころ，まばらに椰子とユーカリとサボテンの見えるところ，そこが人の住む集落なのである．

一体，なぜ人間が，こんなにも住みにくいところに住まねばならないのか，と考える．　これと同じことはスペインでも感じた．　なぜこんなに暑いところに住むのか，なぜこんなに建てにくい急斜面に密集して建てるのか，なぜこんなに水の乏しいところに住むのか，なぜ……，なぜ……．だが，なぜと疑問を抱くのは，外来者の我々だけであろう．　彼らにしてみれば，何の不思議もなく昔からここに住み，ここに家を建てているのである．

◉乾燥地域の土の家

雨のほとんどないモロッコでは，住居は土で作られ屋根はフラットである．　高アトラス山中のいくつかの部落で見たものは，住居は概ね平家で，屋根の上に人は乗らないから，屋根下地の丸太も草も端部は露出して見えていたが，全く雑に出来ている．雨仕舞を主体に考える東南アジアとは大違いである．

高アトラス山脈を越えて南東，砂漠に近い地域では，伝統的なオアシス集落（クサール）をいくつか見たが，その住居（カスバ）は古い型式を受継ぐ堂々たる3階建である．　日干し煉瓦を積んだ厚い壁体に丸太の根太を渡し，細い木と草を下地に土を載せて2階床，3階床と屋根を作る．面白いことに3階が中庭型住居の形を成しており，中庭の床ももちろん土を固めたフラットルーフである．　万一，大雨でもあ



●チンチョン（スペイン中部）の古い町にて



●コルドバ（スペイン），花の小路



●モンテフリオ（スペイン南部）の丘陵集落

ればひとたまりもあるまい．　土のスラブの壁際に排水用の小さな溝が作られ，これが土の階段の隅を伝ってずっと１階まで導かれているのが面白い．　またその中庭のスラブの中央に１ｍ角くらいの穴がうがたれ，粗い格子などがはまっているが，これが下階の明りとりになっている．　雨のない地域ならではのディテールである．

雨がなければ木も育たない．　従って住宅用材として使われるのはせいぜい床スラブを支える根太の丸太程度で，これもさして太くないから壁の間隔も限られる．　せいぜい2.5mといったところであろうか．　細長い部屋になる．

土（泥）が主要材料となれば，いきおい壁がちな造りとなる．　実際，その壁は厚さ50cm～１ｍと著しく厚く，窓は小さい．もっとも，窓は大きい必要がない．　戸外はギラギラした太陽の直射であるから，2.5×６ｍ程度の部屋に対して，僅か50cm×１ｍ程度の窓一つあれば，或は窓が全然なくても出入口の扉を開けてさえいれば，はいった途端は暗く見えてもしばらくすれば目が慣れて，結構明るい．　とくに壁を白塗喰で仕上げた居間では，なかなか良い雰囲気である．

南スペイン，アンダルシア地方でも，概ね窓は小さく壁は白かった．　この一帯，アラブに取られたり取り返したりの歴史が長かったから文化は交流しているのだろう．そして入口一つから土の中へ入る洞窟住居でさえ，さして暗さを実感しなかったのは不思議である．

◉通風についての疑問

このような住居をいくつか訪問して私がまず第一に疑問に思ったことは，なぜ通風についての考慮がないのかということであった．　中庭を囲んだ各室は，奥行が小さく平べったい形で四辺を形づくるが，中庭に向かってのみ小さな窓または入口があっても，外側に向いた窓はない．　従って通風がない．　もちろん，外の気温が高いから通風はない方がいいのだ，とか，壁が厚いから外気温を伝えないのだ，とか，通俗的な説明はある．　また日本と違って空気が乾燥しているから通風は必要ないのだ，という解釈もある．　しかし，太陽の直射する戸外を歩いて来て家の中に招じ入れられれば，やはり結構暑いのである．　高アトラス山中のアスニの部落で一軒の家を訪ねた時には，彼らの流儀でメンテ(ハッカ茶)の接待を受けたが，これは銀のポットからハッカの葉の沢山入った香りの高いお茶を30cmもの高さからコップに注いでくれるもので，その熱いお茶を飲めばたしかに汗が出る．　また，フェズの街なかで昔のちょっと良い住宅を改造したレストランに入り，土鍋に入ったタジン（羊肉と野菜の煮込みのモロッコ料理）を食べた時などは，通風のない暑苦しさは全くやり切れなかった．

しかしこのような感覚も，ひょっとするとわれわれ日本人特有のものではなかろうかと考えてみた．　本当に暑くて困っているなら，何とか対策は講じられる筈だ．住居の伝統的形式が急速に崩れつつある現代では，新築住宅において生活に即した形態が生まれてもおかしくない．　それにも拘らず通風が全然考慮されていないとすれば，彼らは通風を必要と感じていないに違いない．　それは生まれ育っての感覚の慣れによるものかもしれないが，同時に，彼らの生活様式に負うところが大きいのではあるまいか，と思われる．

彼らは多分，日中せかせかと歩き廻った後，急に室内に座るなどということをしないのではないか．　熱いタジンを室内でフウフウいって食べることなどないのではないか．　そう思ってあらためて目にした光景を思い浮かべてみると，昼過ぎ街なかで木蔭や建物の際に寝そべっている人，クサール（伝統的集落）の薄暗いトンネル状の路地で座り込んでいる人などはどこでも見かけたし，グルミマの町でとび込んだ小さな食堂では食事のあと店の中で堂々と横になっている人をみかけた．　暑さに逆らわず，ゆったりした生活を営んでいるのであろう．

こういった生活様式・生活態度とこの住居形式が対応しているだろうことは推察される．　もっとも，生活様式に基づいて住居ができたのか，住居形態によって生活様式が形作られたのかは，わからない．　おそらく両者が互いに影響しあい規制しあって，今日の生活と住居の混然とした様式ができたと考えるべきだろう．　だから，通



●セテニール（スペイン南部）巨岩の下の住居



●モロッコの荒野



●アスニ（モロッコ，アトラス山中の小村）のベルベル人住居にて．　ミント茶の接待にあずかる．

風のない家も，暑いと考える人は暑いのだし，暑さを感じない人は感じないのである．

◉閉鎖型住居の伝統とその変容

通風のないことについてこのように納得はしてみても，だからといってこのような住居の成立の説明にはならない．　中庭側にのみ開口部をもち，道に対しては小さな木製扉一つしか向けていないこのきわめて閉鎖的な住居，これは多分，外敵に対する防御の姿勢から形作られたと解釈すべきであろう．　自然の暑さや風や乾燥への対応からのみ説明するのは無理なようだ．

防御の姿勢，その最も典型的な形態は，クサール（伝統的なオアシス集落）のカスバ型住居である．　日干し煉瓦造３階建，一辺10～15m程度の正方形プランが基本で，１階は家畜小舎や倉庫だが，入口に頑丈な木製扉があるだけで外周はすべて土の壁である．　従って内部は暗い．　２階には部屋があるが，外に対してはそれこそ覗き孔程度の窓しかない．　そして３階床にあけられたトップライトの孔が家の中央に光を落とす．　３階だけは明るく，青天井の中庭を囲んで部屋があるが，主要開口部は中庭側のみである．

最初にアイト・ベンハドウのカスバ集落を見た時には，正直言って魂を奪われる思いであった．　小さな丘の片斜面を覆うその集落は，見上げると固まりとなってそそり立ち，ぎらぎらした真夏の太陽の直射の下に傲然と構えて人を寄せつけない威厳がある．　個々の家はその四隅に塔をもち，さながら一個の城である．　建物の頭頂部には土壁にレリーフをほどこしたような飾りがある．　多分，積み上げる日干し煉瓦を或るパターンで抜いたり外したりして作ったものであろう．　家同士隣りと互いに接したりつながったりして，集落全体がまた一つの城塞の観がある．　しかもそれが，長年の太陽と風にさらされて風化しつつあるように見えるのが，また何ともいえぬ重みを感じさせる．

しかし，現地のガイドに案内されて集落の中に足を踏み入れてみて，また息を飲んだ．　惨憺たる廃墟である．　過疎化によって見捨てられた家が多く，それが端から次第に崩れていく．　家と家の間の狭い路地は，今や石ころと土ぼこりの山道と化しつつある．　たしかに遠望は１戸１戸が屹立し，周囲の広い荒野と丘陵を睥睨し，それこそ誇らしげな城郭であったが，内部はすさまじいばかりの廃墟となってしんと静まり返り，灼熱のモロッコの土に帰りつつあるさまは凄絶である．

モロッコも近代化・工業化の政策により，地中海に面した北部へ人口が吸い寄せられ，内陸部の田舎は今や過疎化している．若者は遠くはフランスまでも出稼ぎに出て，何年かたつとジーパンに帽子のしゃれた恰好で帰ってくるがまたすぐ居なくなるのだという．　一方，土地に残った者も，古い住居を捨てて近くの対岸の平地に新たな家を造って移り住む．　それもできない貧民のみが古い集落の古い家に留まっているのである．

新築の現代住居は内部までくまなく見せて貰ったが，これは土壁造の平家であった．　やはり中庭型だが，家畜や倉庫の部分は横に付いて，もう一つの小さい中庭（家畜庭）を囲んでいる．　そして，四隅の塔も外壁のレリーフ装飾もなく，のっぺりした壁の，平凡な家になってしまっている．

あの威厳のある大住居がなぜこうなってしまうのかと，我々は慨歎するのだが，この変容はさまざまな要因が重なり合ってのことであろう．　勝手に想像してみれば，大家族制が崩れて世帯が少人数になったこと，外敵防衛の必要性がなくなったこと，家事労働軽減のための合理化，とくに水汲みと運び上げの作業からの解放，信仰の薄れ即ちより高く空に近くという観念からの脱却，等々．　更には，巨大な住居を構築するに必要な人手の協力組織の崩壊，例えば日本のかつての農村の〈ゆい〉のような慣習と組織が，過疎化と共に失われたのではなかろうか．　もっともこれは日本とて同じこと，大きな茅葺屋根の民家が次第に姿を変え、トタン屋根とアルミサッシュの家に変りつつある，それを歎くのと同じであろう．

◉閉鎖型住居によって作られる街

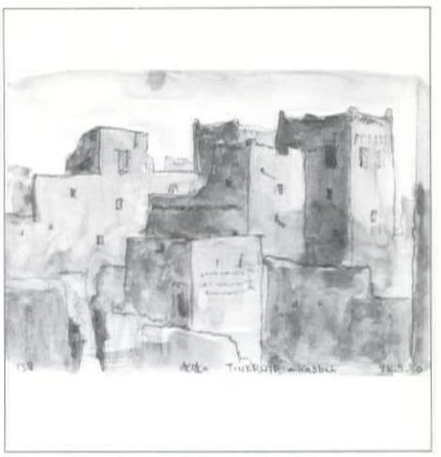
新たに造られる住居は，平家建てにもかかわらず相変らずきわめて閉鎖性の強い中庭住宅である．　平家であれば，外側に窓が



●アイト・ベンハドウ(モロッコ南部)のクサール(旧集落)



●アイト・ベンハドウのカスバ住居



●ティネリール（モロッコ南部）のカスバ住居

なくてもさして強い防衛性を備えているとは思われない。　外敵でも盗賊でも，屋根を乗り越えれば簡単に中庭へ入り込むことができる。　その故かどうかは分からないが，各部屋の中庭に面する窓にも鉄格子がとりつけられている。

この中庭型平家住居は，おそらく伝統的3階建住居の上層部分がそのまま踏襲されつつ低層化したものに違いあるまい。　昔のように高密に寄り集まって塀で囲んだクサール集落を作る必要がなくなったから，敷地の制約もなくなって平面的にひろがり，中庭が拡大し，その上家畜や倉庫の部分も階下でなく横に接続されたと見ることができる。

防衛の必要がなくなってもなぜ中庭型なのか，それを問題としても始まるまい。多分彼らにとっては住居は中庭型であるのが当然だからであろう。　それは文化の問題と考えてよかろう。

さて中庭型住居は本質的に，内には開くが外に対して閉じる型である。　こういう住居が寄り集まると，壁ばかりの無表情な，無愛想な，つまらない街になるおそれがある。　クサール（城壁に囲まれた町）がまさにそれである。　クサールは過疎化して廃墟になったものが多いが，なお現代に活き活きと生活しているものも少なくない。　ここでは，カスバ型の住居が壁を共有して連続するので，道の両側には窓のない高い壁がそそり立つ。　道は谷間である。しかもその道は随所でT字型・L字型・くの字型に曲がる。　これは明らかに堅固な防御の構えである。　日本の街並とはまったく異質であるのはもとより，ヨーロッパの多くの中世都市とも，1階レベルに開口部をもたないという点で著しい違いがある。その空間だけを見れば死んだ街といってもよい。

ところがその街が，常に人間の気配のあることで活きた街になっているのである。主要道路――といっても幅員はせいぜい3～4mだが――から左右に入る路地には，しばしば2階の部屋が上を覆ってトンネル状になった部分があり，その薄暗い空間に腰を下ろしている人々をしばしば見かける。家に窓は無くても，道は常に多勢の視線が注がれている。　我々のような全くの部外者は，特に好奇の目で迎えられる。　時には2階・3階の小さな窓から見下ろしている目に出遇うこともある。　路地の中に案内人なしで立入ることはまず不可能である。彼らの領域は完全に防衛されている。

町の空間に領域を形成するには，家の中から戸外へ日常的に視線が向くことが重要だ，住戸は開放的であるべきだ，とわれわれは日本の町や集合住宅を対象として考え，また主張してきた。（その主張の要点は，SD選書90《「いえ」と「まち」》に収められている）　住戸内の日常生活の場(居間や食事室など）が道や共用空間に面していること，近隣の人々を気軽に迎え入れることのできる入口をもつこと，家の中の動静が感じられること，さらに戸外へ向けての表出があること，これらは，各戸が良き領域をもち，さらに近隣集団が共有領域を形成するための要件であると考えている。ところがここモロッコのクサールでは，全く閉鎖的な造りの家であり町である。　開放的な表情も無ければ，表出物も皆無である。　しかしそれでいて彼等の生活領域は完全に作られている。

この領域は，日本の町や集合住宅における，近隣とのなじみを基盤にするものとは異なり，近隣の結束に依拠し外部の人に対する防衛を基本とするものであるように観察される。　彼ら自身の連帯というか，そのコミュニティは固く保たれていて，長老だかボスだかの支配やコントロールも行きわたっているように見える。　そして，外からの侵入を拒否する姿勢をとっている。これはおそらく，長い歴史の中で，攻められたり掠奪されたりの繰り返しの中から生まれた形であるに違いない。　歴史が生活の様式を作り，それが文化となって定着している。　その必然性が失われた時代においても，極めて当前のこととして人々に自然に受け入れられているように思われる。

◉スペインの中庭型住宅

スペイン南部は，14世紀までアラブの支配下に置かれていた。　フェルナンド王とイサベル女王が，馬車で寝起きしながらこの荒掠たる山河を馳け廻り，長年に亙る戦いを続けて遂にこれをキリスト教徒の手に取り戻したのだと，歴史の本にある。　スペ



●グルミマ（モロッコ南部）のクサール（旧集落）



●グルミマ（モロッコ南部）のクサール（旧集落）の路地



●クサール・エス・スーク（モロッコ中部）の街角にて

イン南部の街や住居にアラブの影響の濃いのも当然といえば当然であろう．

スペイン中部・南部の住居も，基本的には中庭型である．　アフリカ北部とスペイン南部は互いに深く影響しあっている．

このような中庭型住居が集合すれば，スペインの街も殺風景になる筈である．　入口の木製扉が閉じられていれば，住居の表はまことに無表情である．　マドリッド近郊の田舎町チンチョンを訪れた時は，街全体が真夏の太陽の下に死んだように静まり返っていた．　もっとも，われわれが歩き廻るのが真昼間のいちばん暑い時刻だからかもしれない．　気温は36°であった．

ただ少し観察すると，中庭を囲んでの内部は活気があるように思われる．　ここチンチョンでは街の中でも周辺部の家は農家も多いらしく，垣間見られる中庭は半ば作業場のような，気楽な造りである．　葡萄の木が枝をひろげて陰を落とし，疎い石畳みに作業機具などが無造作に置かれている．　入口扉へ通ずる空間，これは屋内の通路のようでもあり，またオープンな居間のようにしつらえられていたりもする．　時には中庭同士，隣の住居と裏でつながっている場合もあるらしい．　表からは見えない，自分たちだけのコミュニティ空間があるのかもしれない．

表に対しても，生活を全く閉ざしているわけではない．　扉の外，道端に椅子をもちだして老婆がぼんやり座っている風景をよく見かける．　隣の主婦が声をかけ立話をしている．　建物としては閉じていても，生活の領域は家の前にまでひろがっている．　窓際に花を飾って通りに対し表出している家も少なくない．

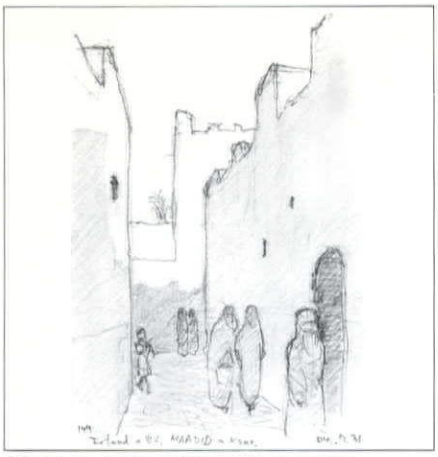
南の方，アンダルシアのコルドバの街では，それが更に華やかになる．　入口扉を開いた家が多く，その内側に鋳鉄製のグリルの扉があり，この格子戸を通して明るい中庭が垣間見られる．　格子戸には，繊細なアラブ模様あり，直線的な抽象模様ありでまことに楽しい．　奥が明るく美しいというのは，期待をいだかせて心地よい．コルドバは10世紀から約300年間アラブ王国の首都であり，しかも当時はヨーロッパ最大の栄えた都であったというが，その文化の高さと伝統の厚みを感じさせるものがある．

中庭そのものはかなりこったデザインのものがある．　中央に池や噴水を置くのが習わしらしいが，黒白の大理石を敷いて床に模様をつけたもの，柱列をあしらって部屋の前に半屋外的空間を設けたもの，さらに手前と奥の二つの中庭をもちアーケードでつないだものなどがある．　鉢植えの草花を置き，時には壁も陶皿などで飾っている．　もともと中庭は，ここを通って各室へ入るし，生活の核となる主空間であるから，家の装飾の中心となるのも当然であろう．

ただ，あとで聞いたことだが，近年の観光化に伴って，年1回，中庭のデザインコンクールが催されるとのこと，これに促されて人々は中庭を美しく外に見せることを競いあうようになったのであろう．　窓辺に花を飾り，壁に植木鉢を吊り下げるなども，案外古い慣習ではないのかもしれない．　今日の平和な時代になって開放することが可能になり，またそれが求められているものと思われる．　やはり中庭型住宅は，本質的には外に対して閉鎖的なものであろう．

◉文化としての住まい

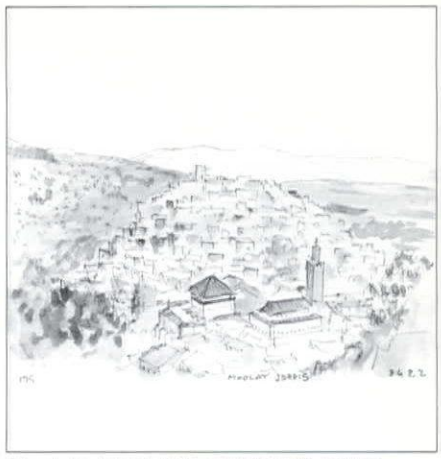
中庭型住宅についてのみ述べたが，この地域を歩いてみると，まだまだ不思議なものを多く目にする．　例えば，斜面にびっしりとはりつき互いに積み重なって家を作る丘陵集落（スペインのモンテフリオ，カサレス，モロッコのムーレイ・イドリスなど），丘の中に穴を掘りあるいは巨大な崖の下を穿って家を作り，内部には美しく飾った居室をしつらえる洞穴住居（グァディス，セテニール，カサレスなど），広い真直な街路はなく曲りくねった細い道に小さな商店と仕事場が密集するモロッコの大都市のメディナ(フェズ，マラケシュなど)，いずれも日本の常識とは著しく異なる．　住生活の様式については，ポルトガル・スペインでは田舎町でも，居間・寝室といった常識で判断できる部屋構成であったが，モロッコでは，誰がどこで寝てどこで食事するのかは聞いても，だんらん・接客などの家族の日常生活の全体像についてイメージが湧かない．　起居様式は椅子を使わないユカ



●マアディド（モロッコ南部）のクサール（旧集落）



●フェズ（モロッコの古都）のメディナ（旧市街）



●ムーレイ・イドリス（モロッコ中部の古都）丘陵都市

ザだが，どんな有様なのか判断がつかない．従って部屋に名前をつけることができない．

これらは，我々とは異なる文化なのだ，と言ってしまえばそれには違いないのだが，この文化がどういうものなのかを勝手に考えてみる．

中庭型住居についていえば，広く見渡せば，東は朝鮮半島の民家，中国の四合院，インドからイラン，イラク，シリアなどアラブの住居，モロッコなど北アフリカの住居，そしてヨーロッパの古い文明を伝えるイタリアやスペインの民家へと分布している．　我々はこれがなぜ中庭型なのかを問題としたがるが，ことによると中庭型の方が人類の住居の主系列であって，日本や東南アジアや北ヨーロッパなどの外庭型（こういう名称があるかどうか知らないが）は，外れの田舎に位するものなのかもしれない．或いは仮に主系列・傍系列と分けないにしても，住居とは基本的に中庭型か外庭型かなのであって，モロッコや南スペインではその一方の型を受継いでいるのだと考えればよかろう．　そしてそれは，我々日本の属する型とは反対の側にいるものだと考えられるのである．

彼らはまず周りを囲むということから家作りを始めるらしい．　塀で囲んだ上で，次に内部に家屋や部屋を作っていく．　アトラス山中で見たベルベル人の家つくりもそうであった．　これはたまたま，青木正夫氏の中国みやげ話で知った西安付近の窯洞民家（洞穴住居）も，まず周囲の土塀を築いてから家を作っていくのだそうで，類似している．

中庭型住居は防衛の住居であり，閉鎖的な住居である．　1戸1戸で守ればそれは完結した形となり，これは決まって入口が小さく固い．　町全体で守れば，それはモロッコでのクサールとなる．　城壁を周らし門を作り厳重な扉を設ける．　ヨーロッパでは中世以降の多くの城壁集落となり，大都市もみなこれから出発して脱皮したものである．　中国の都市また然り．　日本ではこういう伝統がない．　わずかに室町以降に作られた環濠集落（今井・富田林など）にそれと類似するものを見るが，あくまで特殊例に過ぎない．

さらに，中庭型住居から出発したが故に，それが，高層化・集合化・積層化したヨーロッパの市街地住居が，共用の中庭（裏庭）を囲み街路に対しては壁を作るアパートの形になったのだと解釈してもよかろう．一方，外庭型住居が密集して街を作れば，間口を狭めて一列に並び，短冊型の敷地をもって連続するテラスハウスやセミデタッチドハウスを作り，或いは奥行の深い日本の町家となる．

我々日本人は，外に殻をもった家や町を，知識としては理解していても感覚として身につけていない．　だから，現代の集合住宅でも中庭型住戸の集合を見るとどうしても馴染めない．　町が死んだように見えて親しみがもてない．

日本ではどうしても，敵から町を守り，盗賊に対して身構えるということに慣れていない．　また，自分のプライバシーを最も尊いものとして近隣から身を閉ざすという慣習もない．　もっとも，こういう資質も高度成長期以降は次第に変貌し，閉鎖的な住居が多くなってきている．　戸建て住宅然り，公共アパートやマンションではとくに著しい．　また，西欧流の思考をそのまま鵜呑みにするせいか，住居といえばプライバシーが基本だと思い込む建築学生も少なくない．

しかしこういったプライバシーも，実は日本で勝手に作り上げた概念ではないだろうかという気がする．　むしろ西欧では，外敵に対してはしっかり身を閉ざして守り，一方自分たち仲間ではコミュニティを作ることが，長い歴史の中で培われているのではなかろうか．　ただそのために，きわめて閉鎖的な住居形式が作られたのだろうが，平和の今日，それを近隣に対し開く努力をしているということであろう．　モロッコ・スペインを歩いてみると，そのさまざまな姿が見られて面白い．

すまいは文化である．　歴史によって形作られる．　日本では古来からの生活感覚を大事にして，近隣と親しむ生活，内に籠らず外に開く住居のあり方をこそ真剣に追求すべきであろう．

●すずき・しげぶみ／東京大学教授

異文化を訪ねる

モロッコ，スペイン，ポルトガル〈いえ〉と〈まち〉調査紀行

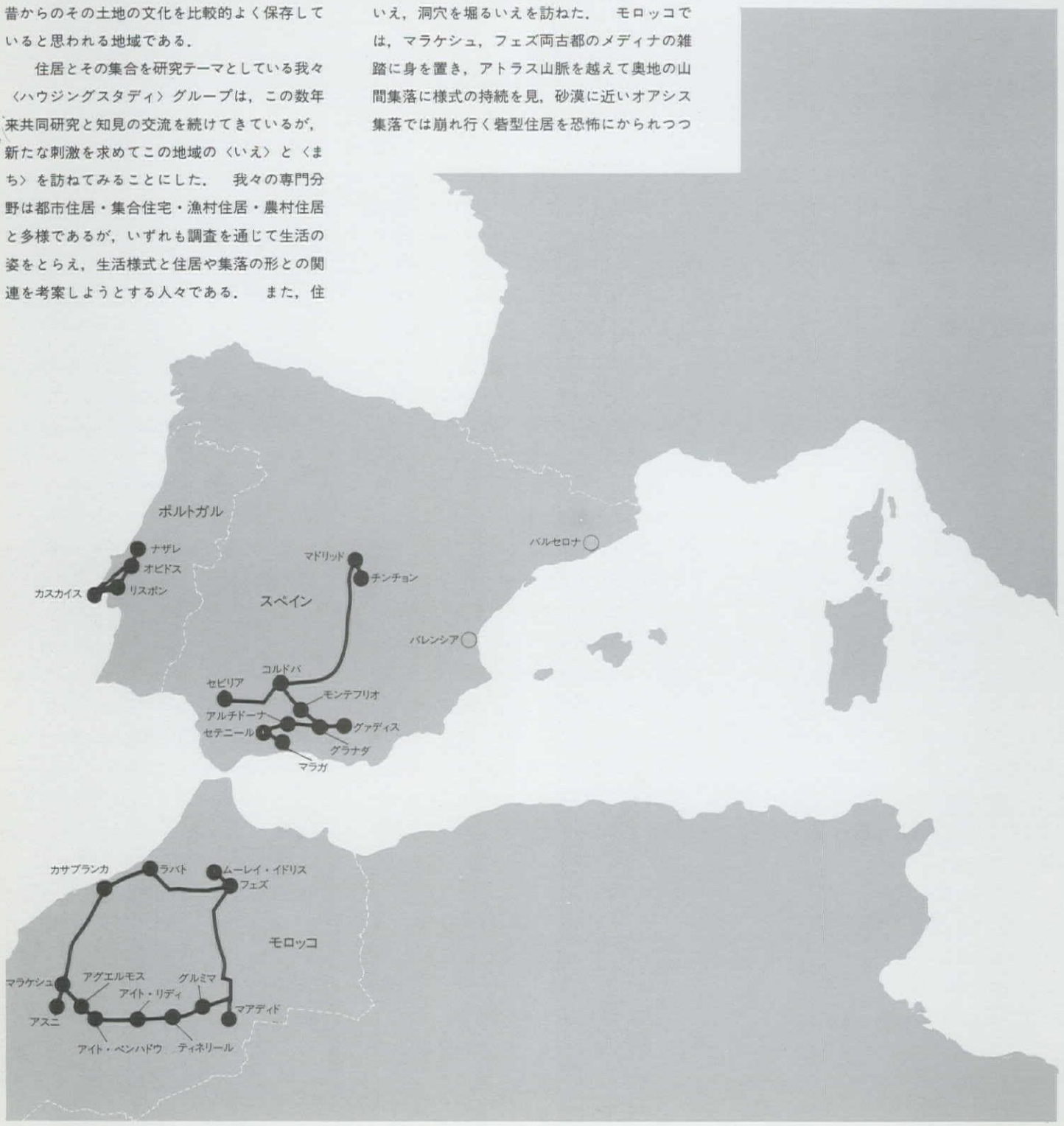
モロッコ・スペインは言うまでもなく灼熱の地帯である．　また，かつてはアラブとカトリックの文化が栄え，両者の戦乱で取ったり取られたりの歴史の久しかった土地である．　そして今日は現代文明の最先端からややとり残され，昔からのその土地の文化を比較的よく保存していると思われる地域である．

住居とその集合を研究テーマとしている我々〈ハウジングスタディ〉グループは，この数年来共同研究と知見の交流を続けてきているが，新たな刺激を求めてこの地域の〈いえ〉と〈まち〉を訪ねてみることにした．　我々の専門分野は都市住居・集合住宅・漁村住居・農村住居と多様であるが，いずれも調査を通じて生活の姿をとらえ，生活様式と住居や集落の形との関連を考案しようとする人々である．　また，住居を現代社会の中で文化としてとらえようとする人々である．

この暑い地域のすまいを見るにはなるべく暑い時期がよい．　そこで7月半ばから8月初めまでの日程とした．　ポルトガルでは，リスボン市内の古い居住区の斜面に刻まれた生活のリズムを実感し，近辺の漁村・旧村で時代の流れを垣間見た．　スペインでは，中央部マドリッド付近の古い町の中央広場に中世の肉と太古の血を夢想し，南へ下って旧都コルドバに華麗なパティオとその裏を覗いて中庭型住居の原理を考察し，さらにアンダルシア地方アラブの砦の残る丘陵集落に，崖に潜るいえ，丘に連なるいえ，洞穴を堀るいえを訪ねた．　モロッコでは，マラケシュ，フェズ両古都のメディナの雑踏に身を置き，アトラス山脈を越えて奥地の山間集落に様式の持続を見，砂漠に近いオアシス集落では崩れ行く砦型住居を恐怖にかられつつ凝視した．

これらの地域については，住居や集落の形やデザインについての紹介はあっても，これを支える生活についての報道が意外に乏しい．幸い我々は住居研究者の集まりであるから，行く先々で住居を訪問し，時には実測調査し，住み方を尋ね，そしてその原型の成立と現代の変容につき考察した．

気温は最高40度，酷熱の旅であったが，我々の日常的常識や西欧的知見とは異なる文化に接し、その度に興奮し文字通り暑さを忘れる得難い旅行であった．　●鈴木成文



MOROCCO
Ait-Benhaddou, Tinerhir, Goulmima, Maadid, etc.

クサール

モロッコの砦型集落

會田忠宏

モロッコは，アトラス山脈を境にして，北側は地中海性気候，南側は砂漠気候に大きく二分される．　この南側の地帯，より細かにいえばアトラス山脈とサハラ砂漠の中間のステップ地帯が，今回が尋ねたクサールの存在する場所だ．　ステップといっても，われわれから見ればそこはもうまさに砂漠であり，乾燥と夏季の酷暑は当然ながら，標高1000～1500mの高地で，冬季の寒さも厳しい．　水はといえばアトラス山系から流れ下る川が頼りで，クサールはこれらの谷筋に点在するオアシスの一画に形成されている．　というより，彼らが定住することにより，オアシスを守り育てて来たというほうが正しいかもしれない．

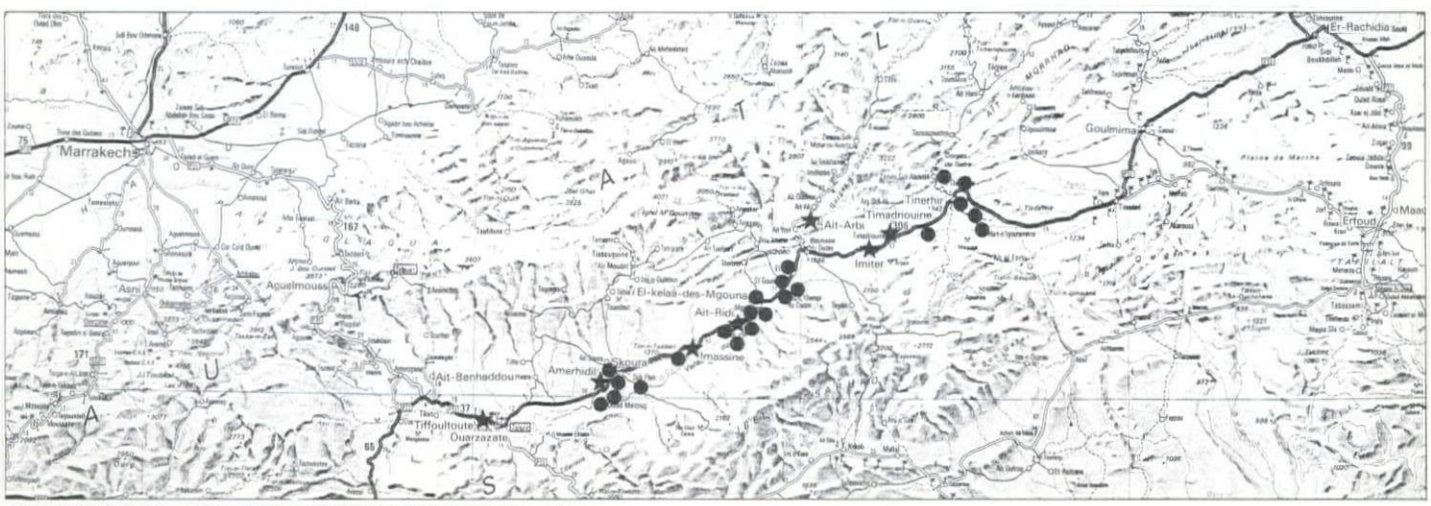
砂漠に限らず，こうした厳しい風土は生きるひとびとのありようを見るにつけ，何故こうしたところをよりによって生活の場としたのか，して来たのか不思議としか言いようがないのだが，外的要因は多々あるとしても，究極は自らが選びとったということではないだろうか．　そしてそれらのひとびとの広い意味での文化についていえば，気候風土に対処・順応して生み出されたであろう部分は当然あるだろうが，そのアーケタイプ・原形はその文化形成のかなり早い時期に定まっていると考えられる．空間を例にすれば，気候風土によってある空間の型が成立したというより，ある型を持ったひとびとがその地を選んだという側面が強いのではないか．　このステップを居住の地として選んだクサールをつくったひとびとについていえば，〈囲う〉とか〈限る〉ことが原形の一つではないかなどと旅の間にふと考えたりした．

今回見て歩いたクサールは，見た順で言えば，アイト・ベンハドウ(Ait Benhaddou)，ティネリール(Tinerhir)，グルミマ(Goulmima)，マアディド(Maadid)である．　またクサールとはいえないが集落としては，アグルムース(Aguelmouss)，アイト・リディ(AitRidi)をあげておきたい．　特にアイト・リディは，クサールの形成過程を窺い知るひとつの視点を与えているように思われた．　クサールについて触れる前に，ちょっと寄り道をして見ておきたい．

アイト・リディの集落はワルザザーテから車で約1時間半くらい，ダデス谷にそって更に東に進んだところにある．　街道のすぐわきに，頂きに大きな岩を乗せた，高さ30～40mの小高い丘があり，この丘の裾に街道からやや離れて，平家または一部2階建の家が散開する．　いま散開という表現をとったが，集落としてのまとまりとか一体性は感じられない．　単位となる住居は，基本的に他のところで見た中庭型の方形の家だが，正確な方形ではなく微妙に歪んでおり，家畜を囲う中庭その他を付属させてさまざまなバリエーションがある．　こうした家々が集落周辺では1戸から数戸の単位で連なり，中に進むにつれてそれらが連たんし，なんとなく集落らしい形態を示しはじめる．　道らしい道はなく，住戸の壁と壁の間の轍の跡とか踏み跡が道といえば道で，壁と壁の距離を道路幅とするなら集落の周辺では十数mくらいあって中心部で8mくらい，これがメインの道路である．　これから各戸へのアクセス道路が不規則に連なっている．　こちらは3～4m幅で，両側の家の壁の具合で微妙に変化しながら，それでもなんとか道らしい姿を見せる．　つまり道は後から出来る，あるいは家をつくりながら道もつくっていくと考えたほうが素直なようだ．

なぜこんなことをくだくだと述べているかといえば，クサールのつくられる過程も恐らくこんなふうだったのではないかと思われるからである．　ただし決定的に違うのは，クサールはその規定する条件ともいうべき砦壁が廻らされているのに対し，ここにはそれがない点と，そのために住戸はだらだらと建て拡がり，住戸密度がはるかに低いことである．　その結果，最終的な姿として，この集落は今後住戸が増えたとしても，クサールのような緊密な空間を構成することはないだろう．

クサールのあの砦壁が，クサール建設の過程のどの時期につくられるのかは判らない．　まず最初に砦壁からとりかかるとは思えないが，想定されるクサールの構成人口に対して地形その他を勘案して最終的な範囲は当然計画されるであろうし，その砦門も機能及びシンボルとしてどの位置に建設するかが，クサールを構成するなにびとかによって決定されるであろう．　道路にしても，なかば自然発生的ではあっても，やはり何らかの構造あるいは規則性をもっ



●カスバ街道（ティネリールとワルザザーテをつなぐ）に点在するカスバ（★，●）．



●アイト・ベンハドウのクサール　Ait Benhaddou

●アグルムースの集落　Aguelmouss



●アイト・リディの集落　Ait Ridi

て計画されていることが感じられる．（ただ道路に関しては，それを構成する住戸との関係や道路空間そのものからみて，日本のそれ，或いはヨーロッパの都市のそれと性格を大きく異にしているように思われるが，詳しくはまた後で触れることになろう．）

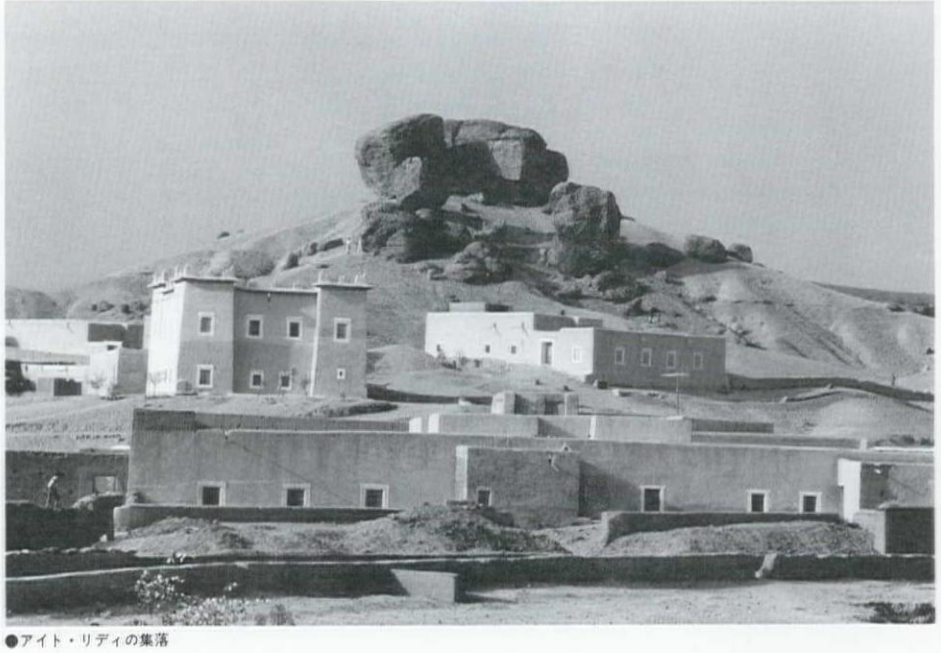
アイト・リディは新しい集落のように思えたし，事実，街道寄りのところで現在新築中のものを見かけたが，今後人口が増え密度が上っても決してクサールという形にはならないだろう．　なぜなら，クサールはある時期までの文化または社会体制によって形づくられ，維持されて来たものであり，今やそうした基盤がいろいろな点から崩壊しつつあるように見えるからである．

まず人間関係の点でクサールを構成する部族あるいはそれを構成する家族体制が変化し，その結束が弱まり核家族化・少人数化したことがあげられるであろう．　次に，防御の必要が無くなったこと．　つまり守るべきものが内部的に崩壊し，外的にも過酷な自然以外に防がなければならない直接の外敵がいなくなったこと．　同じようなことが技術の面でも言える．　クサールは基本的には水によってその存否を左右されるが，エンジンや電気によって，水脈のあるところならかなり広範囲の場所に深い井戸を掘り，更には揚水することが可能になったわけで，水によって限定された場所に高密に生活する必要がなくなる．　逆に高密に住むことを可能にするために傾けられた結束された意志や努力および労働力や建設技術やエネルギーといったものが発散し希薄化され，今やわずかに残されたその片鱗を見ることのできるこれらのカスバやクサールは，今後もう恐らく建設されないのではないかという思いが強い．　それればかりか，素材の点からみて，維持管理の手が入らなくなれば急速に形を失っていくことは明白であり，現に既にその状態に突入したクサールをこの眼で見たのである．

アイト・ベンハドウのクサールは，今回見たクサールの中で最も美しいクサールと言ってよいだろう．　建設も恐らく最も古いのではなかろうか．　しかし同時に最も過疎化し，廃墟化への速度も早そうに思われる．　ワルザザーテへの街道から一旦それて，メラ河にそって漸く進むと，やがてメラ河が削りとった対岸の山腹に，アイト・ベンハドウのクサールがまさに砦という偉容で姿を現わす．　標高差30～40mくらいのかなりな急斜面につくられているので，他のクサールと異なりそれを構成する

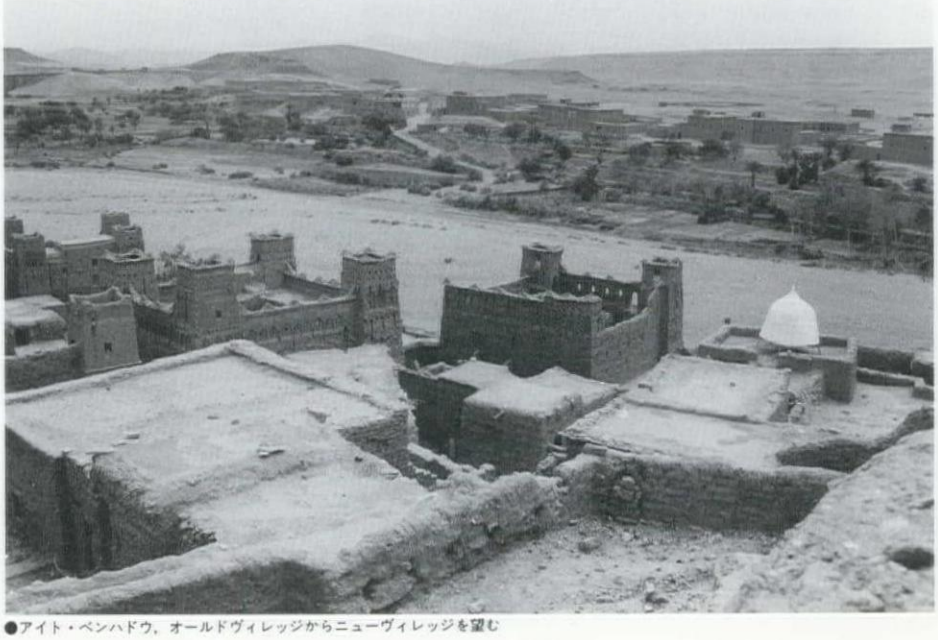

●アグルムースの集落


●アグルムースの集落


●アイト・リディの集落


●アイト・リディの集落


●アイト・ベンハドウのクサール

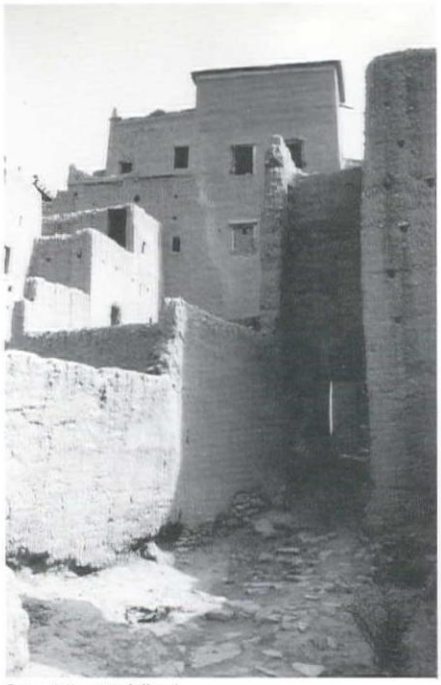

●アイト・ベンハドウ，オールドヴィレッジからニューヴィレッジを望む



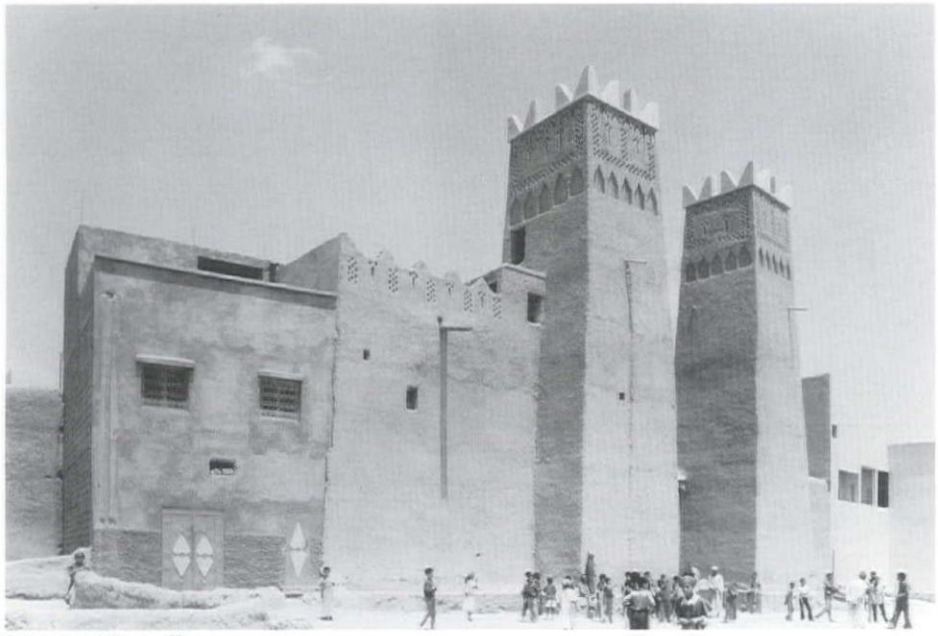
●ティネリール，クサールとパルミラ



●ティネリールのクサール



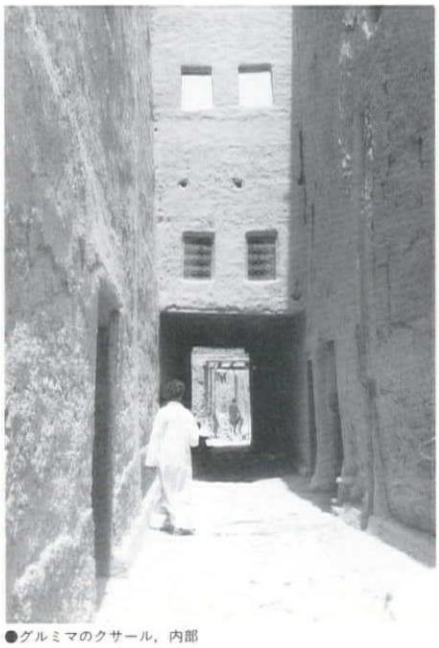
●ティネリールのクサール



●グルミマのクサール，門



●グルミマ，水路空間



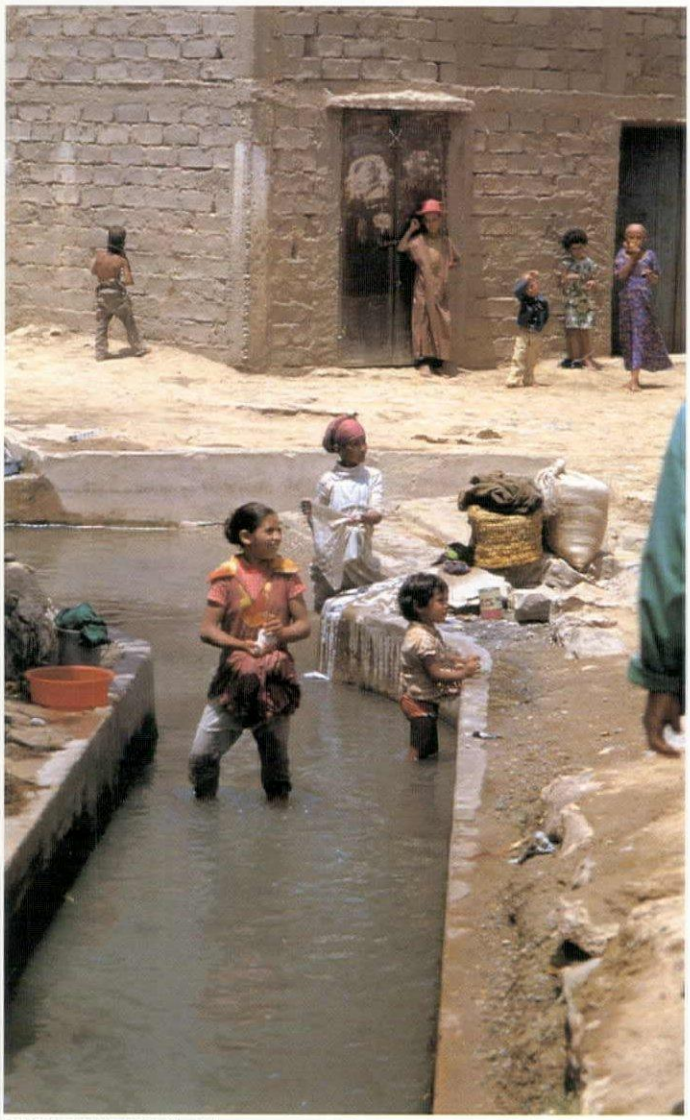
●グルミマのクサール，内部

住居単位が外部からよく判る上，四隅に塔を持つカスバ型のものが数多いので，いやが上にもその彫塑性を高めている．　規模は2haくらいだろうか．　南に河に面して砦門が屹立し，砦壁が両側に延びる（しかしほとんどが崩れ面影を止めていない）．　門を入って一段高いところに広場があり，これに繋がって最下段のレベルにメインの道が横に走り，ここから斜面に向かって縦の道が斜面を登ってゆく．　その途中で何本かの道がこれを横につないでいる．　一部で鉤の手状に曲がったりトンネル状になってはいるが，地形の助けによる見通しもあって，場所感を失うことはない．　ここに現在残っているのは25世帯というが，こちらをオールドヴィレッジとすると対岸に現在ニューヴィレッジがつくられつつあり，今やこの集落は既に廃墟といってもよい程である．　ティネリールやグルミマもクサールの外部にかなりスプロールしており，特にティネリールは新しい町と連たんし，新しい町に中心が移って，このクサールもあと数年ではないかと思われた．

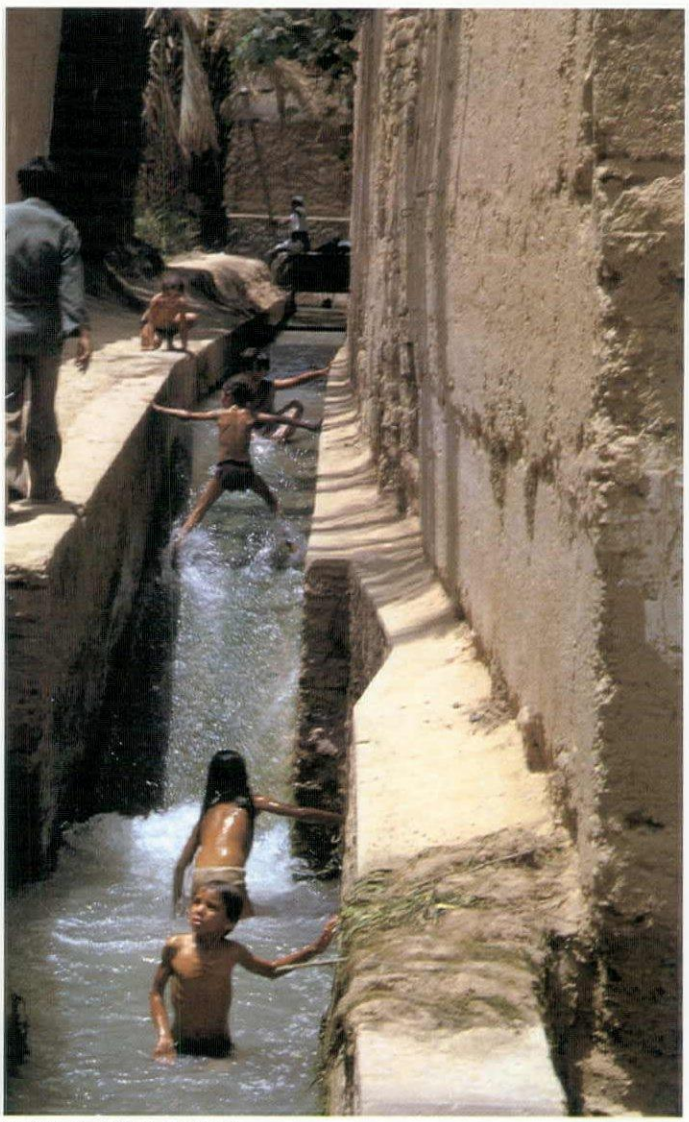
アイト・ベンハドウを山岳型とよべば，ティネリール，グルミマのクサールはオアシス型とでもいおうか．　谷の最も低い平坦部をナツメヤシや菜園などの所謂パルミラとして抱え，これに接して谷のゆるやかな斜面あるいは一段高い平坦部にクサールがつくられている．　両者とも裏側つまり正門でない側あるいはパルミラ側に，クサールに添って1m余の幅のかなりの水量の水路があり，洗濯をする女たちや水遊びの子供で賑っている．　水路の周辺は外部化された共有空間であり，特にティネリールでは斜面にあるクサールがパルミラの緑陰に向かって勝手口として開く形になっており，インティメイトでのびやかな空間をつくり出している．　しかし両者ともクサール内部は2階または3階4階の丈の高い住戸が密集し，道路は住戸の壁に挟まれ，あるいは住戸の下をトンネル状に縫って縦横に迷路のように走り，われわれのように慣れない者の場所感を失わせることがある．しかしこれは迷わせるように意図してつくられたのではなく，通常われわれが道路から読みとって判断の材料にする情報が少ないというべきであろう．　メインの道路は道幅が広く，順次細い街路になるにつけて狭くなるとか，所々に広場とか四つ辻といった結節点があって分節的に構造がつかみ易くなっているとか，そういったことがまるでない．　先に述べたように住戸をつく



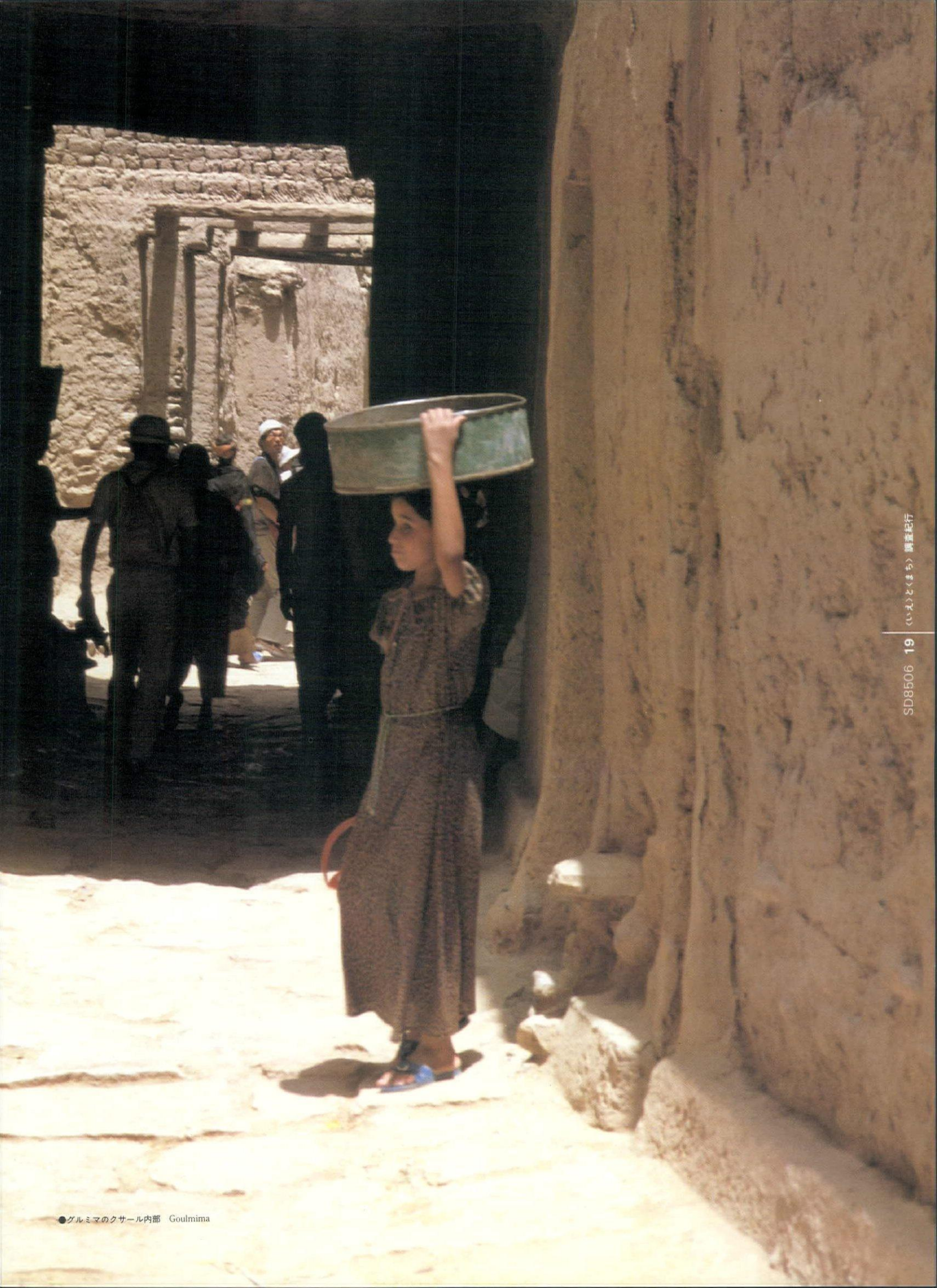
●グルミマの水路空間　Goulmima



●グルミマの水路空間　Goulmima



●グルミマの水路空間　Goulmima

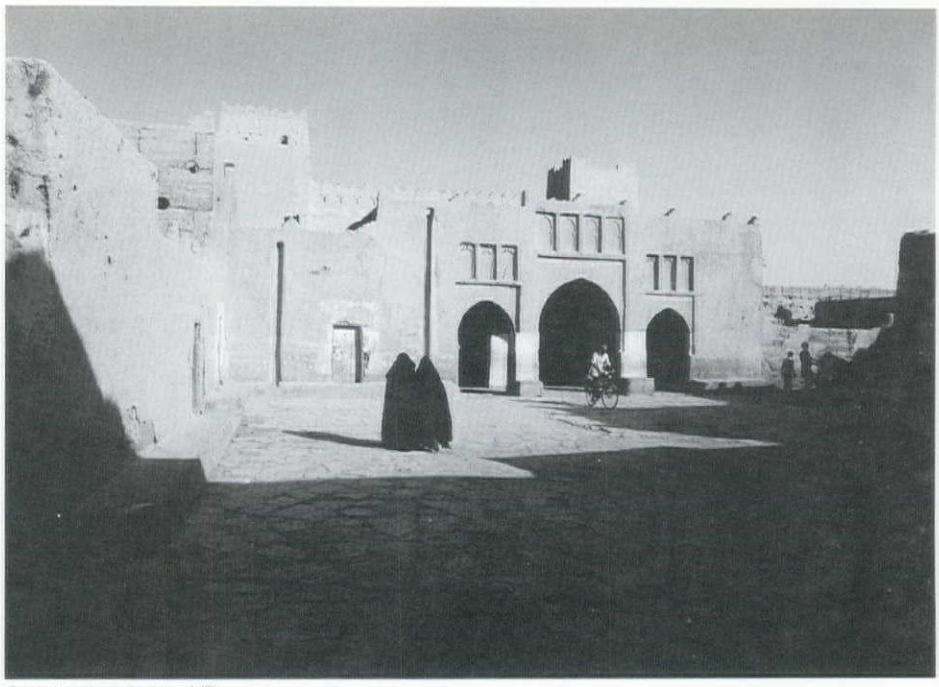


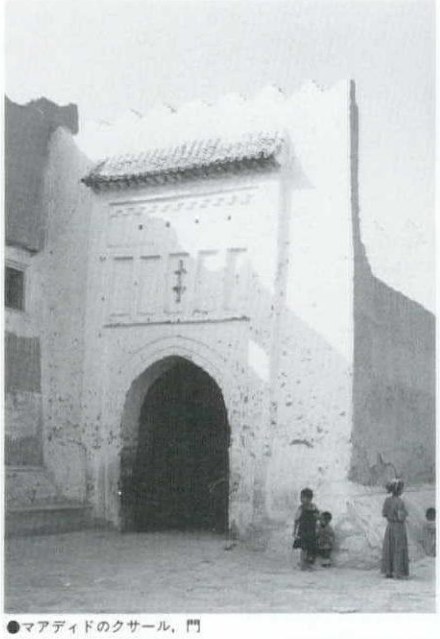
●グルミマのクサール内部　Goulmima

りながら道路もつくるというやり方で，半ばなりゆきにまかせて出来上った感じがする．　といって全く構造がないわけではなく，次に見るマアディドでは明快な構造がよく現れている．　道路と各住戸との関係も独得で，まず開口部が極端に少ない．　出入口も穴があいていて扉があるというだけである．　といって道路が住戸から拒絶された外部かというと，どうもそうだとは言い難いのである．　グルミマやマアディドのように現在も活気のあるところでは，道路は生活空間として活用されている．　そこでこんなことを考えてみた．　クサールでは道路は廊下なのではないか．　クサールの門を一歩入るとそこはもう内部であり，廊下が連なる．　その廊下に更に内部に開き内部にまとまりを持つ形式の住戸が大小とりまぜ接し並んでいる．　ホテルの廊下と客室というと一寸ずれがあるが，昔よくあった中廊下型の木賃アパートにイメージとしては近いものがある．

もしもクサールを上空から見れば，それは四角い凹凸のはげしい平べったい蒸しパンのようなものではないだろうか．　蒸しパンの所々に四角い突起や筋が浮き出し，所々に四角い大小の穴が深浅さまざま明いている．　こんな想像をしたのは，マアディドのクサールの住戸の一つに入れて貰えた折に，屋上に登って周りを見廻したときである．　ここは非常に新しいクサールのようであり，道路パターンなど非常にはっきりしていて，クサールというより計画的につくられた高密度タウンハウスとでも言ってよいような感じがした（内部を実測した住戸の規模から概算すると250～300人／ha.）．　ここでは住戸はおおむね2階建に統一されており，住戸規模も揃っているように見えた．　上からの眺めは，下の道路からの虫瞰的な把握とはがらっと変った印象を与えた．　住戸を画する塀は少なくともひとの背丈より高く隣は見えない，或は見ないということを不文律にしているのであろうが，2階の屋上に登ればまる見えであり，実際この屋上にナツメヤシの葉などを乾したりしている．　いずれにしてもこの屋上空間はなかなか快適な生活空間のようであった．

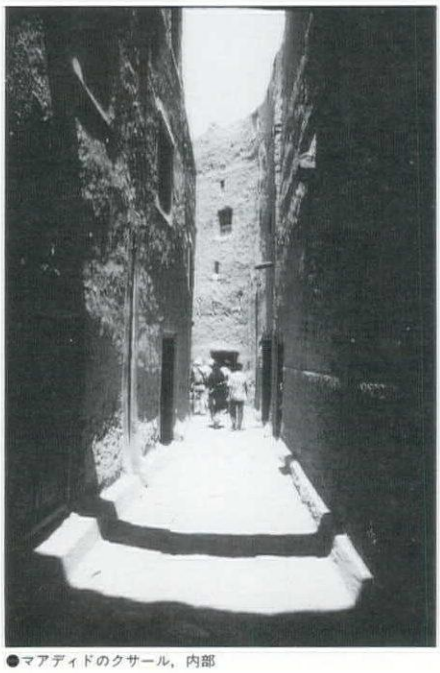
クサールについて語る場合，欠かすことのできない構成単位としての住戸については他の項に委ねるとして，空間構成の原形としての囲うとか限る，或いは内部の内部等についての議論はまた次の機会に譲りたい．●そだ・ただひろ／愛知工業大学助教授

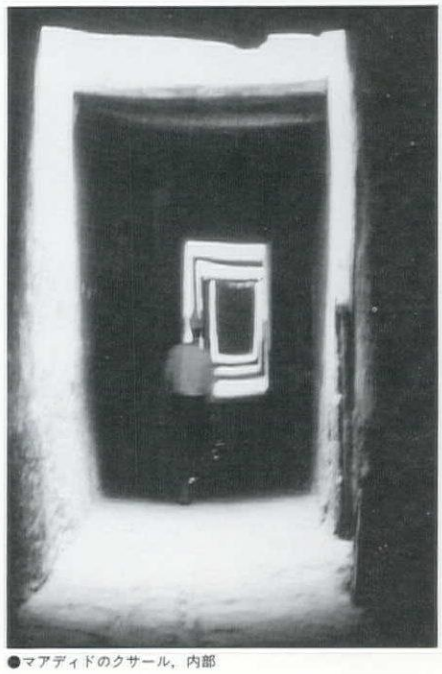

●マアディドのクサール，広場


●マアディドのクサール，門


●マアディドのクサール，住戸の屋上からの風景


●マアディドのクサール，住戸の屋上からの風景

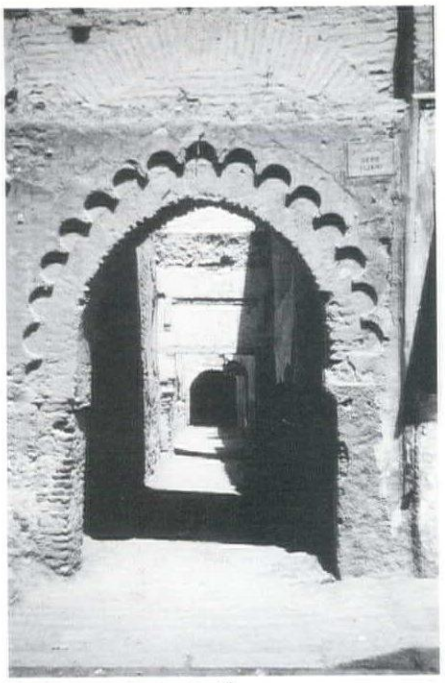

●マアディドのクサール，内部


●マアディドのクサール，内部

MOROCCO
Fes, Marrakech

メディナ断章

長沢 悟



●マラケシュ，メディナへ入る門



●マラケシュ，メディナへ入る門

◉メディナ

モロッコの空間構成を最も特徴づけているのは，住居としてのカスバ（kasbah）と集住体としてのメディナ（medina）である．このうち，カスバは徐々にではあるが近代化の影響を受け，核家族化とともに打ち棄てられる例が目立ったのに対して，メディナの方はますます人々を引きつけ，賑わいを増しているように思われる．　その迷路性と同時に，人々の活動の種々雑多性，音，匂い，接触しながらでなければ前へ進めない込み合い等，我々の五感全てに同時に強烈な刺激を送り続けてくる．

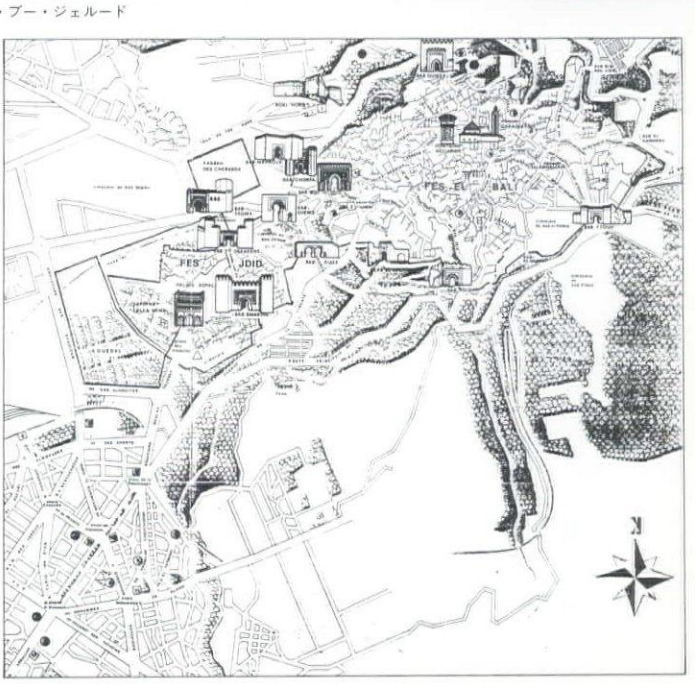
メディナは，今回訪れることのできたマラケシュもフェズも周囲を高い土の壁で



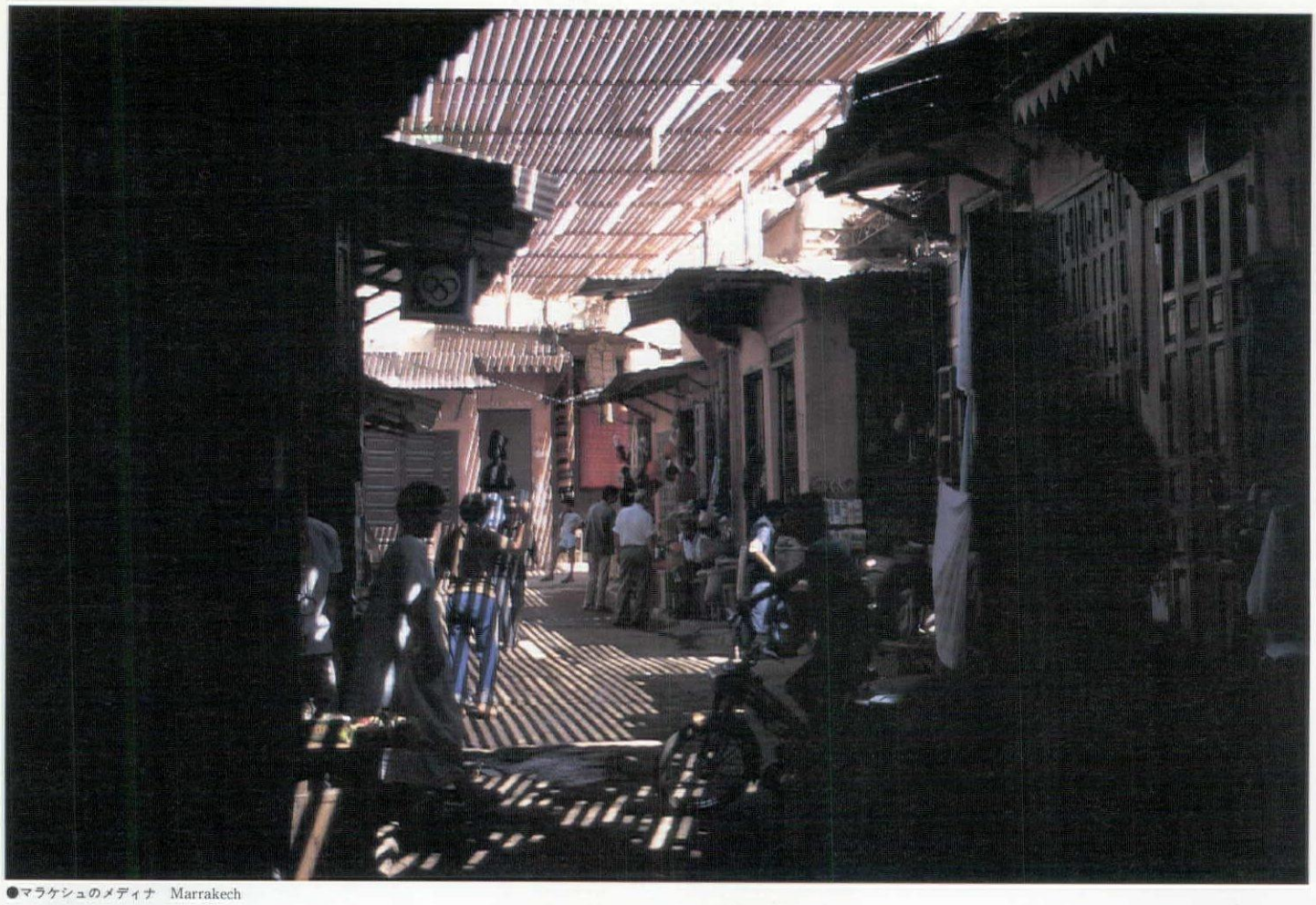
●フェズ，メディナへ入る門，バブ・ブー・ジェルード



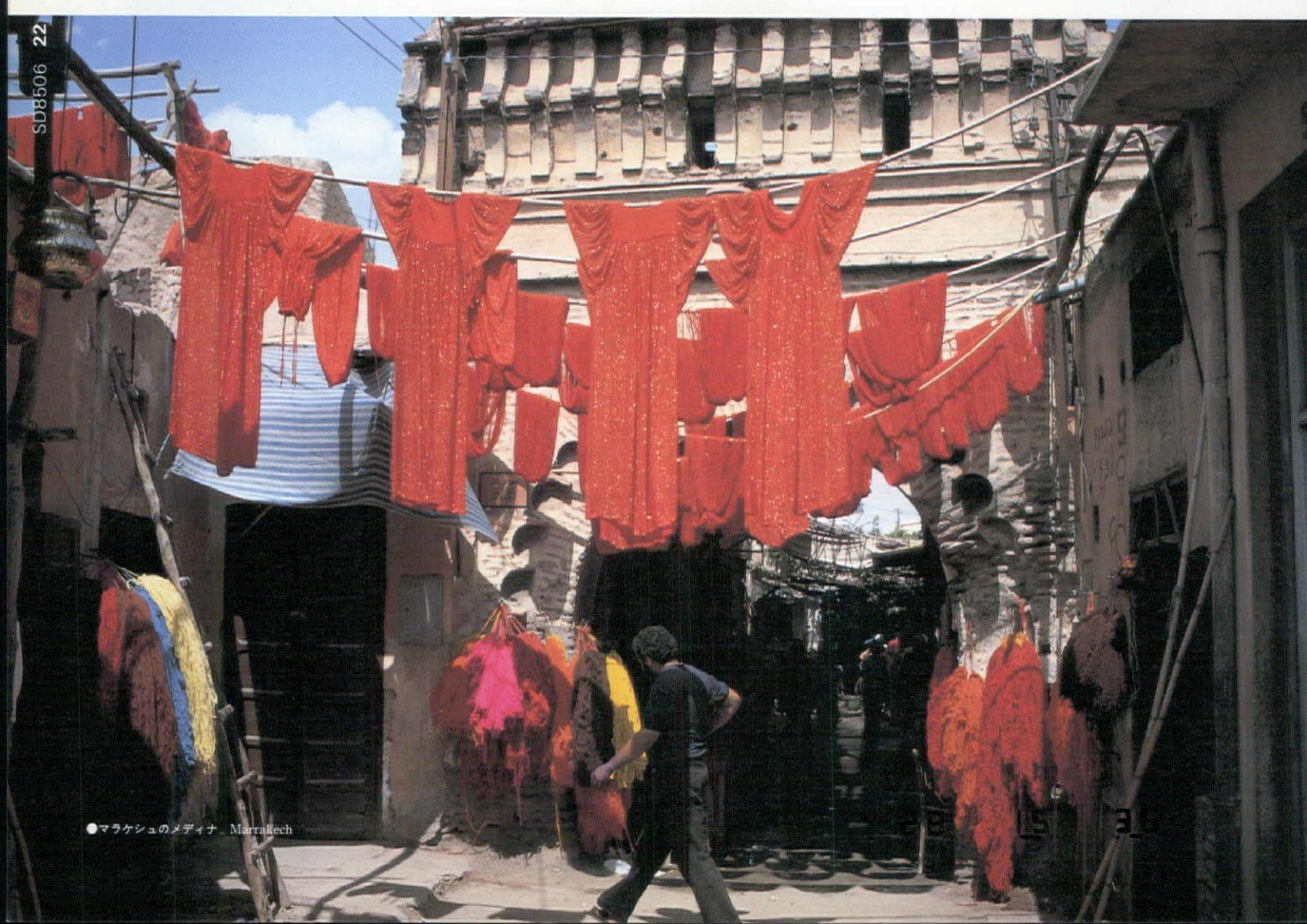
●マラケシュのメディナ



●フェズのメディナ

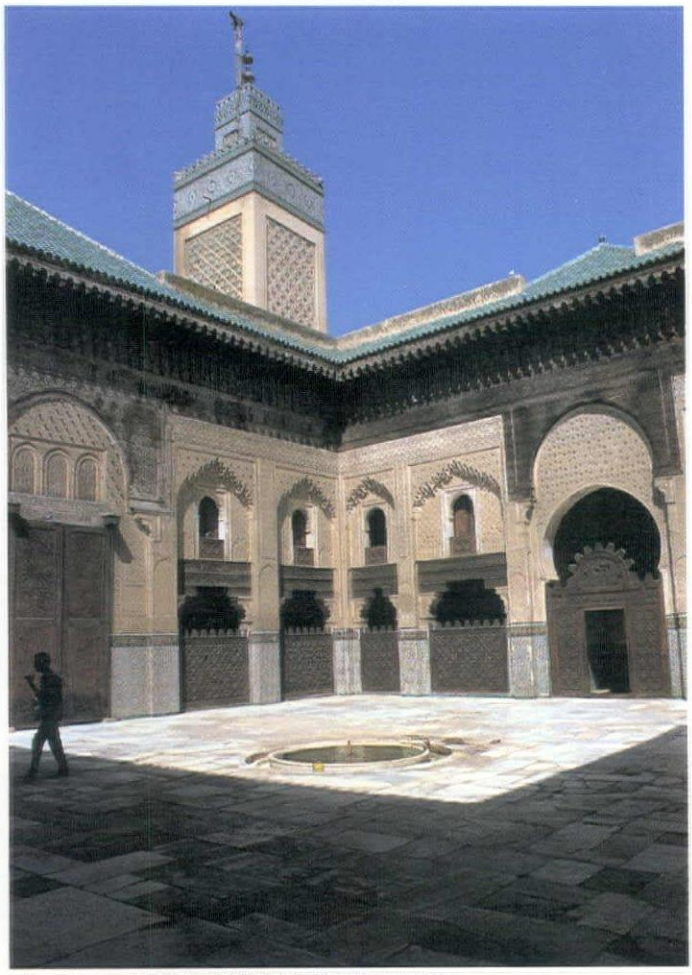


●マラケシュのメディナ　Marrakech

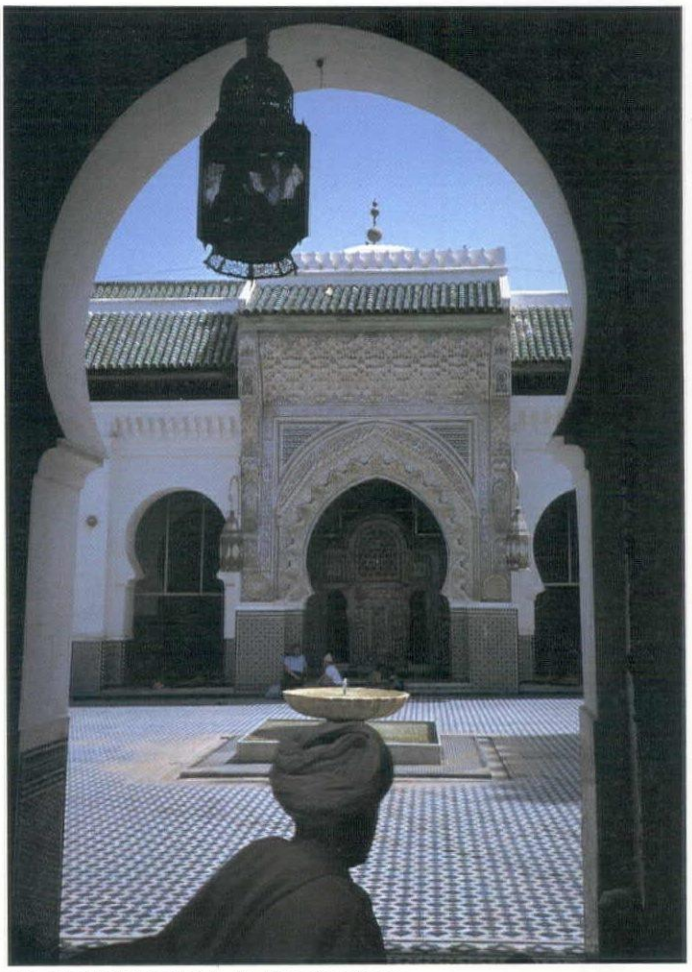


●マラケシュのメディナ　Marrakech

●フェズ，ブー・イナニア・メデルサ，道にかぶさった木製のポーチ，Fes, Bow Inania Medersa



●フェズ，ブー・イナニア・メデルサ　Fes, Bow Inania Medersa



●フェズ，カラウィン・モスク　Fes, Karaouiyne Mosque

囲まれ，限られた門(Bab)からしか出入りできない．　市街地図を見ると，壁の中は周辺部に墓地や庭園等が僅かにある以外は，びっしり建物で埋め尽くされており，その中を隅々まで大抵は行き止まりの細い路地が巡っている．　新市街はその外側に見慣れた道路形態と敷地割をもって広がっている．

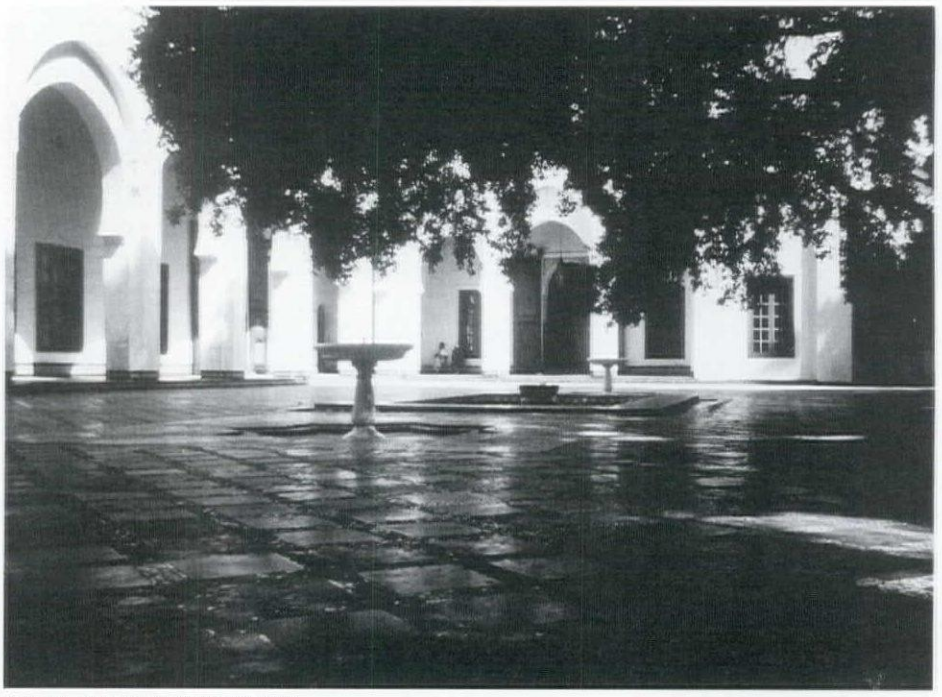
◉マラケシュの広場——遠心的アプローチ

マラケシュは，メディナに向かって走る他の大通りが壁に沿った環状道路とつながって終わるのに対し，モハメッド5世通りが唯一つ中まで入り込み，ジャマ・エル・フナ（Jama El Fna）広場まで達している．通りはその手前にあるクトウビア(Kutoubia)の，高さ70mのミナレット（例外的に独立して立っている）に導かれ，まず広場で外来の者を受け止めてから奥に送り込み壁の内側の地域の中心的位置にまで達する．　長距離バスもここに到着するので，バスの乗客は一歩足を降ろした瞬間に，別世界に来た感覚に捉えられ，我を忘れる仕掛けになっている．

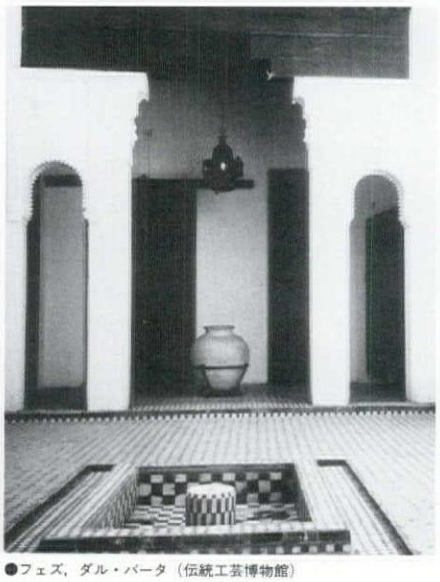
この広場はかつてはこの地に君臨した王達が公開の処刑場として利用していたと言う．　現在は朝は青空市場，昼は青空食堂，そして午後の暑さがおさまる頃からは，周辺の各地方から集まってきた民族音楽，民族舞踊，アクロバット等のグループ，猿回し，占い師，屋台等が続々と姿を現し，喧噪の度を高めていく．　夜に入るとアセチレン灯の強烈な光のなかで，香具師，物売り等が数を増し，祭の気分は最高潮に達するが，これが毎日のことなのである．　一方，その光の陰で玉葱を数個積み上げた2～3の山の前にうずくまって何時現れるとも分からない客を待つ老女，いくらもしない手製の鍋敷を必死に売りつけようとする女，乳飲み子を抱いた母親や不具者達の物乞いなどの存在が，その光を一層まぶしいものにしている．　例えば広場の横のレストランのボーイが旅行客一人から受け取るチップの方がはるかに大きいことを思うと，大資本家は論外として，金の流れの重層性を実感として理解することは殆ど不可能のような気がしてくる．　しかも子供に「しっかり勉強しなさい．そうすれば…」とい



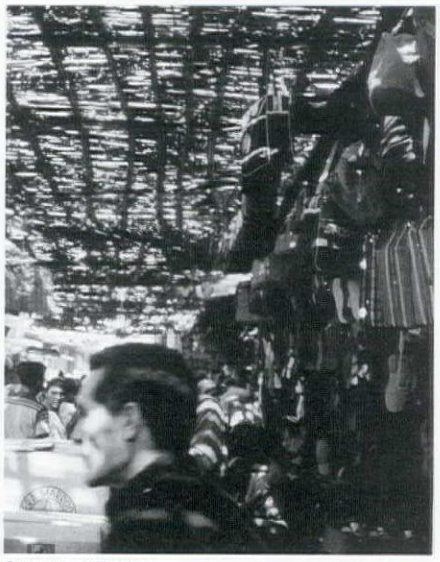
●マラケシュ，ジャマ・エル・フナ広場



●フェズ，ダル・バータ（伝統工芸博物館）



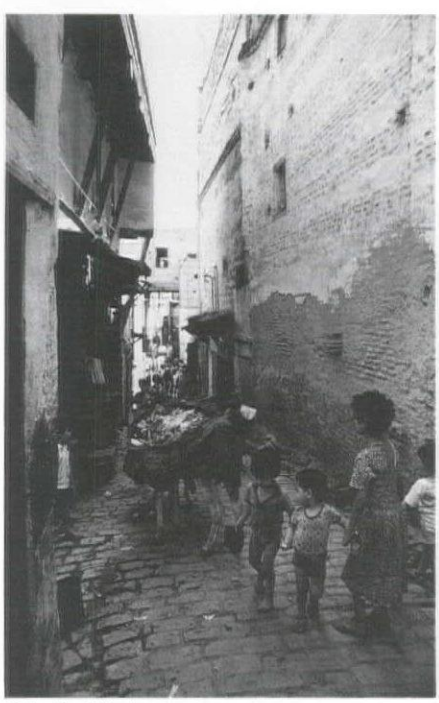
●フェズ，ダル・バータ（伝統工芸博物館）



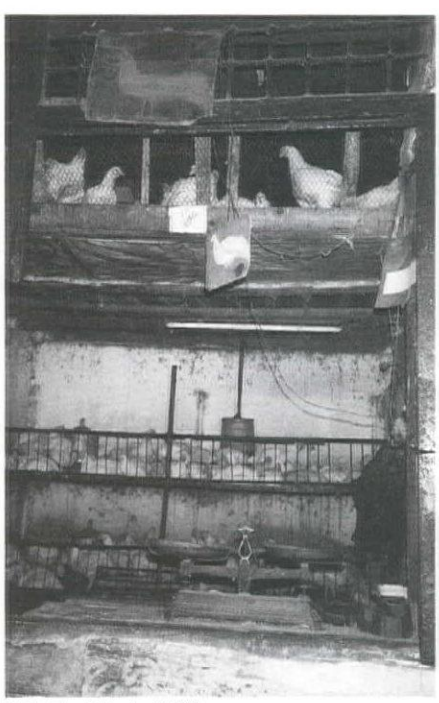
●フェズ，メディナ



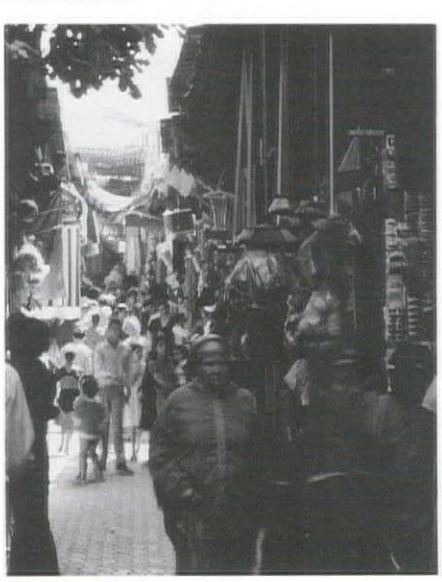
●フェズ，メディナ，道の交差した広場



●フェズ，メディナ



●フェズ，メディナ，鳥肉屋



●フェズ，メディナ



●フェズ，メディナ，果物を売る店



●フェズ，メディナ，野菜を売る店

う日本的な言い方は殆ど意味を持たない．

◉フェズの日用品・食料市場——求心的アプローチ

フェズのメディナの道路も，新市街の軸となっているハッサン二世通りの延長道路だけが，ダル・バータ（Dar Batha）という19世紀の王宮を使用した伝統工芸博物館の前まで直接引き込まれている．　但しこれは壁を入ってすぐの所で，中心部まではまだ遠く，広場もないので各門から直接メディナに入ってくる人が多く，バスやタクシーの発着場もそちらにある．　我々も最初の日は南の門から入った．　そこは地元住民の日常の食料・雑貨の市場で，生きた鶏を並べ，客があるとその場で首をはねるという新鮮そのものの鳥肉屋，牛の顔の肉を客の注文に応じて削いでいくので吊るしたそれが石膏のマスクのようになっている肉屋，多種多量の野菜・果物・香料の店，鍋釜その他雑貨類の店，修繕屋などわが国でも戦後暫く見られたが今は見掛けなくなったような店などが，物凄い人込みの中に独特の匂いを発しながら並ぶ様子は，マラケシュの広場とは違った，生活との距離の近さ故にむしろ強烈な印象を与える．

◉迷路

マラケシュのジャマ・エル・フナ広場の周りは２～３階の建物のため，広場は開放感が非常に大きい．　ところが，ここに口を開けている路地に一歩足を踏み入れると，方向感覚がしきに失われてしまう．　道は狭く，任意にカーブし，しばしば突き当たり，しかも路地の上には日除けの簾が水平に張られ，美しいシャドウ・プレイが上からの情報を奪ってしまうからである．　その上，人の数がとにかく多い．　自分で道を確かめながら歩こうと言う意志は直ぐに放棄せざるを得ない．　これに対してフェズでは道のパターンは同様に迷路だが，もう少し挑戦意欲が湧く．　モロッコ最大のカラウィン・モスクに行こうと思った時，道を覆う簾がマラケシュ程多くないのでミナレットを目標にでき，またフェズは丘の斜面に立地しているため，地面の起伏が手掛りを与えてくれるように思われた．　ところがこれも見事に裏切られた．　方向を

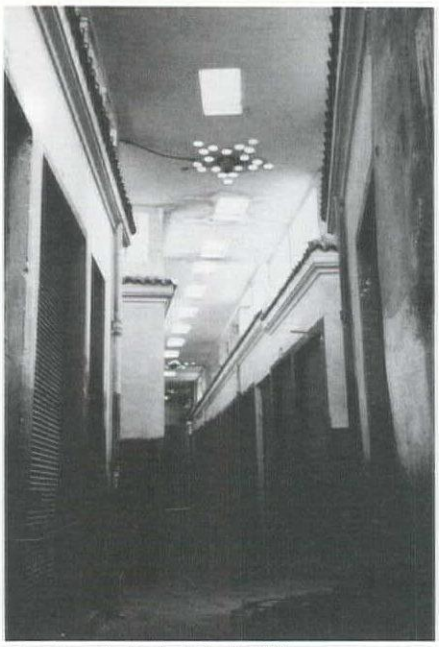
定めて進めば，確かに近付きはするのだが，到達したと思って出る地点が逆に遠くなっていたということが再三で，遂に諦めるということになった．　斜面の中の微地形に騙されるようである．　軸線，中心，放射状や格子状等のパターンに，我々の定位感覚が普段いかに依存しているかを痛感させられた次第である．　さて，以上は店の並ぶ表通りについてである．　路地については言うまでもなかろう．

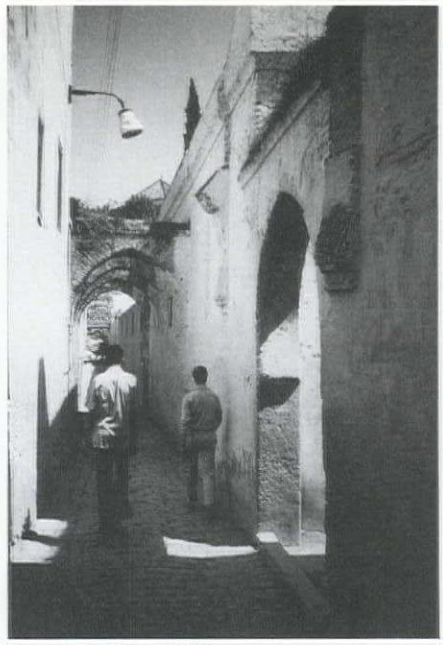
◉表と裏

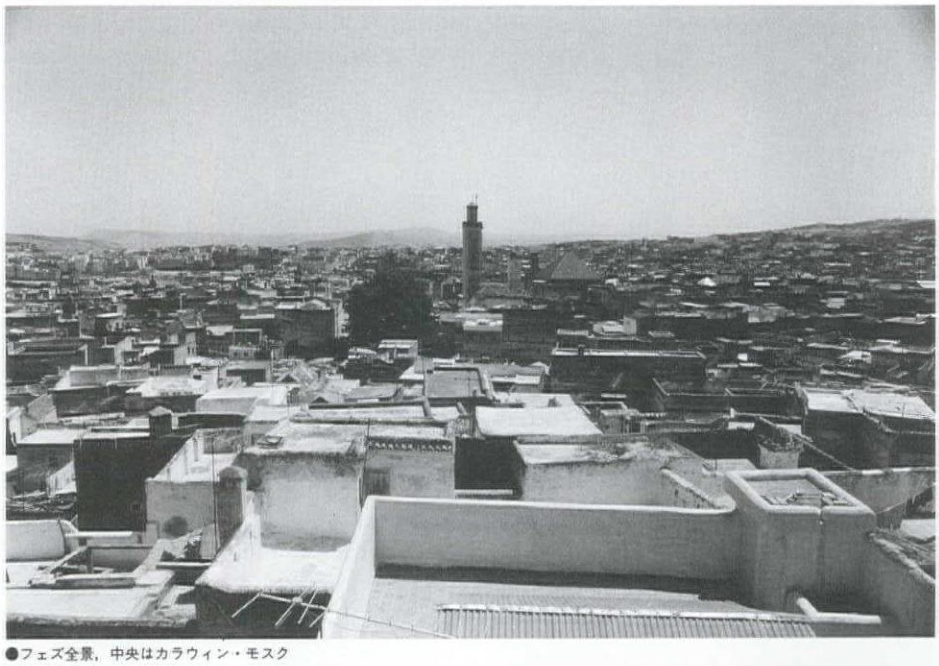
この表と裏の構成は，マラケシュとフェズでは若干異なっている．　マラケシュでは最後の日の夕方，6歳と9歳位の兄弟にメディナを案内してもらった．　路地を入っていくので付いていくと，店の裏側の通りに工芸品の製作所が並んでいた．　表通りは，呼び込みが激しいが，ここはそういうこともなく，ゆっくりしていられる．　所々に精々7m角程度のオープン・スペースがあり，作業や休憩をしている様子が見られた．これは子供の案内なしにはなかなか入っていけない．　我々だけでは抵抗が大きいし，大人の案内人は店に誘いたがるからである．一方フェズの場合は，表通りから入った路地には住宅が並び，建物もマラケシュより高層化している．　一寸日が傾くともう薄暗い．　住民も路地に出ていることが多いので余所者はとても入って行けない．　但し，路地の突き当たりなどに，パティオをもつ旧大邸宅があり，高級カーペット屋になっていたりする．　そういう所に誘われた時覗くと，路地から直角にさらに細い路地があり，その暗闇の中で人影がうごめいていたりする．

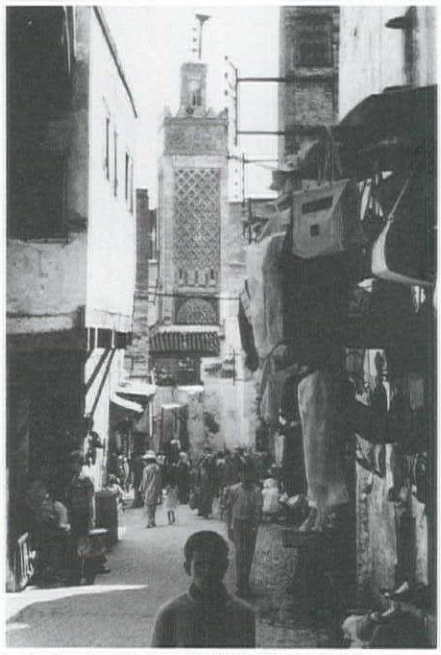
◉モスクとメデルサ

マラケシュもフェズも，メディナの中には中庭をもつモスクとメデルサ（神学校）が数多く存在する．　京都になぞえられるフェズではモスクの規模がいずれも大きいのに対し，マラケシュでは他に中庭もない小規模な礼拝所が散在している．　後者は，薄暗い筵敷のような雰囲気の場所で何気無く歩いていると気づかないが，一方大きなものもうっかりすると見落とす可能性がある．　それは神社の参道やキリスト教会の


●フェズ，メディナの中の天窓のある街路


●フェズ，メディナの中の街路


●フェズ全景，中央はカラウィン・モスク

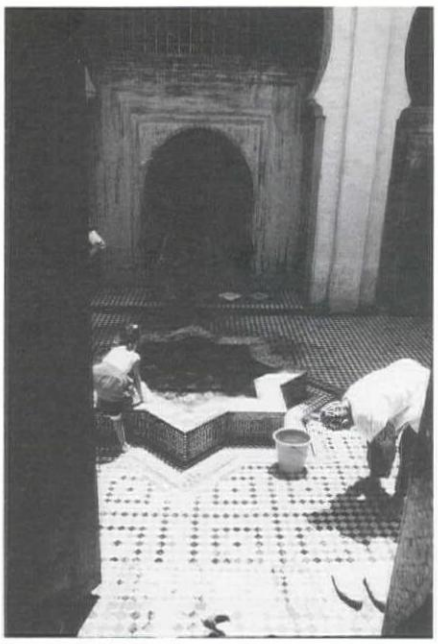

●フェズ，メディナ　正面の塔はカラウィン・モスク


●フェズ，メディナ　木工の店


●フェズ，メディナ　皮なめしの店



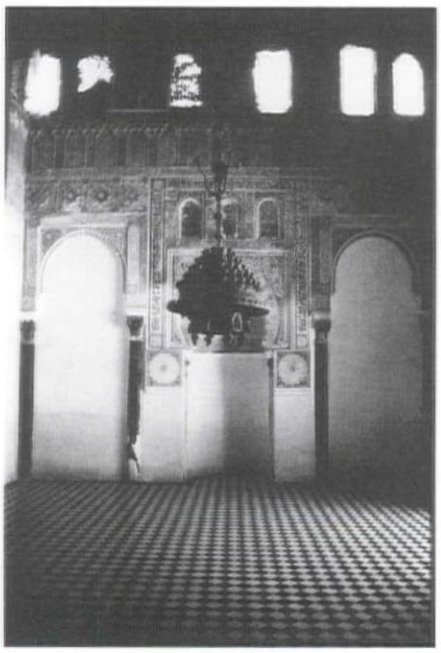
●フェズ，街の中のモスク



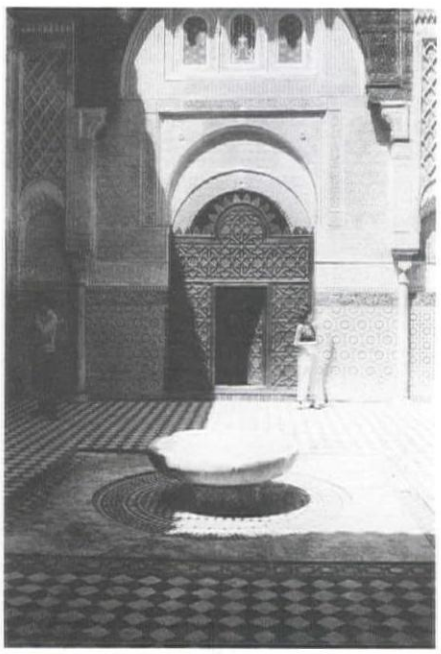
●フェズ，街の中のモスク



●フェズ，ブー・イナニア・メデルサ（1355）



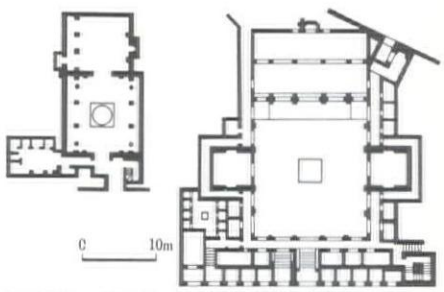
●フェズ，アタリン・メデルサ（1325）



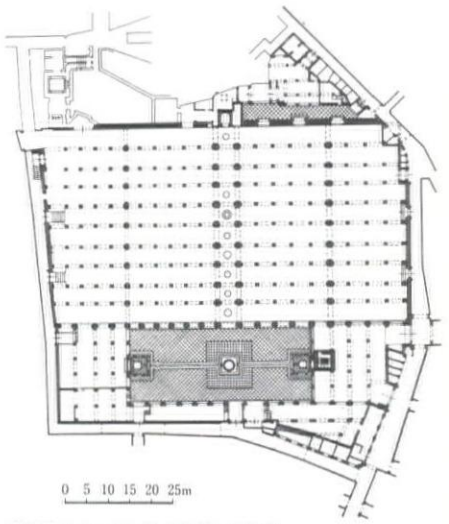
●フェズ，アタリン・メデルサ

前の広場のような導入空間をもたず，狭い道に直接扉が面しているからである．　ミナレットや，メデルサの場合の通りを跨ぐ木彫のポーチによって，漸く離れた所からも存在が知れる．　中庭は，オニックスを用いた床面，渋い色調をした化粧漆喰の壁面，繊細華麗に浮き上がる幾何学文様，緑タイルの屋根など極めて明るく，美しく，かつ静謐である．　喧噪の路地から中庭を望めば，前室を挟んで二重にある扉，あるいはアーチの微細な彫物が逆光に浮かび上がる．　数歩入った所に全く別の世界がある．それにしても幅２ｍ程の路地側，即ちそのファサードを楽しむビュー・ポイントの十分ない壁面にもびっしり詰まったアラビアン・モザイクの細かいパターンは，人間を相手にせず，彫るために彫る，さらには神をとり囲もうとする意志をそれから読み取ればよいのであろうか．

●ながさわ・さとる／東京大学助手



●アタリン・メデルサ　●ブー・イナニア・メデルサ



●カラウィン・モスク（9世紀，1136）

MOROCCO
Asni, Goulmima, Midelt, Had-Zerekten, etc.

スーク

モロッコの市

斉木崇人

私は初めて訪れるマチやムラに着くと，まず〈市〉を目差す．　〈市〉を見るとそのマチやムラの生命力がわかるからである．また市は，道や広場で開かれることからそのマチやムラの空間のあり方を理解する入口ともなる．

モロッコでは〈市〉のことを，アラビア語で〈スーク〉(Souk)と言う．　私にとってのスークは楽しく，時のたつのも忘れ，そこを出た時には一度に疲れを感ずる空間であった．　一歩足を踏み入れると，人ごみにもまれながら，はじめて目にする品物に目を奪われ，売り手の声に引かれ，一度は方向音痴となってしまう．

スークの騒々しさは，何よりも，売り手と買い手の値段の掛合いからくる．　この掛合いは疲れるが，そこには土地の生活や文化の情報があふれている．　それにふれる生(ナマ)の楽しさがある．

露店商や芸人が，人を集め，物資や情報など一見して金にもならない様な〈モノ〉まで売られ，交換されている．　この騒々しさが，香辛料や，動物の匂いとあいまって，人々を引きつける．　その中にどっぷり身を置くと，人との触れあいを実感し，生活の活気を感ずる．

◉メディナの中の街路型スーク

マラケシュやフェズのメディナの中心に，細い何本もの街路にそって形成されたスークがある．　メディナの入口広場から中心のモスクに至る門前町的商店街である．　何本かの網目状の街路により面的に形成され，人々は回遊できる．

マラケシュのスークを中心とする1㎞四方の中には，地図で数えて50を越すモスクがある．　このモスクの入口広場には噴水があり，スークの騒々しさとは対比的に静寂さがある．　中からは時折コーランをうたう祈りが聞こえてくる．

スークの通りには，老若男女，観光客が入り混じり，狭い通りは見通せない．　その通りの上には，葦や布や木で組んだ日除けがある．　この日除けを通してもれてくる強い陽光は，人々や路面の上に縞模様をつくる．　通りを渡して干された真赤な染物に光が当たる様は，燃え上がる炎のようである．　光と影の対比が強い刺激と生きを生む．　その下を人ごみを避けながら大きな荷物を乗せたロバが行く．

この通りで売られているものは，タマネギ，カボチャ，ブドウ，ナシ，ミントの葉，トマト，ピーマン，ナス，ニンジン，オレンジ，オリーブ，ナツメヤシ等の野菜・果物．　生魚，肉，ヤギの頭，ニワトリ，香料，パン等の食料品に始まり，衣類，装飾品，絨毯，真鍮・銀細工，なめした革，木加工品，鍋，焼物……と日常の生活に必要なあらゆる品物が顔を並べる．　そこでは物を並べることがそのまま看板となる．職人達は店先でものを加工する．　客と語り合いながら作ることは，買い手の要求と作る技術が一体となり，商品は店先でみがかれている．

スークでやりとりする買い物は，まさにゲームである．　相手の言い値では負けということになる．　モロッコの人々は，それを通して人との出会いを楽しんでいる様にも思える．

◉農村広場型のスーク

アスニ(Asni)やグルミマ(Goulmima)，ミデルト（Midelt）で見たスークは立派な門を持ち，周りを囲み，おおむね週1回定期的に開かれる，広場型のスークである．　これらのスークは広場の中に何本かの通りをつくり，その通りに向かい合って，それぞれ日除けをつくり店を構えている．

入口に近いところには，野菜，果物，パン，肉，香辛料，サボテンの実等の食料品が並び，種屋，粉屋，衣類，タジン料理のナベ，金物雑貨，農具と続く．　そのひと回り外には，時計・ラジオの修理屋，油つぎ屋，散髪屋，靴の修理屋があり，さらにはずれには，祈禱によって病気を直す医者の小屋も見られる．　農家で収獲したてのモノや，雑貨，修理屋がその中心といえる．

朝から開かれる定期市であるが，品物が売り切れれば店を仕舞い，今度は買い手となる．　昼食時には，肉やパンや果物を買い，スークの外の食堂に持ち込み料理をさせて食べるといった様である．

メディナの中のスークと最も異なるところは，売り手も買い手もすべて男ばかりという事である．　子供達も男の子しか見かけない．　この男達が，妻達にたのまれたのか婦人用の腕輪や，衣類に至るまで買っている．　値段の交渉も腰をおろして，握手をしながらゆったりしたものである．どちらが売り手か買い手か見分けがつかない．　まさに物々交換の様でもある．

いずれにしても，これらのスークを訪れた私達は，どんどん引き込まれていった．引き返す事を忘れそうでもあった．

街路型のスークも，広場型のスークも，歩きやすかった．　我に返った時，これらのスークは車を受け入れない，ヒトとロバの道であることに気付いたのである．　なぜか遠くにスークのざわめきが聞こえてくる．

●さいき・たかひと／筑波大学文部技官

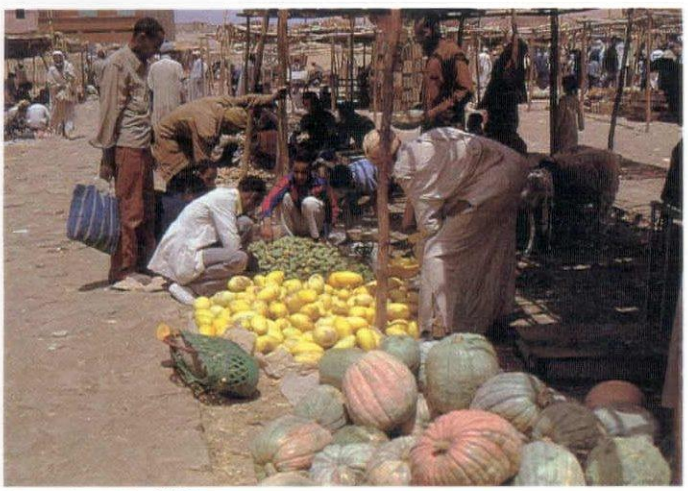

●アスニのスーク，駐ロバ場


●ハッド・ゼレクティンのスーク，ラジオの修理屋

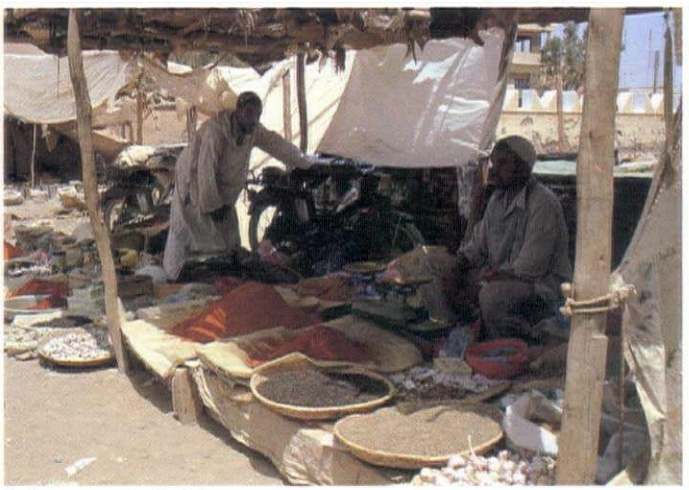

●アスニのスーク，床屋



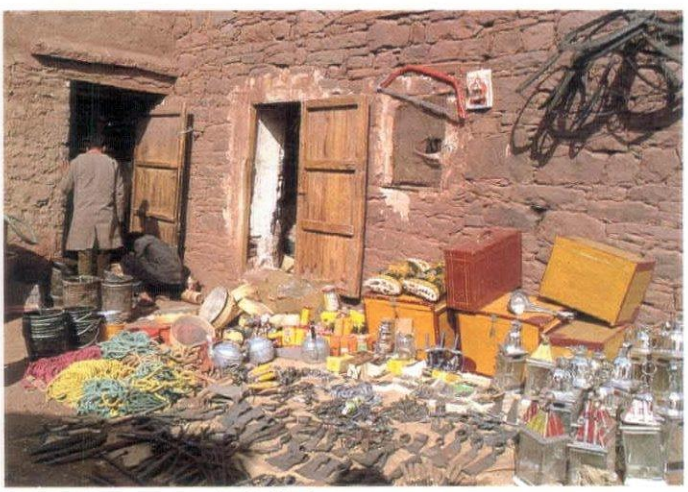
●アスニのスーク　Asni



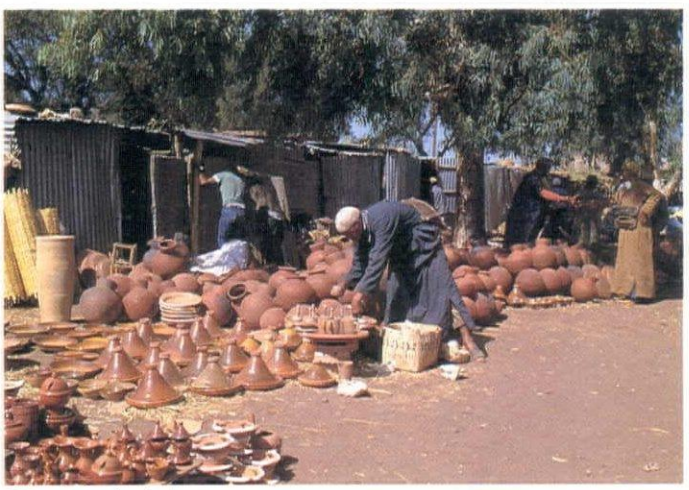
●ミデルトのスーク　Midelt



●グルミマのスーク　Goulmima



●ハッド・ゼレクティンのスーク　Had Zerektēn



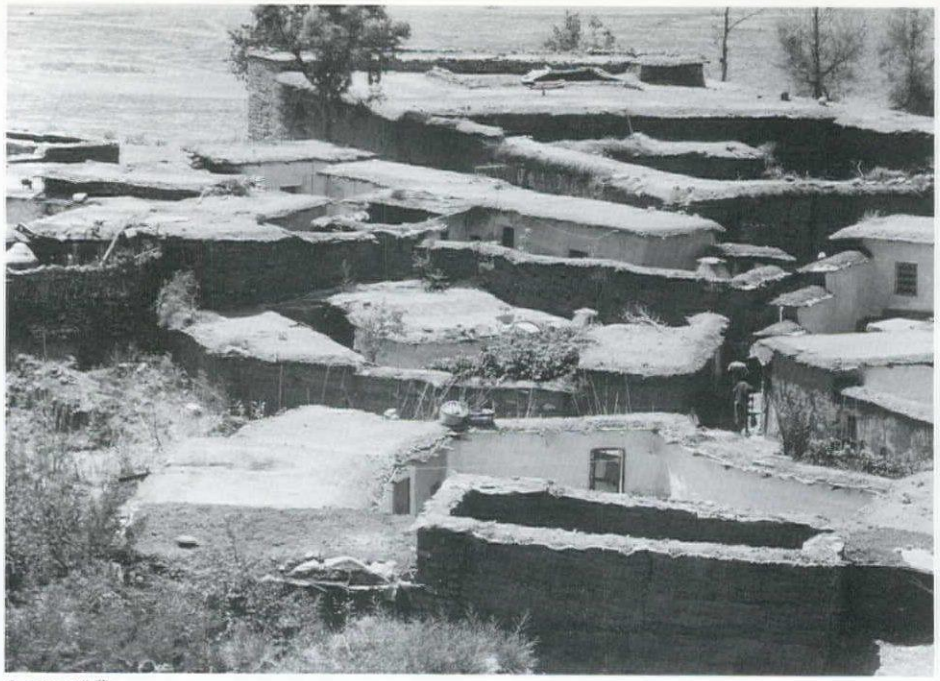
●アスニのスーク　Asni

MOROCCO
Asni, Ait-Benhaddou, Ait-Ridi, Maadid

様式の持続

ベルベルの住宅

初見 学



●アスニの集落

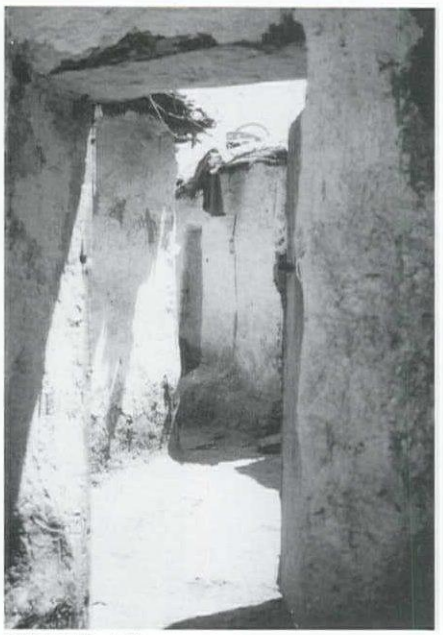
◉アスニ（Asni）の家

マラケシュから南へ47km，高アトラス山脈の裾部，標高1150mの高原に，ベルベル人の村アスニがある．　近くに古いカスバの残る小さな村であるが，毎週土曜日に立つ市には近郊の人々や観光客も集まり大いに賑わいをみせる．

市場から歩いて5分ほどのところに，40戸くらいの泥の家が，赤い大地の上に肩を寄せ合いながら建っている．　家々は周囲に土塀をめぐらし，土塀と土塀の隙間が曲がりくねった路になっている．　このなかの一軒をここに紹介する．

土塀で囲まれた内側に3棟が建ち，その各々が部屋になっていて，外壁の一面は塀を兼ねている．　床は土のままのようにみえる平床．　壁は日干し煉瓦を積み上げたか，あるいは型枠のなかに泥を流し込んで乾かしたものか，その上に泥を塗ったようで，土塀の内側や室内の壁には漆喰が塗られている．　屋根は，壁の上に木材を渡し，その上に小枝を並べ土をのせて作られている．

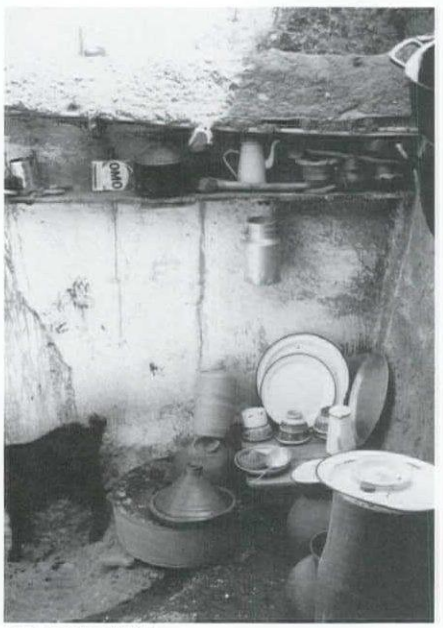
土塀にあけられた入口を入った左側の棟が主屋らしく，床には毛皮や赤を基調としたアラビックな模様を織り込んだ絨毯が敷いてある．　内壁の腰部には素朴な幾何学模様が描かれており，一部に壁面をえぐって祭壇のような棚が設けられている．　この部屋には，扉がはずされたままの出入り口と2個所に窓がある．　他の部屋の窓も



●アスニの家，入口



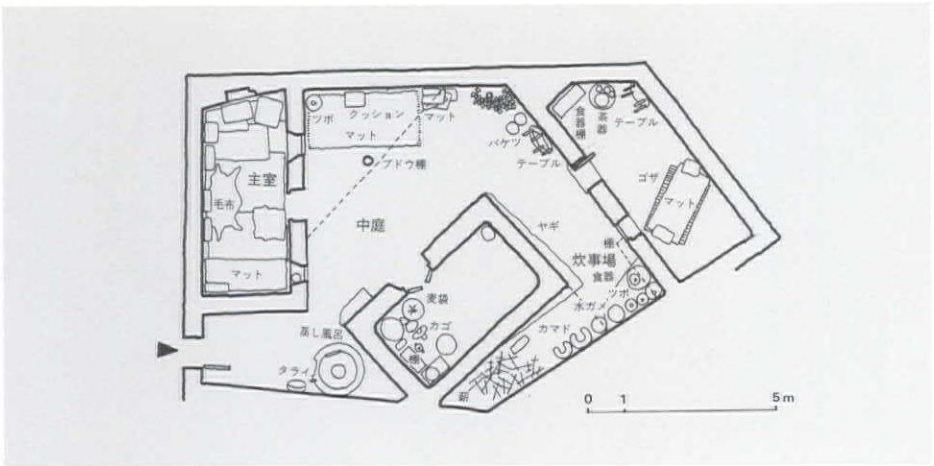
●アスニの家，蒸し風呂



●アスニの家，炊事場



●アスニの家，女の部屋



●アスニの家，平面図 1：200



●アスニの家，主室，ミント茶の接待



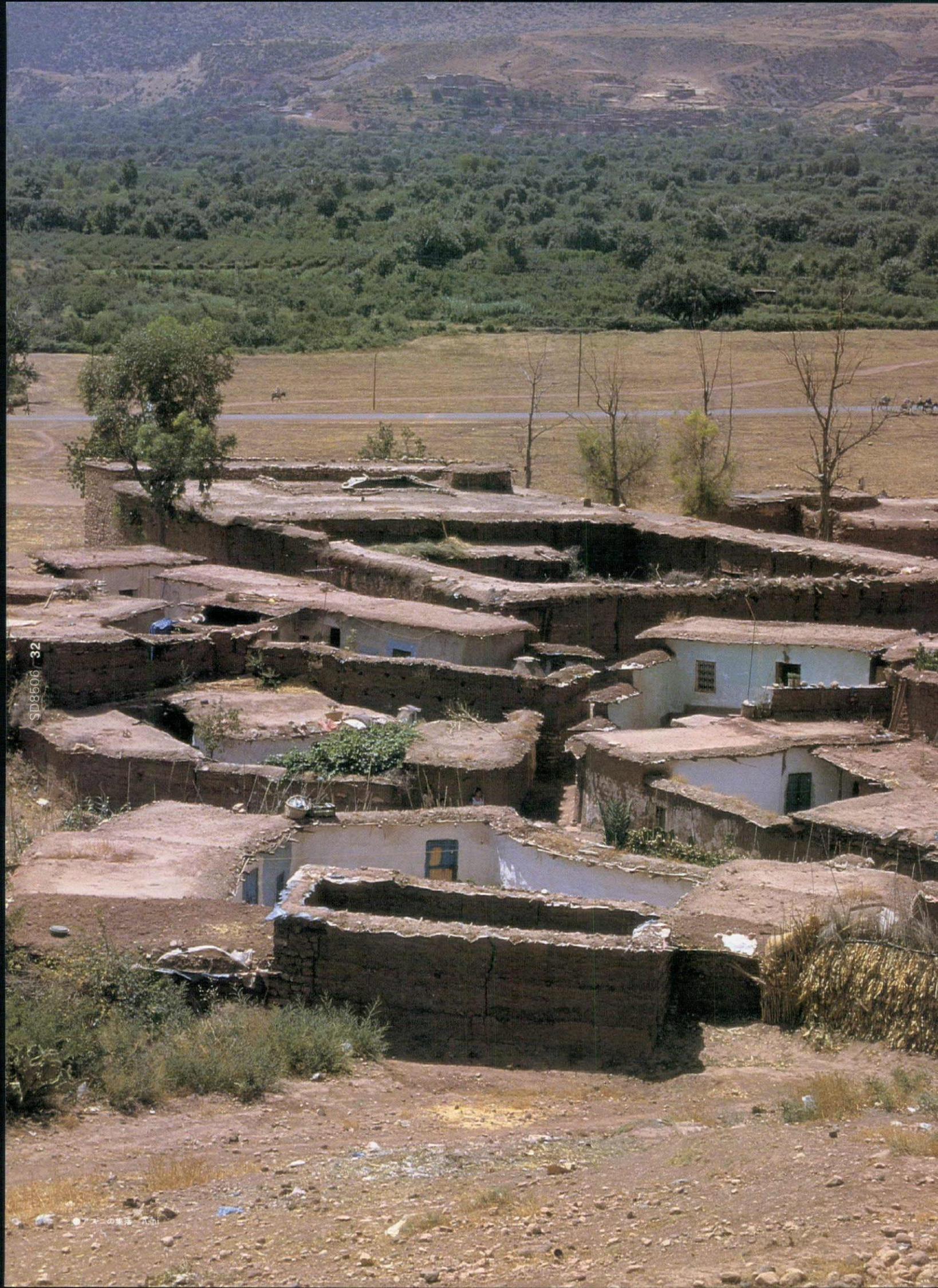
●アスニの家，中庭

同様であるが，窓は外側に鉄製のグリルがはめられ内側に木製の扉がついている．窓のグリルは，かつては他者の侵入を防ぐためのものだったのかもしれない．しかし現在では，防衛の意味は風化し，単なる装飾あるいは窓にはグリルがつくものといった通念のみが残っているのだろうか．壁・天井が白く塗られているせいか，室内は他の部屋ほど暗くないが，とても暑い．我々はこの部屋に通され，ハッカ茶(メンテ)を御馳走になりながら，小1時間，各種装身具の値段交渉ゲームを楽しむことになった．

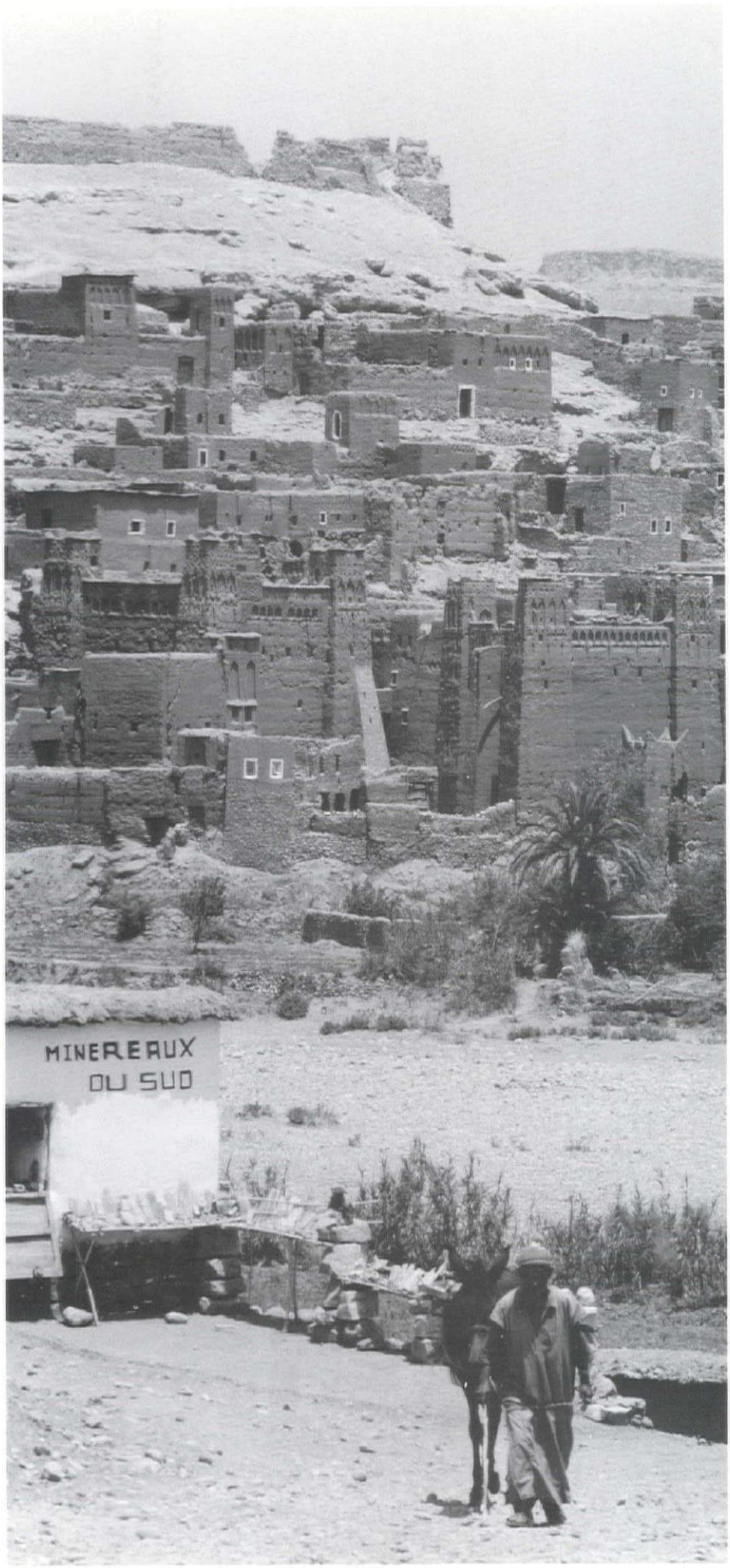
余談になるが，モロッコでは，メンテの習慣が定着しているらしい．市にもハッカの葉が山と積まれているし，零細な家庭ではハッカの葉を買う費用が家計をかなり圧迫しているとも聞いた．お茶のための金属性のポットや丸盆も一般化しているようだし，高所から注ぐという作法もあるらしい．日本の緑茶，英国の紅茶，中国茶等，お茶が休息や会話と切り離せないものになっているのは，習俗の興味ある共通性のように思われる．

主屋の前の棟には窓がない．部屋の隅に，木箱，棚，古ぼけたトランク，籠，小麦粉の袋，ホーローの洗面器，やかん，瓶，罐等が置かれ，倉庫的な性格が強い．

一番奥の棟の床は土に漆喰を混ぜて固めてあり，壁面は腰まで床と同じ灰色．天井はコバルトブルーに塗ってある．空のイメージの演出なのか，小窓から差し込む光だけの薄暗さのなかでは，夜空のようにも見える．部屋の隅に食器棚が置かれ，中には金属製のポットや陶器の壺のほかに衣類や布類が押し込めてある．その前に丸い坐卓が2卓．1卓は壁に立て掛けられ，もう一方の上には丸盆とポット．床の一部に茣蓙を敷き，その上に毛布・シーツ状の布・毛布が重ねられ，枕であろうか，日本の座蒲団のようなものもある．こうした家具類から推測すると，この部屋は，寝室兼居室と考えてよいだろう．この部屋の前のニワは炊事場で，カマドが設けられ，その奥には燃料用の薪が積んである．また，水瓶や壺，モロッコで一般的な料理であるタジン用の鍋等が置いてある．近くには乳を取るためなのだろう，山羊が2頭つながれている．



SD8506 32



●アイト・ベンハドウ，ニューヴィレッジからオールドヴィレッジを望む

部屋の前が炊事場であること，この部屋が一番奥にあり外部の人間が侵入することの難しい位置にあること（イスラム社会では，妻あるいは娘の部屋に入ることが許されるのは，主人かごく親しい親戚のものに限られている），の2点からここが〈女のヘヤ〉であることを推測することはできる．とすれば，主屋が接客の場を兼ねた〈男のヘヤ〉ということになろうか．　この家には，50歳の主人と40歳の妻，20歳の長男を頭に6歳の次女まで男4人と女2人の子供達の計8人が住んでいる．

主屋前の中庭のコーナーに，ツル状の植物でパーゴラが作られ，気持の良い日陰を提供している．　パーゴラの下には，ダブルベッドサイズの織物が敷かれ，クッションを背に2人の娘が遠来の我々を珍しそうに眺めていた．　この日陰は昼間の最高の居場所のようである．　隅にあった素焼の水瓶は気化熱を奪うクーラーなのかもしれない．　そばの壁には，丸い坐卓が立て掛けてあり，日差しの弱い時刻には，この中庭が食事の場やお茶の場として使われることもあるのだろう．　また，太陽に照らされた壁からの放熱が始まる夜間，室内より中庭のほうが眠るにも心地よさそうである．　ニワは屋根のない台所であり，居間であり，寝室になることもあるのだろう．

便所があるのかどうかは定かでない．外部に共同の場所があるのかもしれない．ただ，この家には入口の正面に土製の蒸風呂がある．　袴をはかせた徳利のような形をしており，袴部分に炊き口，徳利の腹部に板戸のついた躙り口ぐらいの小さな入口がある．　蒸風呂を見たのはこの家だけではない．　貴重な水を有効に使うためにつくられたのか，湯温より暑いくらいの外気のなかで風呂上がりの清涼感を味わうためつくられたのか．　いろいろな必然や偶然が重合した産物なのであろう．　我々にその発生を確かめることは難しい．

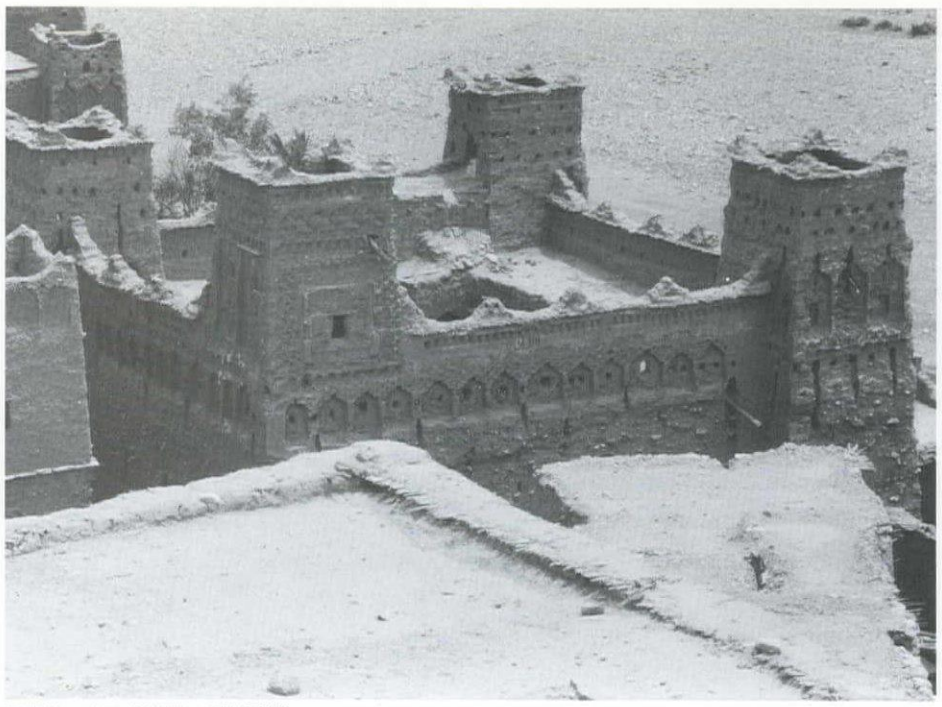
◉アイト・ベンハドウ（Ait-Benhaddou）の家

マラケシュから南東へ180km，標高2260mのティシカ峠を経て，高アトラス山脈を越えたところ，標高1200mの砂漠化した大地にアイト・ベンハドウの集落がある．

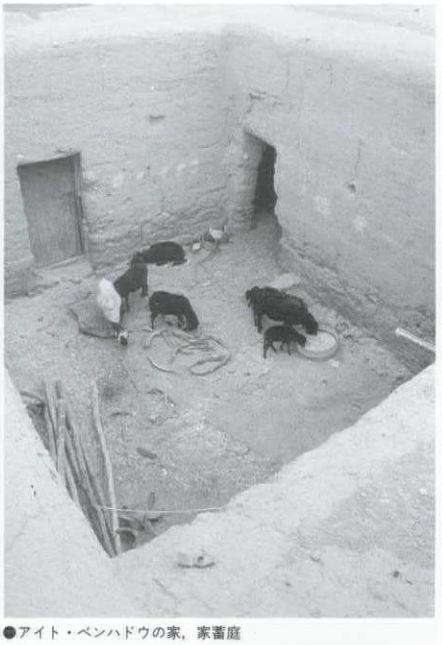
夏季には川底のひびわれた地肌が露出するメラ川左岸の丘にそって，城壁に囲まれ，カスバ形式の家々が蕭然と密集している．　まさにその姿は彫塑であり，大地と同色の赤茶けた家々は，直線的に構成されている点でのみ，それが人間の手によることを示している．　四隅に塔をもつカスバの原型も，斜面や集合化といった条件によるのであろうか，ここでは多くのバリエーションをみせている．　しかし，3～4層から成り，屋上に中庭をもち，その中央に下階への光とりの穴がある，という基本的な構成には変わりない．　家々の外壁には，精緻な幾何学模様のレリーフが施されているが，刻々と風化は進みつつある．　今やこの集落は廃墟といってよい．　若者達は街へ出ていく．　この土地に残る者も，余裕のあるものから順に，対岸に新しく家を造って移り住み，今，この集落に残る者は，僅か25家族とも聞く．　廃墟化は速度を速める．　土で作られた家は，灼熱の太陽にさらされ，また元の土に還るのである．

ここに紹介する家は，メラ川右岸の新しい居住地区のなかの1軒である．　家は平屋で，中庭と家畜庭を囲む構成になっている．　隣の新築現場の様子から類推すれば，この家も，部分的な型枠に泥を流し込んで乾燥させ，型枠を移動し，また泥を流し込むという作業の繰り返しで造られたのだろう．　壁の厚さは約50～60cm．　中庭および一部の部屋の床はセメントの叩き，それ以外は土床．　屋根は，壁の短辺方向に太い材木を渡し，その上に細い枝を架け，葦簾のようなもので覆い，土を被せてある．フラットな屋根の周囲には，ごく僅かではあるが，土が盛られ，パラペットのようになっていて，所々に排水用の切り込みがある．　中庭側の壁には，排水する雨水を導く溝が切ってあり，外壁側には雨水を壁から離して落とす木製の樋が突き出している．架構上の制約からであろう，どの部屋も奥行きは2.5mと浅く，幅は5～9mあり，偏平なプロポーションになっている．　天井の高さは3m強といったところである．

家族は11人で，70歳になる老母，55歳の主人と45歳の妻，24歳の長男を筆頭に男子5人，女子3人がこの家に住んでいる．家の外壁には二つの出入り口と小さな窓が

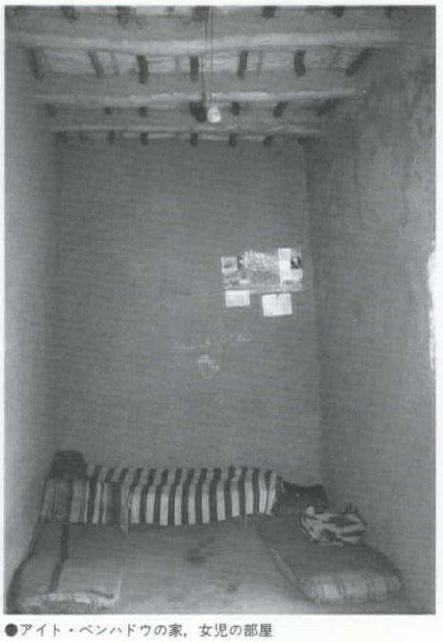

●アイト・ベンハドウのカスバ型住居単位

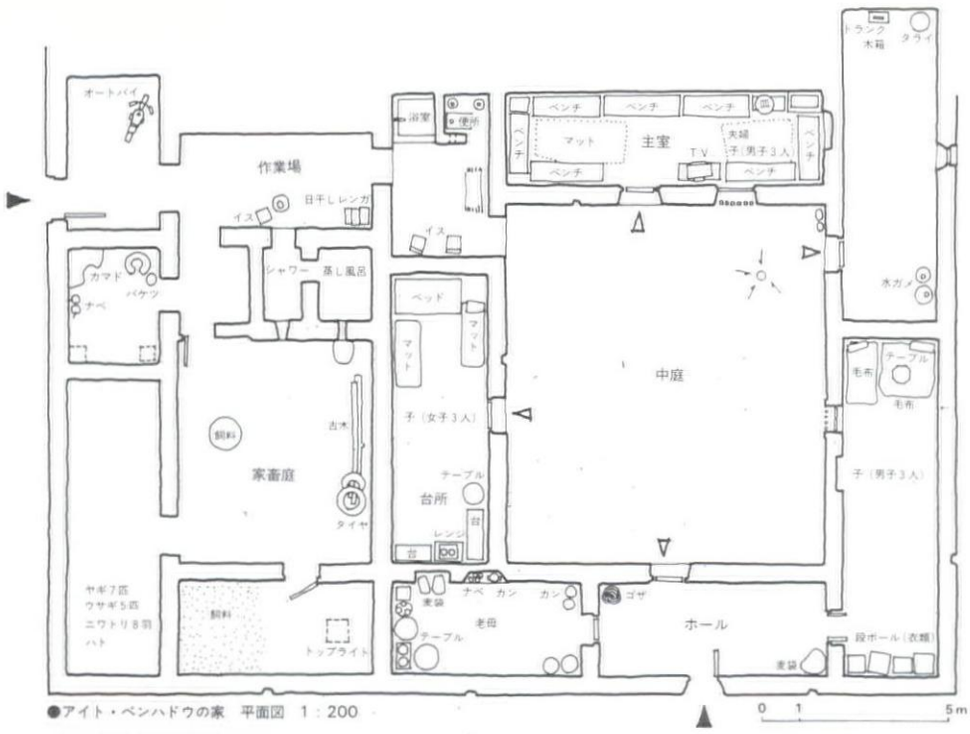

●アイト・ベンハドウの家


●アイト・ベンハドウの家，家畜庭


●アイト・ベンハドウの家，中庭


●アイト・ベンハドウの家，台所（女児の部屋）


●アイト・ベンハドウの家，女児の部屋



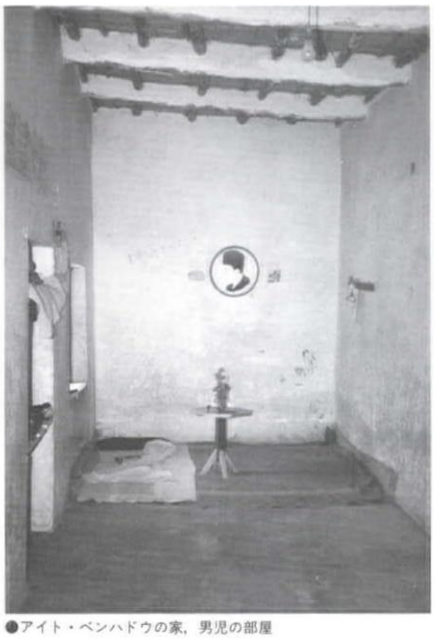
●アイト・ベンハドウの家　平面図　1：200



●アイト・ベンハドウの家，主室



●アイト・ベンハドウの家，男児の部屋



●アイト・ベンハドウの家，男児の部屋

一つあるだけで，家は外に対して固く閉ざされており，部屋への出入り口や窓の多くは中庭に面している．　入口からホール的な部屋を抜けると8.5×9.5mの中庭に出る．正面に主室．　ここは接客の場であると同時に，夫婦と男児3人の就寝室でもある．主室に向かって左側に台所．　女児３人はここに就寝．　中庭右奥の部屋には多少ものが置かれているが，あまり使われている様子はなく使途不明．　以上３室へは中庭から直接アクセスする．　ホールからアクセスする中庭右手の部屋は男児２人の部屋．ホール左の部屋は，もとは台所だったようだが，今は老母の部屋らしい．　中庭左奥には便所と浴室．その奥に作業用の部屋があり，勝手口，家畜庭に通じている．　作業用の部屋には，蒸し風呂とシャワー室とがセットになって面し，蒸し風呂の焚き口は裏の家畜庭に設けられている．　家畜庭には，飼料部屋と家畜を入れる部屋が面していており，山羊７頭，兎５羽，鶏８羽が飼われている．

以上が，この家の概略であるが，ここで興味をそそられるのは，中庭を囲む部屋の配列と，各部屋の差異である．　部屋の配列については，その在りかたに定型のようなものできあがっているのではないだろうか．　アイト・ベンハドウからさらに西へ約120km行った国道32号線沿いの村アイト・リディ（Ait-Ridi），ここの新しい集落のなかの家にも，中庭を囲む部屋の配列に類似性が認められる．　すなわち，入口を入った中庭の正面に主室，左手に台所，右手に寝室という配列である．　これは偶然の一致かもしれない．　しかしこれが偶然でないとするなら，この配列は，なんらかの意味あるいは様式の持続の結果と考えられる．　配列の一致は，中庭に軸線・方向性があることにつながり，正方形に近い中庭にも意味の磁場を読み取ることができそうである．

部屋の差異は，天井の装飾，窓の有無，室内のしつらえ等に現れる．　主室は，壁と天井に漆喰が塗られ，天井には細かいレリーフがほどこされている．　室内には，壁に沿って細身の寝台程度の大きさのベンチがぐるりと配置され，ベンチに囲まれたセメントの床には鮮やかな色彩の絨毯が敷

いてある．　また，売り物の絨毯が積まれ，テレビや銀製の茶器等も見られる．　中庭に向かってドアと窓があり，ともにその外部には白い漆喰で枠が描かれている．　白い枠取りは，男児２人の部屋の窓にも見られるが，これら以外の開口部にはない．　男児の部屋の天井は，屋根を構成する部材が露出しているが，太い横架材にだけは漆喰が塗られている．　また，だいぶ汚れてはいるが壁にも漆喰が塗られている．　部屋の突き当たりには茣蓙，その上に毛布が敷かれており，枕のようなものや，八角形の小テーブルが置いてある．　一方，女児３人の寝る台所の天井は屋根部材がそのまま露出しており，壁や床は土の地肌，窓はない．　窓の有無は居住性に関わるが，女性の保護・隔離という意味があったのかもしれない．　室内には，プロパンのレンジと調理台，タジンの鍋をはじめとする鍋ややかんといった調理道具が置かれ，反対側に，簡単な寝台が一つと布団が２枚敷かれているだけで，彼女らの持物らしきものは見当たらない．　以上のような部屋の差異は，主人あるいは客，男，女といった部屋の使用者の属性に対応している．　家族内・社会での役割の分担が，住み方，あるいは住宅の構成・部屋のつくりに関係しているのである．

なお，主室のドアの白枠のまわりには，いくつもの手形が押され，目の象徴らしきものが描かれている．　これは，メディナの住居の入口に掲げられる聖なる手（ファーティマの手と呼ばれるもので手の中央には眼が描き込まれている）と同義なものと思われるが，住宅への入口にではなく主室の入口に描かれている点が異なる．　日常の重要な生活空間である中庭も，室内空間との間には意味の上で段階的な差があるのではないか．　このことは，住まいのなかでの中庭の位置付けを考える上で興味深い．

◉マアディド（Maadid）の家

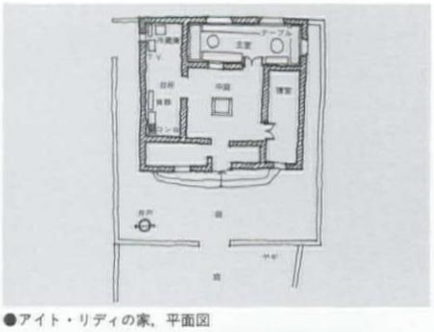
南にサハラ砂漠が拡がるズィズ川沿いのオアシス地帯，ターフィラント地方の入口の町エルフードの北10km弱のところにマアディドの村がある．　この村の，城壁に囲まれた集落（ksar）の中の１軒がここに紹介する家である．



●アイト・リディの家



●アイト・リディの家，中庭



●アイト・リディの家，平面図



●アイト・リディの家，台所天井



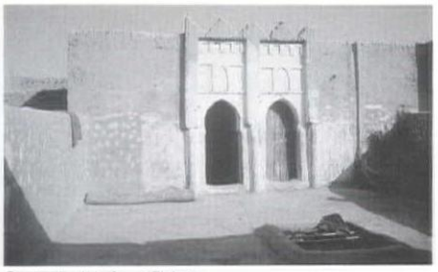
●アイト・リディの家，主室



●アイト・リディの家，台所



●アイト・リディの家，台所



●マアディドの家，2階中庭



●マアデッドの家，2階中庭



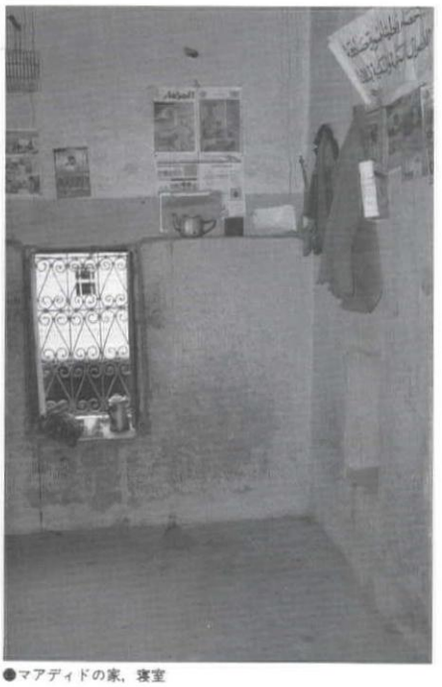
●マアディドの家，トップライト



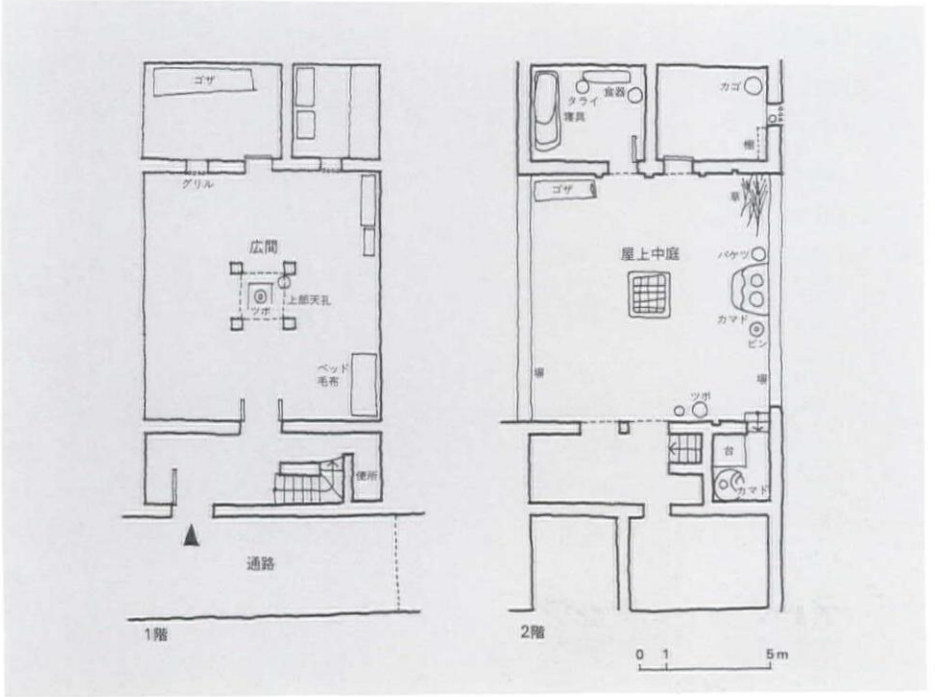
●マアディドの家，カマド



●マアディドの家，広間



●マアディドの家，寝室



●マアディドの家，平面図

一辺約200mの城壁に囲まれた内部の通路は比較的整然と構成されている．　この家は，城門を入り，小広場から続くメインストリートの両側に櫛の歯状に伸びる通路に面する．　通路から入口ホールを経て階段で2階に上がると，中央が屋上になっている．　この屋上に面して，階段の反対側に2室，階段の後方（通路上部）に1室がある．　また，残りの2辺は人間の背の高さくらいの塀で隣戸と隔てられており，屋上は外部から遮断された安定した中庭となっている．　中庭の中央には下階の広間への採光のためであろうか約1m角の孔があり，木の枝が格子状にはめられている．　また，塀際にはカマドが設けられている．

朝，エルフードのホテルの窓から，同じような屋上の中庭に家族が就寝しているところを見かけた．　屋上の中庭は，食事・就寝に使われる家族の生活空間なのであろう．2階の部屋の屋根に上がって周りを見渡すと，この家と同じような家々が壁を共有して背割状に密集している．　通路上部にも部分的にではあるが部屋が架かっているので，空からは，家々が連続的に拡がり，通路は部分的な穴としてしか見えないだろう．

1階には，中央に広間，その奥に2室がある．　2室といっても片方の部屋は，広間に面して窓はあるが入口はなく，隣家の部屋になっているのかもしれない．　広間中央には，天孔をあけた上部中庭の床を支える4本の柱が立ち，柱に囲まれた部分は浅く掘り込まれ中心には壺が置かれている．　天孔から広間に注ぎこむ光の滝を支えるかのような4本の柱．　柱は8角形の断面をもち，柱頭・柱脚もデザインされている．　壁を主体につくられた家の中央に立つ4本の独立柱には，光あるいは雨を注ぎ込む空に対する特別の想いが込められているのではないか．　天孔からの光，4本の柱，トルコブルーと白に塗り分けた壁，コバルトブルーの枠，窓に嵌められた金属製の精緻なグリル．　ここには宗教的な雰囲気さえ感じられる．　また，棚には食器が飾られており，この広間は，儀礼や接客に使われる〈外向き〉の空間なのではないだろうか．　屋上中庭を家族の日常生活を支える〈内向き〉の空間として，上下階を使い分けているのかもしれない．

モロッコの典型的な住居の形式にカスバ（kasbah）がある。　カスバとは城・砦といった意味であろう。　ここには大家族あるいは一族が家畜とともに住むことが多い。　カスバ形式の住居は，高いアトラスのふもとのワルザザーテからダデス谷，トドラ谷を経てエル・ラシディアに至るカスバ街道沿いに多いが，この他の山地やオアシスにも点在する。

カスバ形式の住宅の特徴をまとめると概ね次のようになろう。　平面は正方形に近く，一辺が十数メートルある堂々とした建築物である。　独立して建つ場合には，四隅に塔状の部分をもつのが一般的であるが，塔が3本あるいは2本のものもある。また，塔の四隅にはライオンの歯形を象徴しているという突起物がデザインされる。3～4層から成ることが多く，上階には部屋や高い塀で囲まれた中庭がある。　屋上には下階への採光のための孔があけられることが多い。　この場合，下の階には屋上を支える4本の柱が立つ。　下層部は，山羊や牛等の家畜を飼っておく場所，飼料や穀物を蓄えておく場所，に充てられる。　外壁にあけられる窓は少なく小さい。　大きめの開口には格子がはめられる。　大きな開口は屋上の中庭やその下の広間に面し，内側を向く。　多分このあたりの部屋が居室となるのであろう。　壁が建物を支え，土で造られる。　床は木材を架け，その上に土が載せられる。

典型的なカスバは独立して建つものに多いが，ここに紹介したマアディドの家や，廃墟化の進むアイト・ベンハドウやグルミマのような城壁に囲まれた高密度な集落（クサール）のなかの家にも，カスバ形式の持続をみることができる。　もともとは防御の要請から発生したのであろうカスバの形式が，個別に防御する必要性の薄れた城壁内の住宅の形式として持続しているのは，その形式が高密度な集住に相応しい形式であったためかもしれない。　しかしそれだけではあるまい。　ある型の家に住む人々は，その型に合わせた生活をし，その生活は様式・慣習として受け継がれる。　住居を取り巻く条件が変化し，ある型の発生の意味が薄れても，生活様式は根強く残り続け，その型を持続させる。　こうしたことがカスバ形式の持続を支えているように思われてならない。

ベルベルの家と考えてよいのであろう，我々はモロッコの非都市部において，家畜を逃がさないように塀をめぐらし塀に寄り添うようにいくつかの棟が部屋としてつくられている家，外壁を兼ねた棟（部屋）が中庭を囲むようにつくられている家，積層し下層部で家畜を飼い上層部を居室とし屋上に中庭をもつ家，このような流れで住宅が変遷・展開してきたのかどうかは定かではないが，これらの形式が各々生き続け，造られ続けている姿をみた。　これらの家々に共通するのは〈囲う〉という構成である。〈囲う〉ということには，家畜の保持，厳しい自然環境や外敵からの防御，という必然がその発生にはあったのかもしれない。そしていつのまにか〈囲う〉という形式そのものが，人々の安らぎを保証する住居観になっているのではないだろうか。

生活の必然，あるいは偶然が必然となり，住まいの形式をつくる。

形式は生活と一体となり，住様式をつくる。

様式は次第に意味をもちはじめる。

意味は，より高度な意味へと昇華し，様式は文化となる。

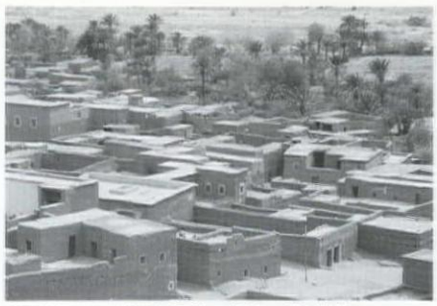
文化は継承され，いつしか必然は風化をはじめる。

こうした文化の重層として実存する生活を，どう受け止めたらよいのか。

異文化との接触から，我々自身の文化をどこまで相対化できるのか。

急ぐことはあるまい。　しばらく旅を続けてみよう。

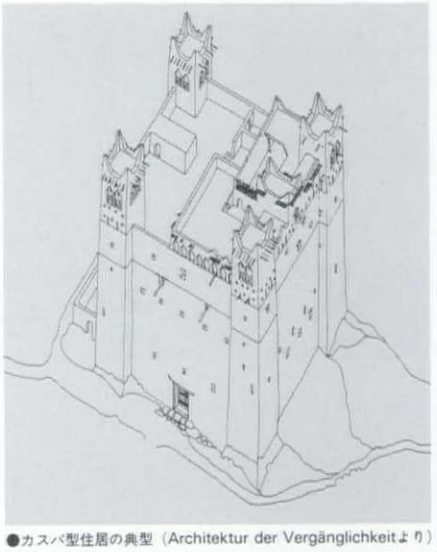
●はつみ・まなぶ／東京理科大学講師



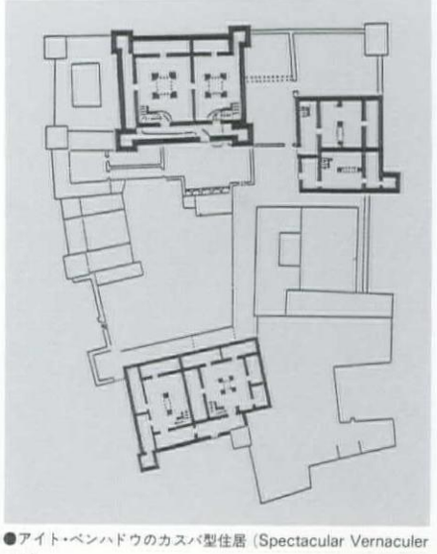
●アイト・ベンハドウとアイト・リディの間の集落



●アイト・リディ



●カスバ型住居の典型（Architektur der Vergänglichkeitより）



●アイト・ベンハドウのカスバ型住居（Spectacular Vernaculerより）

MOROCCO
Moulay Idriss

ムーレイ・イドリスの家

笠島 泰

フェズの西62km，標高1000mの所にアンダルシア地方の町を想い起こさせる白い家が密集したムーレイ・イドリスがある．　アラブ人とベルベル人との間に繰り返される遷都の最初のイスラム王朝の首都であった．この町の白い漆喰が塗られた1軒を紹介する．

この家には，45才の主人と40才の妻，24才の長男，17才の次男，15才の長女，の5人が住む．

入口の部厚い木製の扉を開けると，パーゴラのかけられた中庭に通じる半内部空間がある．　その中庭に面し，三つの部屋がある．　右手に調度品も多く，扉も付き，比較的広い部屋があり，左手にカーテンで扉を代用した部屋，突き当たりに倉庫らしき部屋がある．

入口を入った土間空間には，二つのガスコンロが床に置かれ，折り畳まれた円卓が壁に立て掛けられており，ここが台所兼食堂らしい．　中庭は，二つある．　部屋に囲まれた中庭の床は，平石と土とで，きちんと仕上げられているのに対し，奥の中庭は砂利混りの土床のままになっている．前者の中庭には床生活を想定させるゴザが壁に立て掛けられていたり，ミシンが置いてあるのに対し，後者にはタライ・バケツ・ホウキ等サービスコート的性格を窺せるものが置かれている．　二つの中庭の性格は異なり，前者が極めて室内的利用のされ方をしていることを窺せる．

この室内的性格を帯びた中庭に面した部屋のうち，入口に一番近い所にある部屋で主人が昼寝をしていたこと，サービスコートに隣接した部屋に掛けられた衣服やカーテンが女性向きのものであったこと，中間の部屋は倉庫であること等から，入口に近い部屋が男の部屋で，奥の部屋が女の部屋であることが想像される．　この住居の分節の仕方と各部屋の入口からの位置関係はアスニでみた住居と同様であり，定型があることを窺せるとともに，街や家の外観がアンダルシア地方のそれと類似しているにもかかわらず，その内部がモロッコ的であることは，興味深い．

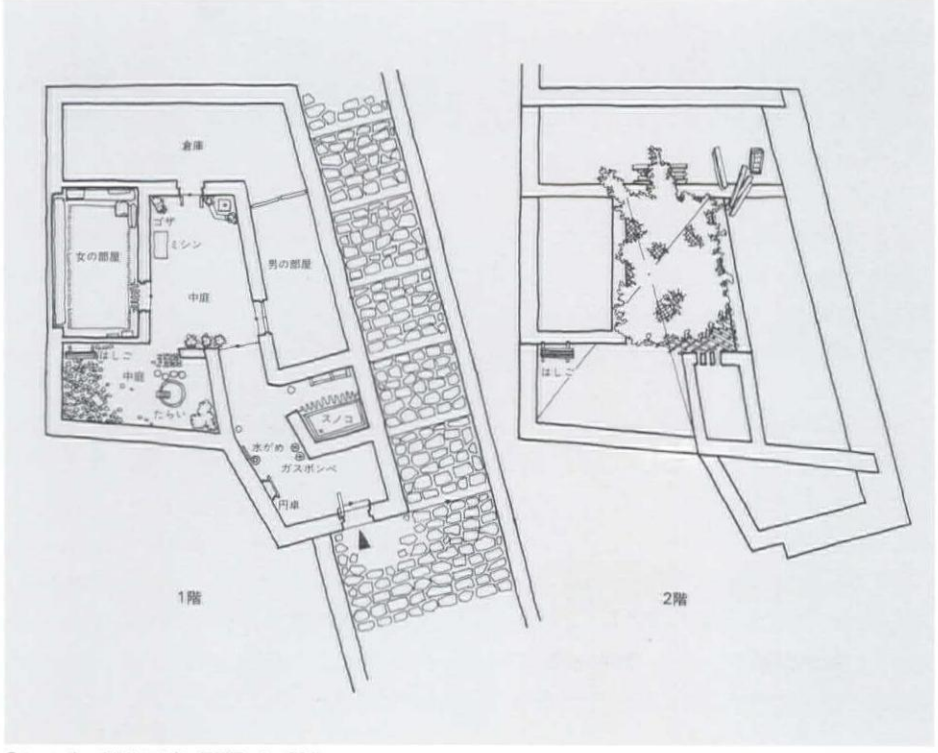
●かさじま・やすし／大同工業大学講師



●ムーレイ・イドリス，全景



●中庭



●ムーレイ・イドリスの家　平面図　1：200



●中庭



●女の部屋



スペイン・モロッコのこどもたち

小川信子

■スペインの子どもたち

都市でも農村でも，スペインの子どもたちの多くは，家前の戸口廻りを基点にして，遊んでいるのが見うけられた．　しかし，異年齢の子が数人まとまっていたり，またある子どもは手に小さな玩具をもっていたりしているのだが，なにをして遊んでいるのか，その中味が一向にみえてこない．　要するに，かくれんぼとか，縄飛びというような，なにか目的をもって活発に遊んでいるという様子は，およそ見受けられなかった．　あるいは彼らの興味は，私たちにあったのかもしれない．　しかし，ついてくるということはまったくなく，声をかけると恥しそうに逃げてしまう．　そんなことから，大人たちにこびない子どもの姿が見えてもくる．　旅行者の眼から見ると，子どもを含めて，スペインの生活は，ゆったりと時が流れている，という感じなのである．

■カスバの子どもたち

崩れかけたカスバの城砦から，突然はだしの子どもたち数人が顔を出す，と同時に沢山の手が出て，「アンディルハム」と口ぐちにいう．　1ディルムおくれ，というわけである．　はじめは驚いた．　カスバの住いは，地面と同じ黄土色で，人がやっとすれ違えるほどの細い道に面して，びっしりと築かれている．　そのため道は薄暗くて，よく見えないところもある．　そんな所で，突然，建物の中や路地から，まるで湧いてくるように子どもが出てくる．　そして口ぐちに「アンディルハム」というのである．

もしかすると彼らは大人に利用されているのかもしれない，と思ってみた．　しかし，仮に利用されているにしても，彼らは，大いに張り切って，積極的に協力している．　むしろ家族の者のために，必要な存在なのであろう．カスバは，彼らの仕事場で，カスバの主人公は，あるいはその子どもたちかもしれない．

カスバで道に迷ったら解らなくなると聞いていたが，ティネリールで，心配したとおり道に迷ってしまった．　高い塔を目印にしたくても，崩れかけたカスバでは目標が見付けにくい．水の流れがあったので，それを頼りに歩いたが，オアシスの植物はどれも同じように見えるので，すっかり迷いこんでしまった．　初めは「アンディルハム」と言いながら近寄ってやがて後になり先になり私たちに付いてきた子どもたちは，私たちが帰る方向を見失ったらしいことを知ると，これまでの態度とは打って変って心配してくれた．　言葉も通じないし，よく解らないながらも，子どもたちが土地の子で，私たちのことを心配してくれているというだけでなにか一種の安心感のようなものが生まれた．　こちらには子どもの善意が感じられたし，彼らにもこちらの困惑が伝わって，頼りにしている様子が汲みとられたのであろう．　彼らは，先にたって私たちを待っているバスのところまで案内してくれたのであった．

フェズの古い市場でタクシーを降りようとした時，すさまじい光景に直面した．ガイドの申し込みが殺到したのである．　タクシーの運転手さんが，その中から，子どもの案内人を紹介してくれた．　2人の兄弟だった．　ちゃんと案内人のバスを持っていて，私たちをエスコートしてくれた．スークは，初めての者には，皆目見当がつかず道も迷路のようなもので，入ったら最後，出て来られるかどうか大変あやしい．　兄の方はしっかりしていて，大人をケアーしながら，案内をする．　弟のほうは英語が理解できて，2人でチームワークを組みながら仕事をする．　そのケアーぶりは大変見事で，わずらわしい呼びかけのさそいを振り払ったり，カスバの抜け道を巧みに案内し，足元を注意してくれたり，狭い道を通り抜け，無事目的が達せられるように気配りをしている．　仕事に甘えが許されないことを知っているようである．

しかし，彼らの背後には，1人の大人がいた．　私たちをみやげ物屋に案内して，商談を買い手側に有利にはこんで上前を懐に入れている人である．　子どもたちが仕事ができるのも，こうした大人の仕組みの中に組み込まれているからであることが察せられた．　そして親切で，可愛らしい兄弟も，お金をうけとる段になると，結構，ちゃっかりした商売人だった．　私は，そのあまりにも可愛らしい笑顔に，かえって胸の痛むような思いがしたが，そうした旅行者の感傷をよそに彼らは，モロッコの地に足をふんばってたくましく，したたかに生きているのであろう．

●おがわ・のぶこ／日本女子大学教授



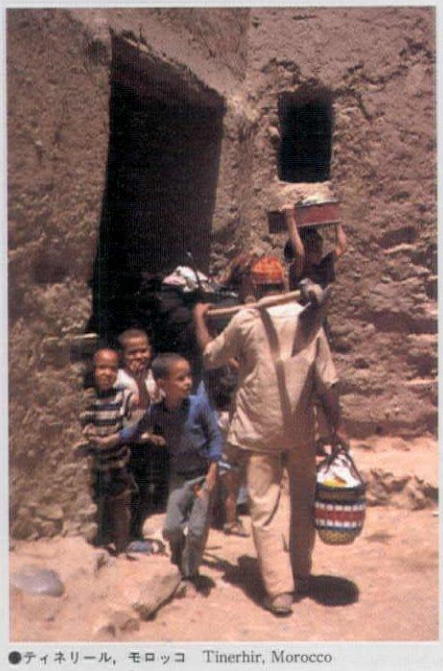
●コルドバ，スペイン　Cordoba, Spain



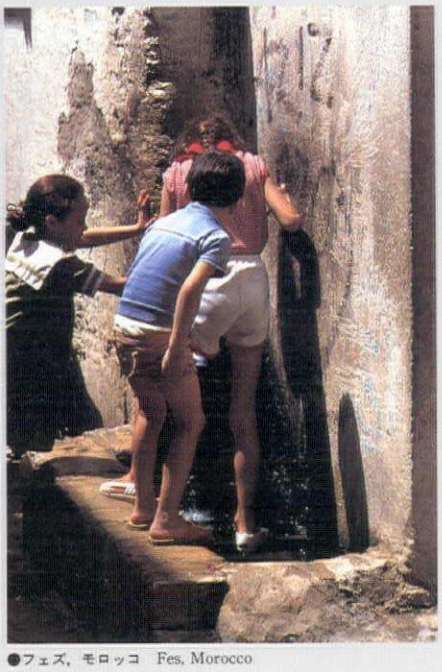
●リスボン，ポルトガル　Lisbon, Portugal



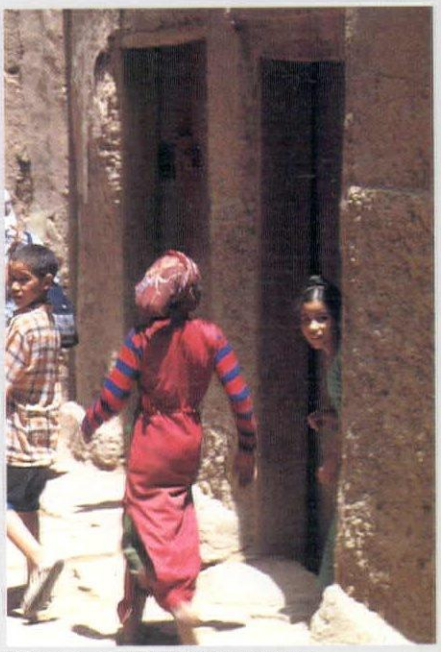
●チンチョン，スペイン　Chinchon, Spain



●ティネリール，モロッコ　Tinerhir, Morocco



●フェズ，モロッコ　Fes, Morocco



●グルミマ，モロッコ　Goulmima, Morocco

パティオ考——個の原理と集合の型について

畑 聰一



アンダルシアの集落を歩き陽気で屈託のない人々に触れたとき，ふと島に渡る船を待ちつづけるピレウスの人達の姿が記憶に蘇った．　それは天井の高い待合室の壁際に腰かけ並ぶ，ギリシア人のあたかも多年の憂苦を想い起こすかのように静止した時間を内向する張りつめた場面である．　共に純白の壁の狭間で汚れた黒い衣服を纏い，しかも区別がつかないほど似た風采，癖を身につけ生活する姿が不思議に感じられたのである．　サハラの縁でみたベルベルのクサールも強烈であったが，記憶の片隅では常にこのアンダルシアとキクラデスの集落の違いの出所が気になっていた．

例えばこれを象徴する幾つかの事例と自然に結びついた．　牛と羊の性格の違い，カソリックとギリシア正教の違い，ローマの専制政治（マグレブを経由するが）とギリシアの民主政治の違い，支配者と被支配者の違い，ドン・キホーテとゾルバの生き方の違いなどである．　ひとまず類似性の出所は棚上げし，とにかく差異についてパティオに育まれた自己中心的で虚栄心に充ちたアンダルシアの気質とデゥロモに育まれた他者依存的で協調性に富むキクラデスの気質を区別し，概ね陰陽の差異として理解することにした．

◉パティオとデゥロモ

このパティオとデゥロモに隠された〈型〉の意味については，本来空間的にも生活的



A

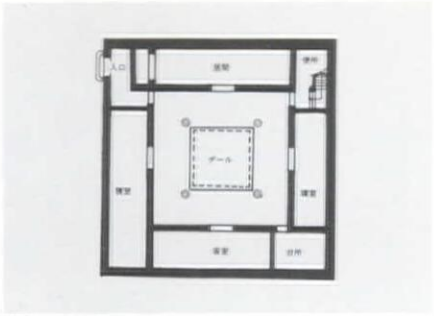


B



C

●蘇生された路地空間（コルドバ）



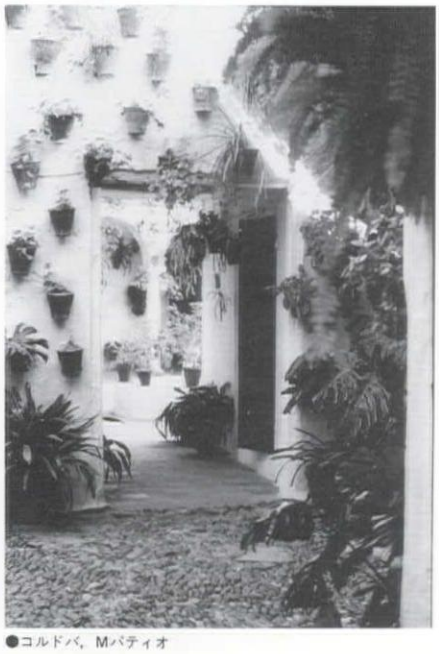
●フェズの伝統的なダール ＊1



●コルドバ旧市街におけるパティオの典型例



●コルドバ，Mパティオ



●コルドバ，Mパティオ

にも異なる統合上の水準で語る必要がある．しかしながらこれを個と集合の文派において対立する二つの型として体系づけることも可能である．　先の事例を持ち出すまでもなく，南欧の西と東が生み出すそれぞれのコスモロジーは〈型〉の意味の違いを明確に示唆し象徴することは確かである．

アンダルシアの住居の多くがパティオを中心にした構成をとるが，これの祖型や出所については残念ながら不明な点が多い．中庭型の住宅はスペインの近隣にも分布するが，このパティオに代わる中庭をモロッコではダール，イタリアではコルテと呼ぶ．言語が異なれば呼称が異なるのは当然といえるが，それらは単に中庭という共通した空間を指すにとどまらない．　言語そのものに内在する文化的な側面をそれぞれが反映するので，例えばスペインのパティオをして安易にダールやコルテに置換することはできないのである．

一方パティオとダールの構成が類似するのは歴史的必然である．　特にそれらの都市域における展開は極めて類似する．ともに2，3階建，偏平な平面の室すべてが内側の中庭に向って開き，外側に対しては厚い壁で閉ざしている．　中庭の仕上げは贅を尽くし，水盤に湛えられる水は乾燥地域における潤いを象徴する．　むろん両者には文化の違いを反映して異なる面も多い．　性差と首長の態勢を写す住様式や起居様式の差異が生活上の著しい違いを生み出すのである．　仮りに意匠が異なるのは当然としても，空間の構成が類似する点には理解し難い部分が残る．

他方，コルテの場合は，必ずしも中庭を住居の中心に住居空間を象徴し，住居平面の要として機能するように住居の中心に配置する必要はない．　一般に床にペーブが施され井戸を備えれば，住居の一面に塀で囲われた庭が拡がる場合でもコルテと呼ぶ．　すなわちパティオやダールと異なる曖昧な構成の原理によって成立しているのである．　我々が通常使用するコートハウスのコートに文字通り近い概念といえる．

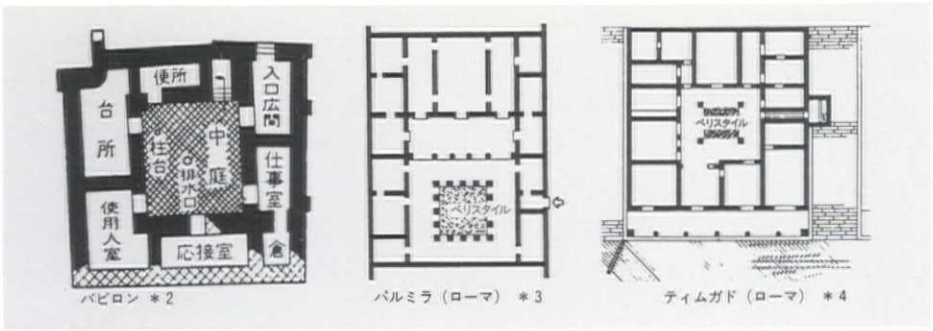
アンダルシアのパティオについてさらに言及すれば，その分布の性質が構成の原理と矛盾する点を指摘しなければならない．アンダルシアでは，パティオをもつ住宅が農村部の集落よりも都市部に，新しい街区よりも古い街区に，さらに傾斜地よりも平地に多く分布する．　等高線に沿うように住居が急斜面に連続するアンダルシア特有の集落に平面立地を原則とするパティオを期待することはできないにしても，これが集まって住むことを原則とする都市街区の構成要素であることには不自然ささえ感ずるのである．　パティオの原理とは先述のように，外に対して厚い壁で囲い，ひたすらパティオに向って生活を営む閉鎖的，内向的な構成にある．　それを厳しい自然や外敵に対峙する形象として理解することはできるが，城壁に護られ，広場を共有し共存する都市(共同体)の要素としては余りに不整合なのである．　この矛盾は，中庭型の住宅が今なお農村部の必然的な形式として生きつづけるモロッコの風景によってより強く認識される．

もう一つの〈型〉，デゥロモについては，まず議論を先に進めるための限定が必要である．　デゥロモとはギリシャ語で広くミチを意味するが，ここではキクラデス諸島の平地集落に分布する住居階段がミチに露出する形式のものに限定して使用したい．　従って，住居単位の1，2階を接続する階段（内階段はない）が唯一の外部空間であるデゥロモに帰属し，一度デゥロモを通過しなければ上，下階に到達できない特異な条件下にあるミチを指すことになる．住居が唯一の外部空間，デゥロモに開き，しかも居室条件のすべてと住居動線の要をデゥロモに依存する構成はパティオのそれに相似するが，デゥロモが集落を支える共有の場であることにこそ本質的な差異が認識される．

以上，パティオとデゥロモの構成をみたが，パティオを内包する住居とデゥロモによって連鎖する集落は，それぞれ個の原理と集合の原理を正確に投射している．むろん，これを現実の都市や集落に重ねた場合，パティオが不完全な事例，パティオをもたない事例，あるいは階段を内包する事例などの例外も存在する．　しかし図式として把握された構成原理を正確に住居空間に変換した事例が数多く存在することも事実である．　そして原理をそのまま空間に置き換え易いこと，換言すれば原理に回

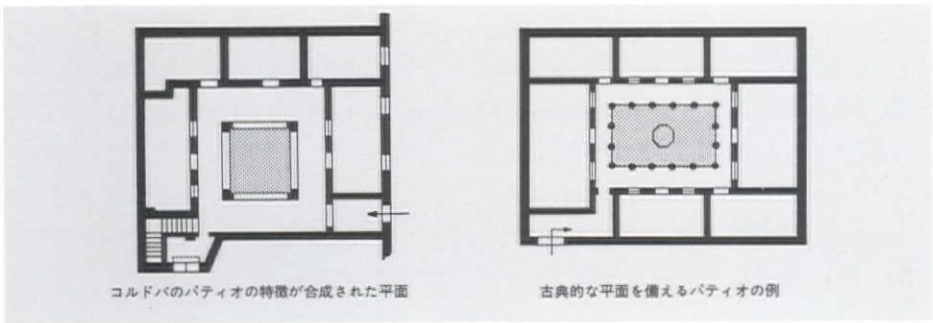


●コルドバのパティオ　Cordoba



バビロン ＊2　　パルミラ（ローマ） ＊3　　ティムガド（ローマ） ＊4

●古代の中庭型住居



コルドバのパティオの特徴が合成された平面　　古典的な平面を備えるパティオの例

●コルドバのパティオ ＊5



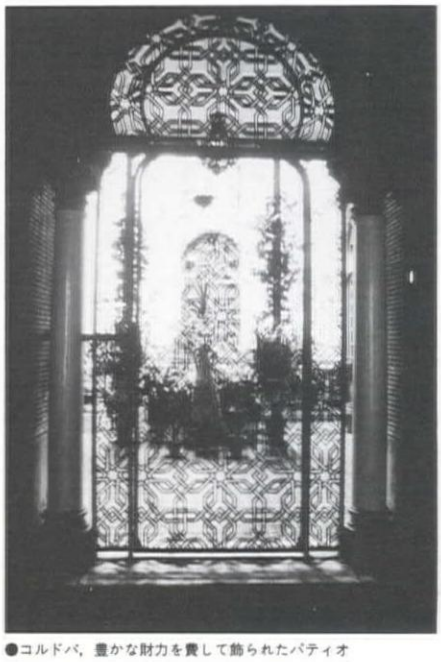
●コルドバ，草花で飾られたパティオ



●コルドバ，草花で飾られたパティオ



●コルドバ，グリーン・パティオ，草花で飾られたパティオ



●コルドバ，豊かな財力を費して飾られたパティオ

帰する事例の多いことが，まさしく構成原理の存在を証明するものとなる．

◉パティオに籠められた宇宙

中庭が平面構成の要となる住居を〈中庭型住居〉とするなら，この分布は広く韓国，中国から北アフリカ，スペインにいたる乾燥地域をほぼ覆うことになる．　また，これの発生は有史以前に遡る．　乱暴に言えば，住居の発掘例の少ないエジプトを除外したとしても，アナトリア高原にはじまりギリシア，ローマにいたる古代の上層住宅には共通して〈中庭型住居〉の構成原理が踏襲されている．　例えば五千年前のバビロンの住居では，すでに１階居室のすべてが中庭にのみ接続する構成を整え，さらにギリシア，ローマにいたっては，中庭への思いが強化され，列柱廊を備えるペリスタイルの形式へと展開する．　列柱廊に囲まれて水と緑が演出されるペリスタイルはまさしくローマの貴族生活を象徴する空間であったといえよう．

コルドバのパティオに初めて接したとき，これがローマのペリスタイルのもっていた構成をそのまま伝えているようにさえ感じた．　アンダルシアの都市には広くパティオの分布をみるが，深く観察すると現実にはコルドバほどに庶民的スケールのパティオが集積する街も少ない．　よくセビリアのパティオと比較されるが，ペリスタイルに似た列柱廊をもち貴族住宅を象徴する規模の大きなセビリアのパティオに対し，コルドバの場合はアンダルシアに固有なパティオの精神を開示するかのように庶民的なのである．

むろんコルドバのパティオにおいても列柱廊や往時のアラベスクへの強い志向が隠されている．　パティオの隅々に飾った骨董の数々は，彼等の栄光の時代への回帰願望を共通に示すが，それゆえにこれが自己顕示欲を競う手段ともなる．　そして，市民が誰でも自らの成し得る枠のなかで主張しあう現象のなかに個別性の原理が内在すると考えることも可能なのである．

しかしながらパティオの庶民性は何よりもパティオを飾る草花によって象徴されている．　パティオを草花で飾るために必要な努力はその手入れ以外にないからであ

る．　ローマ時代の円柱を流用するパティオから列柱廊をもたない外部空間のみで形成されるパティオにいたるまで，草花によってのみ自己顕示欲を同じ基盤に立ち，しかも努力の正確な代償として充たすことができるのである．

パティオの装備を整え，パティオを草花で飾る習慣は外部に対して極めて閉鎖的で，居室のすべてがパティオに開く求心的な〈構成の原理〉と整合し，これをはっきりと視覚化する．　その原理の把握はパティオに籠められた執拗なまでの表出を一目みるだけで充分である．　一般に中庭型住居の基本形には，共同生活者を外界から保護しようとする，いわば非社会的な宇宙観がア・プリオリに作用すると考えることができるが，パティオの場合その構成の手法や表現があまりにも象徴的なのである．鋳物の飾り扉を透かして覗くパティオの光景は住み手に可能な財力と工夫と手間のすべてをそれぞれに費した地上の楽園を想わせる．　とりわけ，工夫と手間が強く反映される点に楽園の意義を見出すのである．

パティオを春秋の草花で飾る習慣がいつ頃から続いているのか明らかではない．しかし草花の最も美しい季節（5月）にパティオを飾るコンペを開始したのは，それほど遠い過去のことではないだろう．　それにしてもコルドバのパティオには，こうした表出の特化現象にもかかわらず，構成原理との間に矛盾が全く生じていない．むしろ，パティオを飾ることに向けての執念を燃やせば燃やすほど，空間の理念がより鮮明に浮かび上がるのである．

◉コルドバのメディナ

コルドバの街を歩き，その閉鎖性に気づくのは時間の問題である．　とりわけメスキータから離れた街区がそれを感じさせる．微妙に曲析しながら連なる住居のファサードは，表現の要素を整理した美しさを感じさせるが，鋳物の鎧（格子）で護られており，さらに表出やあふれだしなどの生活の表情を不自然と思えるほどに欠落させている．　むろん，時々覗くことのできるパティオの温かい表情は，歩行者の感性を刺激するが，同時にオモテの冷たさを助長し，街路空間の閉鎖性をより強く意識させる．

1811年のコルドバを示す地図にはその中心部がMadinaと記され，まさしくイスラム都市のメディナを想起させる袋路の街路構成を留めている．　これがメディナに起源を発することは，10世紀のイスラム時代に関するE．A．ガトキンドの記述によって知ることができる．　このことは，コルドバに限らずイスラム時代に遡る旧い都市の街区が，袋路を末端のアクセス路とするイスラムのメディナに近い構成をなしていたことを示唆しよう．　商工住が複合する街区はイスラムに限らず，近代以前の普遍的な都市住居の型であり，そこには用途複合のイメージにも増して，1人の職人が商人であり街の住人でもあり，さらに小さな子供が既に商人や職人の予備軍として親，兄弟を手伝う複雑で多様な混住のイメージがある．　こうした中世的構成が都市の構造として結晶し生き続ける顕著な例として，メディナを捉えることが可能であり，コルドバがイスラム時代のメディナを継承している点について疑う余地はない．

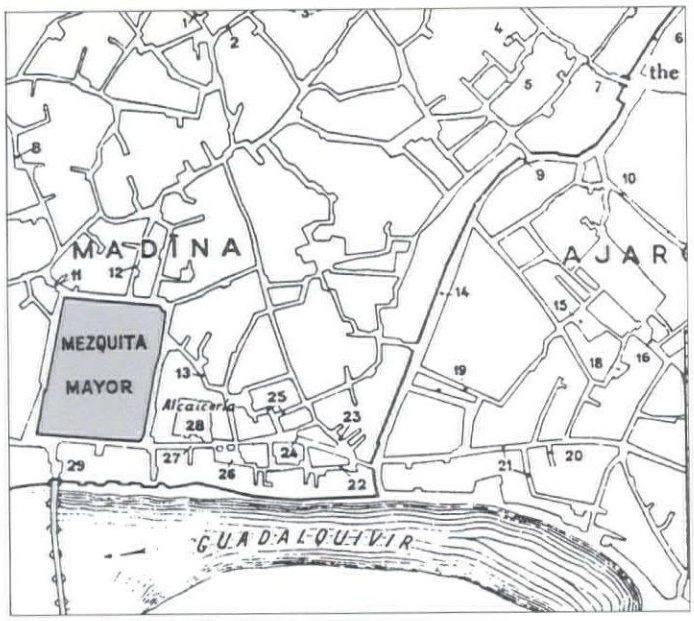
コルドバの過去に関する記述と今日のイスラム都市におけるメディナの実態は19世紀初頭のコルドバの構成を以下のように想起させる．　すなわち，同業者が街路単位に集まり，街路に面する室や入口に近い室など他人を客として受け入れ易い場所で商い，パティオに面する扉のない室やパティオに通ずる奥の作業場で商品の加工，製造を行い，さらにパティオに面する2階の奥まった条件のよい室を居住部分とする構成である．　基幹の街路は商業立地に優れ，袋路のパティオは工場に適していたが，住居は今日のように単独には成立し得ないので，立地に関しては従属的であった．　富を蓄えた商人は家屋を商館の体裁に整えたであろうし，近くの袋路に使用人たち家族の住まいを作業場と抱き合わせで設けたであろう．

◉メディナ的構成の意味

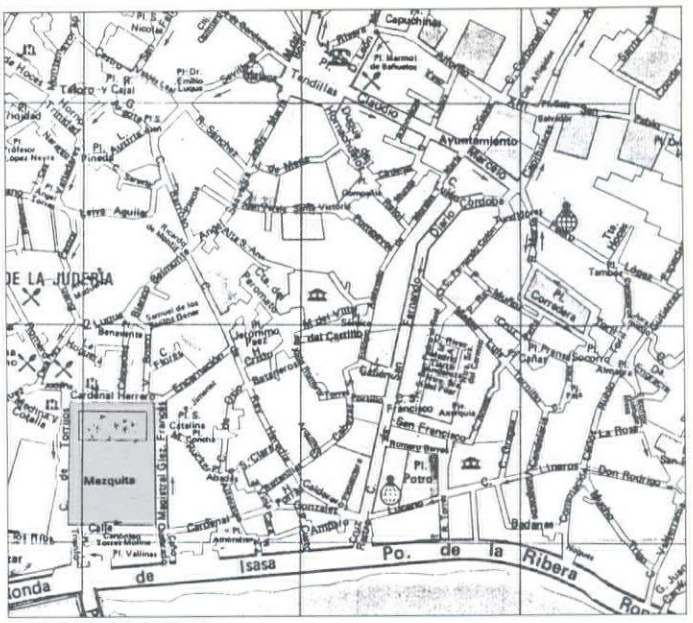
現在，メスキータへと通じるCespedes，Deanesと称する二つの街路があるが，それらはそれぞれの中間点辺りから延びる狭い路地によって結ばれている．　しかし1811年の街路図では，これが双方の街路からの袋路として描かれ，接続していない．　すなわち2本の袋路が1811年以降，今日までに繋がったのである．　袋路が私的な領域を突き破り，路地として蘇生するには，それを促す理由，背景がなければならない．むろん，このメディナ的構成から網目状を想わせる構成への変動の背景には，近代の到来とともに街区構成ないしは住居集合再編への意志の高揚があった．　街区の近世的構成は，近代社会の到来に際し，封建的，停滞的なものと映り，袋路の空間構成は，その成立基盤が近代社会への期待のなかで崩れかけた状況において，行き詰まりの閉塞的な近隣生活を象徴するものへと転化したに違いない．　具現した例は必ずしも多くないが，袋路が連なり，路地を生みだす状況が確かに存在したのである．

そこで，実測図をもとに，さらに袋路が接続する過程で生じたと考えられる生活的・空間的条件を整理し，あえて二つのパティオが貫かれ街路化した変動の背景を探ることにしたい．　二つのパティオのうち，西側のPatio—Aはその表情を床のテクスチュアなどに残しているが，東側のPatio—Bは高い塀によって路地と中庭の部分に仕切られ，往時の面影をみることはできない．しかしいずれも建物の下をくぐり抜けてパティオに入る構成を残し，路地がヴォールトで絞られた部分に厚い木製扉と鋳鉄製扉を二重に嵌め込むだけで，過去の状態へと復原できそうな趣である．　そこで，19世紀初頭の状況を復原すれば，以下のようである．

まず，二つのパティオの外側のこれに達する通路部分については，今日の状況と大差がなかったとみるべきであろう．　Patio—Aについても基本的に変わるところはなかったが，南の小広場に接続する通路部分に，共同利用のパティオを防御するための頑丈な木製扉が取り付いていた筈である．一方，Patio—Bは袋路のパティオの典型として存在した．　このパティオに通じる東の袋路にはパティオの三つの入口が設けられているが，Patio—Cを除けばいずれも通過型のそれである．　とりわけ袋路の突き当りに入口を設け，常に通路からの視線に曝されるPatio—Bの場合，外敵の侵入を拒絶し，あるいは密かに逃避しうることが成立に不可欠な条件となるため，抜け道のな



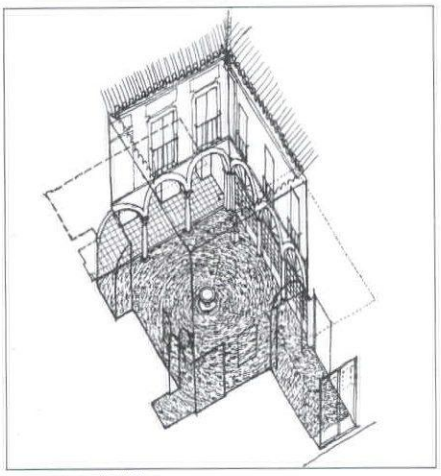
●コルドバのメディナ（1811） ＊6



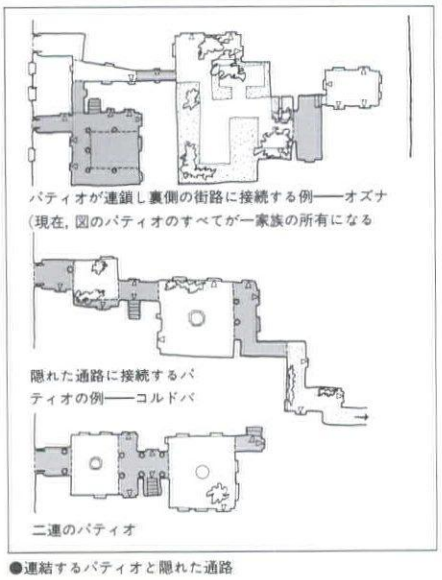
●コルドバのメディナ（現在）



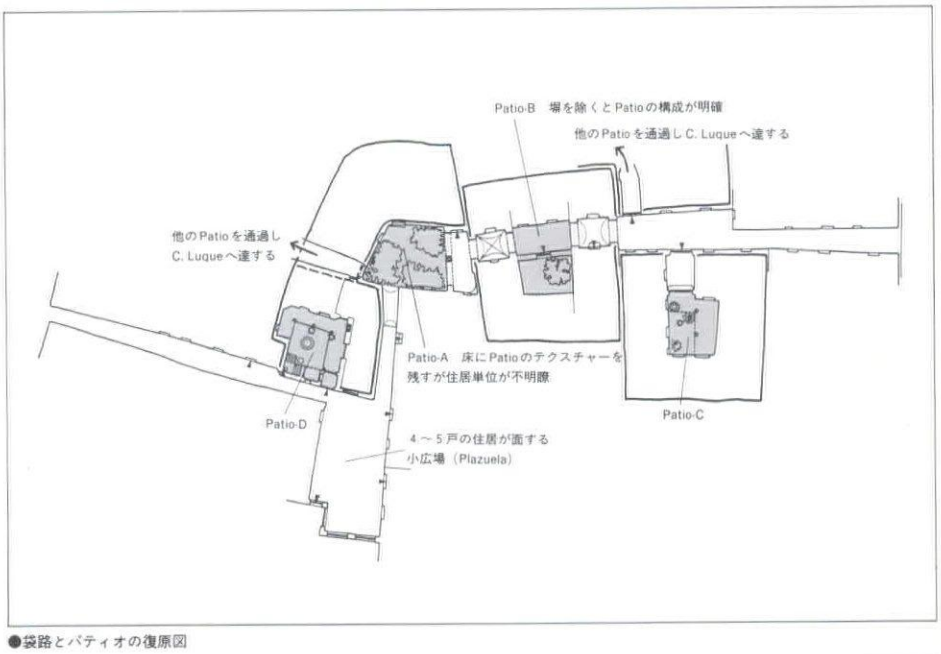
●コルドバの街並



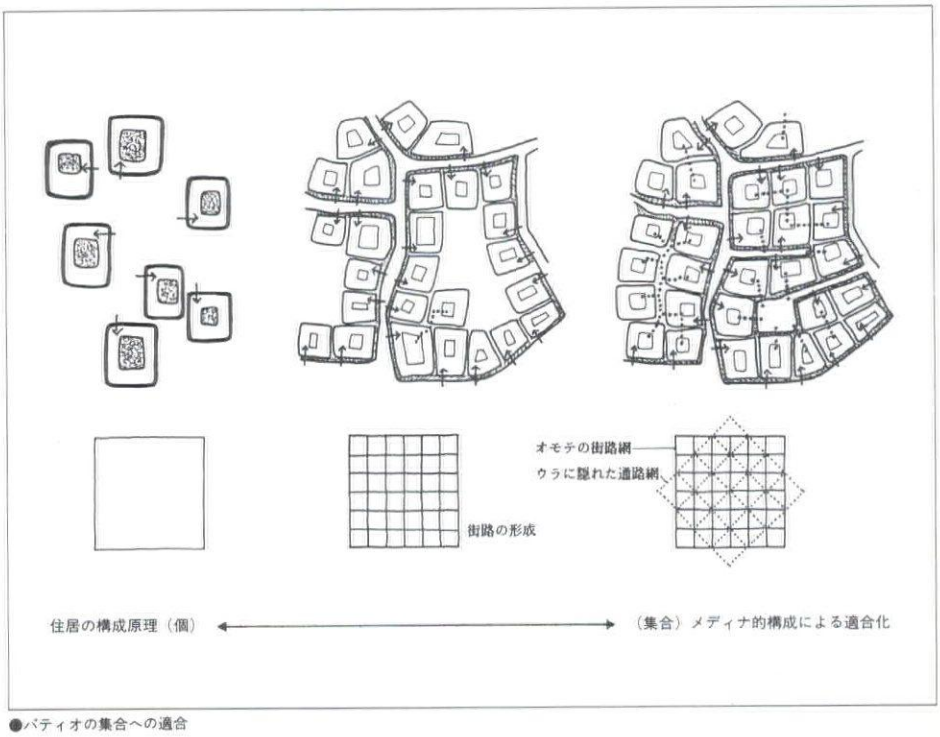
●パティオの典型例



●連結するパティオと隠れた通路



●袋路とパティオの復原図



●パティオの集合への適合

い閉塞したパティオは嫌われたに違いない．むしろこれが共用のPatio—Aに裏口を向けていたことについて必然性すら感ずるのである．さらにPatio—Aの西側にある木戸はこのパティオの所有者であるPatio—DとC.Luqueに面する別のパティオにそれぞれ通ずる裏口を形成する．

よって当時のパティオは，すでに閉鎖的，求心的でしかも自己完結的な構成の原理を失い，部外者の入り込めない隠れた通路がパティオ相互を繋ぐものとして存在し，これがオモテの街路網と併せ，重層構造化していたと考えてよかろう．メディナ的構成とは，地図に現れるような空間ではなく，むしろパティオ相互の隠れた関係を読み込むことによって象徴的に顕れるものである．むろんこうした二重構造は，防御を必要条件として生起したことが考えられるので，イスラム時代には成立していなければならない．つまり，外に対して閉じ，中庭を拠点として成立するパティオの形式を持続させ，同時にこれを大きな変動もなく住居集合の形式として再生させるために，パティオを繋ぐ隠れた通路のネットワーク化が進行したのである．とかくオモテの袋路構成の街路網をのみ指してその迷宮的世界が俎上に挙がり，言及されるが，この迷路のウラにはさらに見えない通路網が秘密裡に張り巡らされているのである．

モロッコのメディナにおいても，今は屋根がかけられ店舗として使われているダールにどこからともなく汗をかきながら商品を抱えて出没する人たちをみることができ，あるいは用を足すついでに隣りのダールを覗くことも可能である．気に入った品物がないと察するや，近道をして幾つかのダールを繋ぎ工房へ案内される場合もある．屋上は急場の逃げミチにはなっても秘密の通路になっているとは考え難い．

さて，この二重構造がメディナ的構成の原理であるとして，ここに提出した路地化の事例は，ウラに隠されていた通路がオモテの街路の系統に組み込まれることによって生ずる二重構造の消滅ないしはメディナ的構成の崩壊を示唆するものである．一方，容易に変動しそうにない歴史的環境のなかに類例を見出すことはそれほど容易ではないが，過去をひきずる構成のなかに，これと拮抗する新しい生活の波を感ずることは，防御の必然性が失われた今では，むしろ自然なことである．

パティオを部外者に開放する事例，連結する奥のパティオに事務所が開設したために開放されたコルドバの事例，パティオへの導入通路が居室化するチンチョンの事例など，現在隠れた通路の消滅，視覚化が総体的に進行しているとみるのは妥当であろう．他方，こうした通路の多くは今もなおウラ側にあってパティオ相互を繋ぎ，近隣交流の場やサービスヤードとして生き続け，しかもオモテを美しく飾り，表出を豊かにし，生活を活性化させる間接的な効果さえ生んでいる．

◉〈個〉の原理と〈集合〉の型

再びパティオに内在する構成の原理について考えてみたい．パティオとは外界を区別するために厚い壁で閉ざし，すべての室を中庭に向けて配置した求心的構成をとる住居の中庭に限定される．それゆえパティオは必然的に閉鎖的，内向的な構成のなかに非社会性あるいは家族中心のイデオロギーを映し出すことになる．いわばパティオを構築する原理そのものが〈個〉の原理と整合し成立するのである．

アンダルシアでは，住居を計画する場合，初めにパティオの規模が画定される．すなわち，本来外部空間であるパティオの内法寸法がまず決定され，これを囲む居室群はパティオの内法線と敷地境界線の狭間の従属的な空間として生起するのである．むろん，こうした計画，建設時の思考過程が生み出す価値観は，パティオと居室の空間の精度や仕上材料の差となって現われる．内—内の寸法体系によって内部空間を認識する石造文化圏にあって，外部空間である筈のパティオを内なる核と認知する観念は住居を単位とする〈個〉の原理を例証するものでもあろう．

一方，このような住居単位が累積するとき，集合の形態にどのような新たな意味を生起しうるのか関心のもたれるところである．〈個〉の原理によって排他的に成立する住居単位の集合が，人間の集まり住む環境として単に物理的集合の状態を停めるとは考え難い．矛盾ないしは相克を招来させる筈である．メディナ的構成はミチの体系をオモテとウラに双分する極めて論理的な構成にみえるが，同時にパティオの閉鎖的な性質を弱め，パティオを核とする住居単位の意味を解体させる方向に作用する．いわば，パティオを裏ミチで繋ぐという本来の構成に矛盾する改変を加えることによってかろうじて集合の意味を獲得したのである．

しかしながら，パティオに内在する〈個〉の原理が〈集合〉の型を演繹することはなかったと断定することも難しい．未だに把握されていないアンダルシア個有の集合形態の存在する可能性が残されているからである．例えば，セビリアで偶然見い出した，廊下をブリッジで繋ぎループをなす3階建のアパートは，確かにパティオの原理を継承するのだが，中庭はまさしく街路に置換されていた．街路の上を気にせずにブリッジで繋ぐ構成は，もはやパティオの構成原理そのものではないが，その止揚の程度が安易にパティオを繋ぐことに対する比喩に満ちて理屈を超えており，集合の型を暗示させるものがある．

ここで再度キクラデスのデゥロモを引用したい．ミチと住居の特異な関係を持続させるデゥロモの出所についてはベネチア支配の時代に持ち込まれたという説はあるが，なお不明な点が多い．ギリシアの住宅一般についてアテネのプラカ地区，ペロポネソス半島，マケドニア地方などを概観すると，パティオのような明確な図式的構成をとらないにせよ，コルテ程度に囲む癖を備えている．つまり中庭型を志向していたのである．

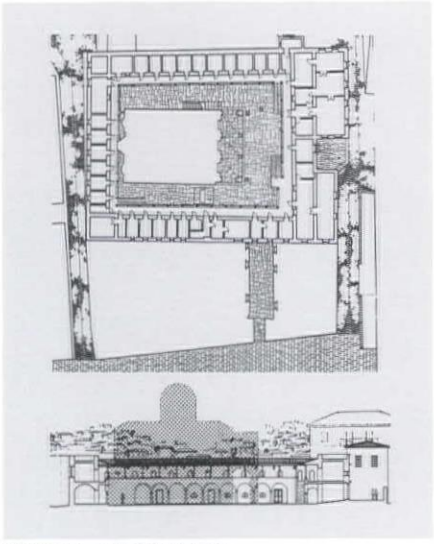
そして，二千年近くに及ぶ異民族支配を象徴し，彼等の精神をあたかも象形するように成立するギリシア正教の修道院の構成にデゥロモの祖型を見出すことは可能である．使命を終えた僧侶たちが僧房を拠点に死と直面し端然と生きる修道院の空間はそのままキクラデスの集落に写し出されている．質素な僧房の構えは住宅に，それを支える回廊はデゥロモに，修道院の生活を象徴し中央に配置される修道教会は集落内に分散し住民が自ら管理する礼拝堂に変換する．改宗を強要され血で教義を守り抜いた修道僧と，彼らを支え盗賊や異民



●コルドバ，パティオの奥にさらに連結するパティオ



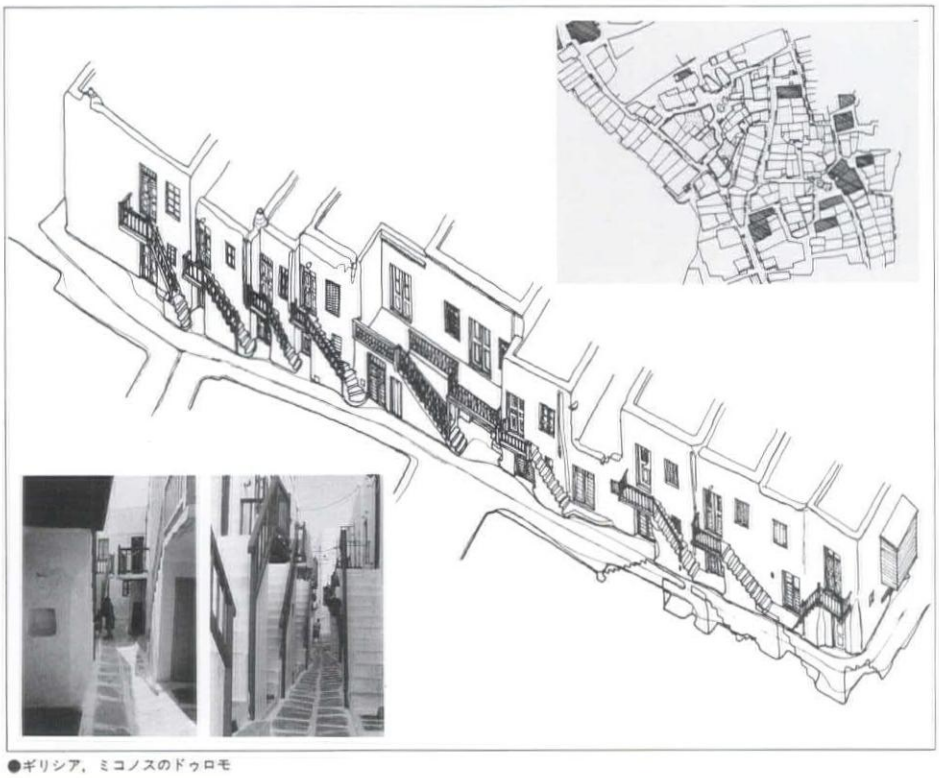
●セビリア，廊下がブリッジで繋がれループをなすアパート



●ギリシア，イドラの修道院 ＊7



●ギリシア，パロス島の修道院



●ギリシア，ミコノスのドゥロモ

族支配に対抗した集落の住民が，〈個〉の原理よりも〈集合〉の型を選択しても不思議はない．

個の要求を充たすために個の原理を超え，もっぱら集落の単位性を強化する集合の型がデゥロモとして存在するのである．住居内の領域の一部である階段や水まわりが共用の領域に曝される不便さを持続させる論理は地域の中庭型住宅への志向に拮抗し，意識して組み上げられたものに違いない．　今でも店が並び集落の骨格をつくるデゥロモは二千年前を夢みてアゴラと呼ばれるが，確かに民主的な社会を象徴する．集合の型がもたらす共存の社会，キクラデスに個の原理では越えられないユートピアを実感するには１日の生活を観察するだけで充分である．

〈個〉の原理と〈集合〉の型は，住居が集合する様々な水準のなかで個有に選択される文化としか呼びようのない集団の主住境界が形象したものである．　たまたま個の原理としたのは住居に住む成員が家族という普遍的な集団を主住境界として表わすからである．　そしてパティオとデゥロモは全く異なる文脈をもつが，個と集合の体系の諸水準のなかに確かに対立する側面を有している．　他方，両者には，スケールをスリップさせることによって重なる部分も多い．　例えば集団の水準を家族単位からムラに置き換えると，パティオはデゥロモに自動変換される．違いは集合の規模と密度の条件が四角のパティオを迷路状のデゥロモに変えるだけである．　むろん個の原理はパティオに限らず，集合の型はデゥロモに限らない．　しかしこの乱暴な操作は，アンダルシアとキクラデスが類似のコンテクストにより成立していることを示唆している．

●はた・そういち／芝浦工業大学助教授

■図注
＊1　A.Paccard／Traditional Islamic Craft in Moroccan Architecture／editions atelier 74，1980
＊2　W.シュナイダー(志鎌一之訳)／ウルフからユートピアまで／時事通信社，1961
＊3　桐敷真次郎／中近東の古代建築，続地中海建築，ＳＤ臨時増刊号／鹿島出版会，1973
＊4　福原昌明／北アフリカの古代住宅，地中海建築，ＳＤ臨時増刊号／鹿島出版会，1971
＊5　A.K.Tariq／Los Patios de Cordoba／Imprenta San Pablo
＊6　E.A.Gutkind ／ Urban Development in Southern Europe:SPAIN and PORTUGAL International History of City Development vol.III／Free Press，1967
＊7　C. E. Michaelides／HYDRA : A GREEK ISLAND TOWN／The Univ.of Chicago Press，1967

SPAIN
chinchon

中世の肉・太古の血

チンチョンのマヨール広場

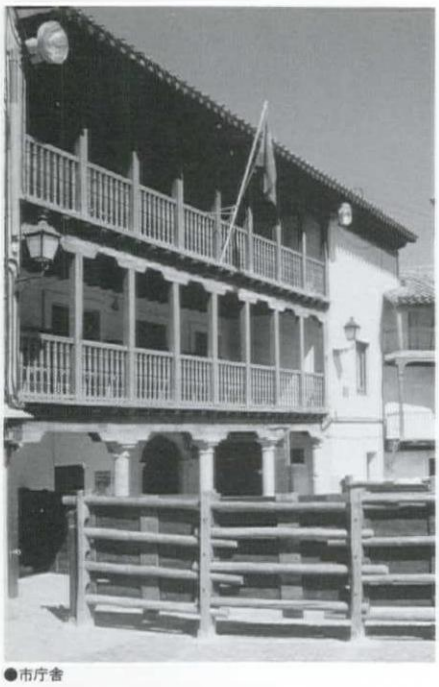
林 章

◉チンチョン（Chinchon）のマヨール広場

チンチョンはマドリッドから南東45kmにある。　標高770m，エル・リャーノと呼ばれる高台に始まる傾斜地の中に位置している。西に向かって緩く下る地形は，建物，街路，広場等を絵画的情景にしているが，その中でもとりわけ際立っているのが，街の中央に位置しているマヨール広場である。　ロジアのついた建物で囲まれた広場そのものの美しさもさることながら，窪地に位置しているために周囲の建物や街路から望まれることにより，街の構成上だけでなく視覚的にも街の中心としての象徴的役割を担っている。

昔，ナーバス伯爵が王立広場の一つに数え入れたこの広場はスペインで最も古いものの一つである。　市庁舎が広場に面していること，祭儀空間としての性格を有している点では，これ以降に成立したマドリッドやサラマンカの同名の矩形の美しい広場と共通しているが，形態はそれらと著しく異なっている。　プランだけを見ると，イタリアのサン・ジミニアーノ等の広場の成立と同質の歴史的背景を有している。　言いかえれば中世的雰囲気を色濃く残す実例の一つとして認識することも不可能ではないだろうが，写真を見てすぐわかるように，現在でも夏期に仮設される楕円形の闘牛場そのものがこの広場のデザイン・プランニングを大きく支配している。

その傾向を如実に示しているのが，市庁舎である。　市庁舎のファサードは広場を囲む他の建物と同様のファサードを持ち，そのロジアの色によってかろうじて他の建物と区別されているにすぎない（市庁舎のロジアのみ木地のままで，他の建物はコバルトグリーンに統一して彩色されている）。しかし最も興味深いのは，市庁舎の1階部分のほとんどが闘牛場の付属施設（牛舎，牛の解体場，木柵の収納等々）になっていることである。　このことはスペインの人々の闘牛好きを考えるならば我々に容易に祭政一致の政治形態の想起を可能にする。事実，チンチョンにおいて古くは1502年に



●市庁舎



●マヨール広場を取り囲む建物群



●マヨール広場

ドン・フェリペ・エル・エルモソに敬意を表して盛大な闘牛が催された記録が残っているのを始めとして，これまで政治的意味合いを色濃く有する闘牛が数限りなく催されてきた．　しかしこの想起が誤まっていないとしても，祭政一致という観念的図式でこの広場の持つ意味を引き出し切れる程，問題は単純ではないように思われる．

チンチョンのあるカスティーア地方やナバラ地方を中心に，エンシエロ（牛追い祭）がスペイン各地で行われており，特にナバラ地方にあるパンプローナのサン・フェルミンの祭は世界的にも有名であり，その規模の大きさと迫力で他の追随を許さない．　しかしヘミングウェイが小説の題材にし得るようなエンシエロばかりではない．なかには，エンシエロの最後に牛を嬲り殺してしまうようなかなり残虐な例もアルバセテ県の村々等に数多く見ることができる．筆者の不勉強で後者の形態の方が本来のエンシエロの姿をとどめていることを示す文献を見出すことはできなかったが，パンプローナでも，サン・フェルミンの祭の際に行われる闘牛において，闘牛後の解体された血まみれの肉塊や臓物等を，老若男女を問わず闘牛の興奮醒めやらぬまま目を輝かせて覗き込んでいる姿を見て，まず筆者の頭に浮んだのは旧約聖書の世界であった．そして今，さらに空想の翼を拡げ，それがアルタミラの洞穴壁画の時代まで遡ることができるのではないかという考えが浮んだ時は，その真偽はいざ知らず，ひょっとすると，このような視点はスペインという一種不可思議な世界を理解する糸口になるかも知れないという思いに筆者自身多少とも酔ってしまったことを告白しておくべきだろう．

このような勝手な解釈を許してもらえるならば，チンチョンより以後にできたスペインの一連の都市のマヨール広場が，ピレネー以北のいわゆるヨーロッパのデザイン・プランニング手法を導入し，矩形に整えられる一方で闘牛場が独立した施設として，街のはずれに押し出されたのに対して，チンチョンのマヨール広場が，そのような大改造を受けなかった結果として生じている魅力は，単なる中世的なものに対する漠然とした懐古趣味的興味の対象としてだけでなく，原始時代から連綿と生き続けてきたかも知れないスペイン人の精神生活の原点を，集落の中心にいまだ位置させているという象徴的意味に負うところが少なくないのかも知れない．　その意味では，未確認であるが，この広場の闘牛場から街はずれまで続く木柵がこの街で小規模ながらもエンシエロが行われているのではないかという筆者の想像も，あるいはあたっていても良いのではないかと思っている．

●はやし・あきら／愛知工業大学講師


●チンチョンの中心部遠景


●観客スタンド下の店



●広場から放射状に延びる街路のゲート


●牛の洗体場


●牛の出口

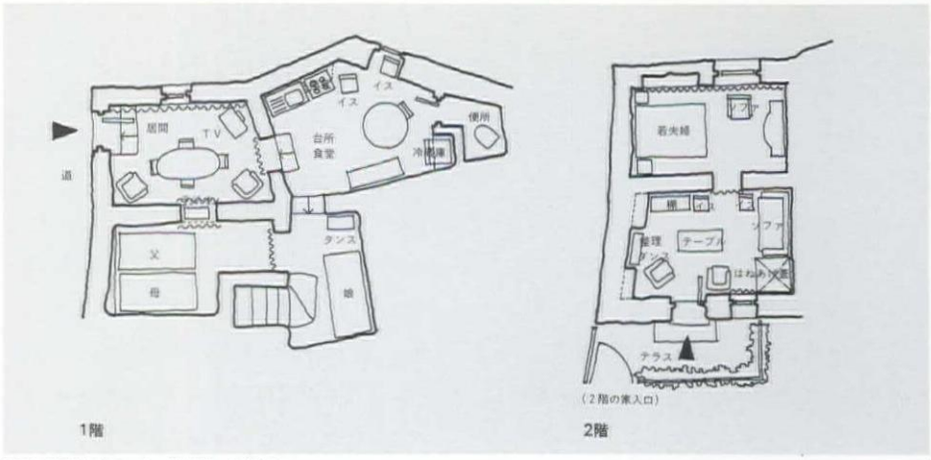


SPAIN
Montefrio, Archidona, Setenil

砦の残るまち・崖に潜るいえ

モンテフリオ, アルチドーナ, セテニール

植松貞夫



●モンテフリオのいえ, 平面図 1:200



●モンテフリオ, 街並



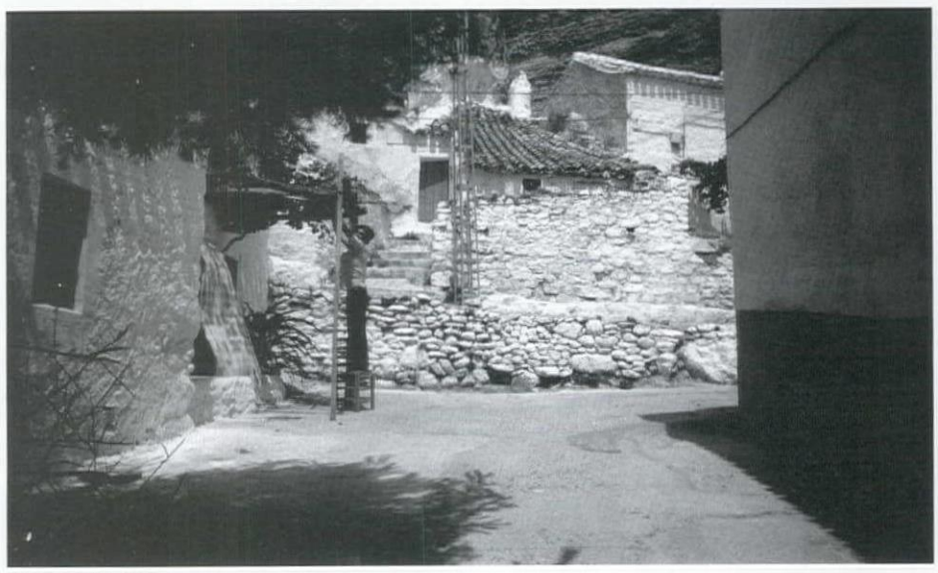
●モンテフリオのいえ



●モンテフリオ, 街並



●モンテフリオ, 街並



●モンテフリオ, 街並

◉モンテフリオ

モンテフリオ(Montefrio)は, アンダルシアの主要都市であるコルドバとグラナダとを結んだ線上に, グラナダから38kmの地に位置する町である. この両都市を結ぶ道路は, 現在は国道432号線と呼ばれているが, 古来より戦略上重要な街道であった. 特に, 8世紀以降のアラブ民族支配下にあっては, 当時世界最大の都市といわれた首都コルドバとグラナダを結ぶこの地方には, 要所要所に砦が作られ強固なイスラム支配が敷かれた.

この国道沿いには, エスページョ, カストロ・デル・リオ, ハエン, アルカウデーテ, カスティロ・デ・ロクービン, アルカラ・ラ・レアル等々, 町の名前からもそれとわかるかつての城砦都市の幾つかを見ることができる.

そのほとんどは, 丘の上に昔の砦跡と教会とがあり, その下の茶褐色の斜面に白い壁と橙色の屋根の住居群が固まっている.

都市の外側は一面の農地である. 牧草地や麦畑, ひまわり畑, そして丘陵の頂上まで見渡す限りの地に整然と植えられたオリーブの木が続いている.

モンテフリオは国道からははずれているが, 丁度東西南北から道路が集結する峠の尾根筋に開けた町で, 交通の要衝としてイスラムの砦が築かれた町である. しかし, モンテフリオは単に古いものが残されている町ではなく, 現在でも物流の集積地

あるいはグラナダの郊外都市としてかなり規模の大きな町に発展している．　現在の人口は１万１千人弱である．

モンテフリオのまち

モンテフリオで古い住居の残る部分は，砦跡のある山の南側の急斜面の一画と，その東側のやや平坦な部分である．　峠という立地条件が水の確保を難しくしていたであろうから城砦都市時代のモンテフリオには規模に自ずと制限があったであろうが，水道の整備の進んだ今日では市域も拡大している．　その成長は主に，山のふもとに置かれた円形のキリスト教会より東側で吸収されている．　この拡張の余地があったことが，上述の部分を古いままにとどめることに幸いしたのであろう．

グラナダに観光客が集中してしまうためかアンダルシア地方の海沿いの各地で進む観光地化に伴う破壊からも免れている．

モンテフリオではアンダルシア地方の一般的な中規模都市の表情を見ることができるが，ここではやはり山の南側の急な斜面に白い壁の民家が自然の地形をたくみに利用して帯状に連なる地域が最も興味深い．住戸の集合密度はさほど高くないが，道は急坂になったり階段になったり，突然狭まったり人の家のテラスで行き止まりかと思うと横に通じていたり，道だか個人の領域だかわからぬままに繋がっている．

かつては石畳であったろう道も現在ではコンクリート舗装されている．　家々の壁から擁壁までが白く塗られていてとにかく白く眩しい．　家や道の維持管理には熱心で暑い最中道を箒で掃いたり，壁や戸口をペンキ塗りする姿をあちこちで見かける．道は半ば私的領域としてとらえられ管理されているのであろう．

猛烈な暑さと乾燥であるが斜面一体には相当に強い風が吹いている．　家々の窓は総じて小さいが，戸口は扉を開け長いカーテンや縄のれん状のものをかけたりして通風を得ている．　また，戸口や家畜（ロバ）の小屋にぶどう棚状の緑陰を作りだしている例も多い．　山の頂上附近ではオーバーハングした崖の下に潜りこむようにして小さな家が建っている．

東側のゆるい勾配の地には裏に作業庭をもつ住宅が連続的に展開している．　タイル張りの歩道のついた道には自動車もかなり入りこんでいる．　平均して住宅の規模は先の南側よりも大きい．

まちの各所に水場がある．　綺麗な水が常に流れていて，人もロバもヤギも水を飲む．

昼前には賑やかだった教会前の広場や道も食後のシエスタの時間には人通りも絶え町はひっそりと静まりかえる．

モンテフリオのいえ

山の頂上付近の家である．

２世帯居住で老夫婦と娘が下に，若夫婦が上に住んでいる．　急斜面であるため上にも専用の戸口が設けられている．　上下階とも内部の部屋と部屋の間には扉は無くカーテンが下げられているだけである．ただ階段の上ははね上げ蓋式になっていて，それが両者の領域を分けている．　また，下の階の寝室と階段は斜面を掘りこんで作られており，洞窟型住居のようになっている．

テレビもあり家具・調度品は標準的．

窓は小さく厚いカーテンが引かれていて室内は暗い．　窓を大きくすればより通風が得られ，なによりも素晴らしい眺望が得られるのにそうしている住宅は無い．住民には見飽きた景色なのであろうか．

●アルチドーナ

アルチドーナ(Archidona)は，グラナダからは真西に走る国道432号線に沿った町である．　この町にもアラブの望楼跡が丘の上に聳える．　即ち古くからの町であるが，建物は新しいものが多い．　現在の国道は町の外側を大きく迂回しており，通過車両は入りこまない．　人口１万１千人弱の静かな町である．

アルチドーナのまち

丘につらなる斜面は意外に急だが，まちは自然の複雑な曲面に貼りついた形でできあがっている．　基本的骨格としては町を貫く等高線に沿った何本かのゆるい坂道と，これらを繋ぐ道が何本もあってこれは急坂か石段になっている．　住宅と斜面との取合いは，住戸内に段差を設けることや特に山側に向かう住居では斜面を一部削りとることで処理されているが，これだけで調整できない場合には，この町には不釣合なほ



●アルチドーナ，遠景



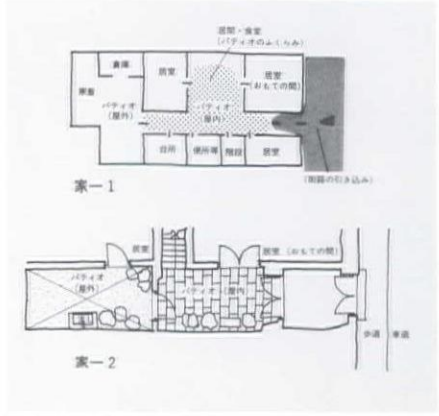
●アルチドーナ，街並



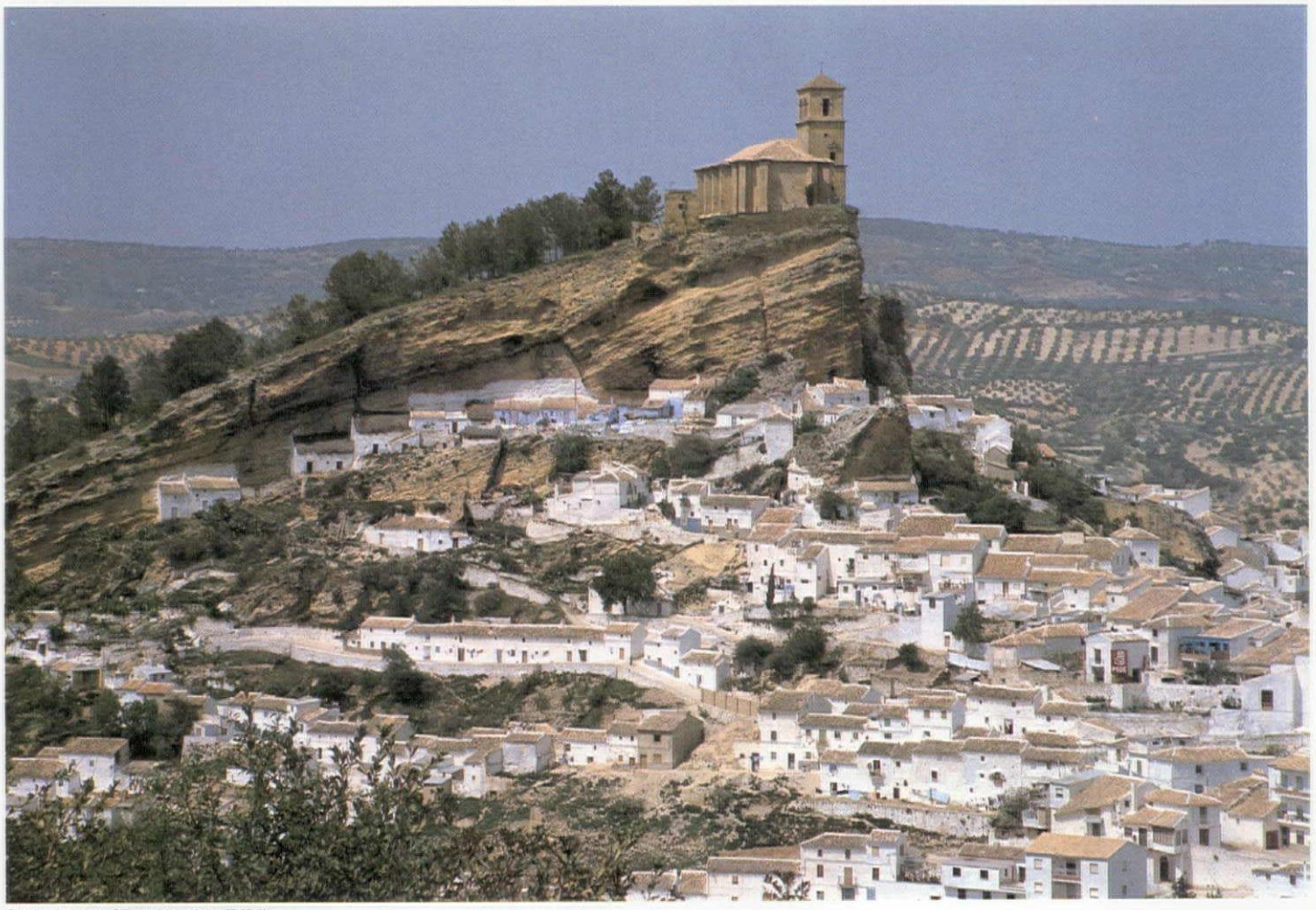
●アルチドーナ，街路



●アルチドーナ，パティオ



●アルチドーナ，パティオ平面



●モンテフリオ　Montefrio *photo:K.Kojima*



●モンテフリオ　Montefrio *photo:K.Kojima*

ど整備された歩道によってなされている．

アルチドーナの街並では，上述の歩道が極めて立派に整備されていることがまず目につく．　細かい加工がなされていたり，日常の清掃も行き届いている．

次いで，スペイン南部の各地に見られるような外壁に花鉢を飾ることがここではほとんどないことも特徴的である．　街路に表情を生みだしているものは歩道と草木模様の窓格子やベランダの持ち送り，そして壁面に取付けられた街路燈である．

アルチドーナのいえ

アルチドーナの家には道路から奥の作業コートに直線的に至る通り庭を持つものが多い．　この通り庭はパティオと呼ばれている．

まず道路に面して板戸があり，それを入ると美しい装飾タイルの貼られた街路の延長部といえる〈間〉があり，この部分はコルドバのパティオ型住宅と同じ構えである．　街路が公共空間としての性格が強くなるとその延長を住宅の中に引込む必要が生ずるのであろうか．　第2の扉からがパティオである．　これらには2階の居室がのっている．　さらにその奥にやはりパティオと呼ばれる戸外の作業コートがつながり，家畜小屋と倉庫が面する．　ここに花鉢が並べられたり，木が植えられている．

住居－1の例では，パティオの両側に居室がとられパティオの中央部がふくらんだ形で居間兼食堂がつくられている．　戸口を開け放てばここは風が通り抜け，快適な家族だんらんの場となろう．

アルチドーナのパティオは風と人の通り道であると同時に，居室の延長として多目的に活用されるという点で，京都の町屋の通り庭と似た機能を果しているといえる．また，都市住宅の典型であるパティオ造りの住宅の様々な部分的手法が立地条件・生業等により変質を加えられながら近郊の農村住宅に取入れられていったものと考えられる．

◉セテニール

セテニール（Setenil）はロンダの真北約9kmに位置する小さな町である．　この町はアンダルシアの風土的な条件としての，夏の暑さに対する光や熱の遮断，そのうえで通風をどう得るか，水の確保及び戦争に対する備えという四つの立地条件の総てを満足する環境を備えている．　そのため，町の起源は極めて古いとされ，その後は15世紀末までイスラム支配が続き，キリスト教徒との間で激しい争奪戦が繰返された歴史をもつ．　しかし，現在は人口もたかだか3.500人と発展から大きくとり残された山間の町である．

山岳地帯の乾燥したオリーブ畑の間の田舎道を進むと，そこだけ落窪んだ盆地状の場所にすっぽりはめ込まれたようにまちが形成されている．

まちは大きく蛇行するグアダルポルクン川が岩石を浸蝕した所にできており，市域の幅はせまい．　川は乾季のためか水量もわずかで著しく汚染されている．　現在は水源としての価値は認められない．

川の両岸の崖の上にはイスラムの要塞跡と教会とがある．

セテニールの洞窟住居

セテニールにはもちろん地上の普通の家もあるが，特徴をなす住居は谷あいの急斜面の巨大な岩石の下をうがって作られた住居である．　川沿いだけでなく，切りたった崖のあちこちに洞窟住居がみられる．　切りたった崖面の岩層と岩層の間の掘削可能な層を連続的にかきとり，これを適宜仕切ってそれぞれの住居が作られている点で，グァディス等の完全な洞窟型住居と大きく異なる．

つまり，住居正面の壁や内部間仕切り壁，多くの場合は家と家の隔壁まで石積みやレンガ積みの人工の建築物である．　このため，正面の壁面が連続的なファサードを形成し，上の岩石を見なければ他のまちの通りの表情と変らない景観をつくりだしている．

また，その連続的なファサード面を崖面本来の位置にとらわれずに設定することが可能であり，個々の住居の洞窟部分と外部架構部分との比率を自由に決定することができる．

すなわち，奥の方まで掘り進むことが可能な場所では前面道路も含め総てが岩盤層の下に入り込むことも可能であり，そうでない場合には，外部に一部屋分位飛び出した形で連続する．

概して，完全に掘り込んだ住居群よりも，一部が外部になった住居群の方が開口部も大きくベランダの張り出しをもつなど正面の表情は豊かであり，屋根も垂木構造のものの他，陸屋根で一部が屋上テラスになったものなど建設時期的には新しいものといえよう．　量的にも後者の方が圧倒的に多い．　内部構成の点では，前者がせいぜい2層といっても上階の天井高は1.5m程度であるのに対し，後者には3階建てもみられ屋根と奥の壁のほんの一部を自然の地形に依存したという形式になっている．

この両者の共存をみるとき，後者を前者からの発展型であるととらえることも可能であるが，これらにやや平らな土地に建てられた通常型の家も加えて，その土地の地形というものに大幅な手を加えることなくこれを最大限に活用し，自然・気候・風土に融合しているアンダルシア地方一帯の生活および住様式の象徴であるとみるのが素直であろう．

〈いえ－1〉道が岩山をくり抜いたトンネルの入口にある完全に岩盤の下に入り込んだ住居の例である．　トンネルを風が抜けて涼しい．　隣家の主婦は道に椅子を持出して食事の下準備をしている．　家の内部もひんやりと涼しい．　窓は小さく室内は暗い．

この家には50歳代の母親と未婚の娘それに20歳代の息子夫婦と乳児が住んでいる．1階に総ての居室がとられているが，この家でも二つの寝室の間に扉はなく，母と娘の奥の寝室には若夫婦の寝室を通って入る．

2階は農業をしていた時代には作物倉庫であり家畜小屋でもあったということで，20年程前まで10数頭のヤギを囲っていた柵が立上がった一画が残っている．　2階の天井高は1.3m～1.4mの範囲で，直立することはできない．　天井面は掘り込んだ崖そのままで白く塗られている．　2階も居室として利用する等活用の余地はあろうと考えられるが，現在は物置きとしてもほとんど利用されていない．

〈いえ－2〉崖面から飛出した部分に垂木構造の屋根をもった住居の例である．老夫婦だけの住まい．　間口は狭く，1階が居間と台所，2階は寝室である．

家の後半分が岩石の壁で白く仕上げて



●セテニール　Setenil



●セテニール　Setenil



●セテニール，街並



●セテニール，街並



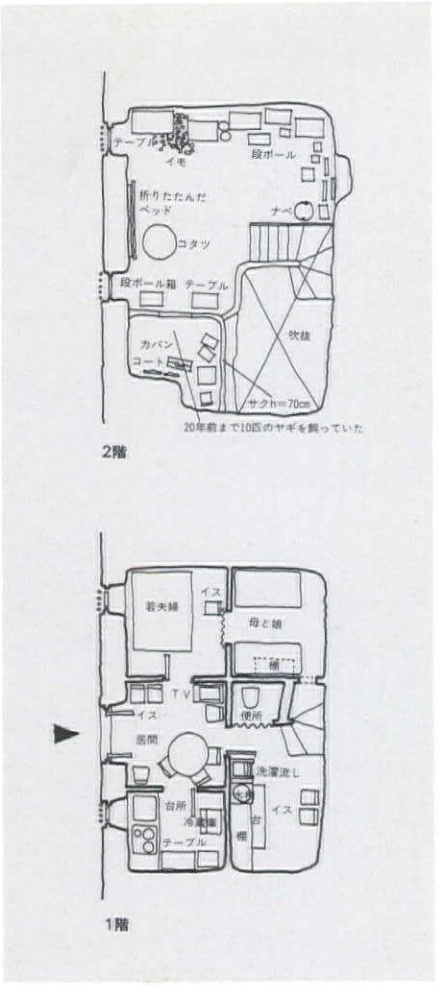
●セテニールのいえ−1，2階



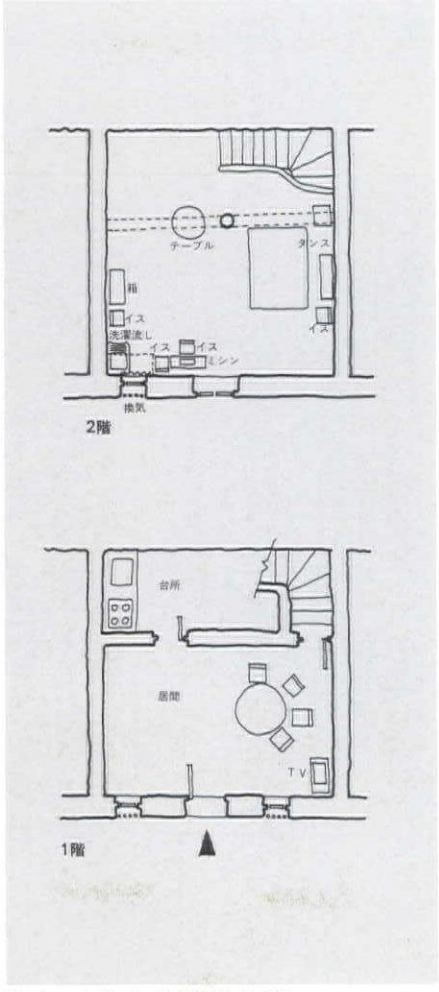
●セテニールのいえ−1，1階



●セテニールのいえ−1，1階



●セテニールのいえ−1，平面図　1:200



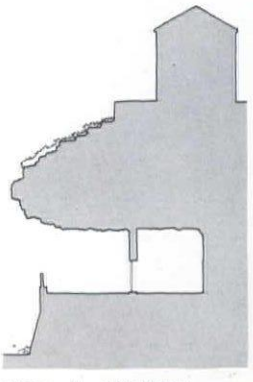
●セテニールのいえ−2，平面図　1:200

ある．　ただ，先の家もそうだが掘り進むと岩に当ってしまうためか掘削するのは容易ではないようで，壁面天井面とも仕上げはグァディスの方がはるかに綺麗である．

◉アンダルシア山間のいえ

①自然の地形に合せた住居には定型が無い．しかし，おおむね戸口を入ったすぐのところに綺麗にしつらえられた居間がある．　半ば私的領域としての道との連続性をもたせながら，ここが近隣にも開放された半私半公的空間なのであろう．　避暑法としても，戸口を開け放ち，風が入る居間にじっとしている事が多いようである．　②モンテフリオ，セテニールの古い型の住宅でも部屋の機能の固有性は確保されている．　性格付けがはっきりとした居間と食堂，寝室が備わっている．　しかし，それにプライバシーの観念の形成が伴っているとは考えにくい．　寝室が完全な個室になっていない．セテニールのいえ−1では寝室の通り抜けを行っている，そこ以外は総て扉をはめ込んでいるのに技術的には可能であってもこの2寝室間にはあえてそれをしていない．

●うえまつ・さだお／図書館情報大学助教授



●セテニール，川沿い断面図

SPAIN
Casares

連続する部屋

カサレスの家

笠島 泰

マラガからコスタ・デル・ソルの海岸線を南西へ約90kmの所で北に折れ，山間部の曲りくねった道を7km程進むと，山腹に美しい白い町が見え出す．　これが，アンダルシア地方の昔ながらのたたずまいを残している数少ない町の一つカサレスである．

街は中央の広場を中心に等高線沿いに四方に伸び，四つの各ウィングに小広場をもつ．　家々は平面的にも断面的にも複雑に絡み合い，どこまでが1軒なのか判然としない．　この中の住宅5戸を紹介する．

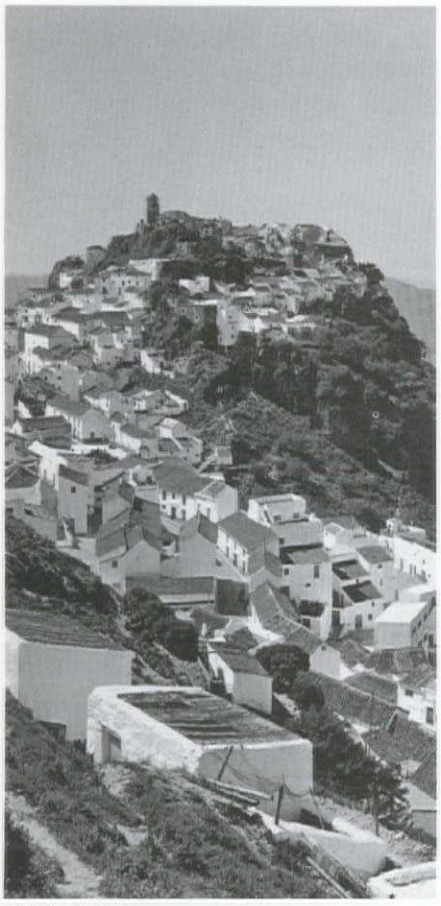
〈カサレスの家－1〉は，急斜面の上の道と下の道とを結ぶ等高線に直交する小径兼広場に面する．　この小広場に8軒が面し，各々の家の入口は，広場に微妙にレベル差を設けたり入口前に小さな階段を設けることにより，接地している．　この家は，3階建ての中間層に位置するフラット型住戸である．　家は，煉瓦や石を土で固めた厚さ60cm程度の壁と，おおよそ45cm間隔に置かれた20cm×25～30cmの梁の上に根太を架け，その上に幅広の板を渡し土をかぶせた床により構成され，どの家もおおむね同様の構法をとっている．　この家の規模は内法で約50m².

家族は，ホテルのサービス係をしている32才の主人と我々を案内してくれた40才のエマヌエル夫人，10才の長男，0才の次男の4人で，我々が訪れた時はセビリアからきた夫人の友人が滞在していた．

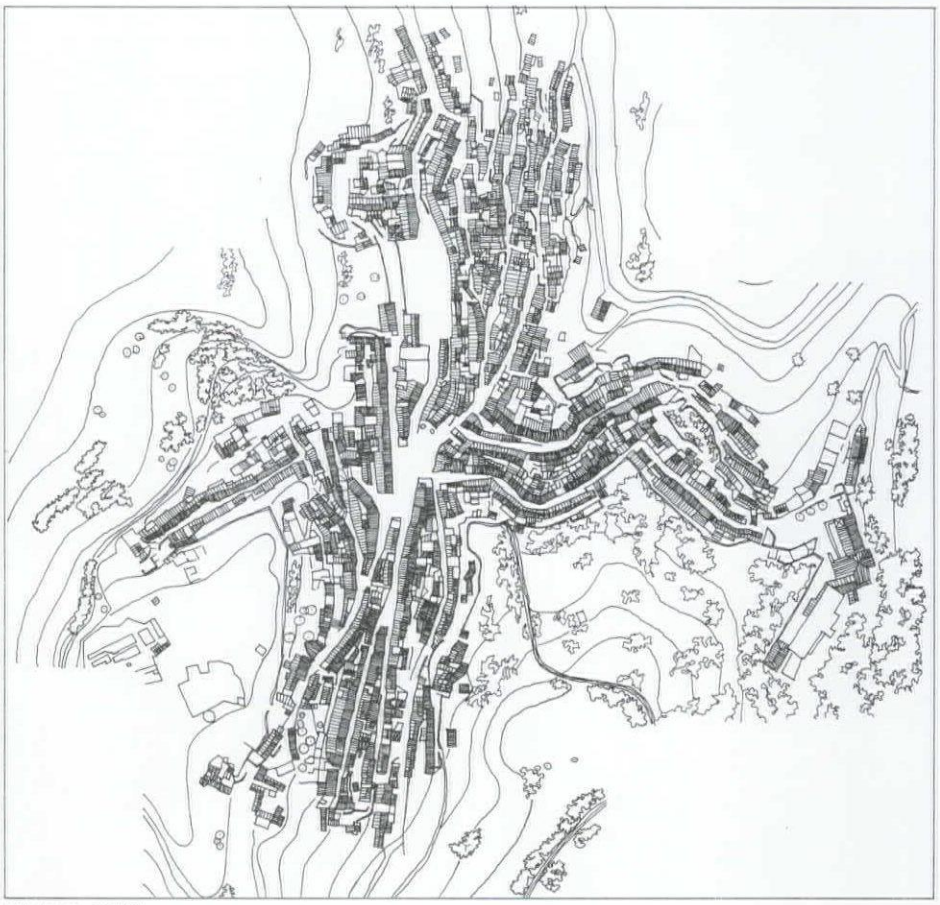
ビニール製の縄暖簾（なわのれん）を掛けた入口を入ると，ソファーやテレビ，円卓が置かれた応接・居間・食堂を兼ねた部屋がある．続いてベッドを置いた個室が2室続くが，個室といっても他室への動線が入り込み，プライバシーは保たれていない．　これらの個室の奥に，夫婦寝室とコンロやミシンが置かれたサービス空間とがある．　各室には60cm角の窓が一つ，しかもその窓には厚手のカーテンがかけてある．　このカーテンを少し開いて外を覗くと，斜面住宅であるため，眺望が開ける．　窓を大きくしたり，他の所にも設ければ，通風も良くなり，眺望も楽しめるはずなのに，なぜそうしないのか．

〈カサレスの家－2〉は，主婦が「何もこんなに小さな家を調査しなくても……」と言う通り，居住者自身も小さいと思っている家である．　面積は内法で45m²．　壁にはいろいろなものが飾られ，中でも入口を入ったすぐの食堂らしき部屋の壁の中央に飾られたマリア像と二つの個室に飾られたキリスト像が印象的であった．

この家には40才前後の主人とその妻，18才の長女が暮す．　2階建てで，1階には家具や飾り具合からおそらく接客を兼ねる食堂と台所・便所・洗面等の水廻りがあり，2階にはダブルベッドが置かれた個室とシングルベッドが置かれた個室とがある．ここでも部屋間の出入口にはドアがなく，



●カサレス，全景



●カサレス，配置図

レースのカーテンで仕切る程度で，部屋が通路にもなり，プライバシーに対する考え方が我々と異なることを窺せる．　しかしこのことにより，家の奥行きを深くみせるため，実際の面積よりなぜか大きく感じられるのが面白い．

〈カサレスの家－3〉には，入口が二つある．　一つは半地下の物置に出入りするためのもの，他の一つは玄関である．この半地下もいれると，4階建てとなり，縦に長い家である．　規模は物置を除いて，内法で58㎡（一部推定）．

1階は応接兼居間，食堂と個室が1部屋，2階は台所食事室と夫婦寝室，3階に水廻りと屋上テラスがある．　訪問した時は，若い主婦と幼女が居り，家具配置より，この2人は2階の個室を使用しているものと想定される．

規模も大きく，居室も多いにもかかわらずやはり廊下が現われない．　廊下をとらないことに積極的意味を見い出しているか，あるいはそれが当り前のことと考えられているのであろう．　一方公室が三つあり，接客・食事に対する考え方が日本と異なるためか，部屋の分節を応接・居間・食堂とせず，応接兼居間・食堂・DKとしている．　DKは日常の食事，食堂は客を招いた正式の食事に使うのだろうか．

それにしても，住宅が縦に長かったり，横に長かったりいろいろな住戸形式があるのには驚かされる．

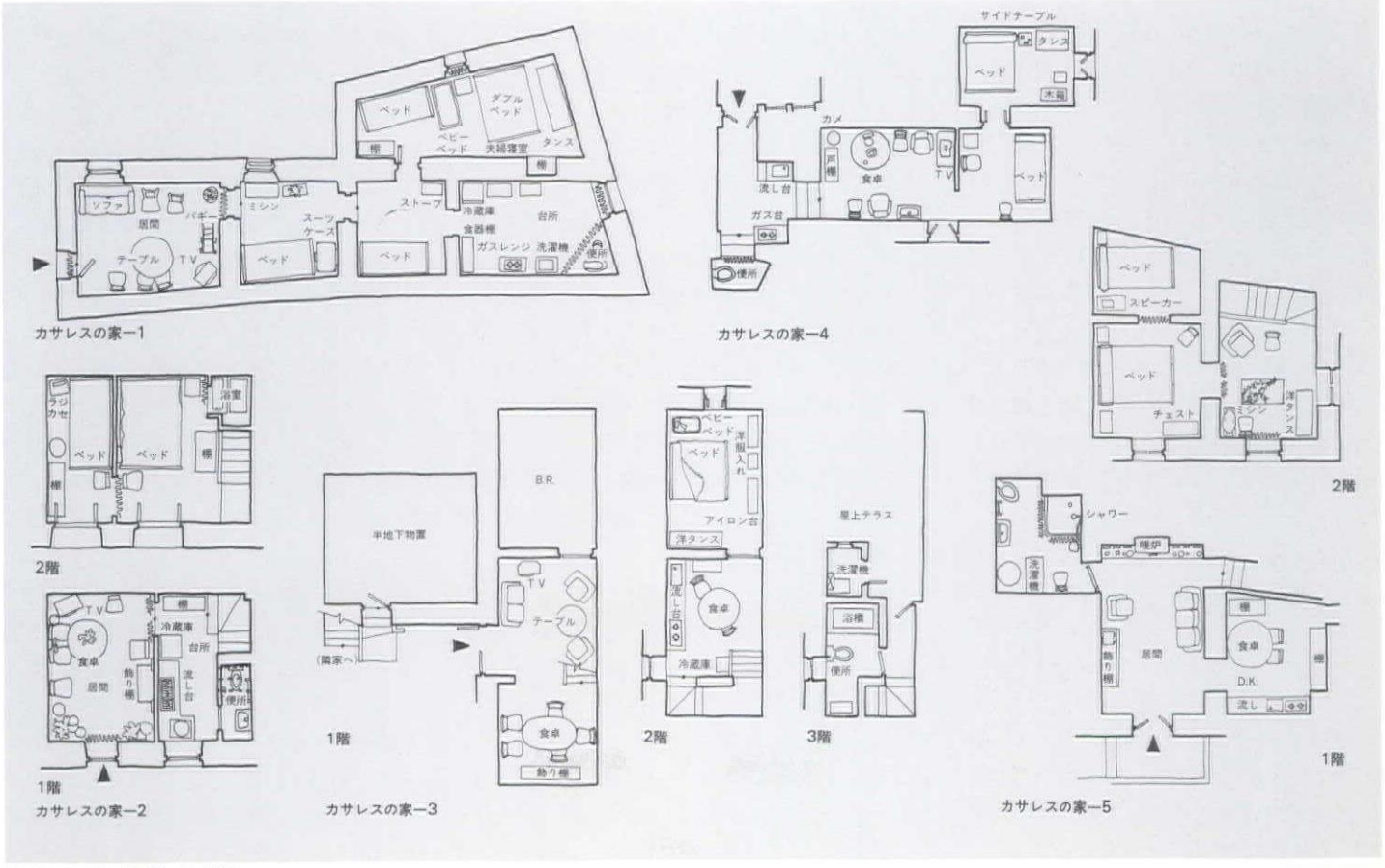
〈カサレスの家－4〉は，袋小路に面した数軒の中の1軒で，2階建ての1階部分のみを使っている．　入口ファサードの真中のドアは右端と同じ色・形の縄暖簾が掛けられていることより，確認はしていないが，この家の倉庫の入口と考えられる．入口を入るとガスコンロや洗濯機が置かれたサービス空間，次いで応接兼居間兼食堂となり，さらに個室へと続く．　奥へ行く程，プライバシーの必要な部屋となっていく．　規模は内法で約30㎡．　調査住戸の中で一番小さい住宅である．　白髪の老女が1人で留守番をしていた．

〈カサレスの家－5〉は，同じ袋小路に面している．　ほぼ総2階建てのメゾネットタイプ．　規模は内法で約60㎡．

1階にソファーやテレビが置かれた応接兼居間，流し・円卓が置かれたDK，シャワーのある水廻り等，2階にはソファやミシンが置かれた第2の居間と二つの個室がある．

以上，観察した中で興味を覚えたことをいくつか記せば，①部屋構成において，廊下が無く部屋から部屋へとつながること．従って夫婦寝室にも個室にも他室への動線が入り込んでいる．　奥へ進むほどプライバシーを要する部屋になるのは当然であるが，こういう部屋構成は建物の素朴な姿がそのまま引き継がれているものかと思われる．　②縦に長い住戸あり横に長い住戸ありで，住戸タイプに定型がないこと．　定型がないことは，住戸タイプを決定づける論理がないか，その論理よりも強い力が作用していることが想定される．　カサレスの場合は多分，急傾斜の地形による制約が大きいのだろう．　③風通し，涼しさ，眺望等からみて，窓をもっと大きく多くしたらと思えるのに，頑固なまでにそうしないこと．　これらは，一見定型が無く勝手に作られているようにこの丘陵集落の住居にもある種の定型がうかがわれる．

●かさしま・やすし／大同工業大学講師



●カサレスの家，平面図　1：200

SPAIN
Guadix

クエバスの生活

グァディス

峯 成子＋曾根陽子

グァディス（Guadix）は首都グラナダの北東57km，シェラネバダ山麓の傾斜地の町である．

展望が開ける小高い丘の上からの景観には人を圧倒する何かがある．　殆んど木のない赤茶けた土と枯草に覆われた丘のそこここから人の背丈程ある煙突が真白く日に輝いて突出している．　そうした丘がいくつも波のうねりの様に起伏しながら連なっている情景は異様で美しく，幻想的とも言える不可思議な雰囲気を醸し出している．

スペインの新聞に掲載されたグァディスの紹介記事によると，この地の洞窟住宅は質的にスペインのナンバー・ワンと断言し，比較できるものとして中国の中央平原のもの，またはアナトリア(カッパドキア)渓谷のものをあげている．　地中の民家はスペインでは稀な例ではない様で，アルメリア，アルバセテ，コルドバ，ムルシァ，バレンシア，グァダラハラ，サラゴサ，ナバラホーネンといった県にも散在する．しかしグァディス程，景観としても住居群としても見事な所はないことが強調されている．　グァディスの街の人口の約４割，約１万人，２千家族が洞窟住居に定住しているという．

ここの土質は柔らかくて掘削しやすく，また空気にさらされると石灰分が固まってしまうという特性を持っているため，好きな様に頑強な床・壁・天井が形づくれ，それ等がまたそのまま水や寒暑を外部から遮断してくれる．　そして，洞窟住居の室内気温は，年間を通して最高と最低の差が18°C程に抑えられている．

自然の丘を掘って空間を創っているのだから，さまざまな形が出来ていってもよいように思えるが，スケッチしたいくつかの間取りを見ると，空間構成には共通性がうかがわれる．　要約すると，入口とともに前面の外壁部分が一部洞穴から張り出し，そこがポルタルタ（玄関の間）と呼ばれる居間的な空間となる．　その奥に寝室，左右には台所・食堂または物置が配置され，古い家ではそれ等の奥に馬小屋やわら置場が続く，という造りが基本的な構成になっている．

連なっている部屋はその殆んどが正確でないにしても四角形が基本で，円や妙な形は選択されていない．　また殆んどの住戸の床面は段差がなく，特に掘り上げたり掘り下げてつくられた空間は見られない．

この地に住みついた人々の頭の中には，住宅または部屋に対する一定のイメージがあって，それが保たれ引き継がれて来ているのであろう．

グァディスは，クエバス（洞窟住居）で有名である．　何軒かのクエバスを訪問，見学したが，そのうちの１軒について，少し詳しく説明しよう．

アーチ型の入口には，両開きのガラス戸がつき，その外には紐のカーテンが下げられている．　この紐カーテンは，他の家にも見られ，日本のすだれのような使われ方をする．　入口脇のぶどうの木がつるを延ばし，入口の前に陰を落とす．　数字のタイル１枚が表札にかわる．

入口を入ると，そこは，３m×５m位の居間である．　白い漆喰で仕上げられた室内には家具がきちんとセットされ，清潔である．　もし洞穴住居に対し，暗い，陰気，神秘的といった先入観があれば，あまりにも健全な，当り前のしつらえに驚くだろう．採光は，入口１ヶ所だが，白く見える程強い太陽の光は，それだけで充分室内を明るくする．　床はテラゾー風タイルで，天井は舟底天井のようにカーブし，高さは2.4mくらい．　目につくのは，部屋中に置かれた装飾品で，絵画，写真，賞状，真鍮飾り，置物……など．　レース編みやクッションなど手づくりのものも多い．　壁の飾りだけでも39個もある．　居間を中心に，いくつかの部屋がじゅずつなぎになっている．つなぎ目は小さなアーチで，その壁厚は，0.9～１m程もある．　アーチには，大体，ドアやカーテンが付いていて，各部屋の空間はマッシブに独立している．　壁と壁，壁と天井の接線（稜線）は直線でなく，角がなかったり，波打ったりする．　壁面や天井も平滑でなく，いかにも手で掘ったという感じで，はりぼてでは表現できない質感がある．　このような内部は，掘りとった空間そのもので，密度の濃い，凝集感を与える．

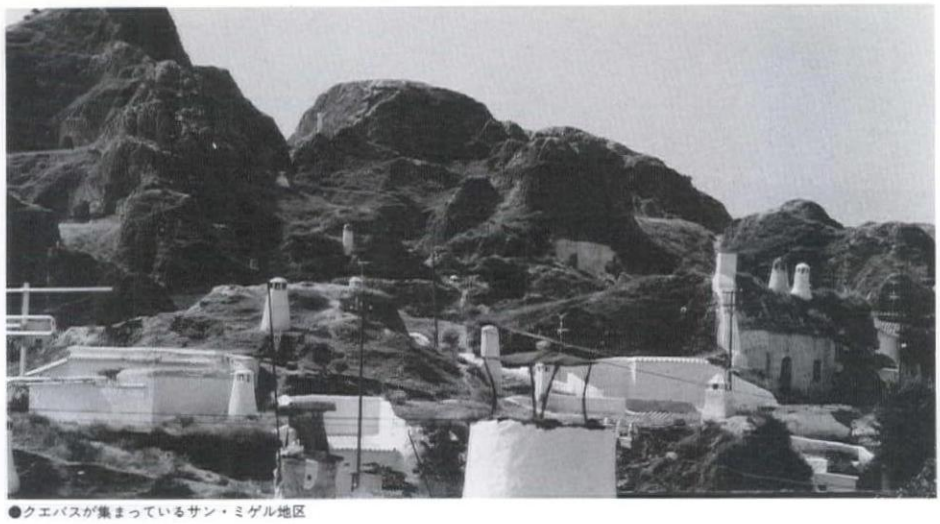
居間の隣は食堂，その先が台所で，冷蔵庫・洗濯機・食器棚と一通りのものが揃っている．　居間のテレビも2台だが，ここの洗濯機も２台あり，勿体なくて捨てられないというセンスだろう．　なべやフライパンなどの調理用具は奥の物置に置かれ，流し台はきれいに片づいている．　調理用のコンロは小さな窓の際に置かれ，地上に突出している換気筒の排出口は食堂にある．換気口前のたれ壁には，青く塗られた棚があり，皿やグラスが飾られている．　また，別の家では，換気口を暖炉のフードのように壁から突出させ，そのフードの周囲に飾り棚をつけている．　こうした換気口の扱いを見ると，換気筒が単に排気のためという機能的な目的だけのものでなく，家の装飾の中心であろう事が推察される．

寝室は２室あり，それぞれ居間に接している．　暗いが，空気が乾燥しているので，シエスタ（昼寝）でも気持ち良く眠れそうだ．　就寝分離のルールについては，例数が少なく断定できないが，夫婦単位が基本になっている．　しかし，寝室の奥の物置に色々な物を置いたり，老人といっしょに寝たりする例から見て，それほどプライバシーを気にしていないようだ．

物置は，その位置によって性格が違っている．　居間の脇にある物置には，靴やこうもり傘，自転車など外出用の品物．小窓のある物置には，寝室の奥なのに，つけもの（？）のカメや生ハムなどが置いてある．　食堂の奥には，調理器具やワイン，掃除洗濯用具など．　暗さと，動線の頻度から，物置が一番奥になるのは当然である．

しかし，どの部屋もきれいに飾られ片づいているのには感心した．　ポルトガルからスペインにかけて，行く先々でとびこみで，数多くの住宅の中を見せてもらったが，貧富に関係なく，それぞれに家を飾りきれいにしている．　日本での団地調査で家の中を見せてもらうと，洗濯物や子供のおもちゃなどのちらかった家が少なくない．住宅に対する手のかけかた，態度のちがいを感じさせられる．

居住部分は９室あるが，食堂から，暗い素掘りの物置を介して，農業用のスペー

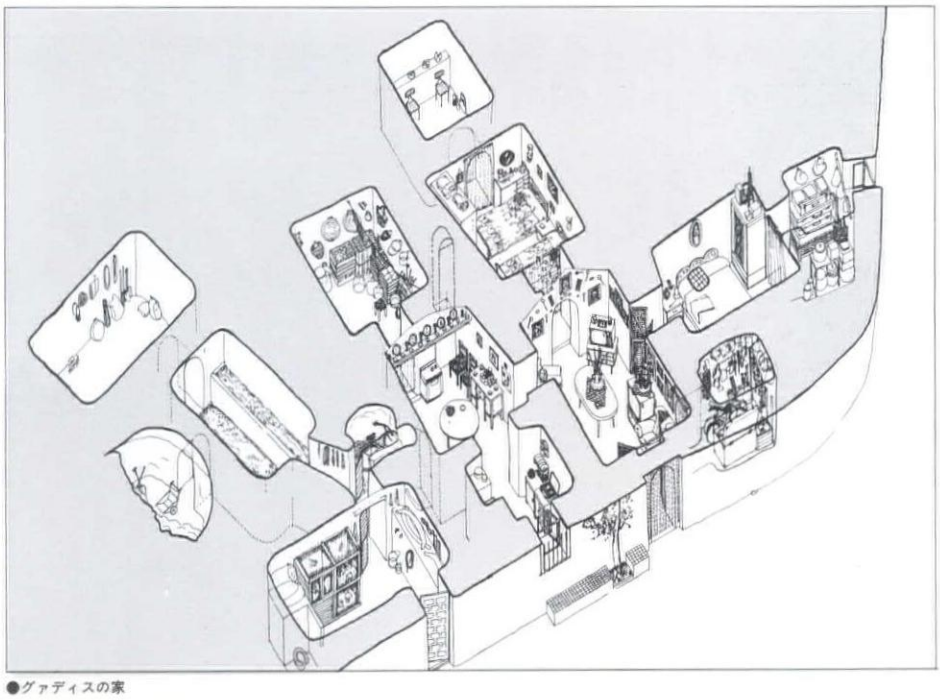

●クエバスが集まっているサン・ミゲル地区


●様々な形の換気筒


●グァディスの家，内部


●グァディスの家，内部


●グァディスの家，内部


●グァディスの家

スがつながる．　一番外側の部屋には，20羽近くのうさぎが飼われ，天井一面ににんにくが吊るしてある．　また，ここには便器も置かれている．　昔は便所のない家が多かったようだが，今回の調査では，4軒中3軒の家にあり，それの設置は一般化しつつある．　入浴習慣はないようだが，都会の新築住宅のほとんどに浴槽が設けられており，クエバスに浴槽が置かれるのも時間の問題ではなかろうか．

その奥は馬小屋（クワドラ cuadra）で，ロバが2頭いる．　床にワラが敷いてあり，臭気はさほど気にならない．　さらに奥は農具置場，道具も少なくガランとしている．

馬小屋の脇には，掘っている最中の部屋がある．　一輪車とシャベルが置いてあり，暇を見て掘っているらしい．

この家は3年前，造作に手を入れたが，また模様変えをするつもりだという．　家にかける情熱というより，楽しみながら家を作っている．　この広い家に住んでいるのは，中年の夫婦とおばあさんの3人だけ．息子は船関係の仕事をしており，別のところに住んでいるという．　男女2人の孫がいて，よく遊びに来ていること，その孫を大変かわいがっていることは，寝室にある子供のおもちゃや孫の描いた絵などから充分うかがわれる．　別のグループの訪れた家でも，息子夫婦はクエバスの外の住宅に住んでいるという．　若い世代にとって，同居という暮し方が問題なのか，クエバスという住居形式が問題なのかはわからないが，若い人がクエバスから離れる傾向にあるのは事実のようだ．　しかし，現在，これほどに愛着を持って，クエバスに住み続けて来た人達は，決して，クエバスを離れることはできないだろう．

隣家を見せてもらっておいとまをした．

外に出て丘に登ると，両方の家の換気筒が立っている．　今歩いているこの足の下にあの家があるのだ．　そう思って換気筒を見ると，初めは変った景色を作っているとしか見えなかった換気筒の，それぞれに違ったデザインがその下にあるそれぞれの暮しを示しているような気がして来た．1本の換気筒の下に，1軒の当り前の毎日の暮しがある．

遠くまで広がる一面の白い換気筒を見ていると，ここにも，こんなにも人の生活があるのかという感慨にふけってしまった．

●みね・しげこ／東京家政学院大学助教授＋そね・ようこ／共栄学園短期大学講師

PORTUGAL
Lisbon(Alfama)

斜面に刻まれた生活のリズム

アルファマ

畑 聰一

一般に，ヨーロッパの古い街並みに往時の貴族生活を想定する機会はあっても庶民の生活についてはこれを復原する手段さえ見い出し難いものである．　重くのしかかる中世に背を向け，とにかく現代風を志向する生活の真実に触れ，そこに中世を凝視する機会を捉えることもまた困難である．　むろん，近世風の生活が展開される場面に遭遇する可能性に期待しても無意味である．しかしそれでもなお，アルファマの街路をめぐる内外の空間的構成，そこでの生活の様式に中世を繙く糸口が刻まれている．

◉アルファマとバイロ・アルト

リスボンは1755年大震災に見舞われたが，これに耐え当時の面影を留める街区が二つある．　アルファマとバイロ・アルトである．　前者は古代リスボン以来の市域であり，後者は16世紀に計画的に生起された．いずれも傾斜地にあり，岩盤が街区を崩壊から救った．　しかし両者の街区構成は多くの面で対立的であり，近隣生活までも示差的にみせる．

アルファマが急峻で多様な起伏上に立地するのに対し，バイロ・アルトは平地の計画モデルを受容しうる限度ぎりぎりの斜面に立地するが，これは二つの街区の性質を分ける基本的な条件である．　そしてその差異は幾つかの水準に分けて捉えることができる．　むろん両者の街区形成の歴史，街区の地域的条件など，外在的条件が著しく異なることを付言しておく．

アルファマの街路空間はその多様な構成に特色がある．　そこには場面が刻々と変化する線形空間の印象はなく，むしろ全体として不連続に組み立てられた場面の残像を得る．　街路の幅員，向き，傾斜角，交叉パタンなど，構成の多様さは斜面類型をそのまま投影し増幅させるが，同時にそれ等の統合として捉えられる街区の構成には明らかにバイロ・アルトとは異なる秩序が暗示され，しかも近代の文法では読み得ない独特のものがある．

アルファマでは家屋が個々に街路との関係を保持し，ネガ空間の集積が街路空間を形成するので，ブロックに相当する集合水準(単位性)をみい出すことができない．つまり，個性的な場面の形成はこれを囲む家屋群の個別的な対応に準拠するのである．

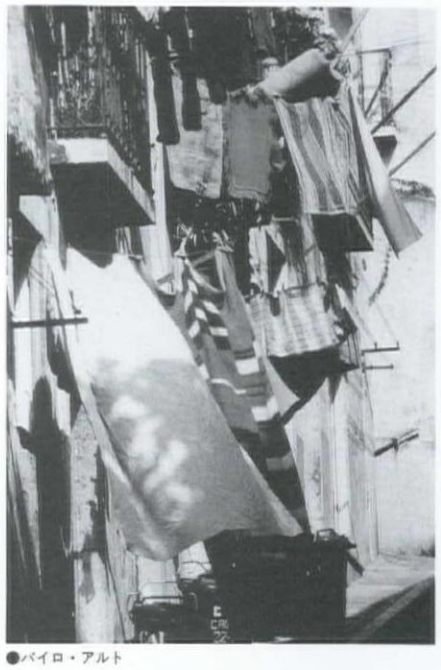
一方，バイロ・アルトは大航海時代の富を注ぎ込み，机上で生み出された街区である．　共用の中庭を囲みブロックがくっきりと浮き上がる近世以降の街区構成は斜面をものともせずに刻み込んでいる．　街路のパタンに人の往来を期待する優しさはなく，馬車の往来のみが目論まれている．家屋は不揃いの間口をもち思い思いのタイルによって飾られてはいるが，城壁のごとく連続するため柔らかい中庭がその内側に存在することなど全く感じられない．

街路が唯一の外部空間となるアルファマでは，戸内の生活拠点は居室条件のよい街路側に確保される．　その結果，居住者の集合生活への意識は街路に面する室と街路とを繋ぐ部分に集中し，開口部廻りには洗濯物も並ぶが，むしろ植木鉢や絵皿などによって美しく飾ろうとする意識の強いことが観てとれる．

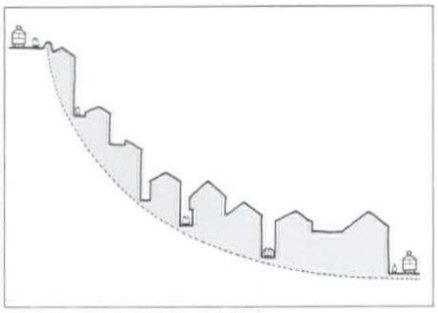
一方，街路と中庭に分けて外部空間をもつバイロ・アルトでは，戸外空間の使い分けが生じてよい筈である．　しかし，アパート化により街区構成の主旨と家屋の使い方が整合しなくなった街路では，今や中庭で展開される筈の生活表現であふれている．　無雑作に立面にあふれだした生活と無頓着に止められた車の列は，共に街路を煩雑にさせるだけであり交点をもたない．個々の生活が確実に積み重ねられ街路空間のスケールを持続させるアルファマに対し，


●バイロ・アルト地区


●アルファマ地区


●バイロ・アルト

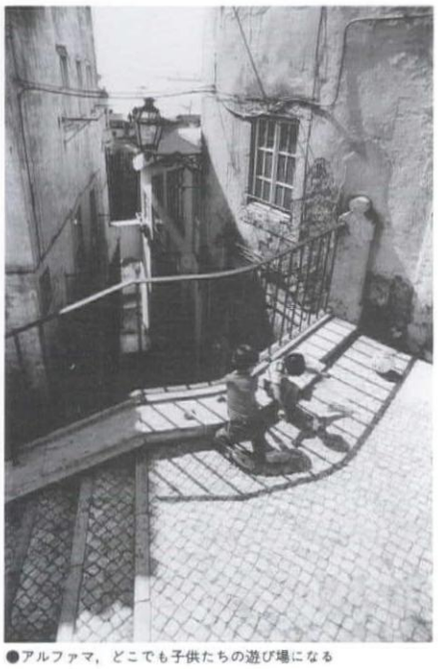

●バイロ・アルト



●放物状に立地するアルファマの街区



●アルファマ，美しく飾られた窓辺



●アルファマ，どこでも子供たちの遊び場になる



●アルファマ，路地に展開する子供たちの生活



●アルファマ，街並



●アルファマ，どこでも子供たちの遊び場になる



●アルファマ，共同洗濯場

バイロ・アルトの街路空間は生活のすべてを，歩道に椅子を持ち出して坐る老婆の姿さえもただ喧噪の中に露出させるだけである．

◉斜面居住の秩序

石造の街に足元の処理のうまさを感ずるのは常であるが，傾斜地利用の空間の見事さを感ずることも少なくない．　アルファマはまさにその好例である．　しかも一見複雑にみえる街区の背後には長期にわたる斜面克服の積み重ねで得た空間構成の知恵が隠されている．　そこには斜面居住の秩序が内在しているようにもみえる．

斜面地形の特徴は図に示す放物線に重ねてみることができる．　斜面は連続するが上方と下方では重力を支える接地部分の勾配が著しく異なるのである．　さらに凹型の地形は人の動きや生活の拡がりを谷側に溜め，街区の性質を山側と谷側に双分する．　仮りに両者の性質が斜面地形により生み出されたものとするなら，相補的である筈の両者を比較することにより，それぞれについて次のような性質が抽き出せる．

上方地区では，家屋のランダムな配置のなかで階段と斜路がそれぞれ固有の条件下で駆使されるため，とくに街路が交差する部分には個性的な空間が生じやすい．　家屋はそれほど密集せず，規模も大きくないので，街区の環境は谷側からの日差しを浴びて明るく，とりわけ白壁を背に樹木によって彩られた場所などは健康的でさえある．これに対し切通しの様を呈する下方地区の場合，路地が暗く併用住宅が多いので必然的にバイロ・アルトに似た雰囲気を伝える．むろん歩車道に分離せず，直交することのない街路に小広場や袋路が接続するアルファマ独自の構成はバイロ・アルトと出所を異にする．

そして空間の違いは生活のしかたの違いを助長する．　上方の街路はそのすべてが子供の遊び場であり，いつでも主婦や老人の溜り場に転化するが，下方では通路であることが優先され，子供や老人達は上方に避難するか，もしくは出入口廻りや袋路に押しやられる．　洗濯ものが壁伝いに滑車で運ばれ，窓辺や出入口廻りが草花で賑かな，いわば日常生活の表出の豊かな上方

に対し，下方ではこうした生活の臭いは退行し，商いの表出にとって替わる．　草花が育ち難く，またせっかく育てても街路を往来する人の目に止まり難いのであろう．それでも下方の住人は午前のうちに共同洗濯場に出かけ，屋上や袋路，最上階の街路上など，目立たない場所に干す心遣いをみせる．　上方の路面を箒で掃くやり方は下方では水洗いに転じ，街路の性質の違いが掃除のしかたにまで及ぶことになる．

これらは放物線状の断面に内在する住居集合の規定条件が生活のしかたを誘導した結果であると理解されよう．　むろん断面は本来連続的に変わるものなので，双分的に捉えるべきでないかもしれない．　しかし，これを街区の相補的な構成要素と考え，変動の幅とみるならば，断面は極めて分り易いものとなる．

◉アルファマ・コミュニケーション

上方地区にはアルファマ特有のコミュニケーション・スタイルがありそうだ．　斜面を昇降する人と窓辺に寄り添う人達の立体的な交流であるが，これが至近距離で電鈴のごとくなされる点に特色がある．　ネガ空間として生ずる不規則な街路が窓相互や窓と街路の視野を確保し，さらに窓と山側の街路が仰角をとらず至近距離で結びつくためである．　窓辺にいる複数の人が街路にいる人々を巻き込み，直接会話ができない広い範囲にわたり，視線，会話線と信号音（叫び声）を使い多重コミュニケーションを行う光景は活気に満ちた午前のアルファマには不可欠である．

家屋の向き合う角度が生み出す平面と斜面処理のかたちはともに多様であるが，そこには空間の楽しさを超え近隣生活に集合の意味を付与する側面が強い．　線状の街路には期待しえない豊かな生活感を生み出していることも事実である．　むろん，この特異な状況は街路に面する居室が日中の生活拠点となる空間の型，さらに唯一の開口部近くに拠点を構えてなされる行為や住み方の様式と深くかかわる．

下方を目差し街路を降りはじめると，実に多くの人達が窓辺から観察しているのに気付く．　2，3階にいてじっとこちらの行動を観察していた人と至近距離で視線を合わせ思わず息を呑みながら挨拶する場面が少なくない．　時々静寂を破り，けたたましくアルファマ・コミュニケーションが生起する．　この上方地区に特有なコミュニケーションの精度は彼等が100%の確率で見失った仲間の行先を教えてくれることで証明される．

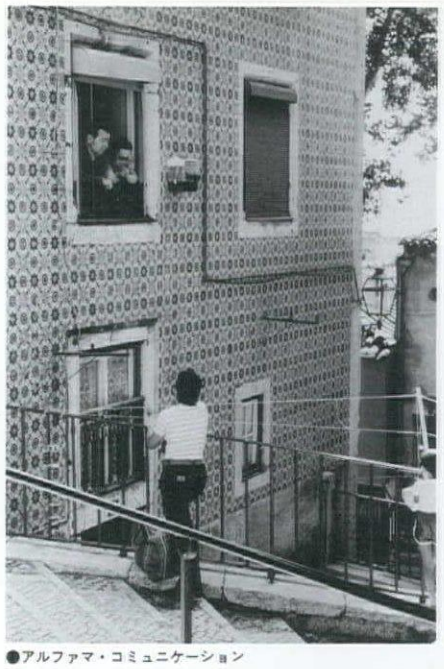
◉朝市にはじまる生活のリズム

下方の併用住宅が並ぶ場所はアルファマを支える活気に満ちた台所である．　そこでは異質な生活と空間が時間を追って刻まれ，一日の生活に強烈なリズムを生み出している．　この時刻とともに訪れる場面は同じ空間での出来事とは思えないほど示差的であり，五感のすべてを介して訴えかける．

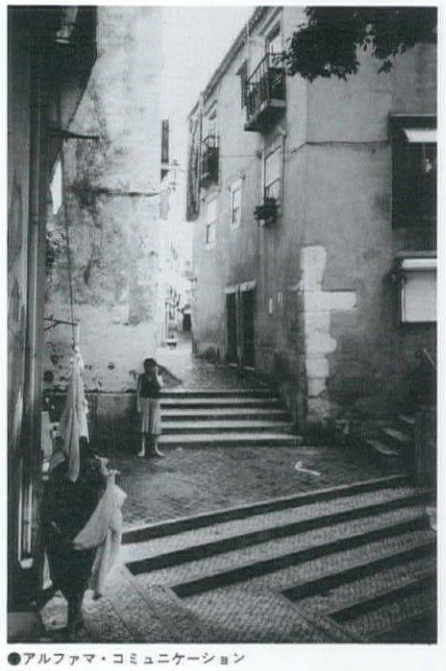
アルファマの一日は朝市ではじまる．朝市は8時頃に店を開け，9時前後のピークを経て11時には終了する．　本来は魚市であるが，野菜などの食料品，衣類の露店が魚市の周りに便乗する．　魚市は下方の街の中心に位置する聖ペドロ通りに限られ，野菜などを売る店がそれを取り囲み，さらにその外側の数箇所に衣類の店が集めて設けられる．

魚市にはイワシ，アジ，イカ，タイ，タラ，舌ビラメなどが木箱で運ばれた状態のまま台に載せられ細かく秤り売りされる．街路が2.5m前後と狭いので，売り場を街路の片側に寄せ，魚の入った木箱のみが街路側に並べられる．　むろんこれを挟んで室内側の売り手と街路側の買い手が対峙する．暗い室内には水揚げのあとそのまま運び込んだとみられる木箱や空箱が山積みされ，台の上に魚を簡単にさばくまな板と包丁，秤などが置かれているだけでさっぱりしている．　売り手，買い手ともに中年の婦人であり，街路はごったがえしているが客は上品である．

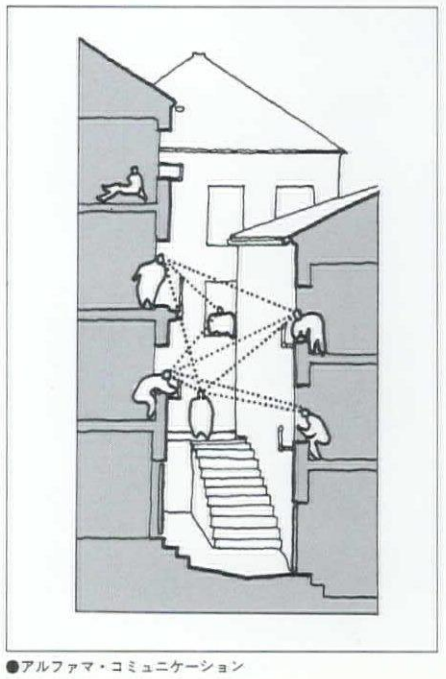
これに対し，食料品や衣類などの店には日除けすらない露店が目立ち，晴れた日にしか商わないようにみえる気まぐれな店が多い．　車の荷台に衣類を並べたまま商うものもいる．　野菜などを買う客の数は魚の売り場に比べぐっと少なくなり，さらに衣類を買う客ともなるとめったにしかお目にかかれない．　ピーク時には往来が困難な魚市の街路は，11時頃から汚れた路面



●アルファマ・コミュニケーション



●アルファマ・コミュニケーション



●アルファマ・コミュニケーション

を水でたたきそろそろ店じまいが始まる．正午にはすっかり朝市の光景は消え元の姿に戻ってしまう．　朝市はポルトガル人の勤勉の証明であり，一日の買い物を午前中に済ませるのが習慣である．　昼近くになると朝市で買ったイワシを炭火で焼くこうばしい気流がどこからともなく流れ，昼食の準備をする家庭が多くなる．　レストランの準備も整う．

アルファマのレストランにはテーブルクロスのかかっていない庶民的な店が少なくない．　レストランのメニューの主なものは朝売られていた魚の料理である．　こうしたレストランやバーの多くはアルファマに住む人達の溜り場であり，年輩の男たちは酒を飲みながらシエスタに入る前の数時間をここでたむろする．　魚市場の通りを中心に分布するレストランには街路に一部があふれだしたもの，半地下に設けられたものさらに主要な店の部分が屋外に確保されたものなど様々であるが，いずれも食事空間が街路空間に取り込まれ深く結びついている．　半地下に設けられたレストランでさえ，入口や高窓（街路の足元）が食事を楽しむ人と街路を通行する人の交流を助長するように仕組まれているようである．それゆえレストランはアルファマの男達には欠かすことのできない社交場といえる．

街がシエスタの眠りから醒めるのは夕刻の５時に近い．　再び店が開きレストランが準備をはじめる．　婦人の活動が目立つ午前と異なり，家族連れや若い連中が目立ち，行動の範囲もぐっと広がる．　一部のレストランやバーは相変わらず男連中に占拠されるが，同時に部外者を受け入れる準備も整えられる．

アルファマの夜は静かである．　レストランとバーのみが音と光を夜半まで街路に落とすが，この時刻までアルファマの住人がこれらの施設に留まる場合は稀である．深い眠りにつくか，都心で楽しむかのいずれかである．

アルファマでは時間の経過とともに異質な生活の場が出現する．　年寄りや婦人を主役に街区全体が活気を帯びる午前の生産的な空間，レストラン，バーを拠点に男連中に占拠される昼時の食事空間，シエスタの眠りによりすべてが静寂と化す昼下り



●アルファマ，朝市


●アルファマ，シエスタで通行人のいない街路


●アルファマ，シエスタで客のいない屋外レストラン



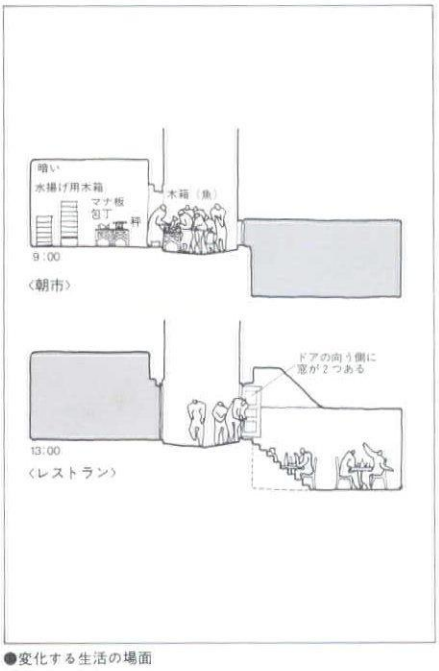
●アルファマ、朝市遊びをする子供たち　Alfama, Lisbon



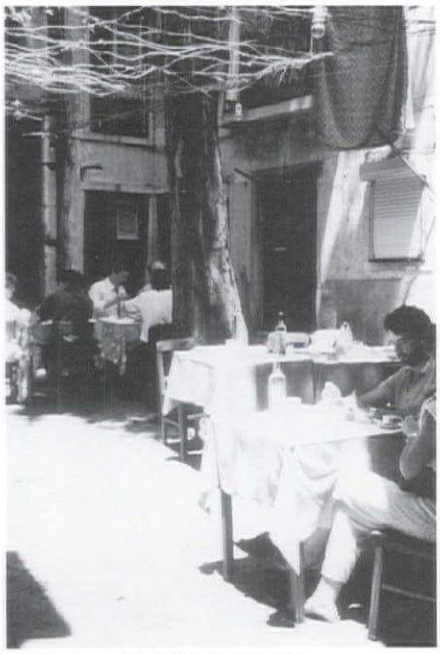
●アルファマ，朝市



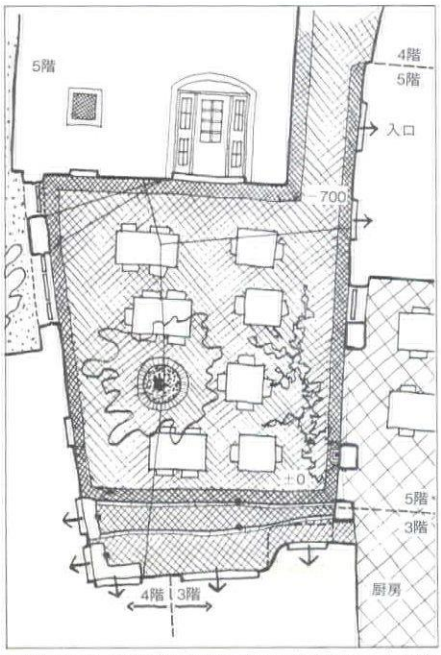
●アルファマ，朝市



●変化する生活の場面



●アルファマ，中庭に拡張された食事の空間



●アルファマ，中庭に拡張された食事の空間（屋外レストラン）

の街区，日が落ちるまでの短い時間に時を惜しみ場所を構わず交流を果す街区，外人を迎えて展開される夜間のフォーマルな食事空間である．　時間とともに多様な表情をみせて出現するこれ等の場面には相互関係が希薄であり，不連続でさえある．　近世の都市には治安の悪い例が少なくなかったが，このように街区の性格が時間的に大きく変動することを条件としなければそれの理解も難しい．　治安の良さと悪さは一日のリズムのなかで刻まれたのである．　また，過去の生活に遡るほどそこに刻まれる生活の場面は明日のパンを得るために張りつめていた筈である．　そして近世の生活や空間の場面を惟わせるアルファマの展開のなかに隠された共存の論理を垣間見ることも可能であろう．

アルファマが自ら親密な関係を持続するための努力は，場面を変えながらシエスタの時刻までに果される．　むろん日没前に明日を意識し会話に耽る婦人や老人の東洋にも共通する形式に補われてはいる．　そして，常設の店舗を必要とせず市場を交換や商いの拠点とし，レストランやバーを店舗として先行させる形態に中世をみることもまた可能なのである．

●はた・そういち／芝浦工業大学助教授



●ナザレの婦人　Nazare

PORTUGAL
Cascaiss, Nazare, Obidos

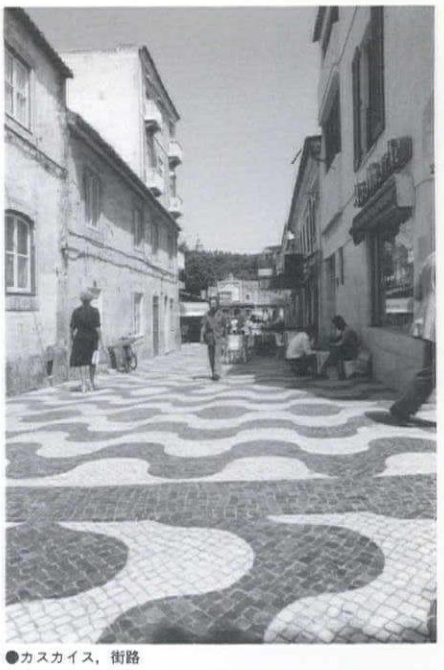
古い村々と時代の流れ

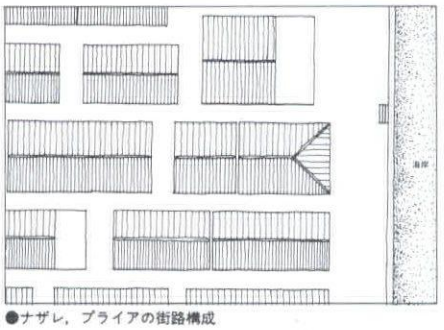
カスカイス，ナザレ，オビドス

笠島 泰

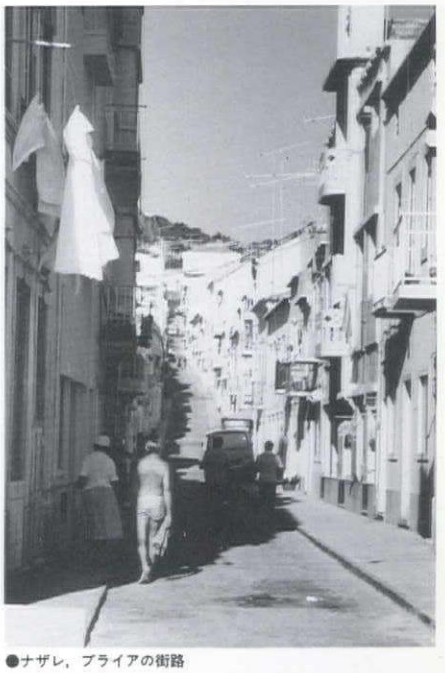

●カスカイス，海岸


●カスカイス，かつては漁村であったことを想起させる魚売り


●カスカイス，街路


●ナザレ，プライアの街路構成


●ナザレ，海水浴のテント


●ナザレ，プライアの街路


●ナザレ，プライア

◉カスカイス

カスカイスは，リスボンの北約30km，人口約13000人の町．　ローマ，西ゴート，ムーア支配の後，リスボンと同時期に独立を果たすが，その後，侵略や1755年の地震によって破壊され，今は当時の面影を残していない．

観光化される前はリスボンで消費される魚を大量に水揚げしていたが，現在はリスボンのベッドタウン，主に北ヨーロッパ（スカンジナビア・イギリス等）に住む人々のリゾート地である．

◉ナザレ

ナザレは，リスボンの北約120km，人口約9000人の典型的漁村である．　ナザレの人達は，かぶりものの奥の厳しい目付き，驚くほど真直ぐに伸びた鼻をもつ人が多く，自分達をフェニキア人の子孫と信じている．　実際に今なお男性の中には，輝くばかりのシャツを着，違った色合いの継ぎ当てをした派手な色彩のタータン・ズボンをはいた連中がいることや，海水浴シーズンのためかあるいは近年町の南側に漁港が整備されたためか確かめられなかったが優雅なデザインのカラフルな小舟が並ぶこと等は，フェニキア人によって開かれたことを連想させる．

ナザレの町は三つの地区によって構成されている．　丘の上にあり古くからの集落であったシティオ(Sitio)，丘の真下に広

がるプライア（Praia），さらにその東南の崖の上に位置するペデルネイラ(Pederneira)である．　プライアは，昔は居住地ではなく漁をする地区であったらしいが，現在は密集して住んでいる．

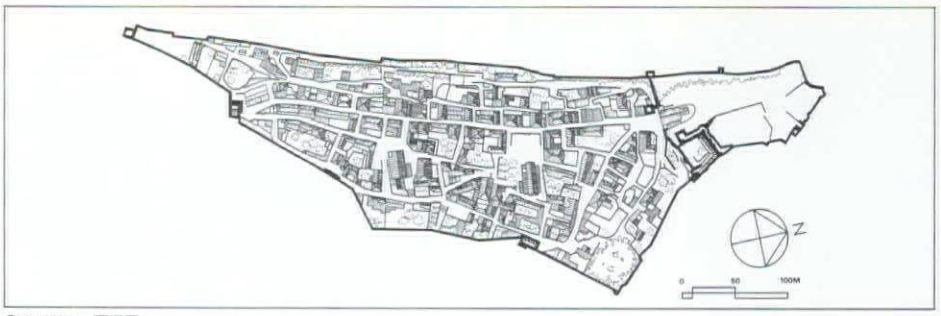
海岸沿いの街プライアの街路構成は特異である．　海岸に向かって幾筋もの街路が延びており，これらを繋ぐ道はアミダ状を呈し，真直ぐに通っていない．　更に細かくみると，切妻屋根の向きは一定であり，住居が裏側に連続し，道が真直ぐ一棟ごとに通っていることが分かる．　一般的な漁村の不規則な道とは異なったこうした街路構成は，特殊な条件が作用して成立したことを暗示させる．

その理由を以下のように推理した．　住居が丘のシティオに限られていた頃，プライアには漁業の作業場としての小屋が建てられていた．　一方，舟をかなり奥の街路にまでひき上げていたことは，ナザレに関する観光ガイドブック・絵葉書・レストランのメニューに印刷された写真等で明らかである．　この二つの要素が絡み合い，小屋と舟道との関係が自然に出来上がっていったものと思われる．　やがて，町の防衛の必要性が弱まり，漁民がシティオからプライアに移り始めた頃には，街路構成はすっかり出来上っていたのであろう．　この時，漁家は一列に縦に並び，舟を引き上げる側からの片側アクセスの形式をとったと思われる．

◉オビドス

オビドスは，リスボンの北約95km，人口約4500人のこじんまりした町．　ムーア支配から開放された1148年からオビドスの再建が始まり，King Dinisが若い妻Queen Isabellaを伴ってこの町を訪れた1228年には，最も魅力的な町に出来上っていた．　通りにはゼラニウム，ブーゲンビリヤ，メドラー(西洋果林）の緑が美しい．　ムーア支配以来の城壁がほぼ完全に修復され，中世の面影を色濃く残す．

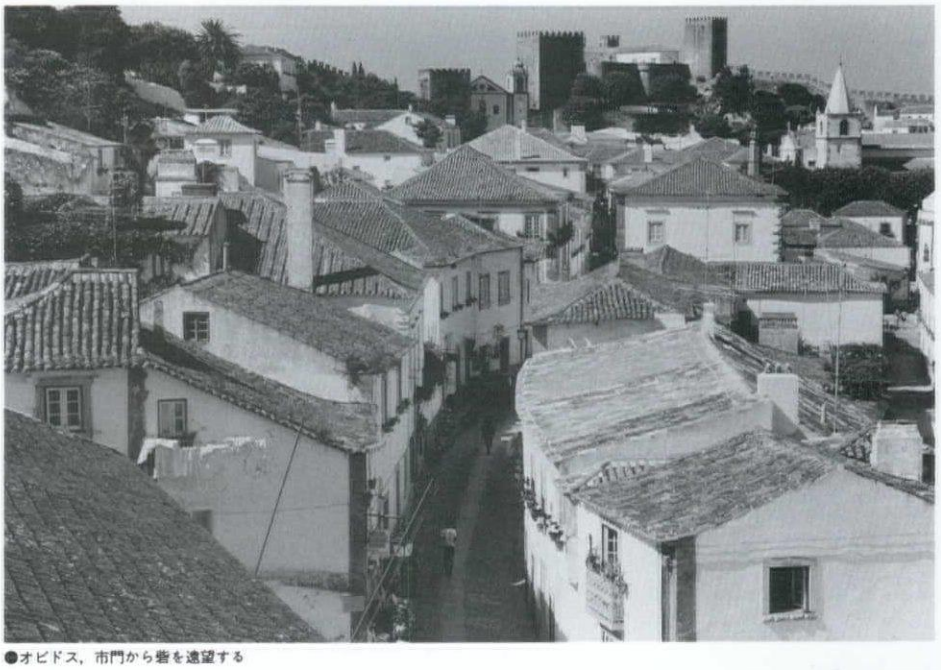
オビドスの街は東西に細長く延び，この長手方向の等高線に沿うようにメインストリートが走っている．　この主動線の上に1本，下に1～2本の副動線が等高線に平行に走っている．　この副動線はそれぞ

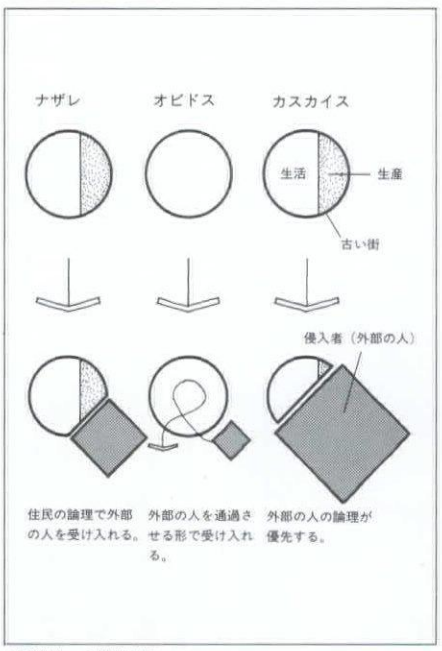


●オビドス，配置図


●オビドス，市門


●オビドス，街路


●オビドス，市門から砦を遠望する

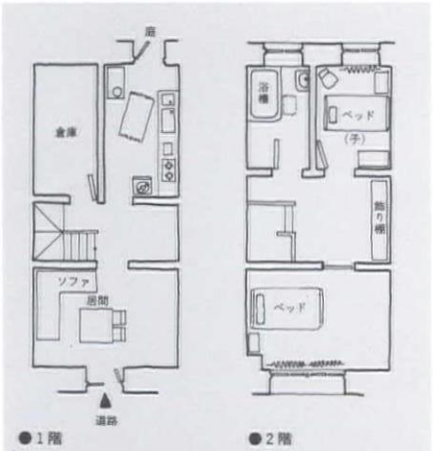


●観光化への対応パターン



●カスカイス，観光化されたメイン・ストリート

■カスカイスの家
漁船の舟底にでも塗るペンキであろうか，真赤に塗られた上下が別々に開く観音開きの扉を開けると，ソファーと円卓等が置かれた応接兼食堂らしき部屋がある．　1階には他に流し・ガスレンジ等がある台所と倉庫とがあり，台所の外には雑多な物が置かれた小さなサービスコートがある．　また2階には2寝室とバスルームとがある．　家族は夫婦と子供の3人．



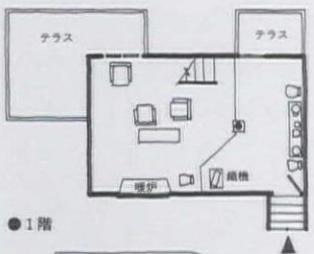
●1階　●2階

●カスカイスの家，平面図　1：200

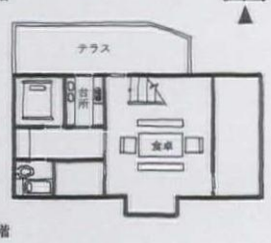

●入口

●2階

■オビドスの家
観光局のオーナーの住宅．　1階はこの国の骨董品らしいものを展示した部屋で，生活空間ではない．　生活空間は地下1階にあり，食堂・夫婦寝室・台所・サニタリーで構成され，カスカイスの庶民住宅との部屋の構成原理はかわらない．



●1階



●地階

●オビドスの家，平面図　1：200


●1階


●1階

れ街の中央の城門から斜路で分岐しており，中央の城門から各戸への馬車でのアプローチを容易にしている．

これに対して，等高線に直交する道は傾斜角に等しくなり，急斜面に立地する街の場合，階段道となるのは避けられない．このことが，等高線に直交する道を概して裏道に追いやることになる．

◉観光化への異なる対応

三つの街は観光化との関係で比較することができる．　それぞれの町は観光化への適合形態において異なる．

カスカイスとナザレは共に漁師街であったが，両者の観光化への対応は，著しく異なっている．　漁村とはいっても両者の生産形態はもともと違っており，消費地との関係・立地条件の違いを含めれば，昨今の観光化の形態が極めて自然な成り行きのように思われる．　すなわち，カスカイスの場合リスボンから25～30分の通勤圏にあり，これがベッドタウンとしてばかりでなく，リスボンのリゾート地として繁盛しており，かつて漁村として栄えた面影はほとんどない．　他方，ナザレの場合，漁師街であったことが直接の誘因ではないが，美しい砂浜とフェニキア人の子孫と信じているナザレの人の個性とが観光化をもたらしたものである．　従ってナザレの場合は，自然的，地方の文化的個性が遠くから人々を引きつけたと言え，ナザレのペースで観光化が進行しているように思われる．

このような違いは，カスカイスでは，かつてどのような生業形態で漁業が行なわれていたかよく分からないが，いずれにせよリスボンを控え，リスボンに依存する形の従属的体制がとられていたことが大きく作用していると思われる．　他方ナザレの場合，消費地から遠く，保存を考慮した漁業を前提としたであろうし，冬の休漁を条件とする厳しさがあった．　そうした中で，漁民の服飾から生活様式，漁船の陸上げから街の構成にまで及んでいる漁民魂を育み，衣服に代表される独自の生活文化を築き上げてきたのであろう．

経済的にはカスカイスの方が遙かに豊かであろうが，文化的側面からみると，ナザレのいきかたに，独自の町，そこにしかない街づくりができる豊かな可能性が隠されていることに我々は気付くべきであろう．

これに対して，オビドスは所謂ヨーロッパ各地にみられる中世都市の観光化ラインに沿う街づくりをしていると言える．　すなわち，中世の遺産をたまたま維持してきた点が特性を生み出している訳であり，むろん公共的援助があってのことではあろうが，中世らしさを積極的に修復することによって観光化の道が開けているものと思われる．

物産屋・レストラン等の観光化と係わりをもつ職業は良いとしても，他の人達，特に経済的余裕のない人々は無関係であり，逆に住宅の維持を難しくさせているのが現状であろう．　こうした側面からみれば，オビドスの街づくりはあまりにも過去の遺産にとらわれすぎているようにみえる．　ものの世界に無限の可能性を信ずる私の目からすれば，過去の遺産と現代生活との葛藤の中から新しい工夫・知恵を生んでこそ，これからの道であるように思える．

●かさじま・やすし／大同工業大学講師

野蛮な形に可能性を見た

服部岑生



調査旅行の前にも，その直後にもそうはっきりと気付いていなかったが，私をこの調査へ赴かせたものの一つは，少なくとも「連続建の住居集合の計画とは，何か.」であった．　連続建の住居集合は，独立住居の住居集合とは現象面だけでない何かが違っている．　この疑問は，さらに展開して二つの問題に分解される．

一つは，連続して建てられる住居において，そもそも〈連続建〉が了解の上の場合と現代の日本の共同住宅のように了解が伝統的に成立していない場合での住居はどのように異なるかという関心である．　相隣関係に関わる様々な共同意識が伝統としてある時の住居集合のあり方である．　こうした場合，日本的な住棟——むしろ構造・構法的に規定されたかたまりではない住棟が成立しているに違いない．　あるいは住棟という概念はないのかもしれない．

二つ目の疑問は，連続建の住居集合に固有の外部空間に関するものである．　コルビュジエのパリ再開発計画は，旧い市街に対し高層フラット群によりオープンスペースを確保することを主張していた．　旧い市街の外部空間とオープンスペースの外部空間の対比は非常に意味深いものがある．近代の住宅地計画は，オープンスペース型の住宅地の実現を推進してきた．　しかし，外部空間の〈伝統〉としての道・広場のみによる空間，むしろ閉鎖的な空間はどうして継承されなかったのだろうか．　日本の町屋が形成した外部空間もそういう観点からは同質のものでありやはり継承されてこなかった．　住居計画において〈伝統〉維持の議論があっていいようにこの面でもあっていいはずである．

住戸—住居集合という住宅地における単位とその全体の関係は，実際の住宅地計画では〈住い方〉の実態—集落構成の原理の実態という二つのリアリティへの対応を基準に考察されてきた．　しかし，連続建・複層建の住居集合を前提にする時，住戸—住居集合の中間にあたるリアリティを見落とすことは出来ない．　実際の住宅地計画では，〈住棟〉といわれる中間的存在はどのような現実に対応しているべきか．

◉集落の型の意味

住宅地を一応他と境界付けられた存在として見ると集落の物理的形態の上に型が認識される．　集落の型は，建築家に好まれる概念であり集落を建築的存在として見るのに解説的概念となる．

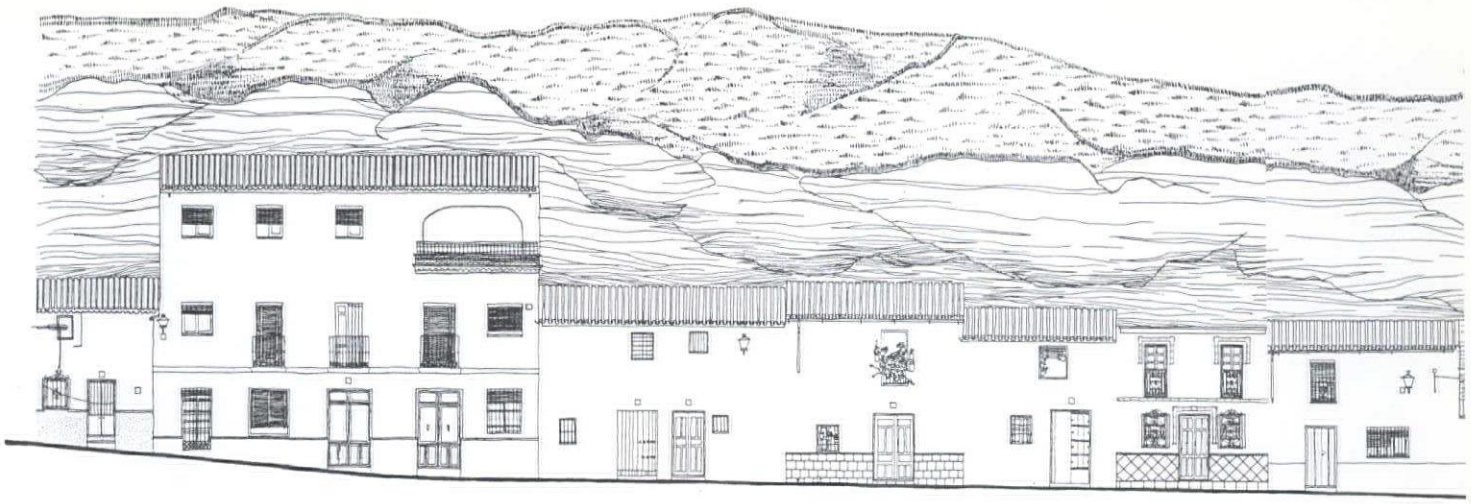
本当に，集落の型が居住者やその祖先が認識していたかどうか疑問が残るが多くの集落サーベイの報告は集落の全体というレベルで構成原理が存在しているという仮説を検証しようとしてきた．　その結果集落の型が視覚的に確認できたとして検証を終了している．

例えば，原広司はその《住居集合論》において集落の型を「ペトレス型——中心とその境界が明快であり飾られたような印象を与える集落」，「クエバス型——全体の中心を持たず，ただ広場を中心とした数戸によって構成されるクラスターが目立つだけで決して明確な配置や境界を持たない集落，スペイン語で横穴式の住居形式」および「メディナ型——外に向かって閉鎖的な住居の群が明確な配置や中心を持たず，またクラスターを形成せずに自由に全体を埋めつくした集落」の３種類に対比させている．　この場合は視認的，すなわち鳥瞰的に全体を見下すと顕在化する構成原理を見ている．

また日本の農漁村集落の研究報告においても必ずしも鳥瞰的ではないが構成原理への関心が存在している．

このような集落の型の認識は，住居集合の全体と部分を同時に説明するという点で非常に優れているが，その住居にとって実感されたものかどうかという点や動的な変化を組み込んでいないなどの点で問題がある．　もちろん事例研究の報告者や分析者に責任があるわけではないが，従来からの一般的住宅地計画の住民集合の考え方への対応を考えると，「住居集合において構成をどう捉えるか」が重要な意味を有していると思われる．

住宅地は様々な個性と意志を持った居



●セテニールの街

住者に共有された存在であるので，その型を問題にする時，型が認識的に共有されたものかどうかという論点が出てくる．　N.シュルツは，その〈実存的空間〉の主張において個としての人間にのみ空間は訴えているのであって，同時に多数の人間に応じているのではないとしている．　シュルツの実存的空間は，「比較的安定した知覚的シェアの体系，つまり環境のイメージ」として説明されている．　この空間は，O.F.ボルノウの言う「人間が，知的なる者としてその空間内に位置を獲得する点」(〈人間の空間〉O.F.ボルノウ　池川他訳)で成長するに従い分化し多様化していく．　人は，個人として空間を生きているのであって，空間はトポロジー的に連結されイメージを形成していると考えていい．　住居集合の型は，このようなトポロジーの集積を包む輪郭線に過ぎない．　人の成長と生活展開は，実存的空間の様態を変化させる．　輪郭を示したからといって人の生活の上に意味付けられた空間を示したことにはならない．

隣人，相隣に居住する人相互にとってこのトポロジーがどう関与するかに問題の秘密があるように思う．　何故なら，一つのトポロジーは，まず二つになることで全体に向かい始めるからである．

◉生きられた時間のリアリティ

なるほど，原の指摘するように外形的な集落構成の原理を見出すことが出来る．　三つの型の提案は，非常に説得的なものである．

しかし，現前の住居集合の型がどのようなものであろうとそれを時間系を無視して新しい住宅地に写し込むという近代的な計画理論を乗り越えられない．　静態としての型が直接コピーされて来た計画では，人々が集合とし住むことの意味が十分に配慮されていない．

計画技術者が職能として確立されてきて以来，住居は居住者だけでなくその職能の意志によって操作されてきた．　計画技術者は，住居集合全体を構想することで居住者個々の住居作り，その集合作りの作業を奪っていった．　その結果，特に住宅地の全体は動態としての存在から静態としての存在に変化していったと考えられる．
また並行して，住宅を把握する概念も住戸―住居集合に分極化し，住戸内部と住居集合の結果のみに対応するようになった．　住戸が動的に住居集合へ到達する仕組は，捉える必要がなくなったとも言える．　住居集合を，動態として見るということは，住居作り，その集合作りのエネルギーを肯定していくことである．　居住者が生きている時間を，肯定していくことである．

調査旅行の対象になった集落には，このような時間が表現されていた．　近代的住宅地計画にない集合作りのエネルギーを感じた．

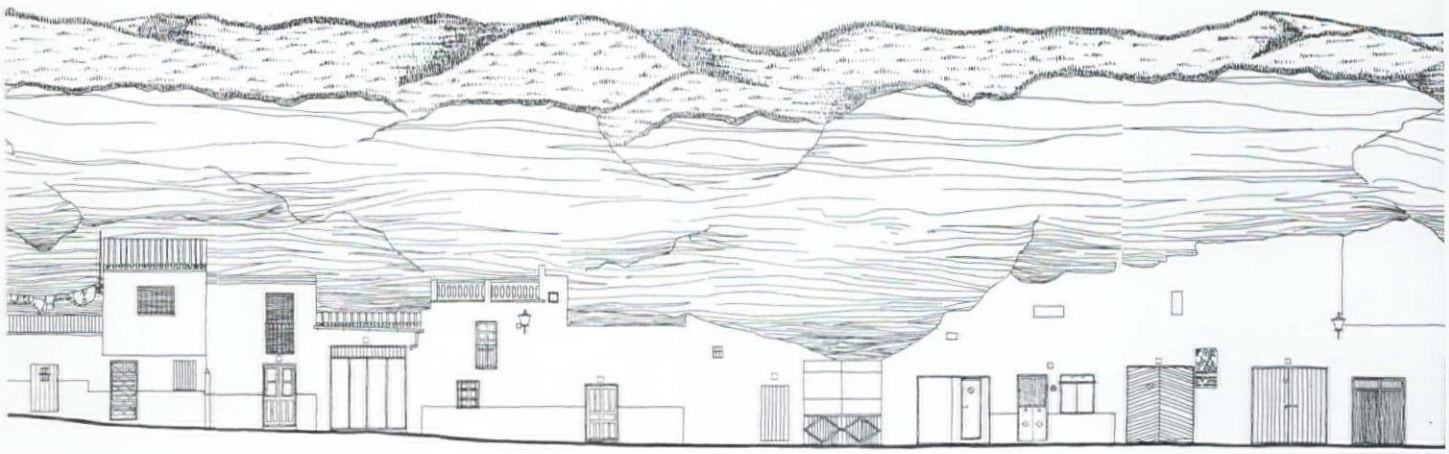
住宅地全体が，その建設開始の際に意図され構想されていることが現代の住宅地作りの特色だとすると自然の集落はその反対の極にある．　全体が意図されていないのである．　閉じた発展を拒否する形式と開いた発展を許容する形式である．　このような二元論は，しかしコーポラティブ・ハウジングや二段階供給方式などでより複雑な関係に変化してきたが，事態は大きく変わっていない．　現代の住宅地は，どこまでも計画しないではいられないのだ．
不確実性までも計画しようとしている．
人間が生きる時間は，計画不可能だとしないのである．

◉生活営為のリアリティ

異質の人間が存在していることを知らされた事は，この調査旅行の大きな感想の一つであった．

現代の住宅地計画の原理は，生活の行動圏域を一つの柱としてきた．　生活の行動圏域を通して配置計画を合理化してきた．人々の行動がそれぞれ持つ拡がり，その相互関係が計量化され計画された．　行動の能率化が促進され不便が除かれた．　しかし行動の合理化のみが行動の目的に対応するかを考慮する時，行動を起こさせる人々の生活の全体の意味が問題になってくる．

「母の慈愛により，父の慈愛によって



●セテニールの街

形成され子供のこの要求が永く持続することは，このような結合を永久化しようとする希望を抱かせる相応しい感情を生じ，家族は次いで結集して一つの群団を作ることが出来た.」(〈人間精神進歩史〉コンドルセ　渡辺訳)

コンドルセは，人間精神進歩史の中で人間の固有な性質——群れ作りをこのように述べているが，群れに至るという人間生活の意味は，住宅地計画でどのように表現されていくべきだろうか.

独立住宅による建売住宅地を見る時の索漠なイメージや人工的に住棟が配置された団地のアグレッシブなイメージは，人間の正しい群れの意志を表現していない.
前者は，群れているが群れの関係を拒否した奇妙なアンバランスがあるし，後者は群れを強制されたアンバランスがある.

調査集落においては，一部の再開発を経過したり建替えで工業化が進められた住居を除きすべてに群れのための住居集合が表現されていた.　集落における住戸は自然に住棟となり，街並みを形成している.
街並みは，個の住戸の表情の一つ一つを組み入れた豊かさがあり，外部空間を閉鎖して生活の濃さを示している.　連続建の相隣関係が，強制的でなく調和的に表現されている.　ここに示したセテニールの住居の連続エレベーションは，この関係を示す好例である.

E.カネッティの《マラケシュの声》(岩田訳) の中に，酒場の女主人の次の言葉がある.

「彼女はレコードの置いてあるカウンターの奥に，ゴム製の警棒を隠しておいた.
彼女はよくこの猥褻な哄笑をひき起さずにおかぬ警棒を友人たちに出して見せ,「これはアメリカ人にしか使わないわ」と説明した.　彼女の見るところでは，野蛮人には二種類あり原住民とアメリカ人がそれであった.」

進歩が野蛮からアメリカの方向とマラケシュの方向に分極したと解釈したら間違いだろうか.　もちろんアメリカ人には，野蛮人もマラケシュも野蛮になるわけだが，文化の異質性が浮かびあがってくる.

現代の住宅地計画が，アメリカ人の酔っぱらいでやさしいゴム棒でたたかれるという印象.　カネッティの紀行の訳者は，「生の新しい絶望的な神聖さ」が書かれていると述べているが，マラケシュの〈神聖さ〉は生に対する真摯さとして受けとめられた.

◉空間認識の近代化

レヴィ・ブリュルは，《未開人の思惟》(山田訳) の中で原始的な空間認識を論じている.
「アフリカ西岸でロシェ博士は，地形感 (Ort-Sinn) と呼ぶものと方位感 (Bicht-Sinn) と呼ぶものを区別しているが……原始人の間に発達した記憶の特に発達した一形態は，一度通った場所の形状を微細な点まで覚えていることだ.」

近代建築の設計の方法が，超越したものを見捨て自身の合理的存在のみで自身の存在理由を示した時，空間認識の秘密の側面は少しずつ浸触されていった.　利用条件の効率化や設計者の自己の美の断定が一般的となる時，近代建築が中心になってきた.　明快で分かり易い建築が指向されミステリアスな根拠が嫌われてきたように思う.　回帰的運動もあった.　伝統や地域的なものへの回帰が模索された.　現代では合理主義を肯定しながらも形態的な超越性が意味付けられるようになった.

しかし，デ・クラークが再来してもどうにもならないような状況である.　全体が構成された超越は，私の見た集落の意外性とは異質である.　数えきれない人々の優れた空間認識が微妙に差異を持ちながら展開する街並みを形成している.　セテニールの連続立面は，各住戸の居住者の意志が，その立地条件に対応して表現されたものである.　確かにデ・クラークの集合住宅の立面も複雑で多様である.　しかしセテニールには複数の多様性があり，アムステルダムには，個人の意志の一貫性がある.

微地形認識と計画への取込みが現代建築の批判的方向として主張されてきた.
しかし，単体建築への建築的ヴォキャブラリーとして採用されるのであれば，それは



徴地形認識への冒瀆である。　空間の秘密を認識する能力のない人々に，どのようなヴォキャブラリーが与えられても何の意味もない。　単なる現象であって永続しない。

どこかで近代は，別の道に入り込んでしまったのだ。　私の見た集落は，どの一つを取っても，地形の力，地神の意志（ゲニウス・ロキ）の表出が見えがくれする。

近代的に制御されていない形式，これこそ私がいう野蛮な形である。　近代的制御と原始的制御に分けて考えることが出来るかもしれない。　いつから，近代的制御への道が始まったのだろうか。

コルビュジエの《建築をめざして》の中に，指標線（レギュレーション・ライン）の主張がある。

「指標線は精神的な満足であって，巧妙で調和を見付け出すみちに導いてくれる。作品に調和音を与える。　指標線は，感覚的な数字を持ち込み，秩序の快い感じを与える。　指標線の種類の選び方によって作品の基本的な幾何学は固定される。　そこで基本的な印象の一つが決定されるのだ。指標線の選択は霊感の決定的瞬間であり建築の重要な作業である。」

美の条件を保証するために提案された指標線は，コルビュジエの「原始的な人間というものはない。　あるのは原始的な手段である。　考えは不易のもので最初からその全力を示している。」という歴史の連続性に関する主張に基づき原始から近代の優れた建築の条件とされる。　特に立面計画は，指標線を下敷きにエスキースが行なわれ，数比的な関係や寸法調整がなされる。この発想は，もちろんコルビュジエに始まったものでは必ずしもないが，近代の始まりを良く象徴している。

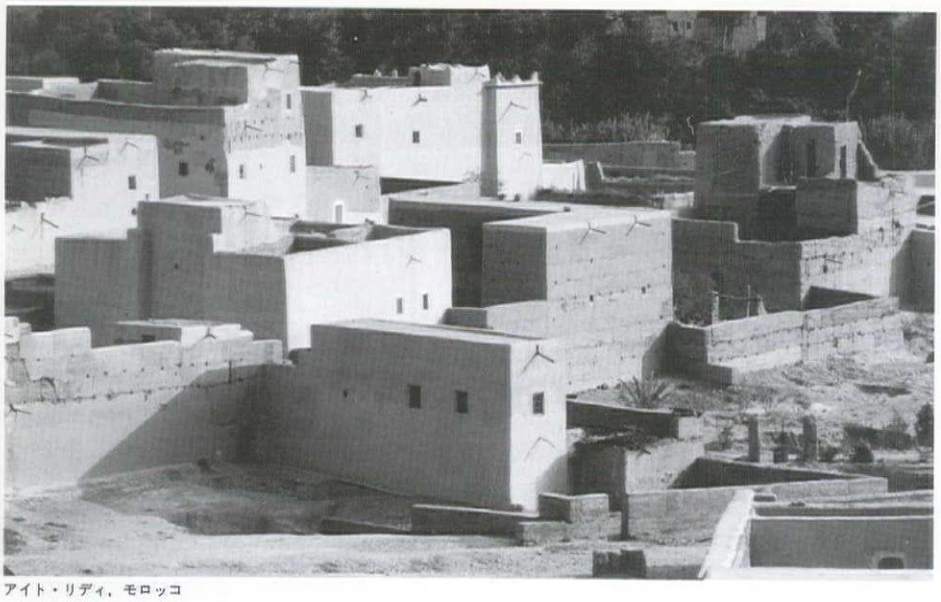
近代の計画では，寸法体系も寸法関係も統制される。　実測されたセテニールの立面計画では，建替えられ不協和音となっている住戸を除き，何の統制もない。　歴史的にも相隣関係的にも同一原理による統制は存在していない。　別の言い方をすれば，われわれの問題とする計画上の概念と異なる所に統制の原理を持っていると考えられる。

◉結び

連続建の住居が構成する住居集合のあり方において，人工的に同時に構成されたものと自然に成立してきたものの間に非常に大きな違いがある。　自然の集落には，例えようのない複雑さがある。　これがどうして成立してきたかについては論じる力はないが，こうした住宅形式を成立させるには全体を同時に構想する方法でなくオープン・エンドにし，かつ相隣の連続関係のハウス・ルールを仕掛けることによるのではないかと想像した。

動きのある住宅地作りは，現代の住宅作りの大きな目標の一つである。　フェズの書店で，メディナ再開発計画の資料を探していた時，通じない本屋の主人と僕の会話を助けてくれたフェズの大学生は，印象的な人間であった。　メディナを破壊する再開発計画やメディナを放棄する行政に反対の意志があると僕の姿勢を述べたら，急に自分は「実は反王制主義者」であると小声で打ちあけ「フランスからのあらゆる意味での独立，イギリス文化の移入による新しい方向の模索」を主張した。　彼は，正しいのだろうが，正しくないような気もした。　自分たちの固有の生活文化の中に可能性を見出せない点が，何か心配だった。
こうして僕はそこに行き，感じていた。
しかし彼は，そこではなく別な方向を見ていた。　かくして近代は，どこにもある悩みであるというわけである。

●はっとり・みねき／千葉大学助教授



アイト・リディ，モロッコ

■

■参考文献

Jean Dethier／DOWN TO EARTH Mud Architecture : an old idea, a new future／Thames and Hudson

Hans Wichmann／Architectur der Vergänglichkeit Lehmbanten der Dritten Welt,
(Jürgen Axel Adam／Lehmbauten Zwischen Atlas und Sahara)／Birkhäuser

Paul Oliver／Shelter in AFRICA, (Peter A. Andrews／Tents of the TEKNA, Southwest MOROCCO),
(Badi G. Foster／Patterns of Human Encounter in Moroccan Bidonvilles)／PRAEGER PUBLISHERS

Myron Goldfinger／Villages in the Sun／Lund Humphries

Jean-Lous Bourgeois & Photographers Carollee Pelos／SPECTACULAR, VERNACULER A New Appreciation
of Traditional Desert Architecture

André Paccard／Traditional Isramic Crafts in Moroccan Architecture／Edition Atelier 74

Albert Laprate／CROQUIS Espagne Portugal et Maroc／Vincent

L'Architecture d'Aujourd'hui No. 185 MAI JUIN／PORTUGAL

National Geographic, June 1971／Thomas J. Abercrobie／MOROCCO, Land of the Farthest West

National Geographic, March 1978／Peter T. White ／It's an explotion, a renaissance, a changed Country ……SPAIN

Jügen A. Adam／Wohn-und Siedlungsformen im Süden Marokkos／Callwey Texte zur Architectur

Michael Grant／Ancient History Atlas 1700 BC to AD 565／Weidenfeld and Nicolson 1971

A.K.Tarig／Los PATIOS de CORDOBA／IMPRENTA SAN PABLO

E.A.Gutkind／Urban Development in Southern Europe : SPAIN and PORTUGAL
International History of City Development volume III／The Free Press 1967

Luis Feduchi／Arquitectura Popullar Espanora 4／Editorial Blume 1978

バーナード・ルドフスキー（渡辺武信訳）／建築家なしの建築／鹿島出版会 1984

バーナード・ルドフスキー（平良敬一他訳）／人間のための街路／鹿島出版会 1976

イベリア半島の村と街：世界の村と街No. 8／A.D.A.

モロッコの村と街：世界の村と街No. 10／A.D.A.

熊本大学環地中海調査団／地中海建築／ＳＤ臨時増刊，鹿島出版会 1971

東京大学生産研究所原研究室／住居集合論 その１／ＳＤ別冊，鹿島出版会 1973

亀井・三上・堀米編／標準世界史地図／吉川弘文館 1970

日本建築学会編／西洋建築史図集（改訂新版）／彰国社 1966

原・小林・エンリーケ・牛島・黒田／スペインハンドブック／三省堂 1982

ルイス・マンフォード（生田勉訳）／歴史の都市・明日の都市／新潮社 1969

堀田善衛／スペイン断章――歴史の感興／岩波書店 1979

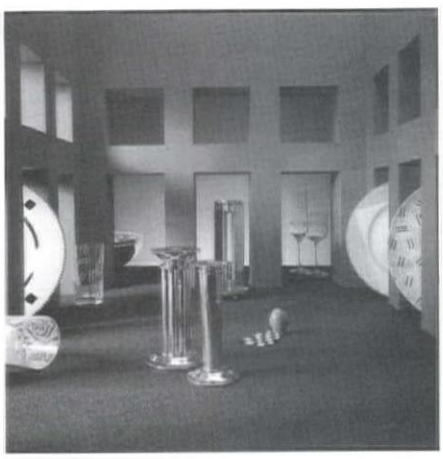
P.ラビノー（井上順孝訳）／異文化の理解――モロッコのフィールドワークから／岩波書店 1980

E.カネッティ（岩田行一訳）／マラケシュの声――ある旅のあとの断想／法政大学出版局 1973

川田順三／マグレブ紀行／中央公論社 1971

建築家によるテーブルウェア
スウィッド・パウエル コレクション

Architect-Designed Objects for the Home
Swid Powell Collection



昨年ニューヨークのスウィッド・パウエル社から，建築家のデザインした食器が発売された．　リチャード・マイヤーを筆頭にロバート・ヴェンチューリ，チャールズ・ガスミーとロバート・シーゲル，ロバート・A.M.スターン，スタンリー・タイガーマン，磯崎新，ローリンダ・スピア（アルキテクトニカ）らが名を連ね，55個に及ぶ食器のコレクションには，グラス，皿，銀製のデザートセット，ボール，トレイ，ローソク台などが含まれている．

この企画を実現させたスウィッド・パウエルのナン・スウィッドとアディ・パウエルは，「私たちは，共にくらし，有用で美しくかつ機能的な物を求めている」と言い，今回のコレクションは，近代建築の流れの中で，クランブルック美術学校やバウハウスやウィーン工芸学校に代表されるような建築家と職人の交流の回復をめざす彼女らの希望から生まれたものである．

今回数多くの食器をデザインしたリチャード・マイヤーが「以前から有用で質の高い大量生産品に興味を持っていた」と言っているように，家具デザインに積極的な建築家にとって，食器もまた身近かなデザイン対象として格好のものであると思われる．

リチャード・マイヤーは，磁器製，ガラス製，銀製の食器をデザインした．　その皿は，美しい幾何学的な輪郭を呈している．　グラス類に施されたエッチングは，透明な材質感をより際立たせている．《キング・リチャード》と名付けられた銀製のボールでは，いつでも光にきらめく，単純で落ちつきのある形を通して素材の美しさを引き出している．

ロバート・ヴェンチューリは，皿とグラスをデザインした．　その鮮やかな色どりと形，パターンは，華々しい祝典風であり，「より少ないことは退屈である（レス・イズ・ア・ボア）」という彼の教条の証明である．

ガスミー・アンド・シーゲルは，2枚の皿をデザインした．　《タキシード》と名付けられた皿は，白と黒の正方形を組み合わせた軽快な作品である．　一方の《レイズ》は，細い黒い線を巧みに使い，繊細さを表現している．

磯崎新のデザインした2枚の皿には，彼のデザイン感覚の独特な融合的特性が現われている．　デリケートな非対称模様は，自然を模すことに始まりながら，高度な様式性をかち得ている．　《エイト・ブリッジ》は，とても精妙な結節部の連なりが，そして《ストリーム》は黒地に金で，滝状の緩やかな曲線が描かれている．

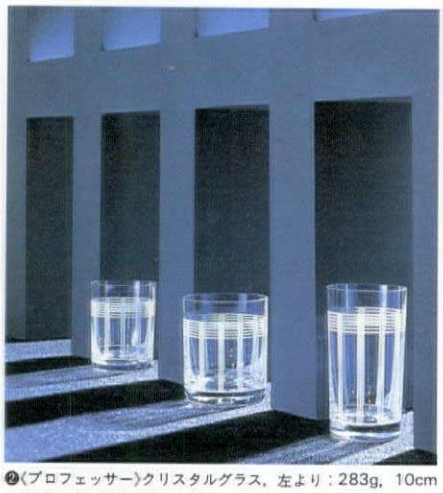
スタンリー・タイガーマンのデザインした皿《ヘブン》は，よく考えられた色と構図でファンタジックな味付けがなされている．

ロバート・スターンの銀製のろうそく台は，古典的な柱の形態を模している．その装飾は控え目で高貴である．

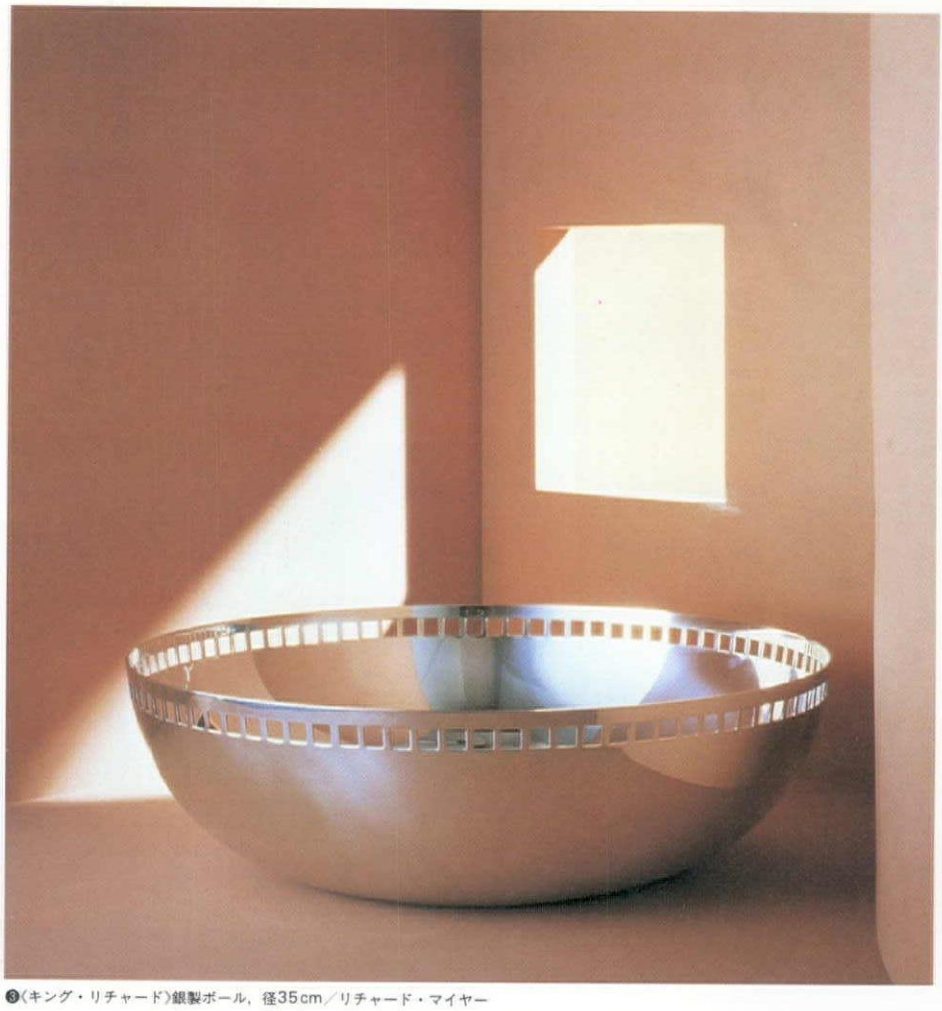
今後もスウィッド・パウエルでは引き続き建築家のデザインした食器の発売を計画しており，フランク・ゲーリー，アンドリュー・プットマン，スティーブン・ホールなどが挙げられている．



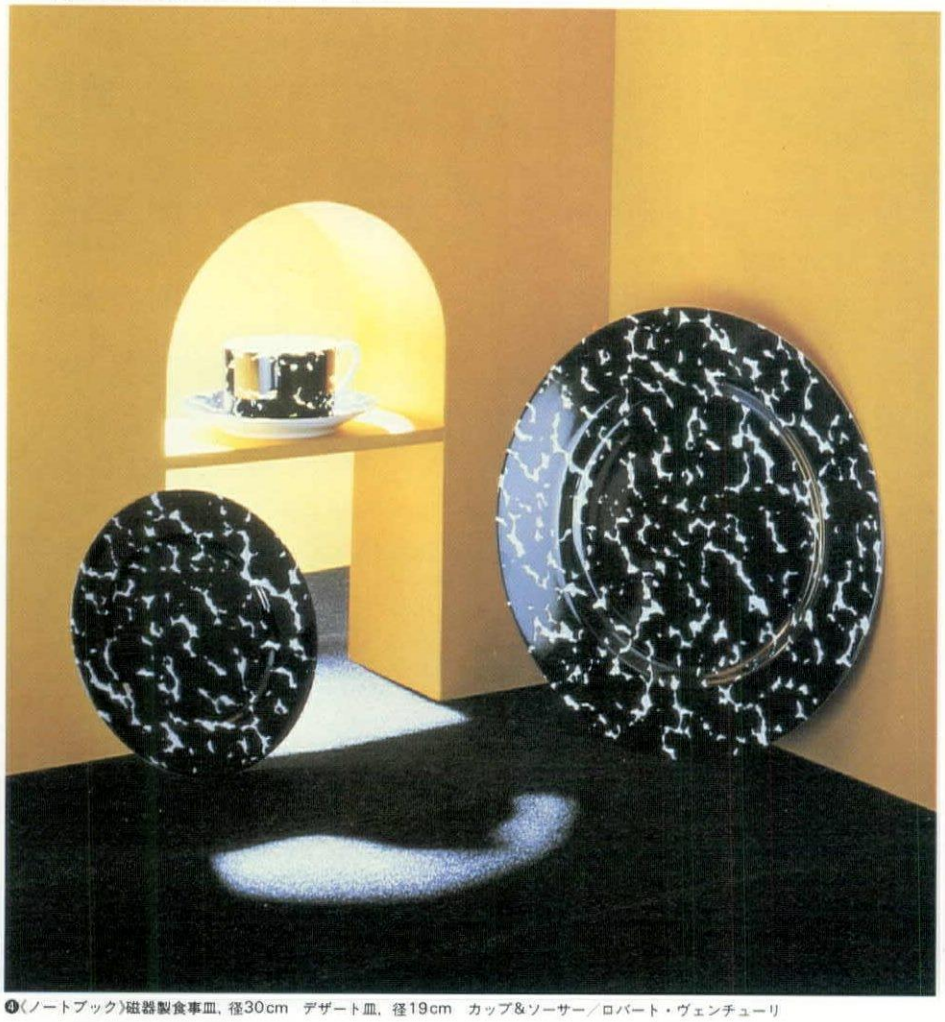
❶〈アンナ〉磁器製食事皿，径30cm／リチャード・マイヤー



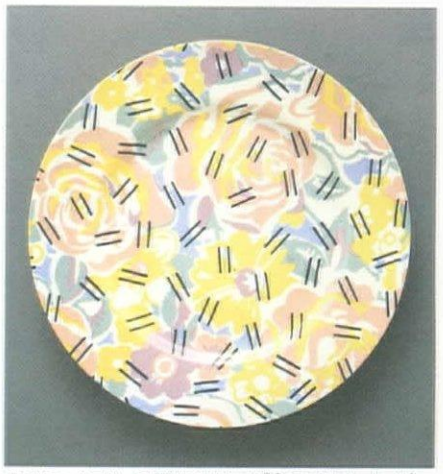
❷〈プロフェッサー〉クリスタルグラス，左より：283g，10cm：425g，10cm：312g，13cm／リチャード・マイヤー



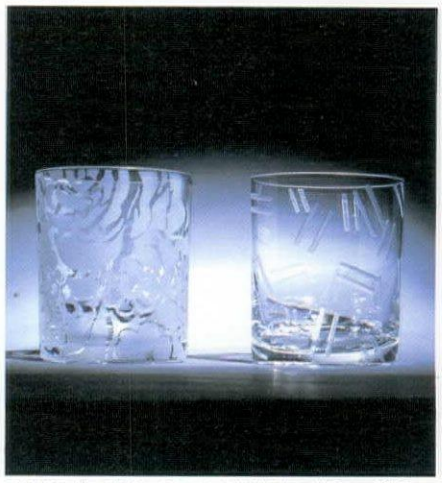
❸〈キング・リチャード〉銀製ボール，径35cm／リチャード・マイヤー



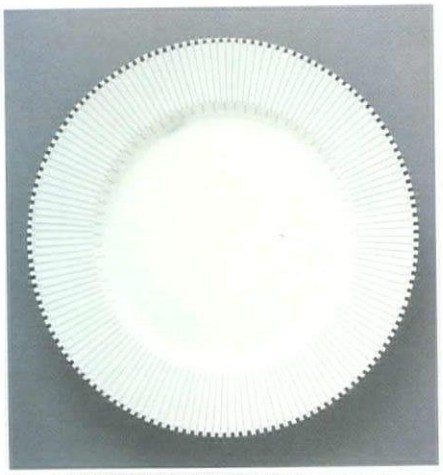
❹〈ノートブック〉磁器製食事皿，径30cm　デザート皿，径19cm　カップ&ソーサー／ロバート・ヴェンチューリ



❺〈グランドマザー〉磁器製食事皿，径30cm／ロバート・ヴェンチューリ



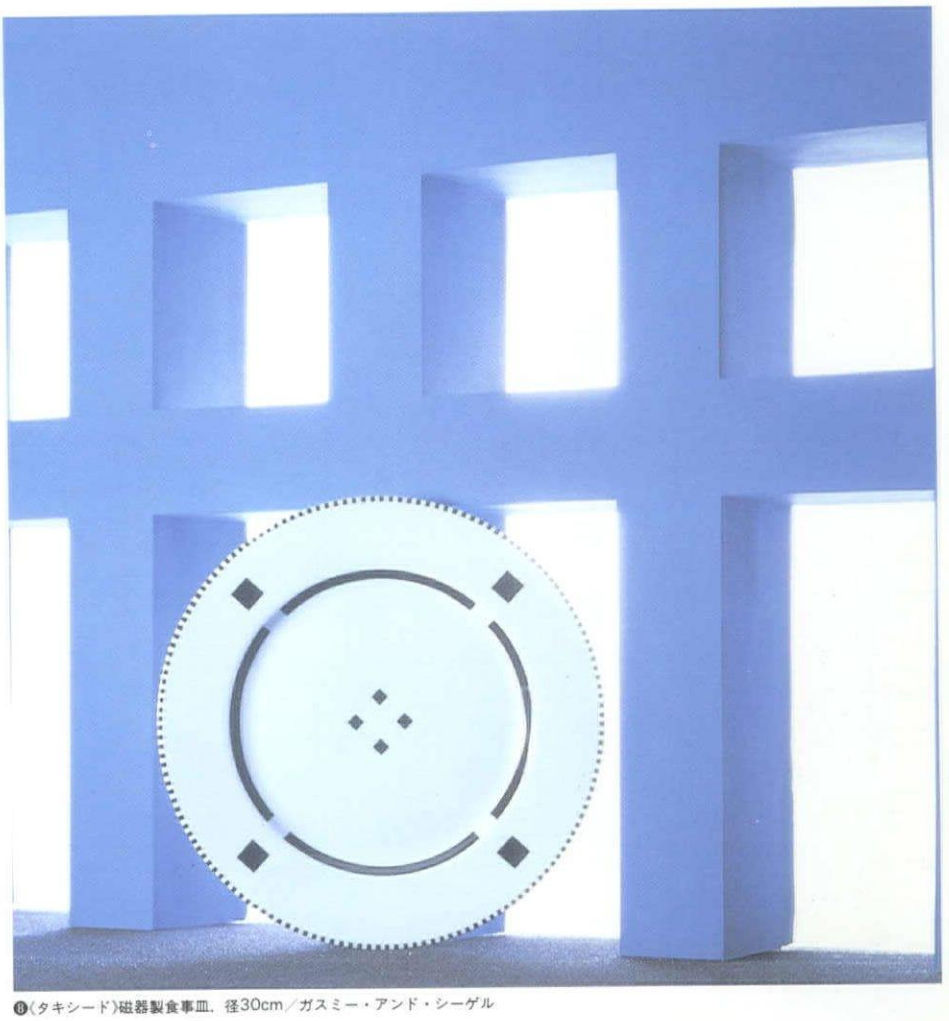
❻〈グランドマザー〉，〈ダッシュ〉クリスタルグラス，425g，10cm／ロバート・ヴェンチューリ



❼〈レイズ〉磁器製食事皿，径30cm／ガスミー・アンド・シーゲル



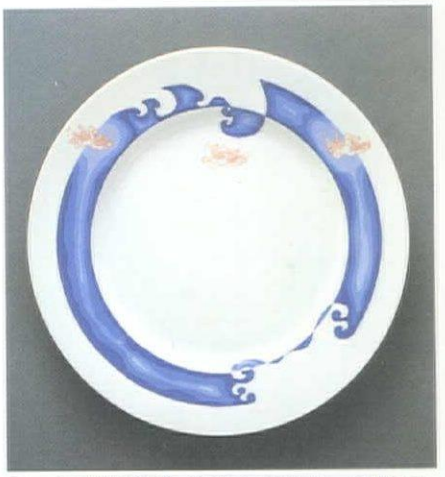
❾〈エイト・ブリッジ〉磁器製食事皿，径30cm／磯崎新



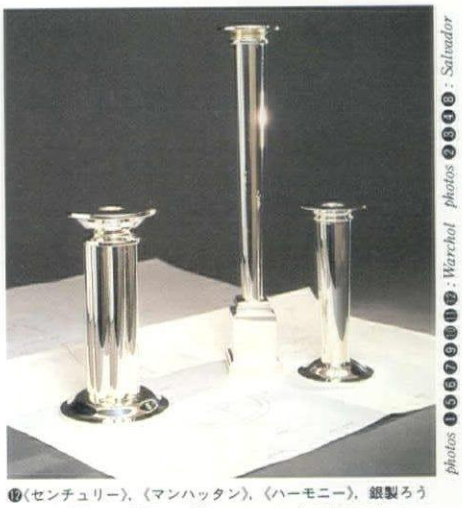
❽〈タキシード〉磁器製食事皿，径30cm／ガスミー・アンド・シーゲル



❿〈ストリーム〉磁器製食事皿，径30cm／磯崎新



⓫〈ヘブン〉磁器製食事皿，径30cm／スタンリー・タイガーマン



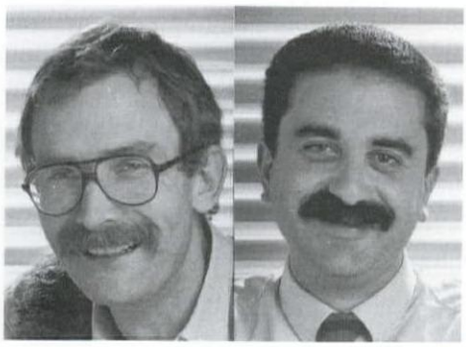
⓬〈センチュリー〉，〈マンハッタン〉，〈ハーモニー〉，銀製ろうそく台，17cm，31cm，15cm／ロバート・A.M.スターン

photos ❶❷❸❹❺❻❼❽❾❿⓫⓬ : Warchol photos ❷❸❹❽ : Salvador

ペリー・A.キング／サンチャゴ・ミランダの最新作：マルカトレ・ショールーム

Recent Work of Perry A.King & Santiago Miranda : Marcatré Show-room

●ペリー・A.キング
Perry A.King
1938年ロンドンに生まれる．バーミンガムの工業学校で学び，英国内で実務経験を積んだ後，イタリアへ渡る．オリベッティのコンサルタントとして手掛けたものの中には，E.ソットサスと共同のタイプライター〈バレンタイン〉がある．近年は教職および諸外国での会議の開催などの活動も目立つ．現在SIADとADIの会員である．



●サンチャゴ・ミランダ
Santiago Miranda
1947年セビリアに生まれる．故郷のThe Escuela de Artes Aplicadas事務所で修業した後，イタリアに渡る．そこでキングと出会い，二人の協働の基盤となった〈無限の水平線〉というパーティションの計画をきっかけに，パートナーを組む．

ペリー・A.キングとサンチャゴ・ミランダはミラノにおいて，パートナーを組みイタリア国内を始め海外でも数多くの仕事をこなしている．ポスター，カタログ，本の装幀や様々な組織の企業イメージ作りといったグラフィックの仕事から，アルテルーチェ／フロスの照明器具，マルカトレのオフィス家具，マクローチの動力機械，オリベッティのパーソナルコンピュータやコピー機など工業デザインの仕事まで，幅広い活躍をしている．最近では，東京・六本木のディスコのデザインも手掛けている．彼らの仕事は，イタリア国内・外の重要な展覧会において，高い評価や賞を得ている．
今回は，彼らの最新作でシリーズとして展開されているマルカトレ・ショールームのインテリアを紹介する．なお彼らの以前の仕事についてはSD8303，8312号を参照されたい．

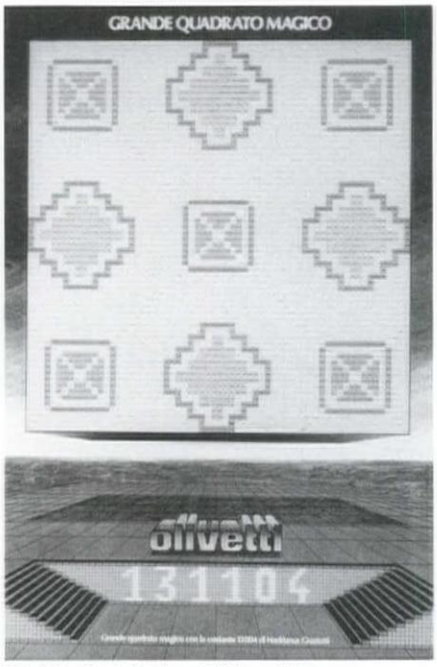
このマルカトレ・ショールームは，ミラノの中心部にある荘厳な建物の中にあり，モンテナポレオン通りのポルジ・ペツォーリ博物館の右隣りにあたる．P.A.キング，S.ミランダそして協力者R.フシの設計によるもので，彼らは街の正に中心部における仕事をする機会を得て，とりわけて満足感があった．

利用できる空間は限られていた．それ故，様々な机，椅子，テーブル，色彩，サイズ，事務用アクセサリー等でありふれているオフィスの際限なき連続といったこと，つまりはデザインの殿堂風のものとすることは避けることにした．

彼らが選択したのは，自然ではあるが活気に満ちた空間を創造することで，それはむしろ観客席なき舞台のようなものであった．その中では，個々の物が各々にメッセージを放ち，知性的で複雑な組織の断片としてたち現われているのである．ここでの対象がマルカトレ・ショールームであることを考慮すれば，それは決して不可能な仕事ではなかった．マルカトレの製品の各々は，実際にメッセージを有しており，家具史の中に足跡を残し，しばしば次なるイミテーションを生んでいるものなのだ．

ここでは全体が，別々の機能（入口，展示エリア，サービス施設，連結通路）を持った違った領域のシークエンスとして計画された．それは小さな製品（小さいとはいっても文化的主張は欠いてはいない）を並べたり，或いは，小さな規模の展覧会のために設けられた地階と，1階・2階の展示フロアから成っている．

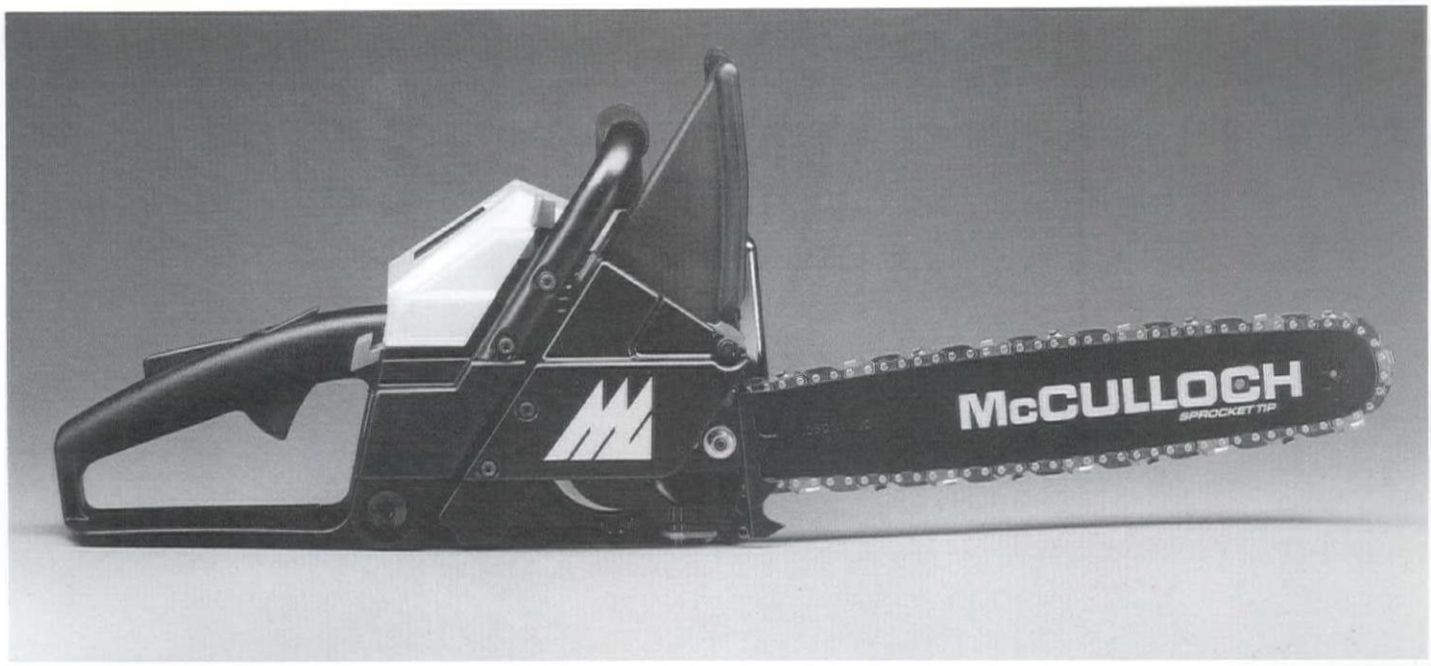
しかし，この空間のシークエンスは単に機能的なことだけではなく，概念レベルにおいて象徴的なヒエラルキーの表現として意図されたものである．〈頂上門（Meridian Gate）〉から通じる5つの橋のうちの1つを渡って，完璧な左右対称の〈黄金の水流（Golden Water Stream）〉を横切ると〈最高の調和の門（Gate of Supreme Harmony）〉に着く．そこから北京の禁断の町の中に潜入していくと，次には第1の空間（〈偉大な明朝の門（Great Ming Gate）〉に至る長い通り）から，第2の空間（〈神聖な平和の広場（Square of Heavenly Peace）〉）を抜け，さらに内側の第3の空間へと向かい，そして〈垂直の門（Gate of Uprightness）〉を抜け第4の空間へ……，というようにして〈帝国の宮殿（Imperial Palace）〉の中心部である〈最高の調和の広間（Hall of Supreme Harmony）〉に着くまでに，12の空間を通り過ぎることになる．



●オリベッティのポスター・デザイン，1978年

現今では，この失われた調和は私達の記憶の中にのみ残存する．それでも，垣根を越え，板ガラスの窓を越えて訪問者を誘い，そして，舞台の中央や上階へと魂を奪うかのように，誘惑する，魅力ある雰囲気を作り出すことは可能だ．総ての航海が暗闇の中心に終結するわけではなく，そして，また総ての迷路がその中を探検する人々にそむくように考えられているわけでもない．たいていの場合は，旅程の果てには何らかの望みがかなえられるものである．このショールームの真珠のような大理石の〈氷の滝〉のごとき白い階段を登って行くと，1階と同じ広さのショールームに達する．その小旅行の最後に，私達の視線の先に白く光る小さな箱がある．それはメインドアを抜けて始めてこのショールームに足を踏み入れた時，急いでちらっと上方を見上げた時に目にしたものなのである．こうして私達は，旅の終わりに望み（白く光る箱）に達し得たという訳なのだ．

全体的な構成の原理は，水平な平面，円柱，滝のような階段，そして白く光る箱というようにミニマル・アートを指向する



●マクローチの職人用チェーンのこぎり，1982年

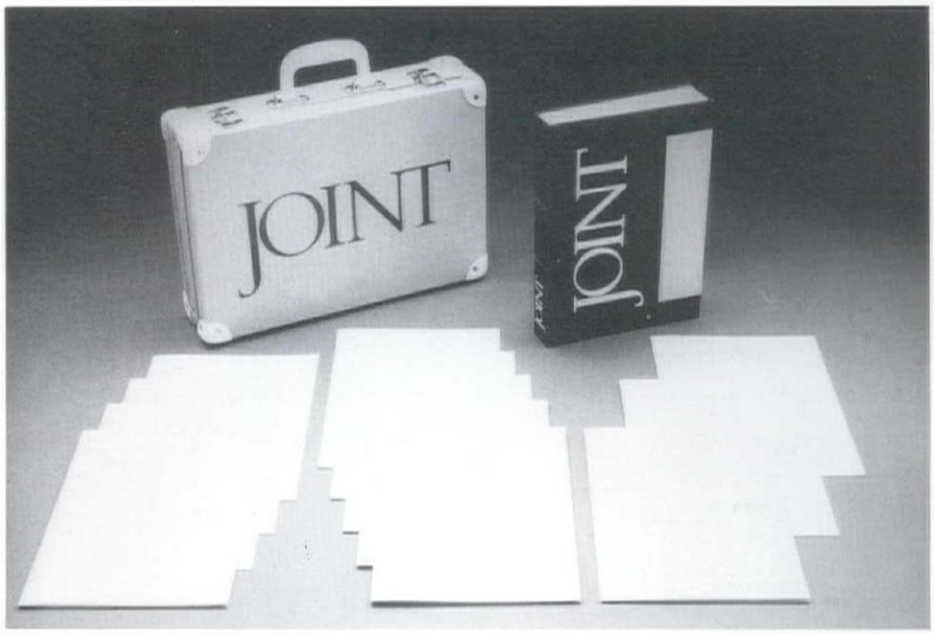
ものであるが，その一方で，表面の仕上げは明らかに手の痕跡を呼び起こすものである．

設計者達は，総ての所作を整えた後に，壁に自分達の宗教的目印——融和的な曙の儀式の中で，何度も何度も繰り返し引かれた鉛筆の線——を残したのである．

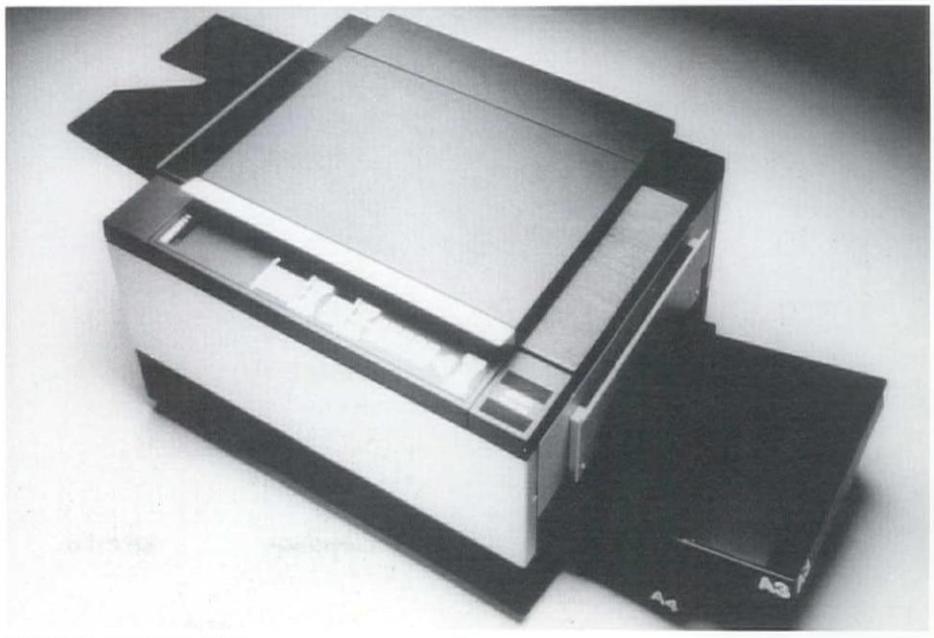
前面の吹抜け部分の壁は，粉状の大理石を固めた仕上げであるのに対して，階段吹抜けと展示エリアの壁は，壁紙または2つの濃淡の灰色のヘラ伸しのスタッコ仕上げとなっている．　床は花崗岩・白大理石磨き仕上げとなっている．　円柱や構造体は，スチールの磨きペイント仕上げで，スクリーンはスチール・メッシュやアルミニウム・ネットである．

照明は建築にとって欠くことのできない部分である．　彼らは，要求されるプロポーションや工学的特性，そして人目を引く装飾効果等とが合致するものを，既製の照明器具からは見つけられなかった．　そこで彼らは，アルテルーチェと協同で作った新しい照明器具《Raラー》（ナイル・デルタの畏敬の念を起こさせる全能の神）を提案した．

その特別の電球と二変色性の反射鏡は，展示場の変化する要求に合わせて調整可能な，ダイナミックで多様な明りを生み出す．それは，拡散照明，スポット・ライト，投光照明など，総てが，光り輝き回転する天体が一分毎に放射した光のように．

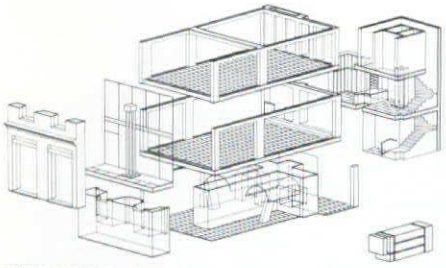


●Joint S.P.A.のカタログ・デザイン，1980年

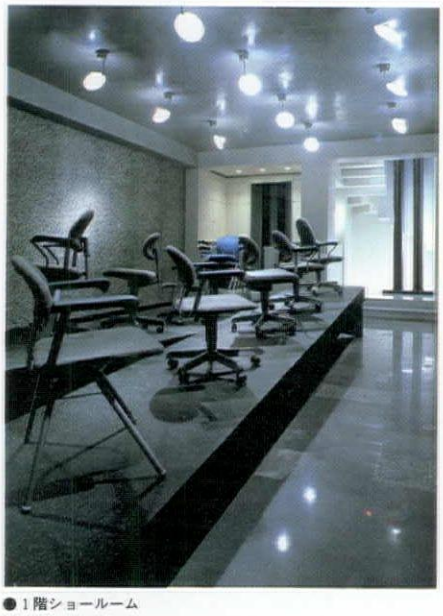


●オリベッティのコピー機，1983年

■マルカトレ・ショールーム



●アイソメトリック



●1階ショールーム



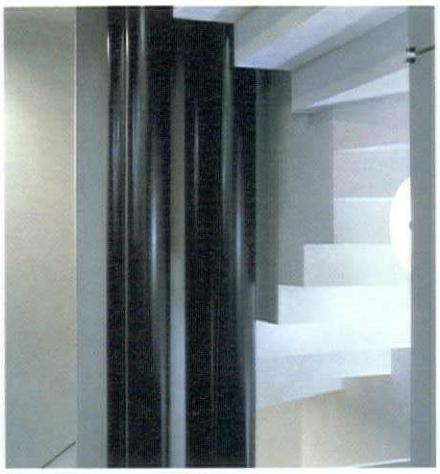
●1階ショールーム入口方向を見る。



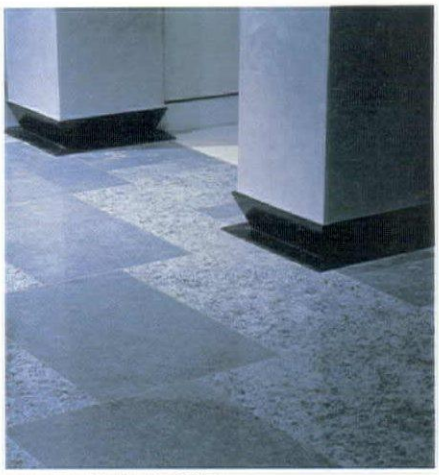
●2階ショールーム。天井の照明器具(ラー)も彼らのデザインによる。壁面は手の痕跡として残され、鉛筆の線で描かれた壁紙張仕上げ。



●スチール円柱の基部詳細



●白大理石による〈氷の階段〉詳細



●大理石と花崗岩による床詳細



●地階吹抜け，壁面は粉状大理石ペースト仕上げ．

photos: Andrea Zani

永年の信用ときたえぬかれた
技術を駆使する!



●一般電気設備工事＝設計施工
●防爆電気設備工事＝設計施工
●計　装　工　事＝設計施工
●電気加熱保温工事＝設計施工
●パイプライニング工事＝設計施工
●静電気接地用リール＝＝販売

昭和電機工業株式会社

取締役社長　浦　道　雄

●本社／東京都港区東新橋２丁目７番３号　電話03(437)3851(代表)
●営業所＝大阪・中部・広島・福岡
●出張所＝苫小牧・京浜関北・新潟・鹿島・千葉・四日市・堺・水島・岩国・徳山・坂出・松山・新居浜・大分
●駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・シンガポール

文=草森紳一　写真=大倉舜二

壊れた魔法円

1

造型として〈円〉を建築に用いると，その姿は，下品に落ちるという観念が，私の中にある．　これを教えてくれたのは，フランク・ロイド・ライトである．

晩年，彼のイメージの中に〈円〉が溢出しはじめる．　部分を円で表現したり，内的に円を意識するのではなく，円そのものの造型に立ち向かったのが，その晩年の野心だったように思える．

グッゲンハイム美術館(1956)ダラス・シアター・センター（1955)はともかくとして，マリン郡庁舎や同郵便局(1957)，ギリシア正教会(1956)，アリゾナ州立大学記念ホール(1959)の外観は，その悪しき例であり，私に，強烈な下品の印象をあたえ，円型の建物は，〈下品〉となるという観念にまで高めさせたのである．

円は〈無限〉，四角は〈完全〉，三角は〈抱負〉の表徴だと，ライト自身も言っているが，なにも彼の発見ではないし，彼流の定義でさえない．

物事を内部から見る習慣が，幼児の時，フレーベルの恩物，つまり三角，四角，円や球の積み木で遊ぶことを覚えた時からついたというのは，もはや伝説と化しているほどだ．　これらの形はすべて万物の中にふくまれている．　建築と恩物との関係は，万物の中からそれらに還元して見る練習になったということに重要な意味があるのであって，単なる造型幾何学の訓練になったということではない．　建物が，幾何学的図形で成立している故に，その組合せの勉強になったと彼自身もいっているわけでない．

たとえば，男は直線的で，女は円的だというういいかたがある．象徴的に男を長方形に描き，女を丸の円形で描いたとしても，私たちはすぐに納得できるが，ディテイルはともかく，見た目のかたちは，男も女も似たようなものでしかない．　つまり〈人間〉のかたちを男も女もしているにしかすぎない．　女のお尻が，丸いとしても，男のお尻も，丸くないというわけでない．　男の尻にくらべれば，女は丸味があるということで，三角形のお尻を男がしているわけでない．　しかし，女は〈円〉であり，男が〈長方形〉であっても，だれも異議をとなえまい．　内的な心的把握では，まさにそうだからである．

ライトは，このようなことを知り尽していたはずである．　だからフレーベルの玩具と，ウィスコンシンの自然と農場は切っても切り離せないのである．　彼は，自然の中にフレーベルの玩具，三角形や正方形のかたちに還元して見る習慣がついたのである．　それをさらに一回転させて還流させたのが，彼の建築であるはずだ．たしかに人間が作る建物は，積木細工にも似ていて，もろに幾何的組合せである．　が，ライトの主張する有機建築というものは，たとえ外見は，幾何学的組合せであったとしても，その組合せを優先するのではなく内的必然性によってそうなったにすぎないとしたはずだ．　そうでなければ，建物を万物自然の生成と等しとする彼の主張は，空論になってしまう．

晩年の彼は，どうも自分の有機理論を，すくなくとも外観において裏切ってしまったという疑いが，私の心の中にくすぶっているのである．　つまり，晩年にあっては，〈円〉にこだわるあまり，最初より彼は，〈かたち〉ではいっていったのではないか．　自分の意図する〈かたち〉を強引にあてはめていったのではないかという疑惑である．

2

晩年，彼が希求したかたちは，もっとも，厄介な〈円〉であった．どうして，こんなことになってしまったのか．　それを実現することにより，無限の〈円〉を有限の〈円〉にしてしまっている．　下品な感覚は，そこから生じているように思われる．

この円志向は，おそらく彼の死の意識と無関係ではないだろう．精力的で長命であった彼にとって，自分の死への意識が，いったい何時ころよりはじまったのか，一般論で推量することはできないが，円型，ないしは円型が目立つ建物が増えだしたころと重なるはずだ．

S.フリードマン邸(1948)，R.D.ウィン邸(1950)，D.ライト邸(1950)，ジェイコブス邸(1943)，R.L.ライト邸(1953)，N.ライクス邸(1959)は，視覚的に〈円〉のかたちを感じる建物だが，その制作はライトの円志向が外在化したころと同時していて晩年の作にはいるが，これらは，しかし公共建築のアリゾナ州立大学の記念ホールのような露骨な〈下品〉さにおちいっていない．

フェニックスのN.ライクス邸などは，砂漠の低い小山を縫って，円形の建物が見え隠れするようにねそべっていて，けっして下品とは思えない．　主屋は，ずばり円形だが，それに尾のようにつらなる棟も，曲線的な流れをもっているが，けっして象徴化されたような円が，もしくは幾何学的円のまるごとがそこにあるわけでない．自然にそって生きもののようにあり，人間の棲み家という感じであるから，下品になりようがない．　林の中のR.L.ライト邸や，S.フリードマン邸の外観にしてもそうである．　住宅は，円的に自然の中でやすらかに息をしているといった印象をあたえる．

宗教のシンボルは，円である．　無限の宇宙，絶対の宇宙が〈円〉であらわすしかないという意味で，宗教は，〈円〉である．　しかし，この円は，あまりにも抽象的であり，むしろ人間には見えない円であると考えたほうがよい．

円は，ありとあらゆる宗教が到達する帰結の象徴である．　妖術・巫術，そして原始呪術すべてこの〈円〉によって自由の境地に達しようとする．　三角形や正方形も，これらの象徴記号となるが，円が最高の座にあり，古代の呪術から新興宗教にいたるまで，どの宗派もそのことに反対し反抗するのを見たことはない．



ジョンソン・ワックス・ビル　1936　ラシーン、ウィスコンシン

だとすれば，円を崇める宗教が，その建築物を〈円〉にしてもよさそうだが，まずそうはしない．　仏教建築にも，ない．　イスラム建築にしても，ドームの天蓋は球体状の円だが，その全体は，円形でないし，原初回帰(円)の魂の願いをあらわしているといわれるミナレットのような垂直な立方体の塔も突出する．

宗教建築は，神と出逢う場所であるから，神聖だが，神そのものでない．　神の象徴が，円だからといって，全体の構造を円そのものにすることはない．　円光を背負った仏のように，どこか一ヶ所，堂宇の中で円の象徴がきかされていればよい．　極端にいえば，円の象徴さえいらない．　〈円〉を感じさせればよい．　円は，無限だが，建物全体で象徴化しようとすれば，有限になってしまうのである．　〈下品〉はここに由来する．　〈円〉にとりつかれたライトが，1956年，ウィスコンシン州にギリシア正教会を建てたが，ここで，〈円〉を適用した．　教会堂だから，〈円〉の象徴をということで説得しやすかったともいえる．　円志向の住宅は，1940年代から50年代のはじめにほぼ終り，公共建築の円志向は，1955年ころからはじまる．　もともと公共建築の注文は，過去のスキャンダルがたたって少なかったといわれているが，最晩年は集中した．

1959年にはフランク・ロイドも，長命の生を終えてついに死ぬのであってみれば，この〈円〉の噴出は，まさに〈円寂〉の予兆であるともいえるし，このSF的な綺想の展開は，真剣に未来建築の予言のつもりであったかもしれない．　ライトはいつだって真剣であった．

教会は，神のためでなく，〈人間〉のために作られねばならぬ，自由であるべきだとしたのは，ライトだが，このギリシア正教会の外観は，これまでの彼に見られない下品な感じ，安手の宇宙建築はかくやあらんといった怪奇な造形に見える．

マリン郡庁舎にも，このことはいえるだろう．　特にマリン郡郵便局の玄関の帽子のひさしのような屋根などは，まるで海中から浮びでた怪魚が唇をグワーッと開いたといった感じで，滑稽にして異様な形象である．　ひさしの端から端までにめぐらされた小さな半円の凹面模様なども，まるで怪魚の歯のような比喩感覚を興起する．　その開いた唇の中央に銀のポールが１本，高く突き抜けて刺さっているのもグロテスクで漫画的である．

内部が，例によって魔的な有機に富んでいることを疑わないが，その有機の必然が外観を作っているようには思えない．　内部的必然によって生じた外部に，ライトはあらたに彼の幻想的イメージを附加したようにも思える．　また「内部的必然によって生じた外部」というライトの規範も，大枠のところで崩れている．

つまり，マリン郡郵便局をとくべつ円型にする理由が，業務目的の上からも，立地の上からも軽薄であり，晩年，彼に襲いかかってきた湧きおこる円のイメージを絶好のチャンスとして応用したといった感じである．

マリン郡庁舎も，大蛇が横たわるかと思える形象である．　これは，郡庁の機能を刑務所までふくめて一ヶ所に収めるという構想から生れた横に長大な建築物だが，イメージとしては，〈円〉であり，〈長円〉である．　長大ゆえに，まさに大地に這うという感じだが，私はこの目で見ながら，その壮大さに搏たれることもなかったのは，なぜだろう．

内部の魔法的で子宮の中を這いまわるような印象を不断にあたえる有機術には，それなりに感心はしたものの，外観は大仰で刺激的すぎる．　SFの世界は，神話的イメージと未来のイメージが，そのジャンルを構成する．　ライトの建築の容姿は，メタリックな未来宇宙的建築のイメージの他に，古代神話的なグロテスクの比喩衝動を見るものにあたえる．　新興宗教の伽藍が，しばしばそうなるのとライトの形姿は似ている．

グロテスクは，ライトの初期からつきまとっているものであり，彼の自然崇拝から根を発した神秘主義的有機発想から必然的に生じるものである．　しかし，けっして〈グロテスク〉を目指したものでなかった．　ゴシック建築よりも，指向性は乏しいといえるほどである．　ところが晩年の〈円〉の解放により，グロテスク・イメージが見得を切ってしまっている．

すでにSF的イメージは，ジョンソン・ワックス(1936)で開いているが，それは内部においてである．　そこに早くも〈円〉イメージはみずみずしく海底を覗きこむように開花していて，未来宇宙の空間をも思わせ，外部にもその〈円〉は反映している．　だが，見得まで切っていない．　見得を切ると，彼の内部空間論は，たちまち腐臭を放つのである．

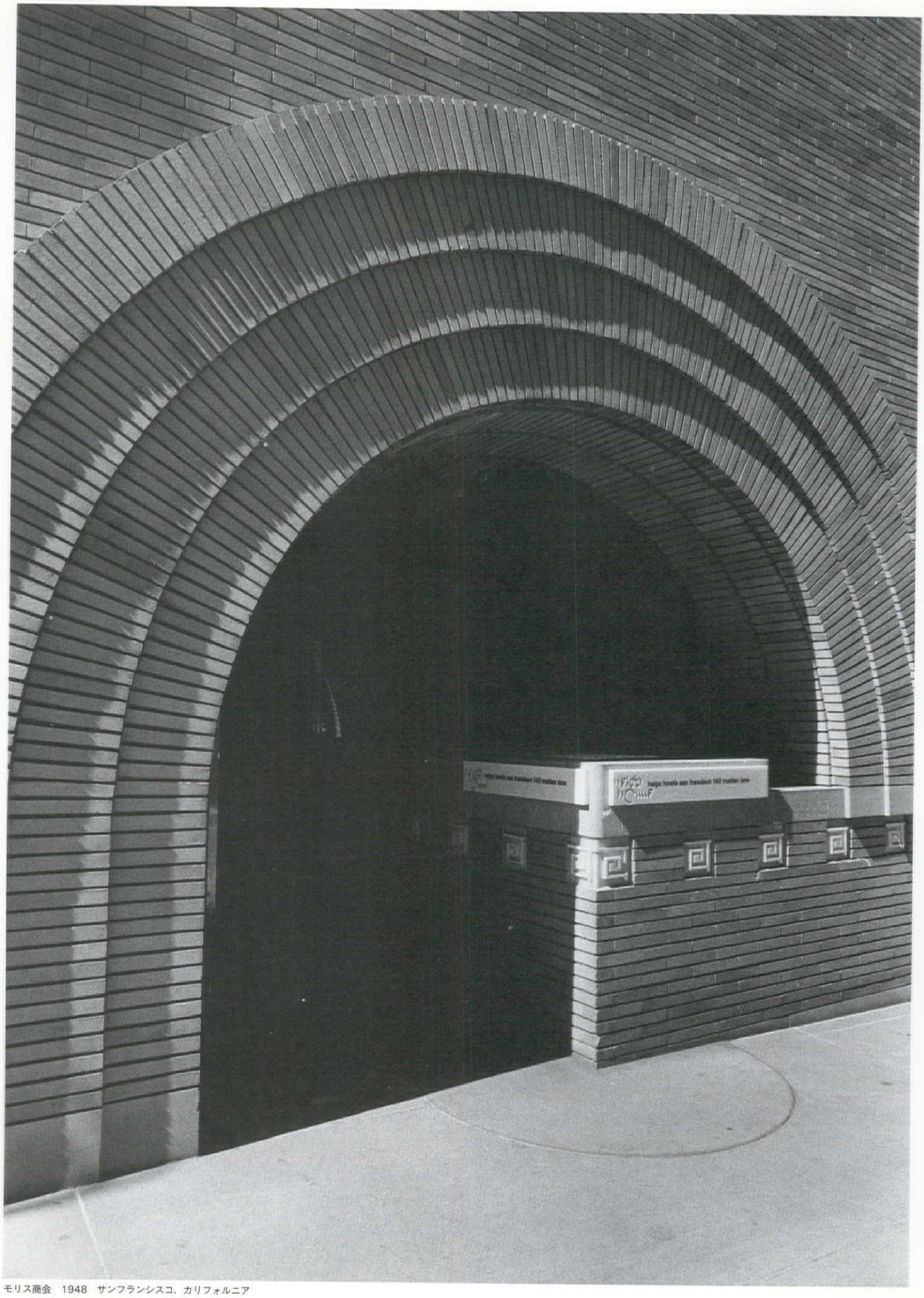
外部の表層にあらわれた円イメージでも，構造からくるものは，壮大になりうる．　建築物には，壮大への渇仰は，附属品のようなもので，すべて否定しさるわけにいかない．　はりぼての壮大も多いが，それは構造の内的必然に欠け，官能に訴えることの喜びに独走しているからである．

古代の円形競技場の壮大さは，たくさんの人間に見物させるという要請から生れるものであり，円形をとるのも，宇宙無限のシンボルとしてではなく，競技を観客にどの角度からも見えるようにしようという配慮からきている．　こういう配慮要請の拝み捕りが，かえって魔術的魅力の条件となる．　なぜなら，この巨大さにはトリックがあって，見物人がどの位置からも同じ大きさで競技を眺めることなどできないし，それでよい．　これが，壮大の有機というものだ．

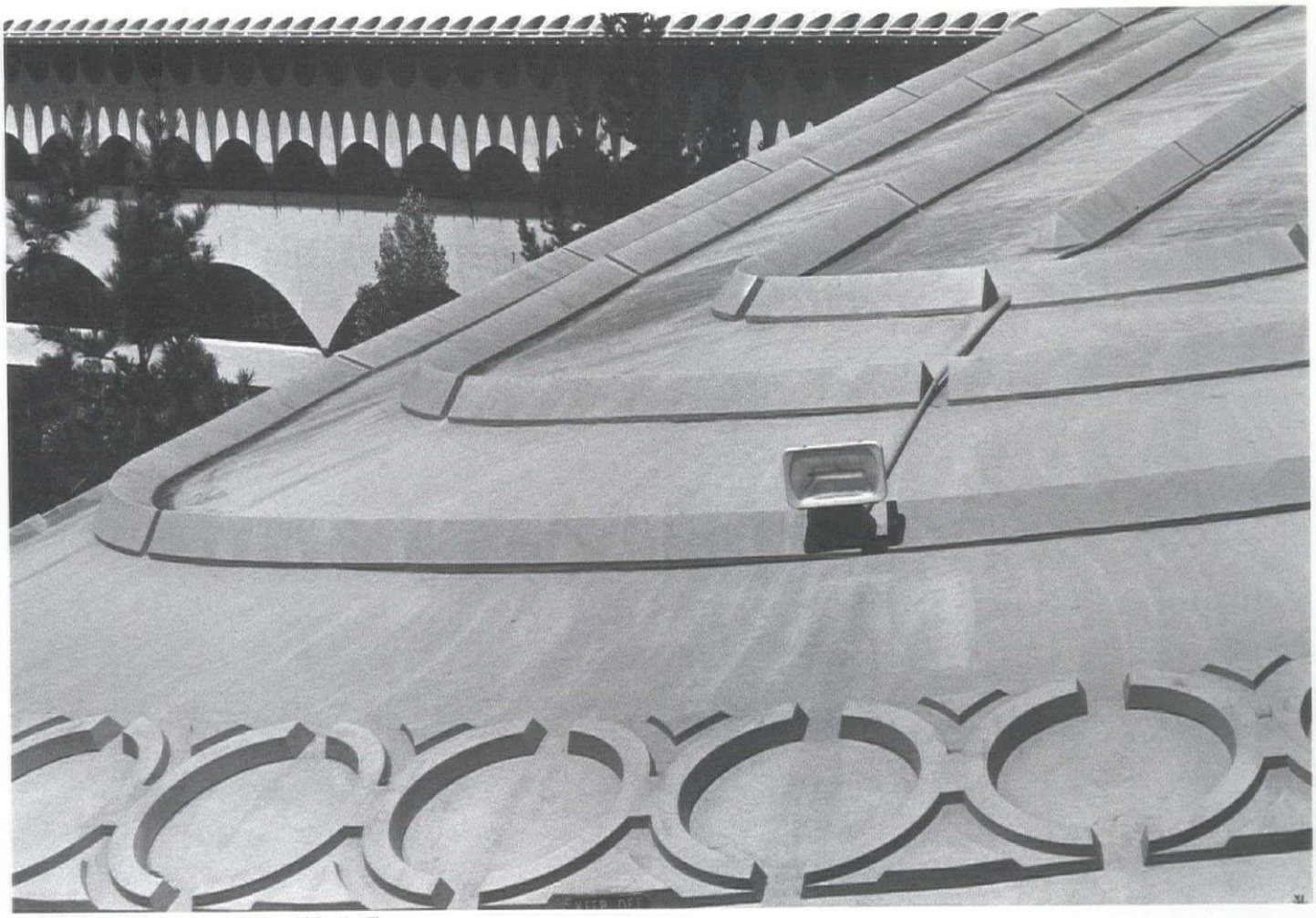
マリン郡庁舎は，機能を一ヶ所に集合させるという内的必然からも長大になり，壮大は約束されたようなものだった．　宇宙を翔けるドラゴンの長く丸い爪のような屋根は，スペースオペラさながらでよしとして，壁の半円アーチの連続パターンは，〈下品〉な印象をあたえる．　屋根のブルーは，ともかく壁の色が黄色なのは，カリフォルニアの空に似合いそうで似合わない．

しかも，この半円連続模様は，五層をなしている．　黄色が似合わなくなったのも，この半円の層化がうまくいっていないからである．　イスラムの建築家は，〈幾何学者(ムハンディス)〉とも呼ばれるときく．即ち時間と空間がもたらす形体について熟知したものが，幾何学者であり，建築家なのだという．　ライトは，この達人でさえあるのだが，〈円〉に固執した晩年は，ややその魔術に誤差が生じている．

半円の〈五層〉といっても，厳密にそうとはいえない．　まず屋根の傾斜の末端に穿った半円の列がある．　つづいて，さらに壁のはじまりの最上層に小さな半円の列があり，その中に球がはめこまれている．　遠くから見ると，球列に見える．　その下の層に正円



モリス商会　1948　サンフランシスコ、カリフォルニア



マリン郡庁舎　1957　サン・ラファエル，カリフォルニア



ジョンソン・ワックス・ビル　1936　ラシーン，ウィスコンシン

が穿たれている．　その下は半円であり，正円より輪郭は大きい．次の層は，それよりも大きい半円である．　そして最後は，それより倍に大きくなった半円である．　これはトンネルになっていて，その下を車が走っている．

二つの小山に橋をかけた感じのマリン郡庁舎は，同じ高さで1本に横たわっているのではない．　よくみると半折で中央から段が低くなって，階を一つ落しながら連結して，一応横1本になっている．　壁が黄色なのは，左のブロックであり，右のブロックの壁色はねずみ色である．　半円の階層のリズムは同じであり，最下層もトンネルになっている．　しかし外観としては，左のほうが，中心に見える．　右が左にくらべ一段落ちているだけでなく丘に隠れこんでいるからだが，それにもまして壁色が黄色で明るいからである．

もともとライトには，色彩の魔術師のごときところがあった．一般論的な色彩の設計はいつも無視し，分量や明暗強軽の度合によって，あたかも名料理人のように色を配合した．　印象としては暗いもので，とりわけ内部空間でその手づくりに近い触覚的な色彩設計は魔術的に生彩を放った．　かつて外観は，きわめて地味だったが，円を多用した晩年では，派手になり明るい体系にはいっている．

それは，あっけらかんとした明るさではなく，むしろけばけばしい．　それもあえてそうしたというより，スパイスのさじ加減の狂いに近い．　屋根は水色，壁は黄土色，2色しか用いていないが，けばけばしい．　水色の屋根は，カリフォルニアの青空．　黄色の壁は，カリフォルニアの黄土を環境計算したはずだが，それらがひとつ溶けあわないで，浮きっぱなしになっている．　〈業(わざ)〉が落ちたとしか言いようがない．

魔術師とは，該博にして勤勉な自然の探究者であるといったのは，建築家の祖ソロモンだが，ライトの自然と宇宙と人間にかかわる隠秘の知力に衰えがおこっているとしかいえない．

フレイザーは《金枝篇》でいう．「魔術の世界観と科学の世界観とは酷似している．　どちらにおいても，出来事の連続は完全に規則的かつ確定的なものであり，不変の諸法則によって決定され，その法則の作用は予知し精確に計算することができる．　急変の偶然・突発事といった要素は，自然の行程から追放される」(島弘之訳)と．

もともと科学と魔術は，分離していないものであったにしても，しだいに分派した科学のほうが母屋をとり，魔術は衰退していくが，フレイザーのように二つを対立させた場合，ライトは，あきらかに〈魔術〉の人であろう．　だが，魔術の子たる木工組合の純粋運動が起った時，彼は科学の子たる〈機械〉をとった．　それは，魔術と科学の酷似を知っていたからであり，機械をとりこんでも，人間を損なわずに魔術の道具になりうると信じていたからである．　機械文明に反対した木工は，ナイーヴだが，〈知〉に欠けた魔術師，没落していくべき魔術師だったのである．

しかしながら，晩年のライトの隠秘学は，体力の衰えにつれ，その知力も衰えた．　マリン郡庁舎の場合，色彩プランの失敗にもまして，それを際立たせたのは，半円の連続模様と階層に応じてその半円に大小の変化をつけた規則的なかたちにある．

このスペースオペラ的とはいえ長蛇の造型は，草原住宅の延長上にある．　カリフォルニアの段丘に横たうように設計されているからだ．　これをぶちこわしにしたのが，ラグビーを真二つにした片割れの一つを並列化した〈半円〉の連続模様なのである．　この半円が浮いて死んでしまうのは，背後に山があるからだともいえる．つらなる低い山々も，半円である．　ライトは，これらの山波を擬して，半円模様を展開したようにも思えるが，このような同一場面における模擬は，下等の見立て魔術である．

第一，本物の山に勝てるはずもない．　本物の山のない空間でこそ，この山波模様を展開すべきなのである．　山々は，なだらかに大小の半円をつくりながら波を打って拡がっている．　それに対して，コンパスで引く，建築の山波は，固くて冷たい．　これが浮いて際立つのは，本物の山に負けたということである．　いったい，この錯誤は，ライトの〈もうろく〉なのだろうか．

20世紀の黒魔術師という悪名を蒙っている英国のアレイスター・クローリーは，その昔《魔術―理論と実践》(島弘之訳)の中で「すべての人は，他人の意志を侵害することなど恐れずに，自分自身の意志を成就する権利を有する」とした．　別の彼の言葉でいえば，「汝の意志するところを行なえ．　これこそ〈法の〉すべてならん」である．このことは，建築家対クライアントの関係の中で，たえず行われている戦いである．　その点では，プロジェクトが実行に移動した時は，かなりの高勝率でもって自分の意志(有機理論)を通してきたといえる．

だが，ここでは，宇宙(山)を自分に従属させずに，宇宙から置いてけぼりを喰っている．　ライトは傲慢だといわれた．　それは，自然とよく交感して自分によく生きていた証拠だが，晩年は，もうろくした自己神へとわが傲慢をしらず退歩させていたのではないか．

マリン郡庁舎の場合，彼の死後の完成らしいから，監理補正することができなかったのかもしれないが，そもそも半円の用いかたで誤っており，色彩プランを変更しても，その誤りはとりかえしのつかないものであったかもしれない．

さらにこの過誤は，うしろの山波に半円の山といった比喩衝動以前にあったと思う．　それは，なにもかも〈円〉のかたちで，建物をつくりあげようという附会の意志である．　円は，絶対の円であり，自分の〈意志〉をあてはめてはならぬタブーを，彼は侵害してしまっていたのだ．

3

オーギュスト・ロダンは，《フランスの大聖堂》の中で，こう言っている．

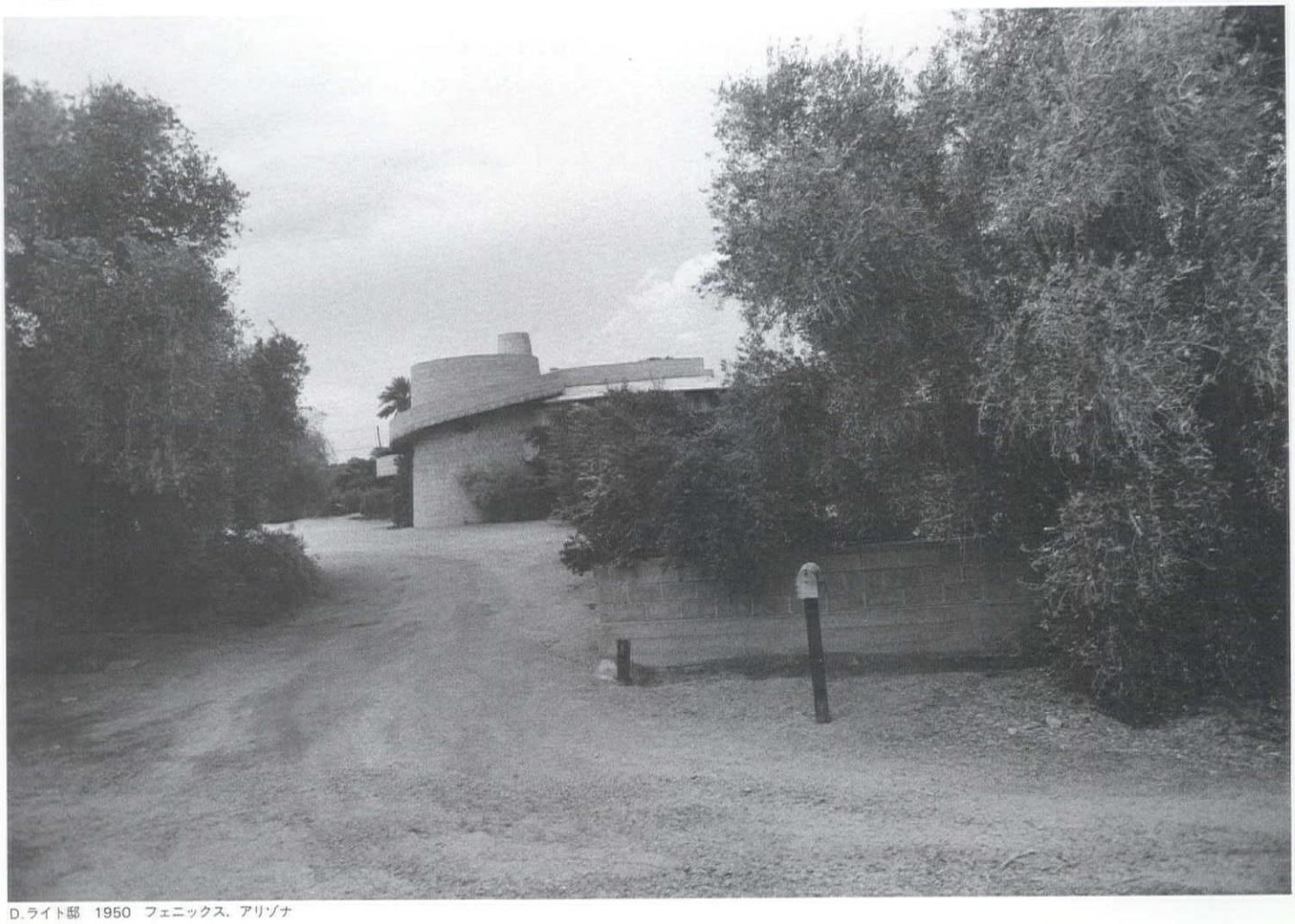
「大聖堂のドルイド的荘厳さが遠くに見えて諸君を驚かす時，この荘厳さは，例えば田園の中に孤立しているからだというような，自然的，偶然的な原因によるものだと諸君はするであろうか？」

「それは諸君の考え違いである．　ゴシック芸術の魂は，建築全体にリズムを与えてこれを生かす，あの，光と影との陶酔的な変化の中にあるのである．　そこには，今日では消え失せてしまった知識がある．　貪欲で落着きのない私たちの世紀には理解できない」(新庄嘉章訳)

よこたわるゴシックと呼ばれ，自らもそう言われることを喜んだふしもあるライトである．　マリン郡庁舎などは，さしずめその



モリス商会　1948　サンフランシスコ，カリフォルニア



D.ライト邸　1950　フェニックス，アリゾナ

例だが，写真だけでなく，私の実地体験からしても，そのSF的な綺想に搏たれながら，戸惑ったのである．　アリゾナ州立大学記念ホールの円志向も，同じように戸惑ったのだが，それは内部よりも外観にであった．　ロダン流には，「光と影との陶酔的変化」というものに欠けていたからだろう．

たまたま，雷雨の中で，アリゾナ州立大学記念ホールの外観を見た．　内部は習性化した有機の魔術であり，くたびれるほど感心しながら外へ出ると，突如のスコールであったが，雨に煙る円形講堂の形姿は，みすぼらしかった．　そこにリズムがなくリズムをかきくどく形骸だけがある．　それは，彼のデザイン能力，装飾の才の衰微というより，太陽ともいうべき〈円〉に触れた罰のように感じられたのである．　彼の中で肥大化した円観念の破産にも思えた．外と内が，割れて二つになっていたのである．

円型プランが登場する前のライトの外観は，不愛想であった．見咎める人には，奇なる形態であっても，下手をすれば見過がされそうな寡黙な雰囲気をもっていた．

この寡黙なファサードが，いったん内部にはいった時，人を光と影の変化の魔術で，洗いたてるのである．

それは，間断なき飜弄といってよい．　ある者は，とろとろに骨を溶かして陶酔する．　はじめての入来者は，いじきたなく，よだれがでんばかりに感嘆の溜息さえもらす．　ライトの呪文のようなディテイルに目を奪われるからである．　呪文について，クローリーは，こうも言っている．

「至高の瞬間が訪れるまではこれらを決して発するべきではなく，その瞬間が訪れても，思わず魔術師の口から破裂するが如く発せられるべきだということ――これらの言葉を発語するのを厭う気持を魔術師は非常に強く抱くべきだ，ということである」

沈黙の効果を彼は強調している．　ファサードや外観の不愛想は，この沈黙に比較してよい．　〈至高の瞬間〉は，ライトの場合，どこにあるのかわからない．　案外に，アンチクライマックスなところがあり，逆には不断にクライマックスだともいえる．　内部への導入から，アンチクライマックスがはじまっている．　さらにクローリーはこういう．

「事実，これらは，初めて神的な憑依状態の発作に襲われた瞬間に，彼の内なる〈神〉が発する声であるべきなのだ．　そうして自発的に発せられれば，呪文は必ずや効験を発揮する．　なぜならその時，呪文すなわち霊験と化しているからだ」

呪文は，内部のディテイルや光の仕掛けがそれに匹敵する．が，憑依するのは，ライトでない．　内部を歩き，見る人たちである．　外部の無愛想が，弾機となって，深く陶酔していく．　クローリーの言葉をもってすれば，〈霊験〉するのである．

既成の宗教臭，つまり抹香臭はないが，ゴシック教会建築の体験にも似た陶酔を体験する．　人間の心の芯にある秘密を襲ってくるところがあり，ライト教の人々は幸せな霊験者なのだ．　その信仰をきらう人は，その陶酔を嫌うのであって，その魔術をよく見抜いているとも，反対には言えるのである．

私が，ライトの建築を〈円〉だという時，このような霊験をもたらす彼の方法をさしていうのである．　設計構造が，十字型であろうと，五角形であろうと関係がない．　彼が呪文のように言いつづけた連続体の有機構造が，〈霊験〉の陶酔境をプレゼントするのである．　それは，かたちにならない，見えない〈円〉である．

イスラム神秘主義によれば，家は，〈隠れた宝物〉の場所だという．　ラレ・バフィティヤールの《スーフィ》によると，

「人の中で魂が肉体に，そして霊が魂にかこまれているように，形体にかこまれている．　このように，壁はこの聖なる場所を限定し，隔絶するのに不可欠なものである．　この壁にかこまれた聖なる場所の中で，魂は感知され，その精神的探求は実現される．　形体，表面の相互作用は，完全に静止したいっさいの緊張のない空間・瞑想へと導く空間を創造しなければならない」(竹下政孝訳)

これは，イスラムの建築家がなさねばならぬこととして記したものだが，陶酔をあたえるライトの内部空間には，このような静かさがある．　陶酔の興奮から醒めたものには，安定と，地上の天国が待っている．　しかし，人間にとって，望ましき〈家〉というものは，つねにそうだろう．

ただ，このような内臓空間が危険なのは，地上の天国の中にひたって運動しなくなることだろう．　幸せともいえるが，骨抜きだし，人間，幸せにばかり生きていけないのである．　人間は，生きるために家を出ていかなければならないからだが，一方，その瞑想をあたえる力が創造への出発にもなる．　かつて左右の思想を問わず帝国ホテルのファンがいたのは，あの静かにして暗い呪文空間の中に，霊魂が囲まれてなにものかを生みだす発条になったのだろう．

こういう全き空間を私は円構造と呼ぶのだが，くわえて，垂直志向の螺旋のリズムが，その空間に内在していることも見逃せない．垂直のゴシック建築は，その意味で螺旋の神秘をもち，円的であるといえるのだ．　それは，螺旋階段を室内に設けるなどということではない．　ライトは，妻のオルギヴァンナに，帝国ホテルでの日本の職人たちに接した体験として，日本人は本能的に物ごとへの接近のしかたが〈螺旋運動〉であると語ったという．　これに反し，西洋人は，直線的であり，いらいらしたとも言っているが，これはどういうことだろうか．

ライトが，このいらいらする螺旋運動を内部空間にとりいれたのだろうか．　そうではないだろう．　あくまでも日本人は，なにごとにつけ螺旋的接近するのである．　それが，日本家屋に反映しているのは，当然としても，ライトの場合は，内部空間に入る人間を螺旋運動させるように設計したというべきである．

それにしても，晩年の〈円〉への固執は，なにごとであろうか．せっかくの持前の円的構造を破壊し，ファサードや外観を饒舌にした錯誤は，ひょっとすると，〈沈黙〉の魔術という階梯を棄て，内部と外部の全き一致に成功し，まるごと〈円〉となった〈落水荘〉やグッゲンハイム美術館の成功への自己誤認からきているように思えぬこともない．　これは，ひとつ足をすべらすと，外観へのこだわりにつながるからである．

それとも，やはり計画案どまりの建築物をふくめて，晩年に続出した円型の作品群は，21世紀への予言として，価値判断を保留しておくべきだろうか．

●くさもり・しんいち



野性の鋭い直感が理想の道を選ぶ。
ロンフォームの快適な歩行感と安全性が、人間のためのよりよい生活空間をつくりだす。

ロンシールの床、ロンフォームは、
実績の足跡を未来につなぐ。
ロンシールのソフト&セーフティ
塩ビシート床材です。

住みやすい空間づくりが私たちの仕事です

ロンシール工業株式会社

東京営業所／〒101東京都千代田区神田松永町13川口ビル☎03(253)4941㈹　大阪支店／〒532大阪市淀川区西中島3-9-13下北ビル☎06(304)2700㈹　出張所／札幌☎011(531)2602・青森☎0177(77)1155・仙台☎0222(88)8501・新潟☎0252(43)3791・大宮☎0486(45)1511・横浜☎045(662)7370・金沢☎0762(44)5871・名古屋☎052(935)7063・岡山☎0869(26)4321・広島☎082(249)3600・高松☎0878(31)4177・福岡☎092(472)5857　事務所／静岡☎0542(51)3712・鹿児島☎0992(58)6571

＊詳しくは上記宛ご連絡下さい。

[SDレビュー1985]作品募集のお知らせ

年ごとに増加する応募案.
秋の代官山ヒルサイド・テラスにて催される展覧会[SDレビュー]は,
沢山の建築家の方々の支援の声を得て今年で4回目に突入します.
SDレビューは,実際に建つという条件の下に企てられた計画を
その対象としています. そこでは,計画のコンセプトが
現実社会のコンテクストを映し出していることが求められると同時に,
建築を表現する手段であるドローイングや模型,
或いは言葉の今日的意味を改めて問い直そうとするものです.
今回も応募案の中から約20点を選択した後,入選者の自由なプレゼンテーションを
[SDレビュー1985]展覧会とSD12月号誌上にて発表します.
多数の方々の参加を期待しています.

——SD編集部



SD Review,

■[SDレビュー1985]の応募要領は下記の通りです. 応募の際には,プレゼンテーションそれ自体の技術や密度は,選択にあたっての主要な評価の対象とされないことにご留意下さい.

■[SDレビュー1985]
コミッティ・メンバー
槇文彦(東京大学教授)
竹山実(武蔵野美術大学教授)
小宮山昭(建築家)
八束はじめ(建築家)

■主催
鹿島出版会SD編集部

■応募対象建物
(屋外空間,インテリアを含む)
実施を前提として設計中ないし施工中のもの. 国外に建つものも含める. 但し,応募の時点で既に完成しているもの,実施の見込みが全くないもの,コンペの応募作(公開,指名,入選,落選を問わず)は対象外とする. 応募作品点数は原則として一人一点に限る.

■応募者の資格
特になし.

■所要図面等
特に制約なし. 設計意図を説明するのに必要と思われる図面,写真等を各自選択する. 表現方法も自由.

建築・環境・インテリアのドローイングと模型の展覧会および誌上発表

1985

■応募の受付・締切
1985年6月25日より7月31日
（同日消印有効）

■送付先
〒107　東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会SD編集部

■入選者への通知
前記のコミッティ・メンバーにより約20点を選択した後，ただちに入選者に直接連絡する．

■展覧会用の図面・模型等の製作
入選者は通知後40日以内に，展覧会用（SD誌上発表用）の図面，模型，その他のプレゼンテーションを製作し，後日指定の場所に搬入する．入選者には費用として一律5万円が支払われる．

■［SDレビュー1985］展覧会
期間＝1985年10月中旬，2週間
場所＝東京都渋谷区代官山ヒルサイド・テラス，ヒルサイド・ギャラリー

■提出図面の返却
提出図面は1985年12月10日から14日の午前11時から午後5時までの間に鹿島出版会SD編集部まで直接受け取りに来られた方には返却します．

■SD賞
展覧会に展示された作品の中からコミッティ・メンバーの合意により数点を選出し，SD賞として記念品を贈呈する．発表は下記のSD誌上にて行なわれる．

■誌上発表
SD誌1985年12月号（予定）

■問い合わせ
［SDレビュー1985］についての問い合わせは，前記送付先にハガキにてお願いします．

■提出用紙
A3判用紙（420mm×297mm）
4枚以内．

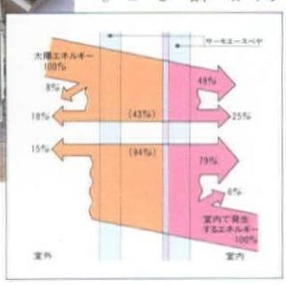
■提出書類
❶プロジェクト名，施主名（事業主体名），工事予定期間，主体構造，主要仕上げ材料，面積（建築面積，延床面積等），応募者名（組織の場合は担当者を明記のこと），年令，職業，勤務先の住所と電話番号，協同者の氏名，❷400字以内の設計趣旨．以上をそれぞれA4判程度の用紙1枚に記入し添付すること．❷は無くても構わない．



熱の選択作用。



太陽の熱を採り入れ、そのうえ室内のあたたかさを逃がさない、という理想的な熱の選択作用をする住宅用ガラスが誕生しました。この新しいガラスは、サーモエースペヤ。ガラスに、室温の熱線を反射する透明な金属をコーティングした低放射ガラスと、透明板ガラスで構成する、断熱複層ガラスです。太陽の熱線を一たん吸収し、室内側にソフトに採り入れる働きと室内で発生する暖房熱やぬくもりを逃がさない働きをし、この2つの作用で窓際のヒエヒエ感を抑えるとともに、冷えにくい室内をつくります。サーモエースペヤ12(3ミリフロート板ガラス+空気層12ミリ+4ミリサーモエース)で、その省エネ効果を見てみると、単板ガラスにくらべ、年間石油換算で1000ℓ(札幌の場合、通産省モデル住宅について計算)にも達します。より快適で、より経済性の高い住宅づくりへ、これからの窓は、サーモエースペヤ。

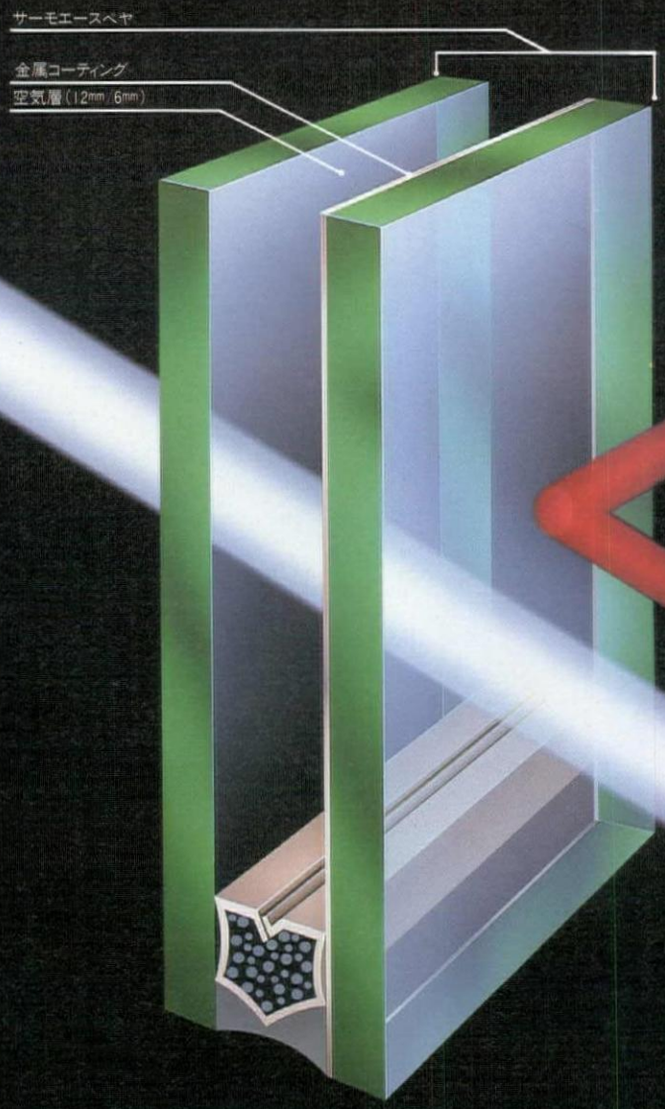


■サーモエースペヤの機能と採光・保温効果

透明金属が窓の性能を飛躍的に向上

特殊断熱ペヤグラス

サーモエースペヤ



旭硝子

本社〒100東京都千代田区丸の内2-1-2(千代田ビル)
札幌支店TEL011(212)3886/仙台支店TEL0222(25)7304
東京支店TEL03(283)9411/関東支店TEL03(283)9388
名古屋支店TEL052(583)2895/大阪支店TEL06(373)5876
広島支店TEL082(248)3737/福岡支店TEL092(441)4123

第5回PA国際家具コンペ

次の世代のアイデアを発表し，同時に優れたデザインを認める場を提供することを目的としたPA誌主催の第5回国際家具コンペの結果が発表になった．　今回は，30ヶ国から920の応募作品があり，入賞4点，佳作7点が選出された．

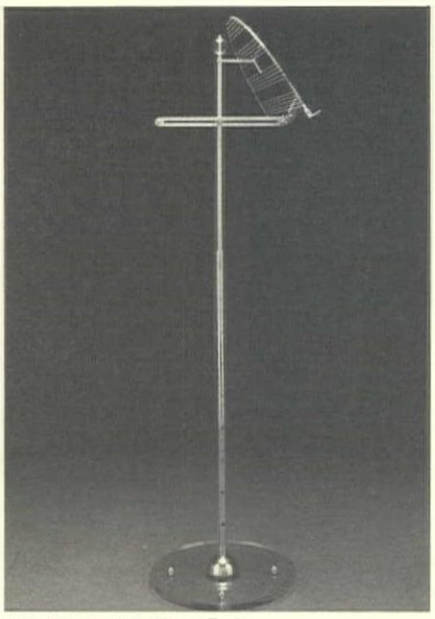
入選：Chris Gazso, Michael Graves, Rory McCarthy, Ruth Rotholz＋Roger Tucker

佳作：Jeanine Centuori, Sava Cvek, William H.Grover, Zack McKown, Kenneth Kaplan＋Christopher Scholz Andrew Metter, Jessica Silverstein

入選したC.Gazsoの作品は，ラッカー仕上の木材とガラス，金属で作られた衣装ダンス，M.Gravesのストゥールは，楓のベニア製で，黒檀で象嵌した足と黒のウールサテンのクッションをもつもの，R. McCarthyの机は，黒く着色されたアルミとスティールのフレームで，樫で作った古典的ファサード模型をフロントパネルにしている．Rotholz＋Tuckerの作品は，アクリルと真鍮でできたミュージック・スタンドである．審査員は，T.H.ビービィ，チャールズ・ガスミー，ペリー・A.キング，リチャード・シュルツ，リチャード・S.ワーマンの5名で，この授賞が，デザイナーや学生を刺激し活発な論争を呼ぶことを希望している．



入賞：Rory McCarthy



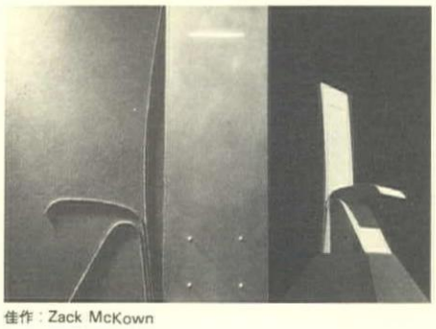
入賞：Ruth Rotholz＋Roger Tucker



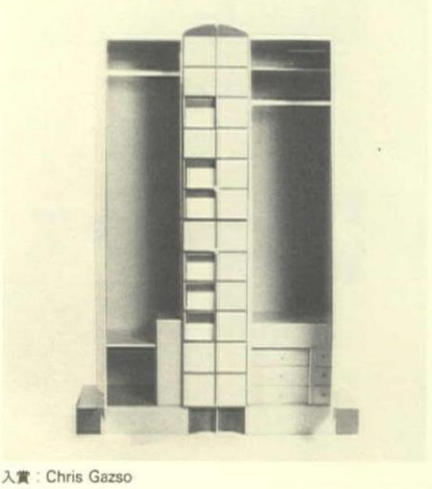
入賞：Michael Graves



佳作：Jessica Silverstein



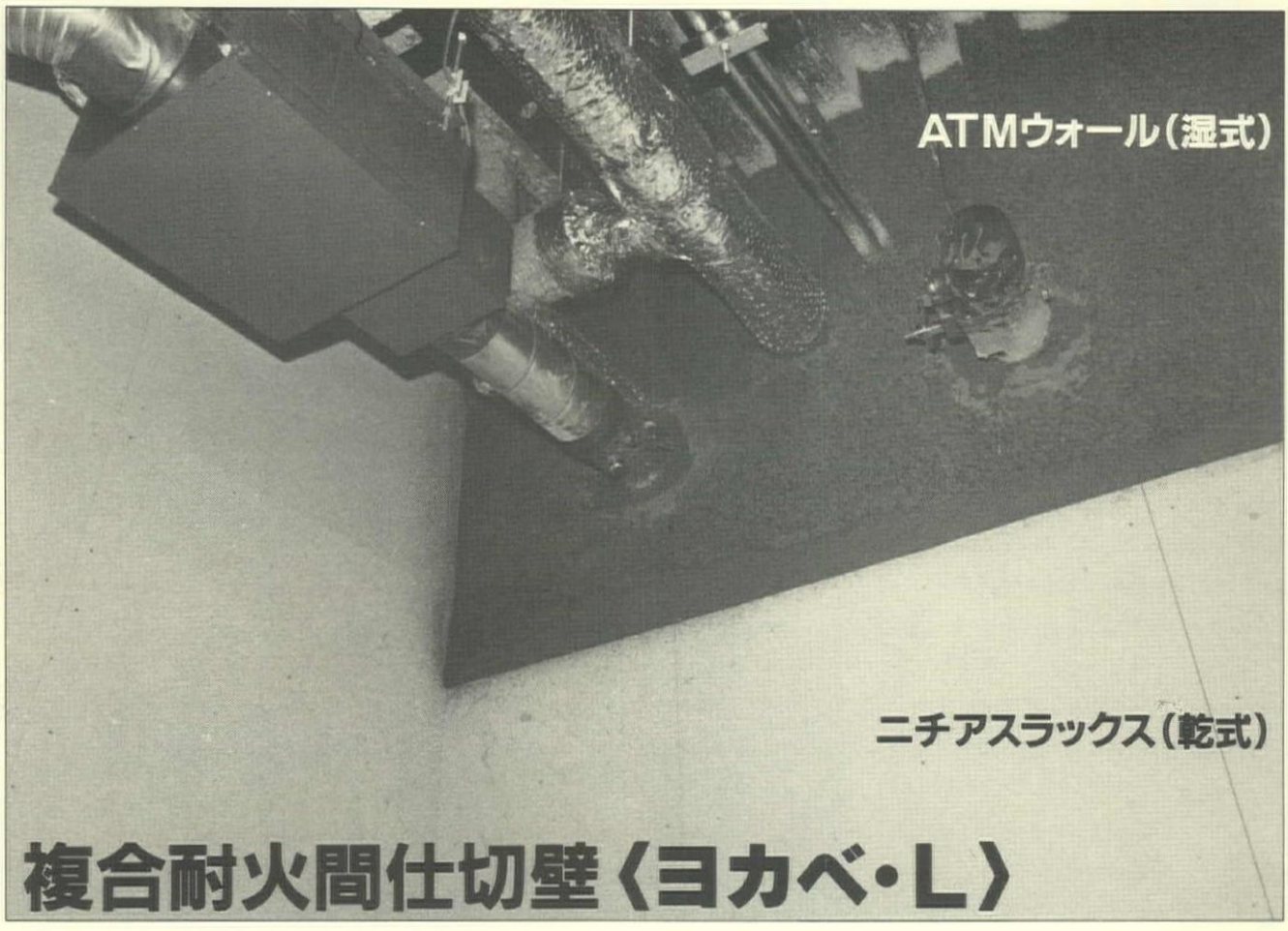
佳作：Zack McKown



入賞：Chris Gazso

ニチアスの燃えない建材

湿式 ATMウォールと、乾式 ニチアスラックスの 機能一体。



複合耐火間仕切壁〈ヨカベ・L〉

新工法

湿式・乾式工法の一体化では、初の"耐火指定"を取得！

建設大臣指定 W2157（昭・59年7月11日）

耐火間仕切壁の代表的な施工法である湿式工法と乾式工法の一体化は、従来より、さまざまな工法が試みられてきました。

ニチアスは、これら工法の長所のみを抽出し、ATMウォール（湿式吹付ロックウール）と、ニチアスラックス（けい酸カルシウム板）を一体化。新たに、複合耐火間仕切壁〈ヨカベ・L〉として確立させ、耐火指定を取得しました。

湿式工法と乾式工法の特長の相乗効果が、品質の向上と現場工数の低減を生み出します。

〈ヨカベ・L〉は、今、画期的な新工法として、各方面に大きな反響をよんでいます。

複雑な壁面は、従来の湿式工法で

天井裏の設備配管、開口部等の壁面は、ATMウォール（湿式工法）で施工します。湿式工法ですので、これら複雑な取合部の施工が容易であり、また、気密性と耐火・遮音性に優れます。

表面化粧を施す壁面は、乾式工法で

クロス・タイル貼り等、いろいろな表面化粧を施す壁面は、ニチアスラックス（乾式工法）で施工します。乾式工法ですので乾燥期間を必要とせず、工期を大幅に短縮することができます。

ニチアス
本社／東京都港区芝大門1-1-26 〒105
☎03(433)7241 大代表
東京支社☎ 03(438)9741(代)
名古屋支社☎052(931)9217(代)
大阪支社☎ 06(252)1371(代)
九州支社☎092(531)3031(代)

戦い済んで，日が暮れて

●ラ・ヴィレット公園コンペのカタログ刊行

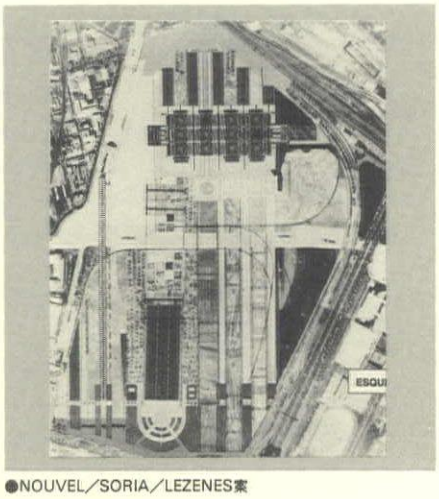
《L' Invention du Parc》

1983年３月，「次代に渡す新しい公園の概念は何か．」という問いを発して行われたパリ，ラ・ヴィレット公園コンペは，結果的に革新的な公園のあり方を主張する建築家と保守的公園の概念に立脚する造園家達との一騎打ちになってしまったようだ．

昨年12月にこのコンペのカタログとして，世界37ヶ国471組の建築家，造園家，都市計画家達が果敢に取り組んだ応募案の中から68点が１冊の本にまとめられ，フランスから出版された．　そこでは，様々な角度から人間とランドスケープ，人間と都市，そして都市とランドスケープの関わり方が再考され，提案されている．　都市における人間の日常行為の新しいあり方の発見を求めてやまない建築家達，そしてあくまでも自然と人間の関わり合いの強化を主張する造園家達．　結果的にはチュミをはじめとする前者の方に軍配があがったのだが，事態はそれほど単純ではなさそうである．

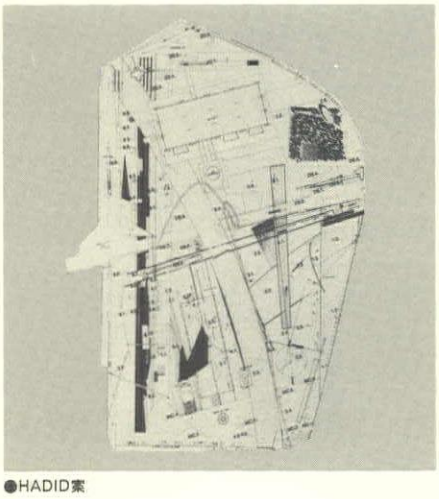
近年にみられる公共広場デザインに関しての造園家達による異議申し立ては，「ランドスケープ・アーキテクチャーにおけるポスト・モダン・デザインは建築のそれと同様，寄せ集めの地域的折衷主義に逆戻りし，〈多様性と対立性〉を認めている傾向が見られる．　入念な力作であっても，短命なステージセッティングにすぎない．」（ガレット・エクボ，SD8404《庭園》特集参照）といった具合いである．　彼らは求めるべきものは，〈人間と自然の関わり〉の新しいあり方であって，多様な偽装的エレメントで人間と自然との狭間を埋める事ではないと言うのである．つまり，ランドスケープが形態的虚飾によって拘束されてしまう事を懸念しているのである．

そもそもランドスケープデザインは建築とは別に独自な発展をして来た．　村のレイアウトや作物植えつけの幾何学形態などは，ヴェルサイユやチュルリーに見られるグリッドシステムに発展していった．段々畑や山間部開発の非整形性はモンソーらによって，ピクチュアレスクとして転用されていった．　ランドスケープデザイナー達は，来るべき次の庭園形式も「都市内部に自然を回復する」という教条から生まれうると信じている面がある．　しかし，ここでチュミが示した公園のモデルは，ラ



●NOUVEL／SORIA／LEZENES案

NOUVEL／SORIA／LEZENES，France（入選）vs HADID，Great-Britain（落選）
未来の公園は，木々の鬱蒼とした背景幕でも，壮大な文化施設の建築を引き立たせるためにデザインされ，構成された人工のランドスケープではない．　この公園は，科学と音楽とに緊密な関係をもつ．　そしてなおかつ，ある特質や可能性をもった，独自の創造物として存在しなければならない．　この様なコンセプトが暗示されている２作品．



●HADID案

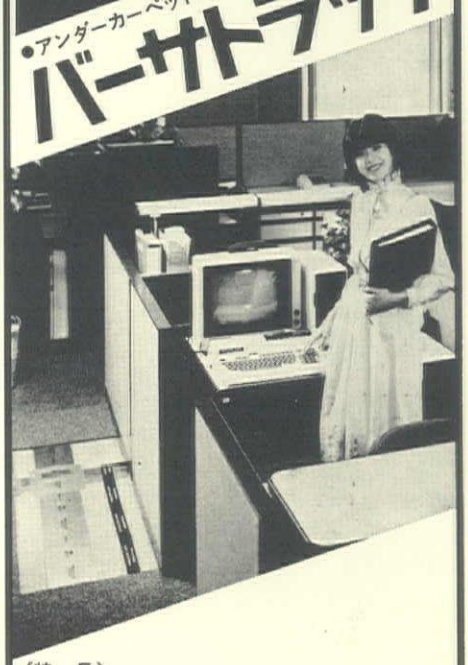
Nouvelらは自然の気高さを脅かしているのは近代技術である，という既成概念に挑戦している．　過去へのノスタルジーに逃げ込んではいけない．　現代においては避ける事のできない，技術と自然との出会いの中からこそ，新たな詩が生まれてくるのである．　一方Hadidは公園の中に，都市性の捕え直しをうたっている．　例のワンパターン撒き散らし図面．　新しい都市生活やライフスタイルを投影すると，この通り折り重なった幾何学模様（プラネタリー・アーキテクチャー）が見えてくる．

OA時代のオフィス内電力、データ伝送、電話配線方式に最適です。

ビル内配線方式の革命

●アンダーカーペット配線システム

バーサトラック



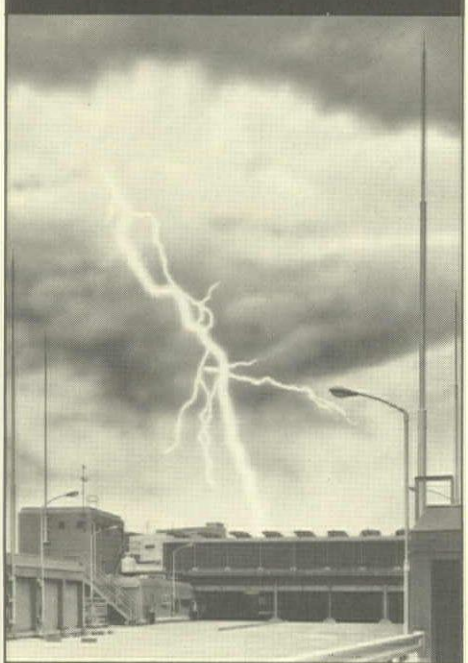
《特　長》
●自由な配線レイアウトができます。
●布設が簡単で、追加、変更も容易に行えます。
●美観にすぐれています。
●トータルコストおよび建築コストが低減できます。

《用　途》
●近代的新築オフィスビル。
●オープン・オフィスシステムビル。
●テナントビル、貸オフィスビル。
●銀行、デパート、スーパー等商用ビル。
●既存オフィスのＯＡ化対応改装。
●工場のＯＡルーム、設計室等。

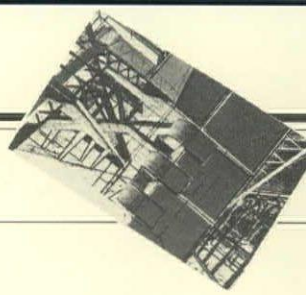
日立電線

本社：〒100 東京都千代田区丸の内2-1-2
（千代田ビル）
電話・東京03(216)1611(大代表)

避雷設備
／設計・施工
避雷針器材
／製作・販売



東京避雷針工業株式会社
本社　東京都中野区弥生町1丁目55—11
電話（03）372-5261（大代表）〒164
支店　横浜市神奈川区星野町1—12
電話（045）453-1991（代表）〒221



●ラ・ヴィレット公園コンペのカタログ刊行

ンドスケープデザイナー達の考え方とは全く意を異にしている．

チュミは，このプロジェクトの主眼を以下の事に置いている．　つまり，新しい建築の概念，新しいプログラム，そして新しい社会的・文化的環境を網羅し得る公園のモデルを提案する事である．　そこでは人間の行為の拡大が模索されているのであって，新たな建築形態，新たな庭園形式を造り出そうとはしていない．

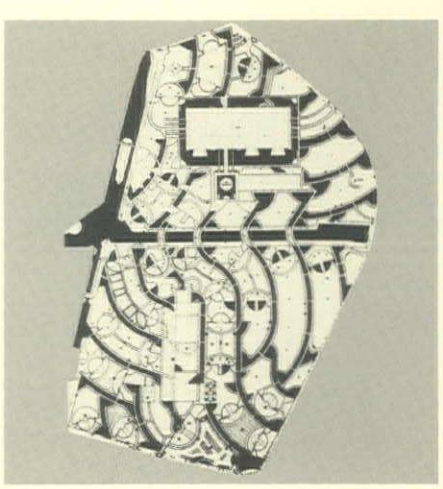
チュミは人間の行為を，それが行なわれる場との関係で考えようとする．　「教会堂での殺人と広場での殺人では全く違う．」という彼の言葉に見られるように，様々な人間の行為は場所によって解釈し直されるものだと言うのである．　ラ・ヴィレットのコンセプトの中では，例えば，〈私はスケートリンクでスケートをしている[*1]〉を〈私は倉庫のような大ホールでスケートをしている[*2]〉，さらに〈私は博物館の球状劇場の上でスケートをしている[*3]〉と展開していく．彼はこの様な言葉の因習的感覚をシフトする中に，〈行為と場〉の関係を発展させる鍵があると言う．　そして，〈行為と場〉の関係に異和感が生じる時，それを関係の新しさとして積極的に受け入れようとしている．具体的にラ・ヴィレットのプログラムでは，ワークショップ[*4]の機能的統一が一旦解体され，その要素，例えば音楽，ビデオ，プラネタリウム，他のテクノロジーなどがレストランや浴場，天文学的庭園という場で再編成されている．

〈行為と場〉の関係の偶発性を様々に生み出すために，チュミは二つの方法を考えた．　一つは，点（オブジェ）と線（行動）と面（空間）という三つのシステムを無調整に重ね合わせる事．　もう一つは，彼自身がディレクターとしての役目に徹する事である．　前者によって，例えば〈ピアノ・バーを通りぬけるトラック（ジョギング用）〉や〈グリーンハウスの中での水泳〉〈スイミングプールの中にある図書館〉の様な事態が生じる事になる．　後者によれば，様々な建築や空間（フォリー，小庭園etc.）のデザインには，諸々のデザイナーにまかされる．　チュミにとって，デザイナーが建築家，造園家，彫刻家のいずれであろうと問題ではない．　彼にとって，フォルムや材料の選択は対象物が「どの様に見えるか」に関与するだけで，ネガティヴな



●ONO案

ONO, Brasil（入選）vs GALVAGNI, Italy（落選）
都市は人々の様々な要求を満足させる空間である．　公園が都市性を持つべきであるとすれば，様々な利用者に答える多様な設備や機能を用意しなければならない．
Onoはチューヴ状（半径約2.5m）のサーキュレーション・システムを考えた．　これにより，南北のゾーンが分断されることもなく，フレキシブルに公園内の施設群を結ぶ．　又，悪天候，夕暮れ後でも公園内を安全に移動できる．　多くの作品の中で



●GALVAGNI案

もこれほど強引に移動のための設備を与えたものは少ない．
このチューヴは屋根のあるプロムナードの発展形と考えられる．Galvagniは人々のコミュニケーションを強調している．　水と谷と歩道を中心に構成された奇妙なパターンは，様々な都市的労働施設（蒸気発電所，セメントプラントetc.）を内包したまま，人々の出会いの場を提供している．　まさに生産的都市の縮図といったものであろうか．

意味でしかなく，むしろ重要なのは，対象物自体よりもひょっとしたら場違いであるかもしれない対象物同志の関係や，一連の前後関係なのである．

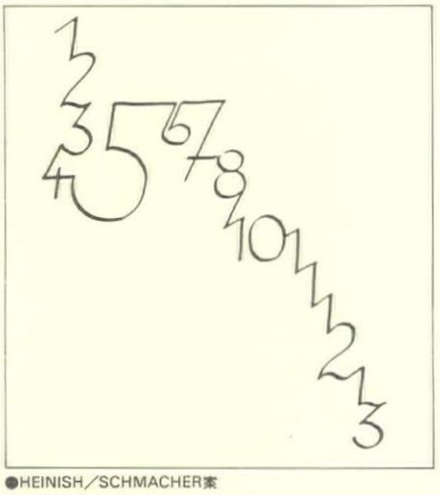
彼は，この公園のコンセプトの中で人間の行為を拡大できるような場やイヴェントを設定するよう，プログラムを編集している．　例えば，緑のシステムと名付けられたシークエンスでは，一連の遊歩道（ジョギングコース）とそれにまつわる多数の小庭園やオブジェなどが一体となって構成（編集）されている．　チュミは，映画のフィルムが1コマ1コマ連続するように，人々の動き（遊歩道）をフィルム上のサウンドトラックに対応させ，移動に伴って次々と現われる場面をピクチャートラックに対応させた．　人々は遊歩道を歩きながら，様々な小庭園やオブジェがまるで映画のフィルムを見る様にして刻々と変わっていく事を体験するのである．

ラ・ヴィレットのコンペにおけるチュミの意図は，様々な人々の行為とそれが行なわれる場の対応関係を強調し，新しい関係を多く提案する点にあり，その是非を問う事ではない．　これは，過去の遺産に立ち返るのでも，新たな物を付加するのでもない．　もはや新しい意味を発し得ない色あせた織物の糸を解き，再び織り直してそこに新しい図柄，すなわち意味を見い出そうとする試みであると言えよう．　そして我々が，その場を体験し積極的行為をしてこそ，彼の意図は評価される．　そんな一つのユートピアに遊ぶかどうかは，結局のところ我々の選択しだいであるが，心すべきは次なる庭園がもはや形の問題ではなくなって来ているという事だろう．

都市の広場や公園は，自然の再現，文化的設備の充足，様々な意味の付与など考慮すべき内容に富む．　勝利者はひとりであるが，しかし参加者ひとりひとりが様々な局面にとり組み，未来を形作ることに貢献したのである．　下の作品は，この様な一面を浮きぼりにしている．

■編：山下秀之＋岩下暢男

＊1　行為と場は正当な対応をしている．
＊2　行為と場は必然的な対応関係ではない．
＊3　行為と場は矛盾する関係にある．
＊4　ラ・ヴィレットのステートメントの中で要求されている様々な施設．



●HEINISH／SCHMACHER案

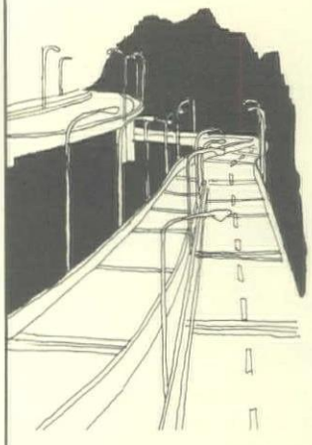
HEINISH／SCHMACHER，West Germany（入選）vs BARUFFI／DE SAHTI，Italy（落選）
地理的あるいは文化的，歴史的コンテクスト等は，まるで表現されていない．　それらは思考外に存在するかの様である．　つまり関心事は，自分自身のイメージの提出．　ラ・ヴィレット公園はどこにもないのだ．
Heinish案は，数字のもつ抽象性による，数字の持ち得る多様な意味作用を意図している．　コンセプトでは作者自身による言葉で数字のイメージが，散文的に述べられ，それらは詩的とも啓示的とも言える．



●BARUFFI／DE SANTI案

Baruffi案は，様々な宇宙船の様なオブジェが，宇宙に浮遊しているかの様に描かれている．　それらが「最も近い世代のもの」の代表であり，その形態は，我々が生きている現在を象徴し，我々の現在の存在を啓示するものであると，彼らは言う．

明日の環境づくりを考える……



営業品目

ビル、工場、一般電気設備
防爆電気設備
受変電設備
外線工事及び計装工事
電気機器の販売

設計・施工

篠原電機工業株式会社

本　社　〒210 川崎市川崎区藤崎4丁目4番4号
電話 川崎 044（244）1241（代表）
横浜営業所　〒231 横浜市中区真砂町4丁目43番地 木下ビル4階
電話 横浜 045（651）4268（代表）
大和営業所　〒242 大和市下鶴間字甲10号1614番地89
電話 大和 0462（76）3107（代表）
相模原営業所　〒228 相模原市相模大野6丁目29番
電話 町田 0427（44）3238（代表）
出張所　岩井、伊勢崎、藤枝

三機

品質への限りない挑戦。
技術と技能。



日々刻々と進歩する先端技術、その成果を製品の中に反映させ実らせる技能。このふたつがあってこそ、確かな品質が保証されます。三機は、現代から未来へ向けて、高品質な人間環境づくりに取り組んでいます。そのために、さまざまな分野で時代をリードする、高度な技術と高水準の技能とを結合し、独自の総合エンジニアリングを推進しています。

建築設備

プラント設備

三機工業株式会社

本　店　東京・日比谷・三信ビル　TEL(502)6111
支　店　大阪・名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・四国

新刊紹介 BOOK INFORMATION

［中国建築留学記］
村松伸＝著
四六判　204頁
鹿島出版会　1600円

1978年に大学の建築学科を卒業した著者は，中国近代建築史研究のため，1981年９月から84年３月まで，２年半にわたり中国政府の国費留学生として，北京の清華大学建築学科に留学した．

本書は，その出発準備から帰国まで，半年間の北京言語学院での中国語学習，清華大学大学院生としての調査研究活動，さては日常の生活に及ぶエッセイ集で，14編を４部に構成している．

第Ⅰ部〈中国人になりたかった日本人留学生〉は，国際色豊かな留学生を交えての中国学生生活一般に関する５編，〈留学まで，もしくは悪夢の「手紙（ショウジイ）」のこと〉〈僕は素敵な「単位（タンウエイ）」人間!!〉〈当世清華大学学生気質（かたぎ）――「洋（ヤン）」と「土（トウ）」〉〈北京小組（ペキンティームファイブ）五，奮戦ス〉〈中国語がめきめき上達する〉を収め，第Ⅱ部〈中国建築だって，おもしろい〉は，現代中国の建築事情についての４編，〈私説梁思成伝（リヤンスーチオン）〉〈ペイ先生の大いなる誤算〉〈北京住宅哀歌〉〈新陳代謝（メタボリズム）派大師，黒川紀章先生採訪記（インタビュー）〉を入れる．　第Ⅲ部〈旅は道づれ，中国は情け〉は，北京はもちろん，上海，大連（ターリエン），沈陽（シエンヤン），にも及んだ調査行の中でのさまざまな人々との触れ合いを描く４編，〈中国旅行のすすめ〉〈上海のナナハン・ライダー〉〈四合院の中の鉄腕アトム〉〈揺れる満州〉から成り，第Ⅳ部〈気分は，まだ，北京!!〉は帰国に際しての感慨を述べている．

「ナナハン・ライダー」や「鉄腕アトム」が登場するからというわけではないが，文章は軽快で，多分にアニメ的である．　しかし，見るべきところ，いうべきことはしっかり押えており，いささか堅い書名「留学記」にも違和感を覚えさせない．

［社会とともに歩む―日本の建設産業］
社団法人　日本建設業団体連合会＝編集
Ａ４版　86頁
社団法人　日本建設業団体連合会

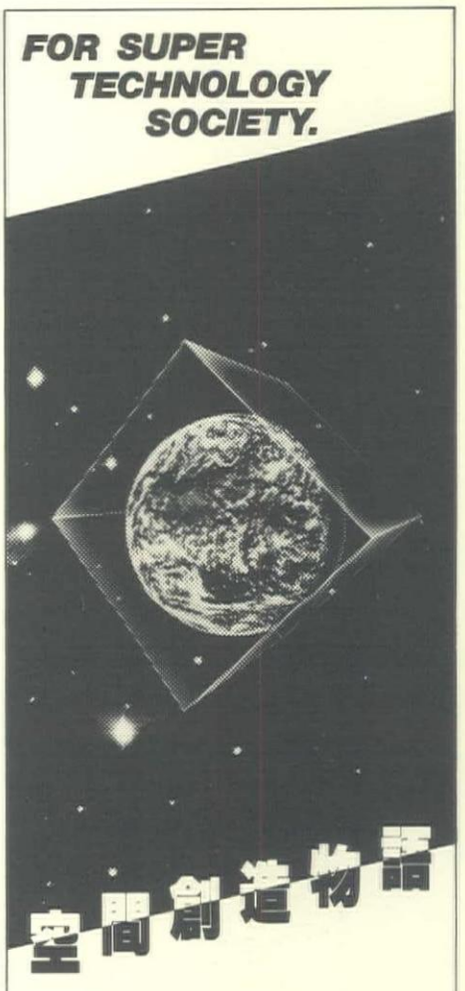
社団法人　日本建設業団体連合会より，建設業界初の試みとしてファクトブックが発刊された．　書名にも表われているように，建設産業がいかに国民生活に密着している産業であるかを，広く一般の人々の理解と認識を得るべく，企画・編集されたものである．　建設産業の仕組みと役割，建設技術，まちづくり，建設産業の新しい展開の方向，その他統計資料・年表等という内容が，豊富なカラー写真＋図版によりグラフィカルに分かり易く紹介されている．

なお，このファクトブック希望者は，切手350円分を同封のうえ，郵便番号，住所，氏名，年令，職業，電話番号を明記して下記宛５月31日までに申し込むこと．

〒104　中央区八丁堀２－５－１　東京建設会館　社団法人　日本建設業団体連合会ファクトブック係　Tel. 03-553-0701（代）

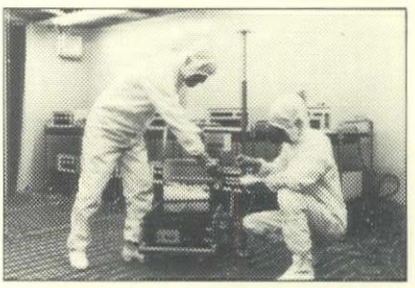
［つくば万博ソースブック《QUEST》］
日本放送協会＝監修
日本グラフィックマップ＝制作・編集
250ミリ×130ミリ　175頁
日本放送出版協会　1200円

現在開催されている〈科学万博つくば'85〉のガイドブックである．　数多くある類似書の中で，本書の特色は総て英訳付きで，各パビリオンを始め乗り物までを多くの図面とイラストにより，建築的でグラフィカルな構成とした点にある．　建築家・デザイナーには好感の持てるものと言えそうだ．



限りないミクロの世界への挑戦。…80年代、超LSI・バイオテクノロジーなどの先端産業では、空気中の数ミクロンの微粒子の存在さえも大きな障害となるため、生産環境はとくに重視され、清浄空間＝クリーンルームが不可欠の条件です。今後は、科学技術の進歩とともに、より精度の高い空間創造技術が要求されてきます。こうした産業界のファイン化に対し、SNKは、空調技術へのさまざまなニーズに応えるため、限りないミクロの世界への挑戦を続けています。

暮らしから産業まで、あらゆる空調分野に総合エンジニアリングでお応えします。●保健空調分野：オフィス、ホテル、マンション、住宅、デパート、劇場、病院、学校、体育館、船舶、海洋構造物　●産業空調分野：機械、電気、電子、化学、薬品、食品、冷蔵・冷凍、原子力、バイオなどの工場・研究所諸施設



✚上の写真は、各種装置類を使っての実証実験、大型コンピュータによる各種シミュレーションを行ない、その研究成果が現場にいかされています。
✚上のイラスト（上原遼氏の作品）は、コンピュータを使用し、数理的構造にもとづいたスーパーイメージの世界です。

21世紀の環境創造をめざす SNK
新日本空調
〒103東京都中央区日本橋本石町4-2(三井第2別館)
☎(03)279-5681(代表)

明日の豊かな環境をつくる。

大成温調
工業株式会社

本　社　東京都品川区大井1丁目47番1号
〒140 ☎03(774)1111(大代表)
支　店　東北・関東・大阪
営業所・出張所
名古屋・静岡・千葉・新潟・横浜・栃木・茨城
秋田・兵庫・青森・盛岡・長岡・甲府・沖縄

主要業務内容
●冷暖房空調設備工事／冷凍冷蔵設備工事の設計・施工請負
●設備／機器に関するコンサルタント業務
●設備装置の修理/整備/運転調整/保守点検
●日立冷凍空調機器の販売

[日本の現代建築——1958-1983]
鈴木博之＝編
288ミリ×283ミリ　224頁
講談社　9800円

評者＝
難波和彦

〈一つの〉戦後建築史として読む

戦後の代表的建築，92作品をとり上げ，建築家の年令順にしたがって紹介した，戦後建築史の概説書である．　巻頭には，二つの論文——この本の編者である鈴木博之の〈現代日本の建築〉と，英国の評論家レイナー・バンハムの〈世界の建築の日本化〉——が置かれ，さらに巻末には，紹介された建築を設計した51人の建築家——村野藤吾（1891年生）から高松伸（1948年生）まで——のプロフィールが付けられている．

とり上げられている建築は，専門家にとってはどれも馴染み深いものばかりであり，その意味では，一般読者や建築を学び始めたばかりの学生を対象とする入門書，といった感が強い．　しかし，巻頭論文と個々の建築の解説を，通して一つの流れとしてみれば，そこから編者の建築をみる眼——歴史観，建築観——を読み取ることができるであろう．

全体は大きく三つの世代，〈黄金の世代〉〈離陸の世代〉〈表層の世代〉に分けられ，これに〈80年代の表現〉として，最近話題になった五つの建築が加えられている．

〈黄金の世代〉〈離陸の世界〉にとり上げられている建築は，ある程度時間を経て，一般的な評価がほぼ固まったものが多い．これに対して，〈表層の世代〉の建築には，編者の眼がはっきりと反映されているように思える．

鈴木の論文は，とり上げた建築を戦後建築史のコンテクトの中に位置づけ，歴史的解釈を加えたものである．　編者が建築史家であるために，こうした構図をとらざるを得なかったのだと思うが，歴史的解釈というのは，しばしば暴力的になり勝ちだし，バンハムのいう〈選択的健忘症〉に陥ることも多い．　とはいえ，歴史はそうした一定のパースペクティヴの下に構築されざるを得ないことも確かである．

要は，個々の建築のもつ，解釈からはみ出すようなノイズをどう考えるか，であろう．　建築家であれば，むしろそちらの方に眼が行く．　そうした眼で見ると，ここでとられている構図は，筋が通っていて明解な分だけ，幾分，窮屈な印象を受ける．

これに対し，バンハムの論文は，肩の力が抜けていて気楽に読める．　自分の国の歴史を見る場合と，他の国の歴史を見る場合との違いかもしれないが，もう一つは，バンハムが明確な歴史的コンテクストを立てず，日本の現代建築の多面的を見ようとしているからであろう．　〈世界の建築の日本化〉において，バンハムが最も重要な要素と考えているのは，〈イメージ〉である．コンクリート・フレームと木造のイメージはブルータリズムに影響し，日本と西洋の混成文化のイメージは，ポスト・モダニズムを先導した，と彼は言う．　そして，最後に石井和紘の〈54の窓〉（私自身も協力した建物だ）のイメージをとり上げ，今後の建築はこのイメージによって先導されるかもしれない，と結論づける．　〈54の窓〉が10年ぶりに再びスポットをあびたわけだが，この点については，是非日本の建築家の意見を聞いてみたい気がする．

●なんば・かずひこ／建築家

旅とトポスの精神史
［祝祭都市——象徴人類学的アプローチ］
山口昌男＝著
B6判　306頁
岩波書店　1600円

評者＝
松永安光

都市のホログラフィー

A　私の記憶では今から20年程前に都市論が流行しましたね。　それがまた復活して来るのでしょうか。

B　あの当時の流行はケヴィン・リンチやフィリップ・シールの記号論に触発されたもので，その状況を要約するのが磯崎新の〈見えない都市〉という論文でした。

A　それは主に建築畑の話でしたね。　おそろしく楽観的でネアカ過ぎるようにも思えましたが。

B　都市に光と闇の部分があるとすれば，光の部分ばかりを見ていたのです。　何しろ列島改造論のイデオロギーを支えていたのですから。

A　それが俄かに内向的になって，都市なんか論じるのはアホかという風潮に変りましたね。

B　そうとばかりは言えませんが，誇大妄想論ははやらず，小ぢんまりしたアーバンデザインの手法ばかりが論じられるようになったのは確かですね。

A　そしていま，都市がまた論じられるようになって来ました。

B　この本の著者によれば，1976年頃から他分野の人々と都市を考え始めているという事です。

A　そういう風潮の反映が前田愛や栗本慎一郎という人々の著作であり，この本が含まれている〈旅とトポスの精神史〉シリーズということでしょうね。　ところであなたがお読みになって感想はどうでしょう。

B　まず第一に，山口昌男の著作の常として知の遊び心を挑発されるという事を指摘しましょう。　この本は都市論へのこよなきチチェローネとなります。　恥ずかしながらジョゼフ・ライクワートの都市論は読んだ事がなかったのですが，是非，訳して見たい気になりました。

A　山口さんのもっと知りたい，もっと調べたいという気持が伝染するのでしょうね。

B　次に，これも言うまでもない事ですが，都市におけるヴァルネラブルなものに対する視点が，ここでも強調されています。

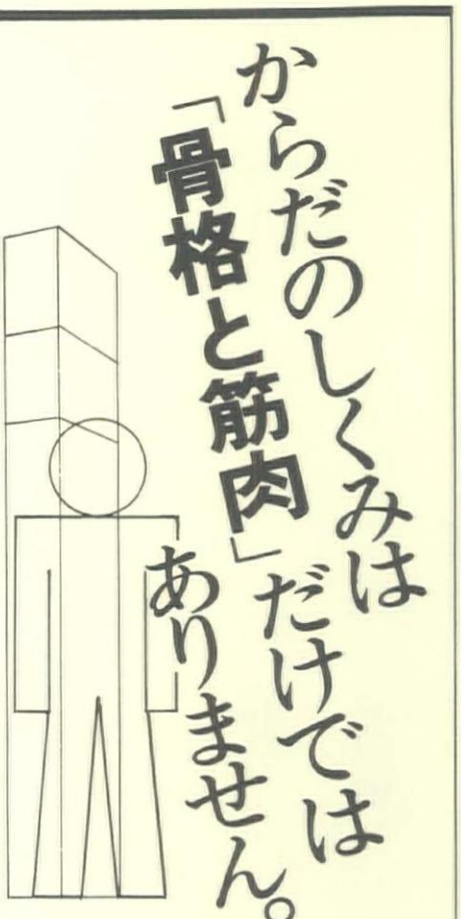
A　四谷怪談に見られる江戸の都市構造の解読は，松山巖の乱歩の例と並んで興味が尽きませんね。

B　《ゴーレム》のゲットーがマンハッタンの原風景だというような指摘も刺激的です。ところで永年の山口ファンとしては巻頭にある著者の都市遍歴が嬉しい。　中でも生誕の地である美幌町のイメージマップは，著者の思想の原点を示している点で貴重です。

A　サブタイトルにある象徴人類学的アプローチとはどういうものでしょうか。

B　都市の中にコスモロジーを見出すという著者年来の主張でしょう。　これは，この本の全体の構成についても言える事ですが，都市のようにとらえどころのない現象を記述するには様々な方法を援用しなければならない。　この本で著者はホログラムとしての都市を描き出そうとしているのだと思います。

●まつなが・やすみつ／建築家



神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないでしょうか。
ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴しい**居住性**が生れると思います。
しかし……
それだけで終ったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴しいことではありませんか。
集中管理或は**集中制御**によって……
省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能を**フル**に発揮できるのではないでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社
本　社　〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部　〒108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(454)5141大代表

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社
●営業種目
空気調和設備/給排水衛生設備/塗装設備
/公害防止関連設備の設計・製作・施工
本社・東京本店 東京都新宿区西新宿2-6-1 新宿住友ビル
☎03-344-1851(大代)
大阪支社 大阪市北区中之島3-2-18 住友中之島ビル
☎06-448-5851(代)
北海道支店☎011-222-3371 東北支店☎0222-21-7800
名古屋支店☎052-211-1535 中国支店☎082-247-5541
九州支店☎092-431-2147

お知らせ INFORMATION

日建設計 パース・CG展

最近5年間の主な建築パース作品（40～50点）に加え，CGによる表現をパネルとVDTで展示するくパース・プラス〉と題された展覧会。 会期中，阪大教授で評論・劇作家の山崎正和氏の講演会を開催。
会期：6月24日(月)～7月6日(土) 9：30～17：30
会場：建築会館1階展示コーナー
東京都港区芝5—26—20
●講演会
〈都市生活の表現としての建築〉 山崎正和
日時：6月28日(金) 18：00～19：30
会場：建築会館ホール（建築会館内）
定員：300名（先着順） 入場料無料

日本火災軽井沢山荘 公開コンペ結果発表

日本火災海上保険株式会社軽井沢厚生寮公開設計競技の審査が4月25日行われ，発表された。 今回のコンペは，応募登録総数1580件，応募総数654点にのぼる我が国で実施の設計競技では史上最高の規模となり，清家清氏(審査員長)をはじめとする5名の審査員(近江栄，増沢洵，長島孝一，品川正治)により，最優秀1点，入選2点，佳作10点が選定された。
最優秀：秋元和雄
入選：（2位）杉本喜一，（3位）宮脇檀
佳作：坂本一成，土屋裕＋吉田研介，足立光章，平川国一，小野英子，内藤廣，浅井謙，毛井正典，小柳津醇一，川田一栄

エミリオ・アンバース展

ニューヨークとボローニャに事務所を持つアルゼンチン生まれの建築家エミリオ・アンバースの展覧会が4月16日～5月6日，東京・六本木のアクシス・ギャラリーで開催された。 建築のみならず，工業デザイン，グラフィック・デザイン，展覧会デザインなど，オールラウンドに活躍するクリエイティヴなアンバーツの全貌を見せた展覧会であった。



アスプルンド展

近代建築の先駆者として知られるスウェーデンの建築家エリック・グンナアル・アスプルンドの全作品のオリジナル図面を展示。
会期：6月8日(土)～7月14日(日)
12：00～18：00 月曜休館
会場：GA gallery Tel：03-403-1581
東京都渋谷区千駄ケ谷3-12-14 入場料：500円

Worldesign 85 ICSID 参加とアメリカデザイン研修旅行

8月20日から24日まで，アメリカのワシントンD.C.で開催される世界で最も独創的で先見的なデザイナーの会議である〈ワールデザイン85／ICSID USA〉に参加し，その後，シェーカー教徒の村，ウィリアムズバーグ，トーマス・ジェファーソン設計のヴァージニア大学，ピーボディ博物館を視察するデザイン研修旅行が実施される。
旅行期間：8月19日(月)～9月1日(日) 14日間
8月19日(月)～8月28日(水) 10日間
費用：14日間コース-59万円，10日間コース-48万円
申込締切：6月29日(土)定員(30名)になり次第締切
問い合わせ先：日本インダストリアルデザイナー協会
Tel：03-433-6391～3

もうひとりのガウディ展

スペインの建築家A.ガウディを中心に同じく手作業的に作られた他の建築家達の建物を写真・図面の展示，映画・講演により市民に紹介，これらをまちづくりの視点から捉え理解を深めて貰おうという企画。
会期：7月6日(土) 13：00～21：00
会場：前橋市市民文化会館1Fギャラリー
●記念講演会
講演：坂田泉 映画：粟津潔，勅使河原宏
日時：7月6日(土) 18：00～20：55
会場：前橋市市民文化会館 Tel.：0272-21-4321
入場料：1300円(前売券)，1500円(当日券)

訂正とお詫び

本誌4月号152ページの中で，以下の項目が欠落していましたので追加訂正するとともに，関係者各位にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。
コンピューター・グラフィック ©Slow Brain：入江経一

美しさを堅持する。
信頼を保持する。



出雲造機本社工場(島根県安来市)

鉄の強さにアルミニウムの耐食性をプラスした10年保証の耐久性鋼板

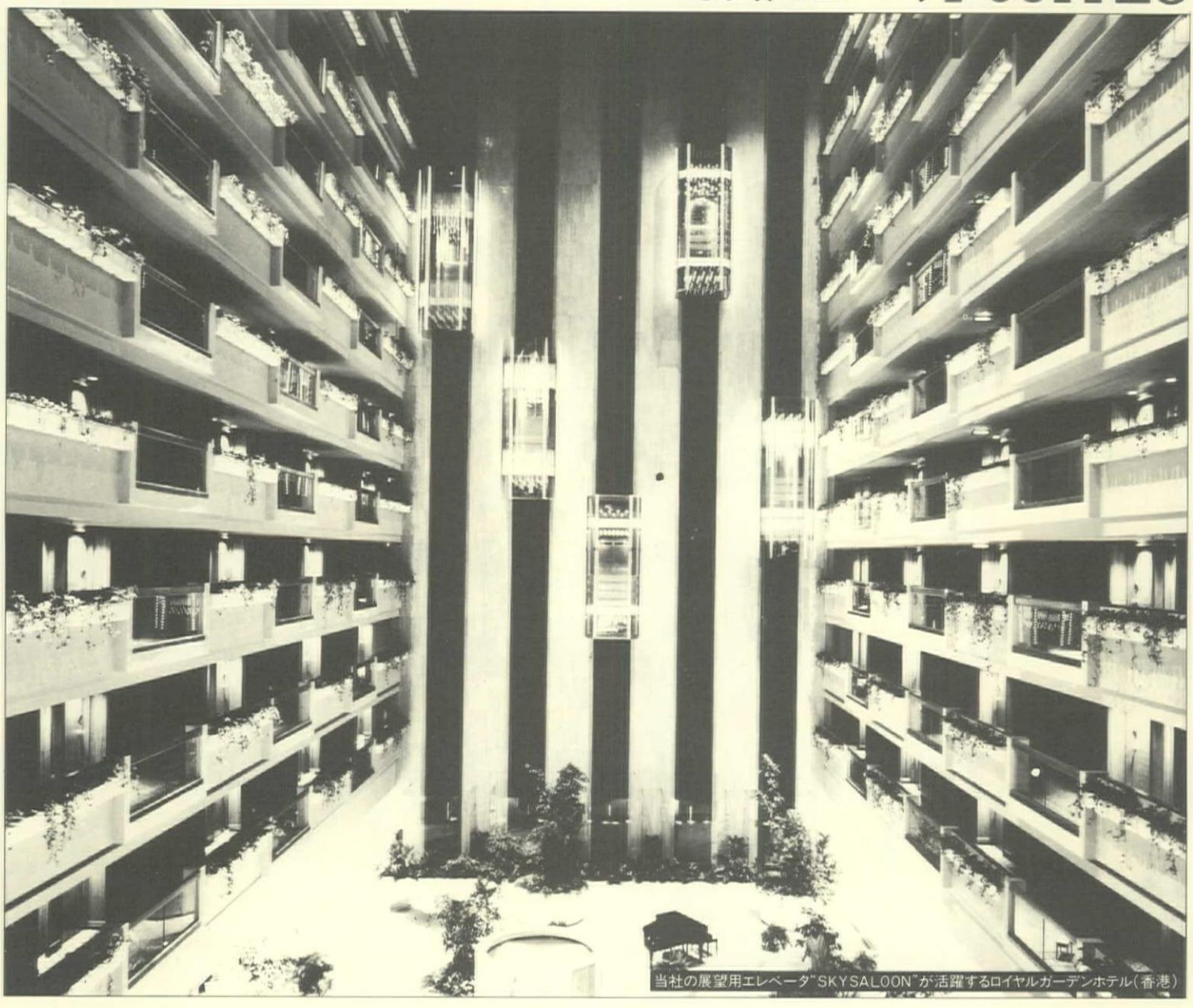
耐候用アルスター鋼板

日新製鋼

海岸地帯や工業地帯などの厳しい環境のもとでは、屋根材や壁材が建物の寿命を大きく左右します。日新製鋼の「耐候用アルスター鋼板」は、鉄の強さにアルミニウムの長所をプラス。あらゆる環境条件のもとで、長期間にわたって耐久性と美しい外観を保つ新素材です。とくに、亜鉛鉄板などに比べて、数段高い耐食性、耐熱性を発揮。さらに熱反射性にもすぐれ、断熱性能を要求される用途にも適しています。工場や倉庫の屋根・壁材に、保温外装材に、このすぐれた特性を幅広くご活用ください。

■お問合せは——●本社〒100東京都千代田区丸の内3丁目4番1号(新国際ビル)☎03(216)5511●大阪支社〒541大阪市東区大川町1番地(日土地淀屋橋ビル)☎06(202)1331●名古屋支社〒450名古屋市中村区名駅3丁目25番9号(堀内ビル)☎052(582)6061●札幌営業所☎011(241)7524●仙台営業所☎0222(22)5835●新潟営業所☎0252(43)3491●富山営業所☎0764(33)8011●岡山営業所☎0862(31)4355●広島営業所☎082(248)4611●高松営業所☎0878(51)9756●福岡営業所☎092(781)1251

●世界のエレベータ **FUJITEC**



当社の展望用エレベータ"SKYSALOON"が活躍するロイヤルガーデンホテル(香港)

エレベータは人の流れを読む。

●ビル交通需要の変化を予測して、エレベータが動く。しかも、その動きはきわめて効率的。FLEX-11はまさに先進の群管理システムと呼ぶにふさわしい装置です。中枢部には学習機能をそなえた高性能マイクロコンピュータを搭載。時々刻々変化する交通需要を逐次、分析・整理します。結果、常に最新の交通データが確保されます。乗場呼びが発生すれば、その交通データからビル内の人の動きを予測、最適なエレベータを割当てます。この予測割当てには高度なゲーム理論"ベイズ戦略"を応用。その精度の高さは驚嘆に値します。しかも待ち時間の短縮だけでなく、消費電力の節減、予報はずれの防止などからも総合評価し、割当てます。FLEX-11はサービス性でも、経済性でも一歩進んだ群管理システムです。

エレベータの動き、あざやか。FLEX-11

■エレベータは乗場呼びに素早く応答します。長待ち発生率は大幅に減少、平均待ち時間は約20%(当社比)短縮。

■高精度な即時案内。

■省エネ運転。乗場呼びには停止回数の少ない、走行距離の短いエレベータを割当て、消費電力を節減します。

■テナントの入れ替わりなどによる大幅な交通需要の変動にも自動的に対応できます。プログラムを変更する必要はありません。

●群管理システム
FLEX-11

フジテック株式会社
●本社　大阪府茨木市庄1-28-10 ☎0726-22-8151

●東京 03-443-5231　●札幌 011-742-2241　●仙台 0222-22-0271　●横浜 045-201-0869　●名古屋 052-261-6851
●大阪 06-441-8521　●金沢 0762-61-5108　●京都 075-231-7144　●神戸 078-391-4795　●広　島 082-231-6760
●高松 0878-31-0015　●福岡 092-472-1591　●鹿児島 0992-26-9555

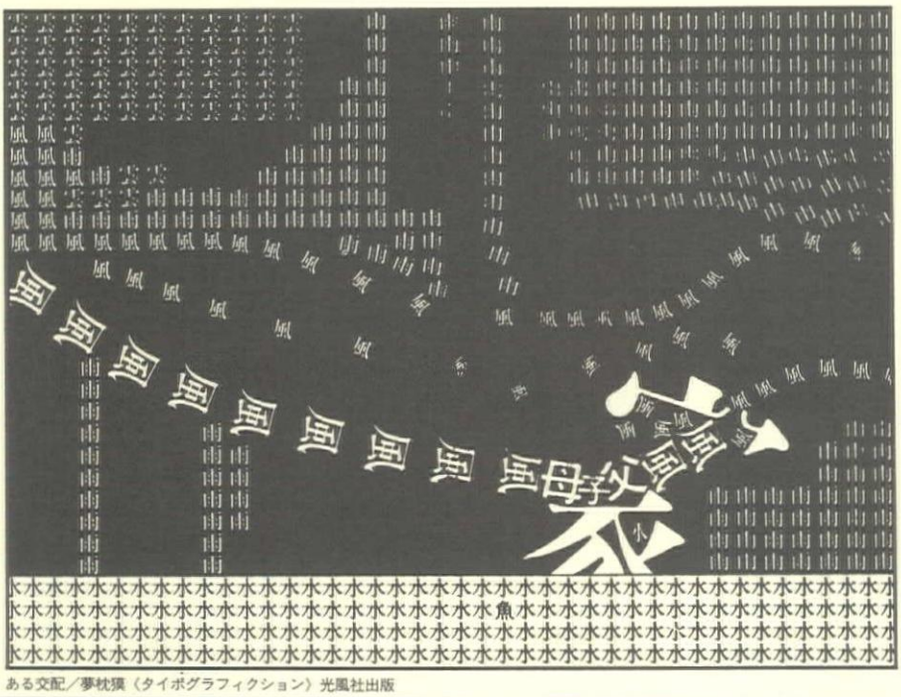
海外建築情報
8506

編＝DUCTSPACE
植野紐
小嶋一浩
小菅克己
田名網雅人
宮崎長志
森 徹

鳩よ！　詩的建築が始まる！

ポール・ヴァレリー
「意味が知られた後でも形式は持続しなければならない」　——詩学の定義
文学は文書やジャーナリズムと区別することができる。　ここでいう文書やジャーナリズムは単に意味を伝達することが目的である。しかし文学は意味を伝達すること以外に文章そのものについても考えさせることができる。またさらに、それは他の意味あい（メタファー）をもつことができる。　これと同様のことがモダニズムにもいえる。　モダニズムにおけるパラダイムは、意味の単義性、意味するもの（シニフィエ）と意味されるもの（シニフィアン）の素朴な一致であった。　そこには、ルレクチュール（再読解）するという行為は存在しえない。　建物はジャーナリズムではない。　新聞のように読んで捨てることはできない。　構文的に正しい建築という文章を作ったとしても、その中に詩は含まれていないのである。　つまり文学性（ポエジー）が必要なのである。　そこに、ロジカルな意味あいを求めるのではなく、ひとりの人間に沈殿した記憶や歴史断片、書誌学的な知見、あるいは心象風景、実像と虚像、イメージとリアルな世界がまじりあい、ひとりのアーキテクトの類推の回路を経てひとつの建築へと結実する。　ここに、アーキテクトの独自性が存在し得る。　アーキテクトという主体に対し、客体がそれをどう解釈しようとそれは自由であろう。　これはデカタンスと呼ぶ代物ではない。　アーキテクトの復権の兆しと考えられる。　モダニズムがもらした功罪のひとつに安易な模倣（エピゴーネン）が挙げられるが、その方向修正（リージョナリズム）の確実な一歩である。
ガストン・バシュラール
《空と夢》 冒頭　——想像力の定義
「想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪曲する能力であり、それは、わけても基本的イメージから我々を解放し、イメージを変える能力なのだ。　イメージの変化、イメージのおもいがけない結合がなければ想像力はなく、想像するという行動はない。もし眼前にある、あるイメージがそこにないイメージを考えさせなければ、もしもきっかけとなるイメージが逃れていく、おびただしいイメージをイメージの爆発を決定しなければ想像力はない」
こうして生まれた建築は、新たな意味をもつことになる。　これは、客体の想像力を喚起し常に新鮮であり続けることが、可能である。テクノロジーというび薬は、建築を芸術の領域から遠ざけてしまった。　広い意味のポエジーが含まれているかどうかが芸術の成立の最大前提である。
ところで、我々を取り巻く環境は、大きく変化し映像と音とが氾濫し今や感性の時代と言われるようになった。　昔は、詩というと一風変わったものであったが、今や大衆誌である《鳩よ！》なる詩の本まで出版され、以前からある《現代詩手帖》《ユリイカ》はある範囲の専門誌としてなりをひそめている。
新しい感性には新しい表現が生まれて来る。たとえば詩も見ることばから聞くことばへと変化し、ロックで詩を叫ぶ表現が生まれ、難解な詩の表現もなんなく受け入れられるようになっている。　ねじめ正一、吉増剛造、さとう三千魚等の詩人たちが独自のスタイルで大衆に受け入れられている。　理解しがたいものを見て、勝手に理解する方法が大衆の中に定着しているのである。　こうした傾向は宣伝業界においてもしかりである。　昨今のコピーの中には、下手な詩よりもリリックなものがあり、ポエジーをもっている。　建築も詩ではないがポエジーをもち、それを自由に理解させることを積極的に試みはじめてもよいのではないだろうか。　《鳩よ！》なる雑誌は、新たなる建築の流れの兆しである。

（田名網雅人）



ある交配／夢枕獏《タイポグラフィクション》光風社出版

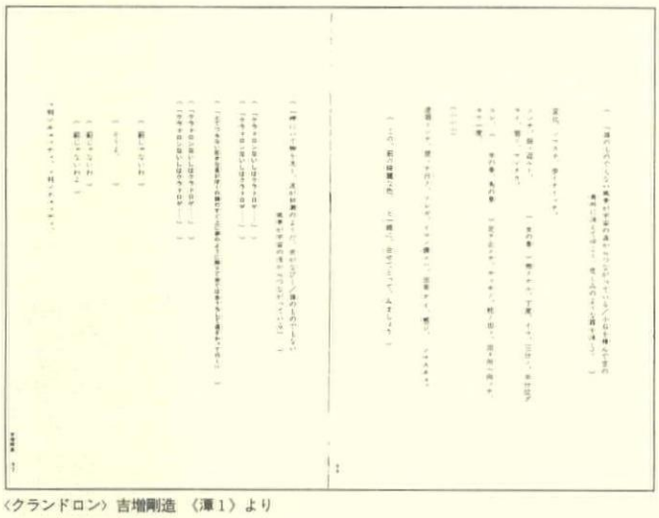
AA：L'architecture d'aujourd'hui
Ark：arkkitehti
a+u：Architecture and Urbanism
d：domus
GAD：GA Document
PA：Progressive Architecture
tA：Technique et Architecture

[Promenade Architecturale]

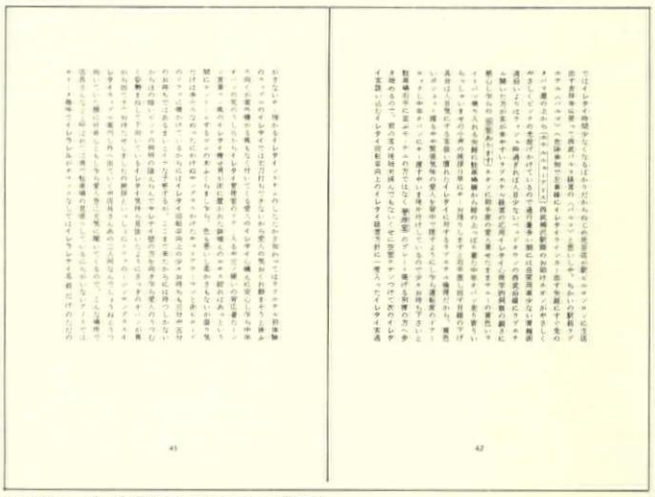
詩の変容

Maison Kalmann
Locarno, Switzerland
architect : Luigi Snozzi
〈AA 8412〉〈a+u 7609〉

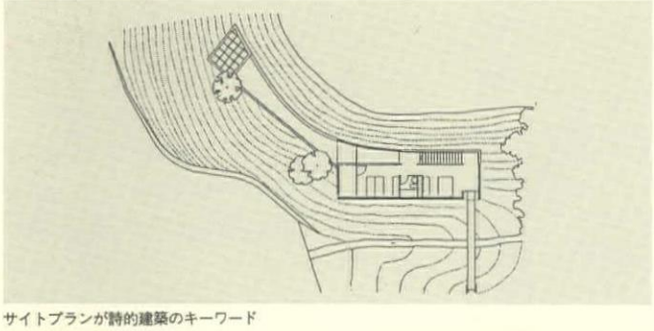
スイスのリゾートに現れる一連の作品をためいきつきつつ眺めた経験のある人は多いだろう。 素晴らしい景観の中で豊かな眺望を持つ住宅に，あんなのは立地(サイト)のおかげさとついついイジけてしまっている。 学生の設計演習にでもでてきそうなささやかなユートピア，そこにある詩性さえ古典的に見えるところまで我々は来てしまっている。
日本の都市に生み出される建築家の手になる作品は，どうもイジけてしまっているようで，なんとかして俗悪な周囲から独立し，箱庭みたいな狭い所にそこだけは，作者のイメージする世界を嵌め込もうとする態度に限界が見える。 かくて猥小化された世界に詩は無縁となり，建築の私小説化が始まることになった。 閉じた回路。 ところが同じ日本の詩人達はもっとしたたかである。
吉増剛造は街中を歩き廻り自分の声を録音するところから出発する。 生きた都市への鋭敏な反応を記述し，いろいろな場面の断片を文字に定着してゆく。 めまぐるしく変わる眼前の風景に過去の記憶やいまだ知らぬものを重ね合わせてゆく方法で，我々の都市での在り様を直接(ダイレクト)に記述してみせる。 詩作のプロセスが新しいスタイルを生み出して，言葉（文字と記号）の配列もまた魅力的。
ねじめ正一は彼が風俗と呼ぶところの都市の猥雑さと大衆性の真只中から出発する。 総てのページが句読点さえロクにない文字の洪水のその中に繰り返し組み込まれた特定の言葉のリフレイン。それを声に出して読めばそのままパフォーマンスになるパワーを持つ。 彼もまた詩の既製概念に反逆し詩人らしさを捨てることで詩の解放を訴える。
詩人はさすが詩人だけのことはあってしっかりと眼を開いている。 切実にかつ積極的に都市と人間に関わってゆく態度は我々を充分に刺激し，限界は常に自分自身の内にあることを示してくれる。
（KK）



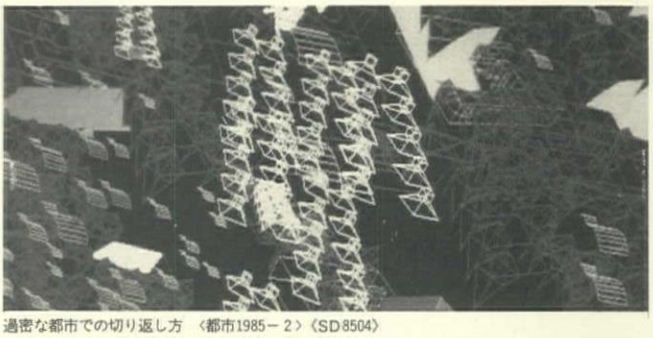
〈クランドロン〉吉増剛造 〈凾1〉より



〈いきなり，愛の実況放送〉ねじめ正一 思潮社



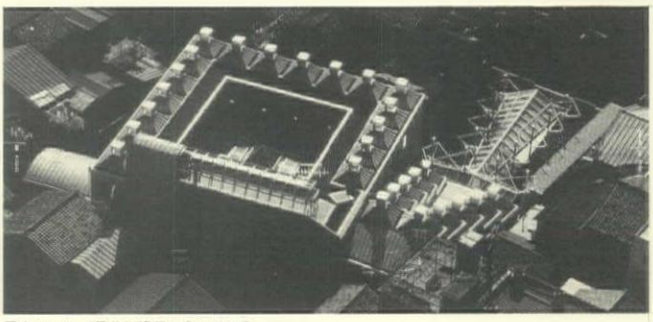
サイトプランが詩的建築のキーワード



過密な都市での切り返し方 〈都市1985－2〉〈SD8504〉







眉山ホール／長谷川逸子 〈SD8504〉

［パルメザンチーズ組合本部］

ザッハリッヒな田園詩

Headquarters for Parmesan Cheese Cooperative
Reggio-Emilia, Italy
architect : Guido Canali
〈PA 8407〉

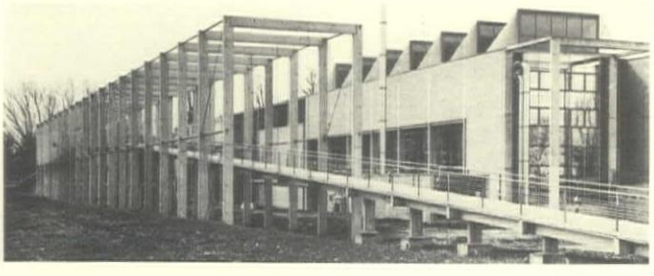
言語空間に張られた一定の規程（ノルム）をやすやすと逸脱して，音としての言葉，形としての文章を気軽に楽しめる可能性が拡っている。　言語に背負わされてきた意味・感情・内容という重荷をふっ切ってしまえば，言葉をもっともっと自由に楽しめるというものだ。　手かせ足かせをとり払ったアナーキーな言語のふるまい。　それが根源的（ラディカル）にして過激（ラジカル）な〈詩〉なのではないか。　例えば，夢枕獏の〈活字絵〉（〈カエルの死〉光風社出版）。　そしてねじめ正一の〈朗読詩〉。　夢枕のタイポグラフィクション，ねじめのパフォーマンスはどちらも限りなく芸能に接近して漫画漫才と区別なく，もちろん大衆芸能と高尚芸術の構図自体をも分解してしまう構えなのだ。　禁忌語や反文法によりしかつめらしい言語空間をすっかりちゃかしにかかっている。基本的には構築性から免れることのできない建築空間にとって，ちゃかしの貫徹は無理としても，機能や意味や内容から自由で，はたまた歴史や引用やコンテクストからも自由な〈詩的建築〉は可能であろう。　狭義のポスト・モダンの知的遊戯を越えた，感覚的遊戯。

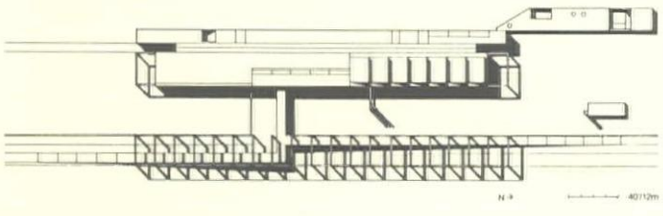
イタリアに建つパルメザンチーズ組合本部。　分園とハウジングに南北を端どられた細長敷地。不必要に3階に上げられた入口。　そこへ至る無用のランプ。　それを支えるRC門型フレームの小刻みな連続。　リズムと間合いで電子文字を思い起こさせるサイトプラン。　酪農実験室採光のための鋸状のハイサイドライト。　サービス空間のブロック壁に穿たれた小窓。　吹き抜け廊下のトップライト。

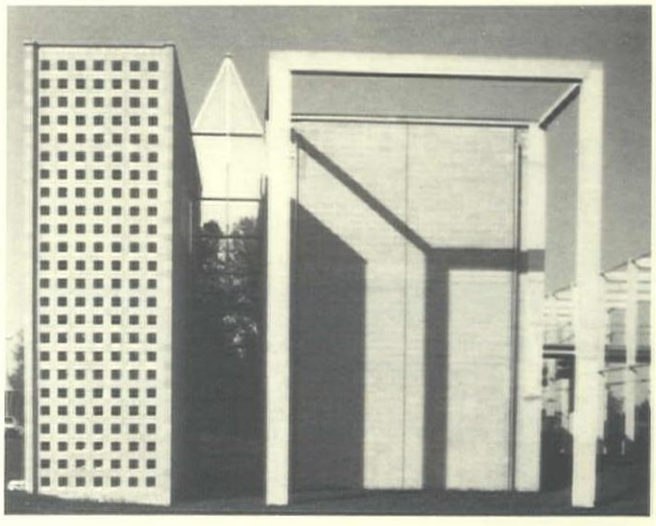
歴史や引用や装飾や機能や技術ではなく，自らの感覚のみによって形を造ったすがすがしさが光る。近代初期のイタリア合理主義に感覚としては近いものの，素材へのこだわりがより感じられる。

ロッシらのネオ・ラショナリズムに強い影響を受けているものの，重々しい形式性は軽々しい工業製品にとって替っている。　こうした即物性が方法としてでなく感覚としてあることが田園詩の所以なのだ。（Q）









[Projeteé dans le Ciel]

鳩よ！　舞い降りておいで

Maison de Vacances
Ossiachersee/Kärnten, Austria
architect: Manfred Kovatsch
〈AA 8412〉

芸術表現としてパフォーマンスが積極的な意味を持ち始めているらしい。　たとえば，詩の領域でも言語的表現を突き抜けて皮膚感覚やリズムに乗せた身体的表現が試みられている。　これは時代の状況とも無縁ではあるまい。

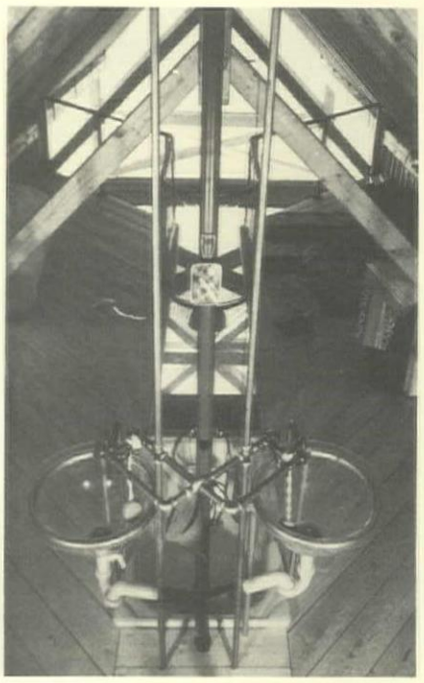
現実が何よりも優先すると信じられていた人間＝機械系の時代がいつの間にか虚像の支配するメディア系の時代へ移行する状況の中で，人々が獲得しつつある知の一つがパフォーマンスではなかろうか。　これは，抽象的な単なる行動＝能動と区別される自他の相互作用を含んだ行動であるという。　芸術表現は多様化しつつある。

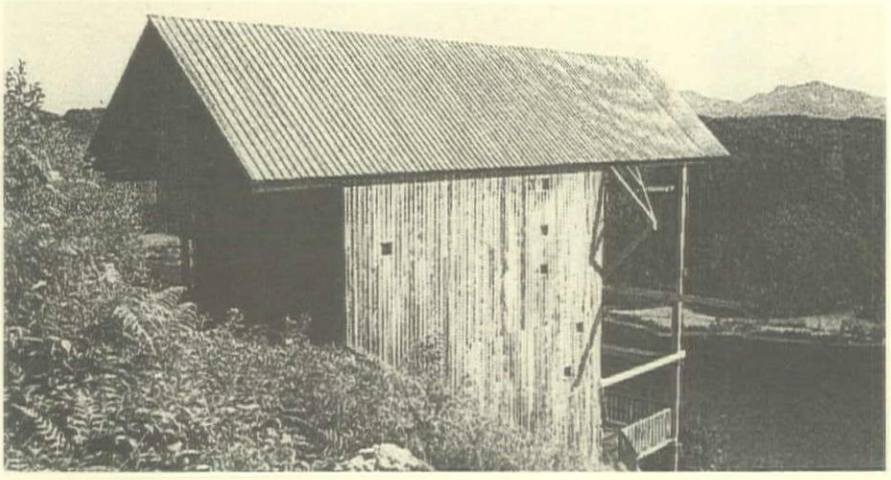
建築から受ける感動は機能や目的を離れて結局のところ表現それ自体に回帰してしまうのではあるまいか。　詩的建築とはその種の建築の一つだろう。

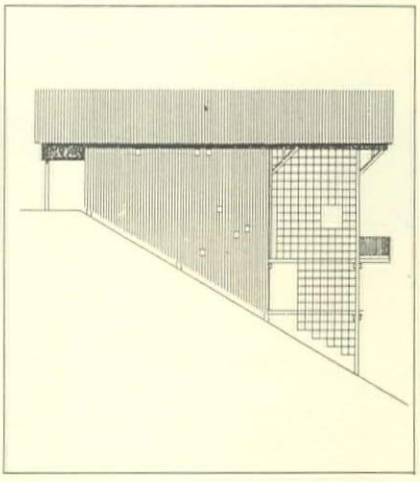
それは，種子が内容で果肉が形式といった果物ではなく，むしろ層からなる玉葱のようなもの，すなわち，中心も，核も，ハイアラーキーも，順番もない自分自身の皮の無限性で構成されているような気がする。　部分が全体表現に従属することなく，構成あるいは配列を介して全体に繋がり，全体としての相貌を形成するのが詩的建築の要諦である。

〈空への投影〉とキャプションの付されたマンフレッド＝コバチのヴァケーションハウスはオーストリアのケルンテン州に建っている。　斜面にフワリと置かれたかのような形姿は空への憧憬を込めて地上からさし架けられたブリッジのような相貌を呈している。　面としての壁が次第に空へ溶け込んでいくような線材の構成への移行は，全体を覆うシャープな切妻の屋根と共に空へ向かう意志を表現している。　吟味され選びとられた細部が詩を謳い，その構成や配列が見事にハーモニーを奏で全体としての相貌を生む姿は詩的と呼ぶに相応しい建築なのではなかろうか。（K2）









[La《Casa》della Città]

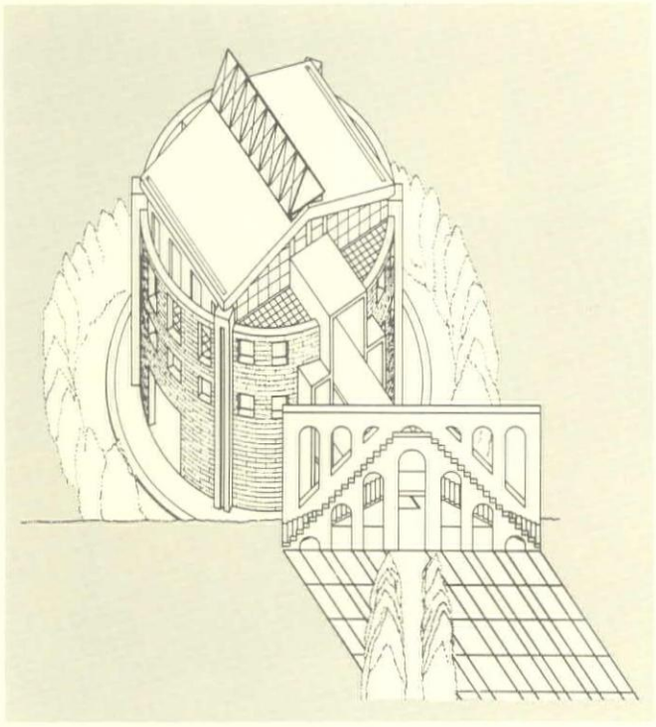
マニエリストの詩情

New Town Hall of Serrone
near Rome, Italy
architects: Massimiliano Fuksas, Anna Maria Sacconi
〈AA 8404〉〈d 8410〉

物まねの品々，筆に尽くしがたし。　さりながらこの道の肝要なれば，その品々を，いかにもいかにもたしなむべし。　——世阿弥《風姿花伝》

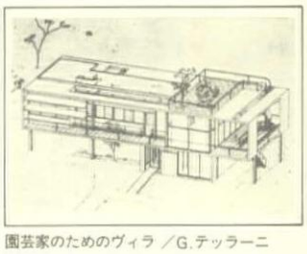
マニエリスティックな建築の詩情とは，どのような形で発露されるのであろうか。　プレテクストの選択，操作，変換による新たな意味の発生といった意味論的なレヴェルにおいては，それらは単に，〈おもしろい〉だけであって，自らの詩を謳いはしない。　詩情は，プレテクスト以前に存在し，メタレヴェルに吹き出すものなのだ。　したがって意味論レヴェルとの距離のとり方が勝負となる。この点において天才的であったのが，コモのファシスト，G.テッラーニである。　テッラーニにおいては，プレテクストも，その意味操作も，自らの詩情が要請する絶対的形態と，プログラムの間に存在する断絶を,うめる口実（プレテクスト）に外ならなかった。　そこでは，コルビュジエやミースまでもが解体され，還元されてテッラーニのアルファベットと化している。
残念ながら，悪しき例として登場するのが，この"La Casa della Città"である。　プレテクストは言うまでもなくM.ボッタのLa Casa Rotonda。実際ボッタ自身が言語と呼べるほどの収斂をまだ見せていないのに，これをとり上げ，生真面目に意味操作に取り組んでしまったところに致命的な誤解がある。　当然のことながら，結果はパロディ以外の何者でもない……。
強固なプレテクストを粉砕しつつ突進し，はるかな高みから謳うことができるのは，あるいは選ばれし者の特権なのかもしれない。

まづ一切の物まねに偽るところにて，危くも，弱くもなると知るべし。　——世阿弥《風姿花伝》
（M）

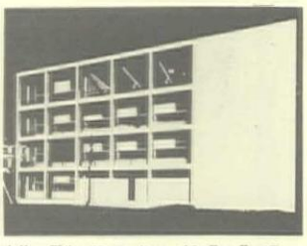




サンテリア幼稚園，／G.テッラーニ



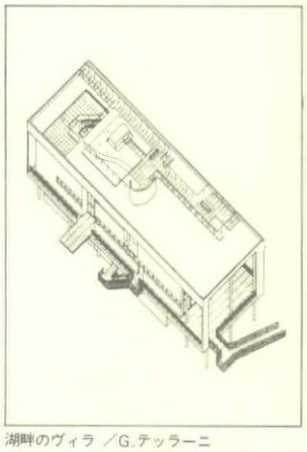
園芸家のためのヴィラ ／G.テッラーニ



カサ・デル・ファッショ，／G.テッラーニ







湖畔のヴィラ ／G.テッラーニ



カーサ・ロトンダ／M.ボッタ

[パロシャル・センター]

トニオ・クレーゲルの彷徨

Parochial Center
Kauniainen, Finland
architects: Gullichsen, Kairamo, Vormala
〈Ark 8407〉〈tA 8410/11〉〈GAD 11〉

「新しいものの内で最良のものは，古代の欲求に応えるものである」――ポール・ヴァレリーの言葉を添えて，《arkkitehti》誌に紹介されているこの教会は，それこそ一篇の詩の様な緊張感を湛えて，ヘルシンキ郊外の丘陵に抱かれている．

1978年のコンペの当選案であるこの建物は，A．アアルトやG．アスプルンドを想起させる，北欧の清澄な透明感を持つ一方で，陽光に深く陰影を刻む，スタッコ仕上の圧倒的な正面の連続壁は，地中海建築を想わせる．　これは作者の意図したところのようで，キリスト教の起源への参照が，〈古代の欲求に応えるもの〉であるわけだ．

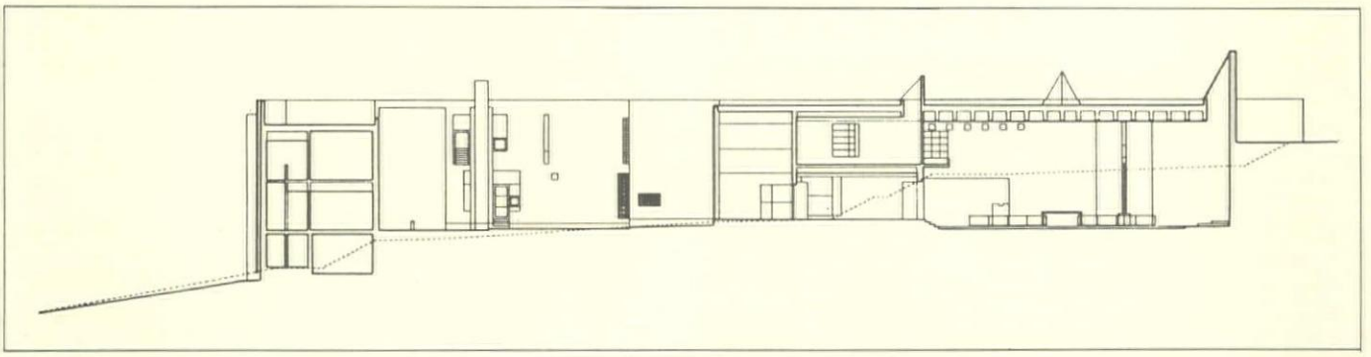
この北欧と南欧を，ないまぜにした魅力は，もう一人の詩人の名前を思い起こさせる――トニオ・クレーゲルである．　トーマス・マンの創作したこの詩人は，そのラテン的響きの名と，ゲルマン的響きの姓とを合わせ持つ．　すなわち，イタリア出の母から奔放な激情を，北ドイツの旧家を継ぐ父から厳格な理性を引き継いで，その２極の間を振幅する様に彷徨する魂であったが，ヨーロッパの芸術家の一つの精神的宿命を感じさせるものがある．　ここで再び，《エウパリノスまたは建築家》の中のヴァレリーの言葉を借りれば，建築体験とは，「……われわれはいわばある人物の意志と選択とを呼吸する．」ことになる．　翻って，このパロシャル・センターである．　溢れる南欧の光への憧れを孕んだこの空間は，トニオ・クレーゲル的魂によって生成されたものの様に思えるのである．　輝く壁に穿たれた小さな入口→中庭に大きく開かれたホール→光井戸がリズムをつくる側廊→様々なトップライトが均衡を保つ教会堂と，光の海から闇の森を辿る様に織りなされる細心の光の演出の巧みさには，またしてもヴァレリーの詩が似合う――「見よ，何と光輝く歌か！　澄みきったわれらが要素　いかばかりかよい音色を光から抽き出すことか！」（〈ヴァレリーの建築論〉加藤邦男訳）

今日の詩人の愁嘆が聞こえてくるようだ．「こっちだってポスト・モダンなんだぜ．いつまでもヴァレリーしていられるかよ！」（T.M.）









技術がつくる高度なふれあい・SOCIO-TECH

MITSUBISHI

設備・防犯・防災監視、制御を一体化、ビル管理の省力化に応えます。

監視業務のオンライン化・トータル化で
ビルの管理を省力化するシステムです。

三菱ビル遠隔監視システム〈メルセントリー〉は、お客様のビルと菱電サービス㈱情報センターおよび綜合警備保障㈱ガードセンターを一般加入電話回線で結び、エレベーターをはじめとするビル設備の異常や故障、不法侵入や火災の信号を監視し、緊急サービスも実施して、ビルの総合的な省力化を図れるシステムです。三菱電機の総合技術力に加えて、設備・保守、防犯・防災サービスに業界トップの実績と規模をもつ菱電サービス、綜合警備保障のすぐれたサービス技術が提供されます。

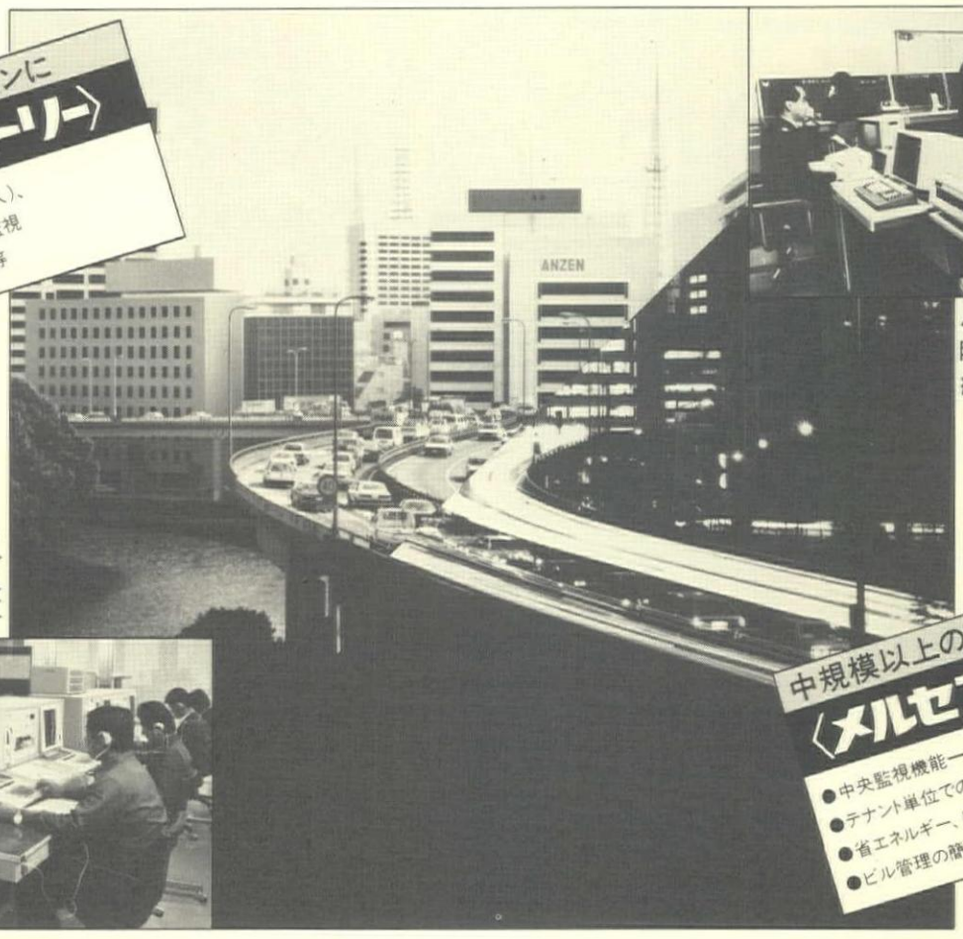
オンライン化された集中管理で
このような導入効果が生まれます。

〈ビル管理の合理化〉：設備監視、防犯・防災監視の無人化を可能にし、省人化が図れます。

〈ビル管理費の節約〉：ビルを24時間常時オンライン監視して、異常の早期発見と、迅速な対応処置が可能になります。また設備の自動制御や計測記録業務を付加することにより、省エネルギーが図れます。

〈ビル運営管理の簡素化〉：総合的な監視業務から、設備メンテナンスまで一括してお引き受けし、ビルの運営管理を簡素化します。

小規模ビル、マンションに
〈メルセントリー〉
- 設備の故障監視、防犯(侵入)、防災(火災、ガス洩れ)の監視
- 設備のスケジュール制御等





▲ ガードセンター
防犯・防災は警備業界大手の
綜合警備保障株式会社

監視サービスから
メンテナンスまで
菱電サービス株式会社
▼ 情報センター



中規模以上のビルに
〈メルセントリーU〉
- 中央監視機能——各種設備監視の一本化
- テナント単位での設備、防犯、防災の監視・制御
- 省エネルギー、省力化向上のための制御
- ビル管理の簡素化

三菱ビル遠隔監視システム 〈メルセントリー〉〈メルセントリーU〉

●詳しい資料をご希望の方は資料請求券をハガキに貼って本社へどうぞ。●お電話でのお問合わせは、お近くの各支社へどうぞ。

三菱電機株式会社 本社 〒100 東京都千代田区丸の内2-2-3（三菱電機ビル）昇降機事業部 支社：札幌(011)212-3727／仙台(0222)64-5633／新潟(0252)41-7221／富山(0764)42-2324／東京(03)218-2752／名古屋(052)565-3160／大阪(06)347-2271／広島(082)248-5278／高松(0878)51-0003／福岡(092)721-2163

菱電 菱電サービス株式会社 本社 〒100 東京都千代田区大手町2-6-2（日本ビル）(03)270-1861 支社：北海道(011)231-8055／東北(0222)21-5661／東京東(03)433-4155／東京西(03)344-2901／横浜(045)311-6433／中部(052)263-7031／北陸(0764)32-0002／大阪(06)344-1196／中国(082)248-1451／四国(0878)22-6061／九州(092)711-9520

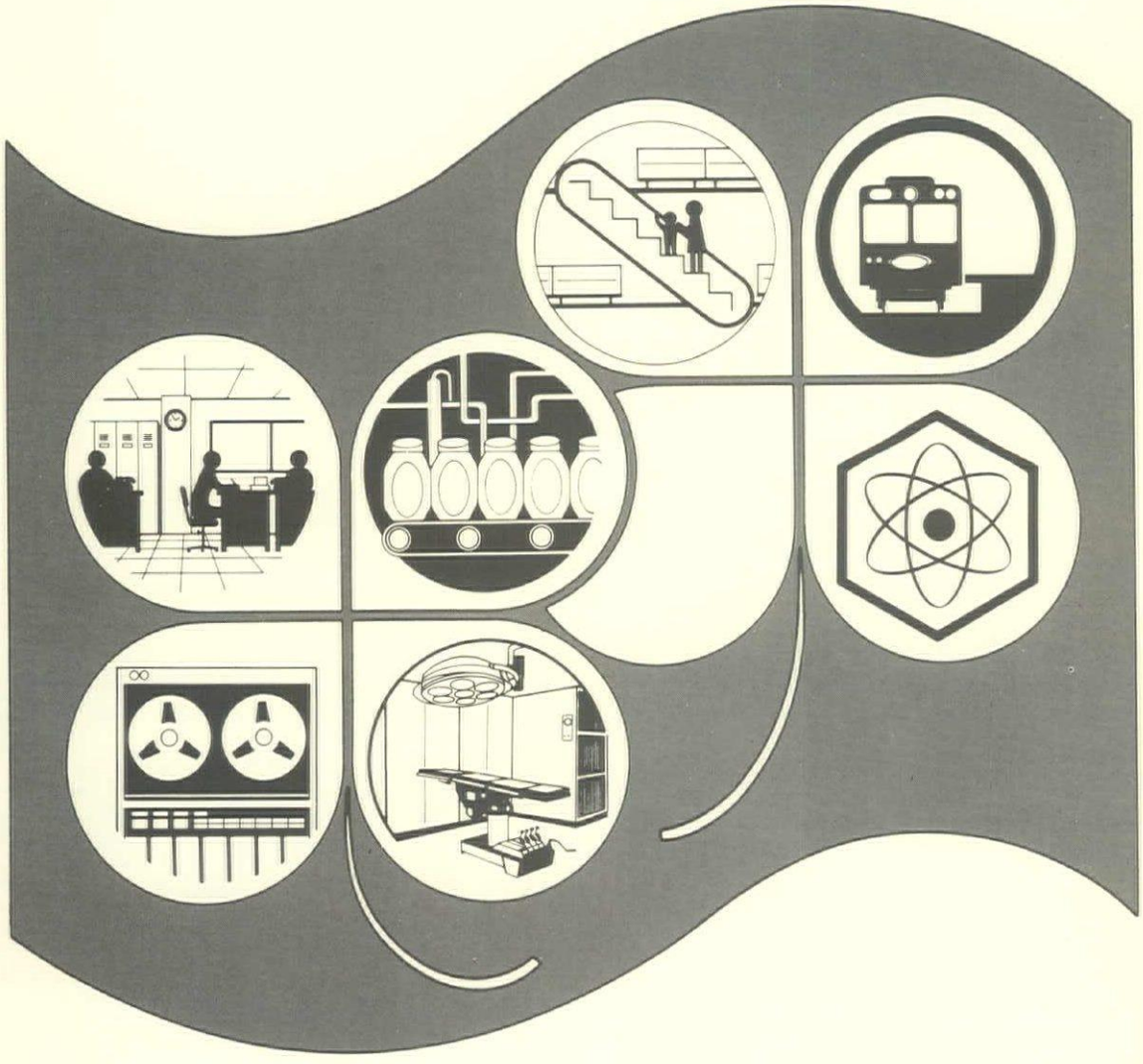
綜合警備保障株式会社 本社 〒107 東京都港区元赤坂1-6-6（第二安全ビル）(03)402-7571

資料請求券
メルセントリー
SD
8506

あなたの電話番号をご記入ください。

MODAIR

あすの空気調和をになう



自然より清浄な環境づくり
それが東熱のねがいです

〔東熱〕がめざす「空気調和」とは、温湿度調整だけでなく、有毒ガスの除去、脱臭、除塵等、人間の生活環境、あるいは高度生産環境を作り出す総合技術です。

この開発された個々の技術を更に、総合的に発展させ、都市全体としての環境改善に寄与してゆくことに東熱としての使命感を持っております。

〔東熱〕によって開発された技術は●地域冷暖房●アイソレーター●サンシャイン計画●超高層ビル●病院●地下鉄等、あらゆる分野に生かされ都市環境の整備、浄化に貢献しております。

〔東熱〕は常に社会の要望に対応した、技術の開発をし、より清浄でより快適な生活環境を皆様に提供いたします。

東洋熱工業

本　社／〒104／東京都中央区京橋2－5－12
TEL 03（562）1351大代表
支　店／札幌・仙台・関東・新潟・横浜・名古屋・大阪・広島・九州
営業所／水戸・前橋・静岡・京都・神戸・岡山・高松

国内建築ノート
聖吾評
8506

ぽちぽち聖吾評にも常連とおぼしき諸君の寄稿が目立ってきた。　ありがたいことです。　しかも寄せられる原稿に読みごたえが出てきた。　うれしいことです。　文章をものにするにはそれなりの意識の集中と持続とが必要とされるはずで、全国津々浦々から寄せられる意気と熱気とが当欄の活気を支えている。　寄せられた多くの原稿にこめられた時間の重みが評者のペンの動きにとまどいとためらいと、そして力を与える。　まずは力のこもった原稿を眠い目をこすりながら書いてくれる寄稿者の諸君に感謝する。　とともに、にもかかわらず選に漏れた諸君になお一層の感謝を送りたい。　評者は諸君の原稿の一字一句をもあだ疎かにせず、名を心に刻み、次回に期待していることを記しておきたい。

「結局、いま何か唯一の評価基準かというと、ノヴェリティ、新奇性ではないでしょうか。」
——磯崎新《ポスト・モダン原論》

今回は、建築における新しさについて考えてみたい。磯崎新氏の同書によれば、建築の様式、あるいは方法の流行というものは、ルネサンスこのかた、だいたい15～20年くらいで変わってきている、ということである。　別にことさら現代という時代が目まぐるしいわけではないらしいのだ。　とくに建築って、やつは、構想の段階から竣工に至るまで、さらに一般の耳目に触れるまでに、最低ン年という時間が必要だから、他のジャンルの目まぐるしさとは若干趣きを異にしようものの、いつもいまに特権的な価値を置こうとする人類の文明の進歩思想にとっては、恰好な反証ではある。
とはいうものの、にもかかわらず、だ。　いまという時代ほど、流行というものに敏感な時代はない、とあえて言いたいのである。　これには、情報ネットワークの圧倒的な進歩が大きな役割を果たしているのは言うまでもない。　しかもその情報の洪水たるや、平等思想の下に、核配備と風俗最前線が等価に、というよりむしろ恣意的な価値付けの下に、どっと流れて来る(行く？)のだからたまらない。　流れに敏感、などという言葉がこれほどまでに折にふれて囁かれる時代もなかったのではないか。　しかもその流れがどこに向かうかを誰も知ろうとしないところに現代の特質がある。　誰も知らない、のでなく、誰も知ろうとしないのである、もはや。　言い換えるならユートピアの喪失であって、それがモダンとポスト・モダンの状況をわけている、というのが磯崎氏の指摘するところでもある。
ともあれこうした無方向かつ無目的な流れとしての現代にあっては、価値とは恣意的に設定した規準に基づいて測られるものでしかなく、しかもそれが恣意的であることを知っての上であるという念の入った醒め具合に、ニーチェ以降のニヒリズムの系譜を見ることもできる。　行きつく先は、確たる価値規準の設定、すなわち階級、絶対者の確定を巧みに避けた、隠徴なる差異化なのである。　トータルな価値観に基づいた事物の位置づけでなく、局所的な、サブカルチュアの視点における事物の色分けなのである。　たとえば血液型や星占いの隆盛も、神なき時代の隠徴なる差異化の表出だろうし、㊓と㊔も然り、サイタマ、ナゴヤ、カンサイ人、というのもあるようだが、これはもはや差異化というより差別化に近い。　そして、これらすべてにわたって共通しているのが、いまという流れに遅れることの恐怖であると見ていいのではないか、と出題者などはそれなりの悪意をこめて思っているのである。　ただし誤解を招くように言うならば、出題者は差別化大好き人間なのである。　ものごとを言いきることは新しい発見につながることだからである。　問題があるとすれば、それを本気で信じてしまうところにある。　現代は、原広司氏の言うように、本気にできないところに価値があるのである。
というわけで、今回も差別化を進めてみたいと思うのである。　現代という時代の流れを、悪意をこめてすくいとってもらいたいと思うのである。　題して〈イマい建築とイモい建築〉である。　みずみずしい視点をもって、この重大なる問題に挑んでもらいたい。　なにせ建築というのは、流行なんぞとは無縁である、という神話と定説の内に、われわれはいるのであるから。●竹山聖

●宿題解説

今月の宿題

「イマい建築とイモい建築」

評者＝竹山聖

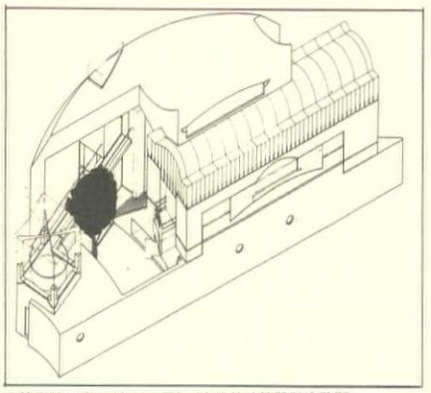
夜更けのウィスキーを飲みながら、夜明けのコーヒー問題に思いを馳せてみる。　聖子ちゃんが正輝サンと夜明けのコーヒーを飲んだか飲まないかなんちゅうまわりくどい質問があって、「夜明けのコーヒーなんて飲んだことありません」という答えが返ってきたとする。かたやメタフォアの次元で問いを発して、かたや字義通りに質問を解してその限りで正しい(かもしれない)答えを返している。　ま、夜明けのコーヒーなんて飲まなくったって、妊娠くらいできるわな！　ところで〈夜明けのコーヒー〉というのはピンキーとキラーズの《恋の季節》だったね、知らない人いるかな？

聖子ちゃんには名前が近いせいもあってひとかたならぬ関心を抱き続けてきたのだけれども、ま、ここにいたって妊娠は間違いなかろ、とゆーのが然るべき筋の意見らしい。ま、いろんな状況から推してみてそういうことになるようなのだが（11月あたりが楽しみですね、皆さん）、問題は妊娠してるかしてないかにあるのでなくて、ンなこと知ったことかという彼女のしたたかさにあるのである。つまり、疑惑は疑惑として野放しにしておくという態度のあっけらかんとした潔さである。この潔さに、世間はさほど本気で目くじら立ててるわけではない、ということに注目したいのである。　芸能レポーターには、一応の旧来のモラルを代弁する振りをして、妊娠という〈フシダラな〉ことをしたんじゃないかと糾弾し、聖子ちゃんは「夜明けのコーヒーも飲んだことありません」とシレッとシラを切る。　このしたたかさ。　こうしたattractionのために、相方汗水たらしての大熱演。で、何があきらかになったかというと、別に結婚前に妊娠してようといまや、何らくフシダラな〉わけじゃない、ということ。

思えば聖子ちゃんの３つ年上の百恵さん（女性週刊誌の呼称に従って）の引退のときに、あれは確か'81年の秋のことだったけれども、その著書《蒼い時》が圧倒的な支持を集めたように、別に結婚前に関係してようといまや何らくフシダラな〉わけじゃないことが初めて大っぴらに公認されたのだった。　今回の聖子ちゃんは、だから、新たなるモラルの確立のために、言いかえるなら新奇性の成立のために、是が非でも妊娠しておいていただかなければ困る。　これが芸能レポーターたちの、ひいては一般大衆の、陰の声であり、望みな

■

イマい建築を追求することは危険である。　まごまごしていると，たちまち難解な文章やドローイングの似合う建築家にされてしまう。　手法とコンセプトをもて遊び，物置きをデザインするにも記号論を脱かねばならなくなる。　さらに磯崎新ばりの国際性を示す為にラジオ英語講座を欠かさず聞かねばならないのである。　また彼等イマい建築家達は数多いクライアントから折悪くかかってくる電話の為に便所へ行きそこねたり，毎夜の接待の結果出て来た腹に悩まねばならないのだ。
そして構想から竣工までの長い時間に耐えられず，のんびり施工図チェックもしていられない様になってからでは，まずいインスタントコーヒーをすすりながら図面に向かっていた日々を懐しがっても，すでに追いつくことはできない。　それでも彼等は言うだろう。「イマい建築家はいいものだよ」と。　だがおかしなことに，彼等はイマくなったと言われれば言われる程建築家では無くなっていくのである。
ではイマくなりたくない，もしくはなりたくともなれない建築家は何を為すべきか。
まずイモい建築家は住み手を選んではならない。ダイエーのバーゲンで買ったと思われる服を着て，右手に買物カゴ，左手で尻を掻いているおばさんが，高松伸風のハイテックな住宅を依頼に来ても，疑問を持たず素直に従うべきである。　つまり，高松伸になれないイモい建築家は，はき古された女子大生の下着のように，本来の姿よりも付加的なものに価値を期待せねばならないのだ。　そしてもちろん，自分の作品を目出たせようなどと考えてはいけない。　もし，たまたまコンペに当選したり，文章が雑誌に載ってしまったならば，絶対に人に気付かれぬ様にすべきである。
また，間違っても建築をロックやニューミュージックだと思ってはならない。　建築は口下手であり，時には吃ったりする。　自分の思いをストレートに表現するなど，イモい建築家には不可能である。　我々イモい建築家は，上からノシかかる重力を支えねばならぬという，被差別部落から出た様な抑圧を育てねばならないのだ。　常に地声で，例えば都はるみの，あのオシッコが漏れるのではないかと思われる程の気ばりが必要なのである。
この様に，イマい建築界とイモい建築界には明らかな差異があるが，発展の難しいイマい建築家に対し，我々イモい建築家は，ある日突然大芸術家として扱われるかもしれないし，転職して幸福に暮らせるかもしれないのだ。　（黒川しゅうじ）



❶修学院の家Ⅱ（欠けた刃）／高松伸建築設計事務所

❶〈SD Review，1984〉SD8412

のであった。　つまりは，したたかさのさらなる前進に向けて，〈私にとってはささやかな一歩だが人類にとっては大きな一歩〉*を踏み出してもらわねばならないのである。　〈イマイ〉ことを判定する価値観は日夜前進する必要があるのである。　ここで聖子ちゃんが妊娠していなければ，もはや〈イモい〉とすら言っていいのだ！

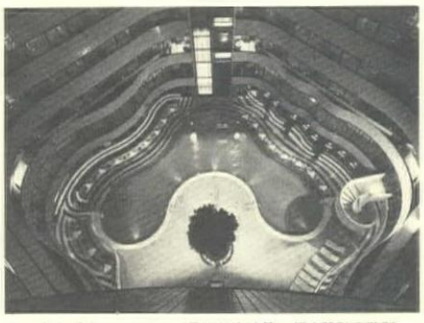
とまあ，こういうエキセントリックな議論を夜，一人でウィスキーを飲みながら独演会をしてると，あやしうこそものぐるほしけれ，になりはてるのであるのだが，よろしい，少し整理しよう。　つまり，こういうことだ。いま，〈イマい〉を判定する価値規準はどんどん変化している。　とりもなおさず，それこそが〈イマい〉ことの宿命でもある。　そしてその変化の方向は，ますますラディカル＝過激な方向に向かっている。　さらに，ここからが重要なのだが，この価値規準の位相とは，まさしくモラルの問題と抜きさしならない関係を持っている。　ここである。　婚前交渉だの妊娠だのとラディカルな例をひいてきたのも，まさにこの点に論を導きたかったがためだ。　すなわち，〈イマい〉〈イモい〉はすべからくモラルの問題に帰着すると。　しかもくどいようだが，モラルは動いているのだと。

裁判所が〈ワイセツだ〉と言えば《愛のコリーダ》は有罪なのであり，丹下健三が〈出口はない〉と言えば，グレイヴスは歴史に恥をさらすのである。　モラルが移り変わるときには，ancien régimeが必要なのである。　グレイヴスの建築は正しくないと思う多くの人々がいるにもかかわらず，その建築が面白いと思う多くの人々がいる。　グレイヴスの作業が説得力を持つにつれ，人々は次第に面白さの内にモラルを認め出すのである。　かくして面白さの内より正しさが生まれ，モラルに新たなる位相がもたらされる。　ただし絶対的なモラルなどというものはなく，人生にどうしてもなさねばならぬことなどないことだけは覚えておこう。　どうしてもなさねばならぬことを，そしてその優先順位を決めるものこそが，とりもなおさずモラルなのであって，くどいようだが，モラルは時代を映す鏡でもある。　そしてどうも，いまの時代は，したたかさの絶対値拡大の方向に，どうやらその軍配をあげつつあるようなのである。田中角栄然り，三浦和義然り，そしてわれら

■『うわぁ，カーワイイ！』

クイズ　現在の日本国で，最も元気よく，周囲の情況とか思惑とかを全く慮ることなく大声で発言しているのはだぁーれだ？
浅田彰，ビートたけし，小森のオバちゃま，竹山聖etc.と答えたヒト，だめーっ!!×
新宿に丁目，青山，六本木，原宿もしくはその周辺に棲息する人種――オカマの人々，女子大生，女子高生と答えたヒト，○です。
彼女たちは毎日，飽くこともなく「判断」を下す。そして，その「判断」をお互い確認し合うかのよーに声に出して言う。「～じゃん。」とか「～ねーっ。」てのがそれである。
「判断」もチョイとハスに構えて，大上段に振りかざしちゃうと「審判」に早変りする。その「審判」とゆーものを社会のおじさんたちは，あんまりしないよーにしている。何かものを言うと唇が寒いからだ。（そーだ。）
だが，しかしだ。彼女たちの唇はよっぽど分厚く出来ているのか，歯にはかせるパンティーを持ち合わせていないのか，速射砲のごとく次から次へと「審判」を下しまくる。
世の中，全般を見渡してみても世紀末だ何だ神田で，何でも許されてしまう今日この頃。「審判」はヒジョーに少ないのであーる。そんなところにもってきて，彼女たちの神をも恐れぬ「審判」のバーゲン。当然，彼女たちの「審判」が，俄然，目立っちゃうのである。
その結果として，「なーに，あいつ，イキガッちゃってサァー，ダサイじゃん。」とか「うわぁ，カーワイイ！」てな彼女たちの「審判」が街中を席巻してしまうのである。「審判」をあんまりしてないフツーのヒトは彼女たちの迫力に負けて「そ…そーかな。」なんて，とんでもない勘違いをしてしまうのである。
さて，ここで本題の「イマい建築とイモい建築」に移る訳だが，このイマいとかイモいとゆー言葉，いかにも彼女たちが好んで使いそーな言葉である。イマい＝カーワイイ，イモい＝ダサイとゆー翻訳もこの場合，可であろう。　でだ，結局，イマい建築をしているおじさんたち，必要十分条件とまではいかなくとも，必要条件くらいには，彼女たちを意識して設計しているんじゃなかろーか。
で，イモい建築をしているおじさんたち，彼女たちを全く無視しているか，意識していても，逆に彼女たちに無視された結果じゃなかろーか。
蛇足ですが，設計事務所とゆーもの，彼女たちの棲息する新宿，青山，六本木，原宿周辺にまるで彼女たちの御託宣を仰ぐかのよーに集まっていると思うのは考え過ぎでしょーか。（住比己）

❶新建築8501，建築文化8501



❶六本木プリンスホテル／黒川紀章建築・都市設計事務所
「おじさんのこのプール，どうかなぁ」
「うわぁ，カーワイイ！」



❷彼女たちと一緒に
「キャピ！キャピ！」
「デヘヘ……」

が百恵ちゃんと聖子ちゃんが然り。KYON²だってひろ子ちゃんだって，いろいろあってもシレッと結婚した夏目雅子然り，いろいろあってもシレッと離婚したショーケン然り。逆に言えば，したたかさを喪失したとき，時代はかれらを見離してゆくのである。げに，恐しい時代ではある。クワバラクワバラクワバラモイチでございます，ん？

というわけで，ことはモラルの次元にもちこまれた。思えば〈正しい・面白い〉は建築物に投影されたモラルをめぐる問いであり，〈抵抗・順応〉は作る主体の内なるモラルをめぐる問いであり，そうしてみれば今回の〈イマい・イモい〉も合点がゆこう。これは社会状況におけるモラルをめぐる問いだったのである。よおし，これでうまく二項対立図式三部作につじつまがあった。

モラルの問題，とりわけ建築をつくることにおいて派生するさまざまな他者との関係を調停するにあたっての価値感の問題，こいつをどう受けとめるかが，建築における思想の課題であって，ささやかながら当欄もこの思想的営為の末席を汚そうとの高邁なる志に貫かれてはいるのである。ただ評者２人が比較的場当り的なO型故に，首尾一貫せぬ面のあることは，お許しめされたい。逐一，批判の点をお寄せいただければ幸いである。

さあ，何とか格調の戻ったところで，今月の佳作からいってみよう。**黒川しゅうじ**君。はっきり言って，結論は陳腐以下のものだ。イマい建築界とイモい建築界との差異，対比が同じ土俵の上でなされていないからこういうことになる。ベイトソンにならえば，論理階型が違うのである。無論イマい建築界とイモい建築界が，というのではない。黒川君がイマいと想定している建築家のポーズと，イモいと想定している建築家の抑圧とが，である。ポーズと抑圧とは両義的に共存していて，イマいイモいは（黒川君の用語として，だが）どちらに比重を置くか，でなく，それらともに在る状態のボルテージの高さによる。このことに思い至れば，〈ある日突然大芸術家〉などというトワ・エ・モア的唐突さや，〈転職して幸福に〉などという苦しまぎれをしないですんだはずだ。ちなみに，黒川君がイマい建築家の代名詞として掲げた高松伸には，こりゃあくまでも私見だが，〈建築は口下手であり，時には吃ったりする〉こ

■軟派と硬派

建築が欲望と願望の集合体であり象徴化であるのは，建設過程におけるさまざまな「かけ引き」や「ゆれ」や「かげり」に影響されているからに他ならない．　建築における「光」と「影」は一面において「イマい建築」が「光」の部分であるように，「イモい建築」はその「影」の部分を多く背負って存在したからであろう．

軟派的傾向を持った「イマい建築」を分析すればおおむね次のような事が言えよう．　①ライト感覚でニオイが無く，ユニセックス的である．　②一過性のウヌボレ的な「ウケ」をねらった手口を使う．③前衛的と錯覚した「アートっぽい」かぶれた切口が見られる．　④ギャル好みのコンセプト主義．⑤「ブレンド建築」や「アメリカン風建築」など「マネ建築」一般，である．

他方「イモい建築」と呼ばれる一群の特徴は，①「オシツケ」と「イヤミ」が隠されていて，独特の「くさみ」を持っている．　②「おくれ者」の自覚を持たない「こだわりの表現」を用いる．　③ヤタラ空間論をふりまわす「マジ」と「イジ」のツクダニ．④オジン好みのマンネリズム．　⑤常識で凝り固まった「ワケシリ建築」であり，それらの手口は硬派的傾向が強いと言えよう．

こういうふうに比較してわかる事は，多くの現代建築がイモか「イモい」わけであって，「イマい」建築は数少ないのが認識できよう．　建築における「ダサさ」の系譜をふり返って見る時，やはり建築の本来的な姿をそこに認める事が可能であろう．

現実には「イジメ」と「イジケ」が同居している．ヤクザな建築の世界で，スンナリと「イマい建築」などできるわけがなく，そこには「ねばり強い」そして「イジマシイ」かつ「人間的しかけ」があるのである．　「イマい」ものをささえる「イモい」多くの人の上に「イマい」ものが存在している．　いわば建築という氷山の一角の光り輝く一部が「イマい」と言われる部分なのである．　「イモ」の中の「イモ」と言われる「与太者」こそが「マネ建築」や「マネー建築」もケットバシテ，骨太の「イモ」建築，本来のブキを利用して独自の世界を開いていくことであろう．　「イモ虫ゴロゴロ……明日はどこまでコロガルヤラ．」と言いつつ，クドクド書くも，紙数つきた．　スイッチOFF．　(S.YOKOYAMA)



❶ヒルポートホテル／原広司＋アトリエ・ゆ

❶新建築8209，建築文化8209
❷新建築8201，建築文化8201



❷大阪芸術大学塚本英世記念館・芸術情報センター／第一工房

とをわざわざ表現しようとしているふうがあり，〈例えば都はるみの，あのオシッコが漏れるのではないかと思われる程の気ばり〉をまさしく同世代的共感をもって実践しているふうがある．　評者はこう見るのだが黒川君は如何？　とはいえ，この2フレーズを中心として，実にメタフォリカルな輝き，しかもどこかしら鈍く，なにかしら湿ったような，手ごたえある輝きをもった言葉が散見された．詩人は三島の構成力を学ぶべきである．　それにしても〈はき古された女子大生の下着〉とゆー具合に，今回の応募原稿のほとんどが〈女子大生〉なる語を用いていたということには，いったいどういう説明が可能なのだろう．

やはり現代のモラルを体現すべく期待されているのがほかならぬ〈女子大生〉ということなのであろうか．　想像力というものの限界を思い知らされることしきりである．　いまや，したたかだのラディカルだのは，ゴールデン街で酔いつぶれる昔全共闘のお兄さんたちになく，オールナイトフジのキャピキャピギャルにしかない，というわけなのだろうか……．

え，さて，やはり結論がなっちゃないとゆうか，えらく凡庸かつ退屈だが，この凡庸さと退屈さがまさに現在の〈イマい〉風を薫らせているという佳比己君．　女子大生も断然顕在である．　文体は軽く，なにやらそれ風の符号・記号もあって，てっきり女の子かと思いきや……どーもこーゆー輩は質実剛健な小中高時代を送った評者としては苦手である．E加減な大時代を送った評者としては，なるほど，しかしながらなにをいまさら，である．ただし文章のリズムはなかなかに侮り難い．日常的な感覚を文章に定着するのは，意外に難しいものだからである．　〈彼女たち〉との距離を計測しながら，さらに一歩踏みこんで，設計事務所のエライオジサンの高尚な設計理論とロリータコンプレックスについて，なんぞを論じるとなお良かった，などと思うのでした．　次回期待．

イマいイモいを恣意的な箇条書きにしてまとめてくれたS.YOKOYAMA君．　ここにも〈ギャル好み〉なる一句が見られ，時代はロリータこれっきり，である．　とはいえ，これらの諸特徴は誠に言い得て妙であり，イマい建築がユニセックスであるというところなど，当欄の寄稿諸君の内にも見られる男だか女だかわかんない，とゆーイマい文章の特質

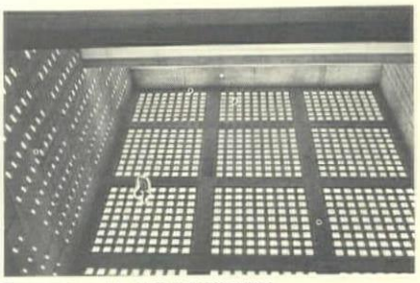
■一度目は悲劇として二度目は茶番として

㊊入選

物事の始まりは常に微妙です.
とあるのどかなゴゴの午睡—社内遊泳—夢か現かと思いきや, ウロウロするな頭がメロンなぶこぶこ上司！　こちらはひたすら樵の弁当(木にかかる)…行為の遮断, 視線による手の〈石化〉*1.　「…万里の長城が築かれたその日石工たちは何処へ去ったのか.　王たちが何をしたのか…」*2　国家装置, 戦争機械, 服装倒錯.　総勢○百○十人の技術者, 空虚な集合, バラバラなものとこと, 背後力による順列組合わせ.　で, 新たなる共同体が生れるべくもない.　垂直にそそり立つ太い直線, 斜めにズレていく逸脱, 状況を変えたい！　「…高松伸なんてやっぱり面白いもんね.　…(A.A.)」*3 明日もまた退屈な昨日の繰り返し…きっとKもSもそうは思わなかっただろう(K例えばカフカ, S例えばスピノザ).　ゼブラ模様の亀裂が走る.　神経直結メカニズムによるトランスだ.　〈「我々はもっともっと多くのものに満ちあふれた建築を要求する.…そしてなによりも破壊する建築を…」再編された神話こそ彼らにとってのリアリティなのだ〉*4　だって, でも, どうせではない, ただただ.　ただ深呼吸と柔軟体操でいい.　もう演出は飽きたぜ.　貧しき記号論的文化戦略, CIの限界はSの業績低下に著しい(例えばSEIBU, SUNTORY…).　ポップ哲学, 流行論, 浮上する〈気象学(メテオロロジー)〉*5　富士山はものすごくナイーブで無防備あの臆面のなさは何んだ？　常に足をすくわれんとの完全武装とは大違い.　ちょちょちょっと君！　○○出版の慈善事業, 食えない作家に原稿料差し上げます.　表現力の取得と同時におそいかかるイモッポさとクサさ.　ハッハッハッ前向きの肯定さ.　ジャーナリズムに愛はない.
美辞麗句の志却, 無定形と歪形.　この目がまばたきする時それは木馬のように大きい.
イマい建築にある類型化を施すなら次のようになる.
A. 元気である.
B.「槇・安藤・高松」である.
C. 聖吾評である.



❶藤沢市秋葉台文化体育館／藤沢市建設局, 槇文彦＋槇総合計画事務所
振動する空間, 波打つステンレス, 何てマテリアリスティック.



❷フェスティバル／安藤忠雄建築研究所
雨天中止, 生業建築家による漁夫の利

❶新建築8411, 建築文化8411
❷新建築8411, 建築文化8411

ABCの順で「である」ことが困難となっていく.
観念のヴェールをひきはがせ！　(カツサンドラ)

*1 〈第三項排除効果の構成契機(2)〉今村仁司
〈現代思想〉8406　青土社
*2 映画〈ル・コルビュジエ—チャンディガールの町〉1965, アラン・ターネル監督
*3 〈アイテムは知的記号か〉浅田彰VS.田中康夫
〈marie claire〉8505　中央公論社
*4 〈コープ・ヒムメルブラウ—思考の臨界測定器〉高松伸
〈極2〉　学芸出版社
*5 〈雪片曲線論〉中沢新一　青土社

をよく捉えている.　ただS.YOKOYAMA君自身は骨太のイモであって, イモ建築の本来を夢見ている.　で, 何を隠そう評者はこの姿勢に共感する.〈イモ虫ゴロゴロ…明日はどこまでコロガルヤラ〉, この精神である.
実は〈本物〉を狙っている, のである.　しかしながら, だからこそ, もうひと捻りで,〈イマい〉方に一票を投じるのである.　無論, 悪意をこめて.　というのも, この悪意に支えられた緊張感の内に身を晒しておかなければ, イモは単なる反動になりさがってしまう可能性なきにしも非ず, だからである.　イモに光とビタミンCを, そこでイマいに一票を, とこういうわけである.　S.YOKOYAMA君の認識の重みに期待する所似である.
はてさて, いったいどうしたというのだ.　まったく実に困ったことに, 入選が4月号と同じ, **カツサンドラ**君となってしまった.
明菜の歌と同様, パターンは見えてきたが, 一部前回を凌駕するものがある.　イメージの質に深化の跡が見られるのである.　特に最後の設問の形での結論は類型的でない.
とはいえ, 自身の言葉の跳梁に意識の集中がついてゆかない場面があって, たとえば「富士山…」以下,「木馬のように大きい」までは, 詩的であって詩ではない.　言葉であってイメージでない.　構成の緊密に著しく欠けて鮮明度が落ちる.　腹から出ずに頭から出た言葉だ.　もっと臓腑を抉るほどの意識の集中をもって, 固定した思考を笑いとばすべきではないのか.　しかしながら, 端倪すべからざる才として, この1度目の悲劇と2度目の茶番とに立ち会ったわけである.　ただただ.
ただ〈3度目の正直〉という言葉もある.　将軍も3代目, 歌手も3曲目が勝負.　是非挑発に乗ってくれたまえ.　いずれ入選回数多数者には, 何らかのゴホービを考えています.
それにしても, 応募稿の多くに高松伸氏の名前が記されて, さながらイマい建築家の代表と目されているのには驚いた.　出来れば感想を, 聖吾評に向けて送り付けてもらいたいものである.　そう思いませんか, 皆さん.　などと, 民主主義教育的主体性のなさを示してしまった.　あれ, ウィスキーも空いてしまったので, もはやこれまで.　これがモラルの限界, でした！

＊アームストロング宇宙飛行士でしたね, アポロ計画の.
えっ？　知らない？　ムムムムム……

〈国内建築ノート・聖吾評〉
原稿募集のお知らせ

■応募規定
応募の資格　とくになし
提出物　本文（1,000字以内），本文の内容に即した写真・図・そのコメント．　本文は原稿用紙に清書のこと．　写真・図は現物またはコピーとし最大Ａ４判程度．　また，出典（掲載誌名，掲載年月）を明記のこと．
応募原稿には，本名・職業・年令を明記のこと（ペンネーム希望者も同様）．
送り先　〒107　東京都港区赤坂6-5-13
鹿島出版会ＳＤ編集部聖吾評係
提出物の返却　提出物はいっさい返却いたしません．
問合わせ　宿題に関する問合わせは御遠慮下さい．
御礼　入選者にはＳＤ半年分，掲載者には２ケ月分（採用号以降）を差し上げます．

1985年８月号・宿題

「新人たちに贈る言葉」

締切＝６月13日（当日消印有効）

風薫る五月，である．　木々の緑も輝きを増して，そうともこれが青春だ，の季節である．　（知らない人はお兄さんかお父さんに聞いてみて下さい．）ところで青春といえば，五月は大学の新入生も社会人１年生も，なべてフレッシュマンには五月病といって，なにやら危険な季節だそうな．　そんな，ひょっとしたら迷える新人たちに，暖かい，あるいは厳しい，いずれにせよ励ましの言葉をかけてやろうというのが今回の宿題の出来心である．　建築科の，あるいは建築家の，ともあれまがりなりにも建築界の先輩たる皆さんから，新たに建築の世界にとびこもうという殊勝な心がけの後輩に向かって，発すべきメッセージとはいかようなものであろうか．　これを考えてみてもらいたいのである．
ケンチクのケの字も知らずにいきなり〈建築とはなんだ〉（青春とはなんだ，に似てるな，どーもくどいよーだが）とどやされた１年生の気持ち，あなたにも身に覚えがあるでしょーが．　ずいぶんと大上段に振りかぶって建築，建築と呪文さながら，なんやそんなタイソーなもんやろか，と思った経験があるでしょーが．　なんぼのもんじゃい，と心ひそかに反発したことも，なくはないんじゃないでしょか．たかが建築！と．　とはいえいつしか，されど建築……と心の片隅で呟いている自分自身に気がついたりして．　そんなあなただから，あえて今，新人として同じ土俵に上がらんと待機している若者たちに，言うべきことを言っておいてほしいのです．
この〈新人たちに贈る言葉〉といった類の企画はまるで目新しいものではなく，むしろ〈中一時代〉なんかだと必ず毎年決まって繰り返される春の桜といった古典的趣向であります．　ではありますが，そこはそれ，聖吾評らしく，ホロ苦く甘酢っぱい感慨をも込めながら，クールに，そしてちらりワサビなんぞも散りばめながら，建築界の新人たちに先達の重みをジワッとわからせてあげようではありませんか．　もちろんそれが天に唾する行為であることは，誰よりあなた自身が御存知のはず．　日頃建築を友として（or敵として？）心にわだかまる由無し言をこの際どっと吐き出すもよし，日々の仕事の辛さを嘆くもよし，課題の過酷を呪うもよし，夢とロマンを語るもよし．　ひとつヒネりとワサビのきいた辛口の批評を，建築界へのオリエンテーションの意味もこめて新人たちに贈ってやって下さい．　ことによるとあなたの一言が，未来の大建築家を生むかもしれない．　あるいはその一言が，建築の正体を鋭くえぐり出すかもしれない．　だから……建築良いとこ一度はおいで，酒は旨いしネーチャンはキレイダ，ワッワッ！　よろしく．　●竹山聖

1985年９月号・宿題

「筑波博
どこが面白かったか，
どこがつまらなかったか．」

締切＝７月13日（当日消印有効）

諸君はその目で筑波博を見たろうか．　その目は筑波に何を見たろうか．　筑波博をとりあげた雑誌の特集号もすでに出そろった．　それらに載った筑波の記事を読まれただろうか．　それらは諸君の若き感性には，退屈至極であり，老練な知性から見れば未熟千万であったに違いない．　ならばこそ，今こそその欲求不満と鬱憤のたけを晴らすべき時である．もしこの時をのがせば，痛恨の情は末代にまで及ばんとす．
月評的な書き方というのがひとつある．　個々の作品をけなしたり，もちあげたり，細部をとりあげてあげ足をとったり，見え見えのよいしょをして，先生と自分との人間関係の緊密化を図ったりといった様々の趣向が考えられる．　聖吾評では月評的な書き方をした応募作は稀である．　聖吾評の宿題があまりに気宇壮大にして，荒唐無稽にすぎたということもあったかもしれない．　しかし今回は異なる．対象が限定されている．　思いきって対象に肉迫し，力いっぱいあげ足をとったらおもしろいのではないだろうか．　あげ足をとったとしてもたかが数カ月の命という建物である．　あげ足をとられた方でも，軽く聞き流してくれるかもしれない．
筑波博を生んだ社会情勢，経済情勢に肉迫し，分析し，ずたずたにするという手もある．　博覧会は建築的イベントであるが，それと同等に，あるいはそれ以上に，社会的，経済的，政治的なイベントであり事件である．　ここはひとつ社会派をきどってみて，その方からせめるのも一興である．　朝日新聞記者の建築記事に決してひけをとらぬ，鋭い切れ込みを期待する．
筑波博に関与した建築家，そのスタッフも数知れない．　それらの人々の生の声を聞きたい．　博覧会協会のアホのせいであんな建物になってしまった．広告代理店のマヌケな企画が先行して，こんなつまらん建物になってしもた．　こういう声が聞けたらどんなにすばらしいだろうか．　書き手のプライバシーは責任をもってお守りします．
各媒体，各雑誌に，筑波の記事は頻出している．おおむね参考にはならないかもしれないけど．　しかし評者がものした筑波ルポ〈埃まみれの筑波博会場に日本建築界の現状を見た〉（カラム96）は読んで損はないかもしれない．　反面教師として一読することをおすすめします．　●隈研吾

<都市住宅>1985年5月号　定価1,200円

特集|〈仕掛け〉考・3

意味とコンテクストを仕掛ける

●

座談会：コードの共有・解体・生成をめぐって―建築思潮における〈仕掛け〉の現在――難波和彦＋野澤正光＋八束はじめ

インタヴュー：構成の廃棄―意識としての建築―多層構造論――原広司

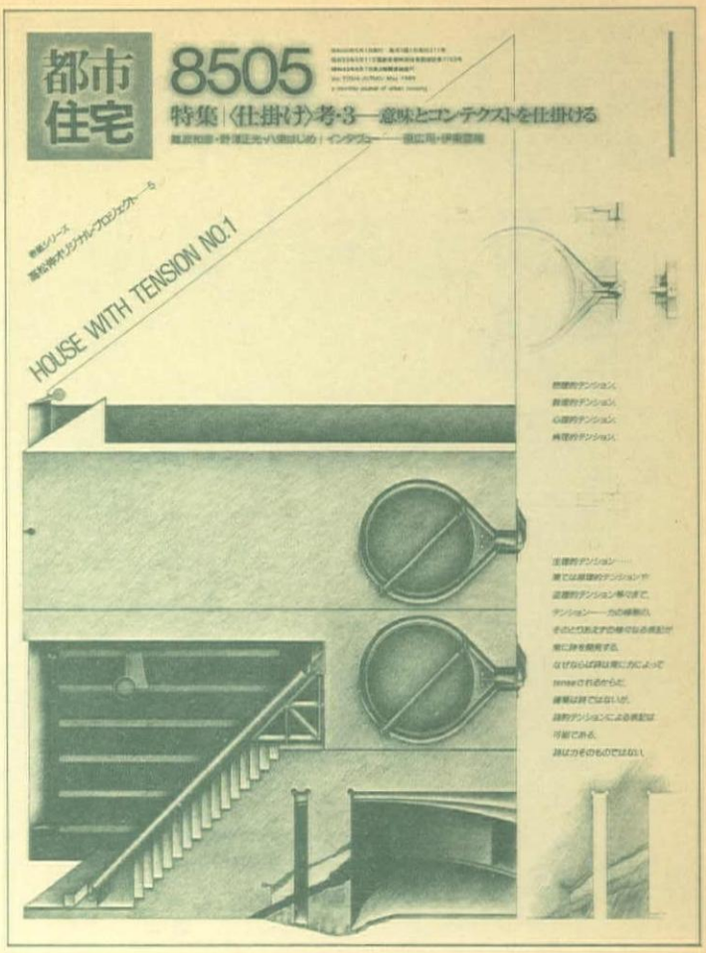
インタヴュー：形式の廃棄―風の建築―プリミティヴ・ハット――伊東豊雄

特集：監修・執筆――難波和彦＋野澤正光＋八束はじめ

建築の記号性　読み取りの戦略　スキゾ・エクレクティズムと仕掛けテクノロジー[磯崎新]　批評の自立・批評家の不在[磯崎新]　町並み記号論　イギリス―ポピュリズムの拡散　ハンス・ホライン―アーキグラム―スーパースタジオ　ピーター・アイゼンマン〈モダニズムの墓(グレイヴス)〉抄　共有コードによる挑発―石井和紘の方法　ゲーム＝ドール・ハウス　仕掛けとしてのタイポロジー　ロッシとポップ　アイロニカルな巨花―ヴェンチューリとウォーホル　アラン・コフーン〈タイポロジーとデザインの方法〉〈形能(フォルム)と形象(フィギュア)〉抄　色彩認知の普遍性　〈絵を描くこと〉のフェティッシュ　シュミラークル・シンドローム　選択の根拠―擬和風　〈地〉としての消費都市　仕掛けとしてのポップ　仕掛けとしてのプリミティヴ・ハット　その後のアレグザンダー

■

表紙シリーズ：高松伸オリジナル・プロジェクト5――HOUSE WITH TENSION NO.1



<都市住宅>1985年6月号　定価1,200円

特集|日仏共同コンペ

〈バンリューを創る〉

●

文：建築から都市へ―繰り返される問い――日仏バンリュー・コンペより――小宮山昭　今なぜ日本で――金子勇次郎　価値感の差を思う――PAN-13J審査に立ち合って――進来廉　[自然]と[時間]に対する日本人独特の感性――ジャクラン・プルース

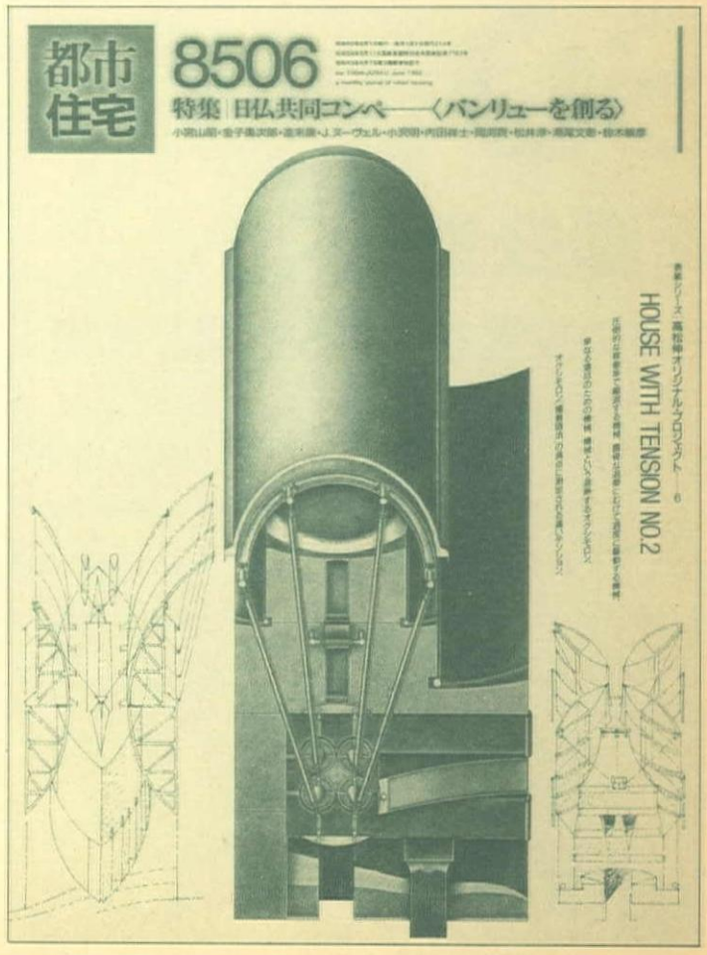
インタヴュー：重要なのは，アイデンティティをもった，ひとつの[場]の創造なのです！――ジャン・ヌーヴェル

PAN-13Jプロジェクト：通り庭協定をもつタウン・ハウスの提案――小沢明　東京調布市国領町再開発計画――内田祥士　ノアの方舟計画――岡河貢＋山下秀之＋兼藤真一　断片の中の都市――前橋：居住施設による風景の再構成――松井淳　木賃密集地域の環境改善計画――瀬尾文彰　老朽化した公営住宅の再生を契機としての公共空間の再構成――鈴木敏彦

PAN-13Fプロジェクト：鉄道に囲まれた半島　河岸をめぐる回廊　周囲と周辺｜空間と社会生活とのコンデンサーとしての建築　中規模都市周辺部に都市化を導く緑地帯　郊外との境界線　現実的で現代的な臨機応変な建築　〈移動〉による空間構成　都市計画道路を中心にした土地利用　人口定着のための再開発　施設の同化による首都の改良

■

表紙シリーズ：高松伸オリジナル・プロジェクト6――HOUSE WITH TENSION NO.2



SD 別冊No.16

大正海上本社ビルの記録

大胆な中庭の彫刻，ユニークな省エネ手法など多くの話題を提供し，各界の注目を集めた大正海上本社ビル．　本書は，計画から施工までその全貌を記録したオフィス・ビル計画の指針を示す決定版！

写真撮影＝村井修

●写真構成

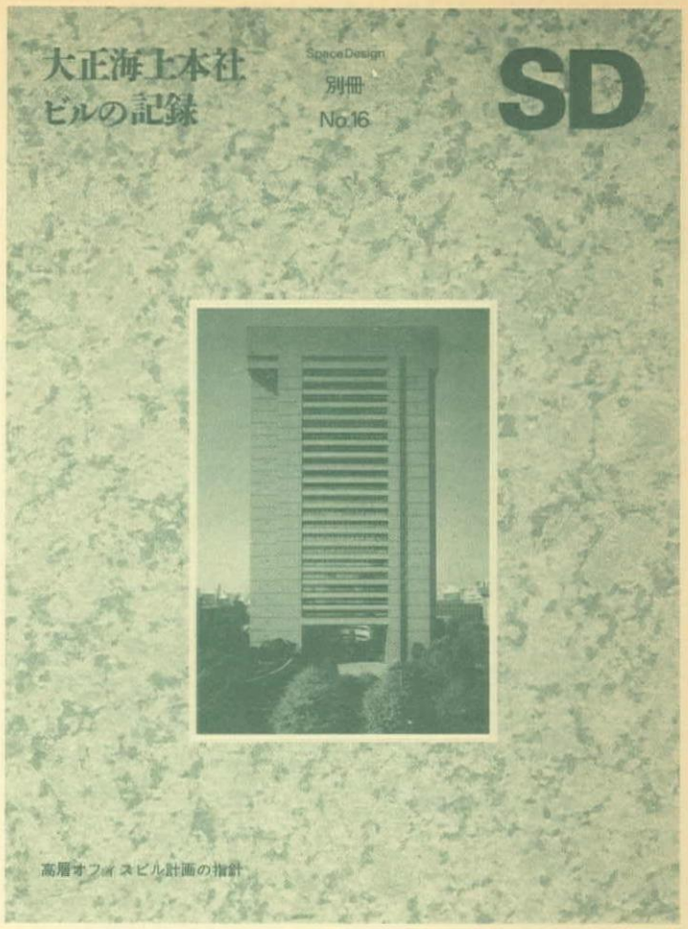
●クライアントに聞く：平田秋夫　聞きて：村松貞次郎＋林昌二

●第一部：計画編　第二部：ディテール編　第三部：施工編

A 4 版　全180頁

絶賛発売中！

定価＝4800円



SD 別冊No.17

新国技館

国技の殿堂を支える空間と技術

大相撲の本拠地として，そして各種スポーツ競技・催物のための多目的建物として，今春，両国に開館した新国技館．　本書では，この和風大規模建築の全容と，それを支える最新技術の数々を詳細にわたって紹介する．

写真撮影＝村井修

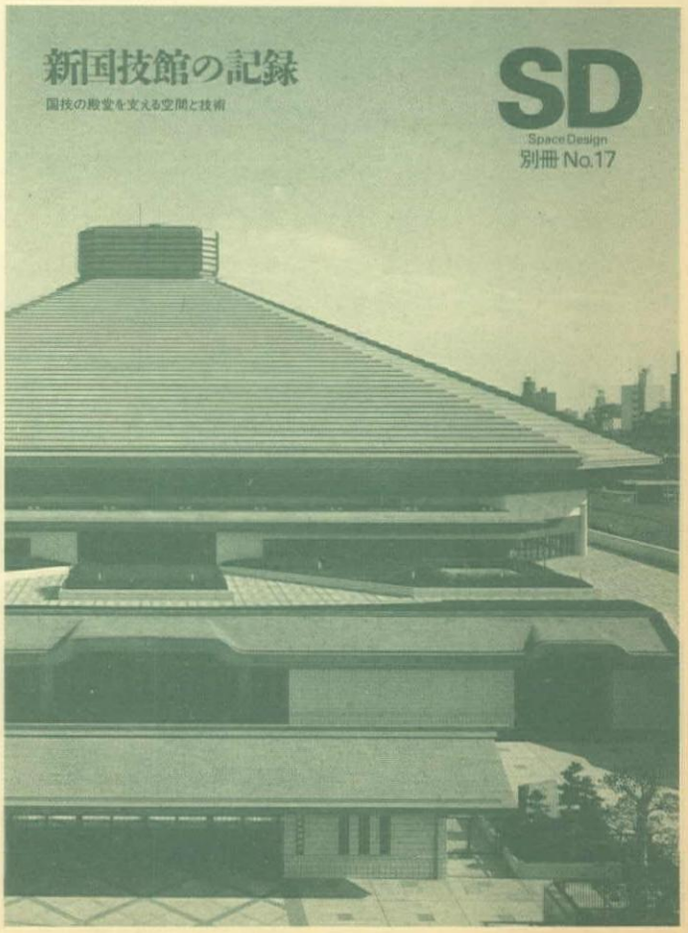
●写真構成

●座談会＝内田祥哉＋中島隆＋今里隆

●第一部：計画編　第二部：ディテール編　第三部：施工編

5月下旬発売

予価＝4500円



SD 5月号好評発売中!

特集①=

Adolfo Natalini:
アドルフォ・ナタリーニの建築1979−83

70年代スーパースタジオのラディカル・アーキテクチュアから10数年,
コモに建つ最新作アルツァーテ・ブリアンツァの銀行ほかに見られる
ナタリーニの変貌.
作品=コモ・アルツァーテ・ブリアンツァの銀行, フランクフルト・レーマーベルクの再建計画, フィレンツェ・パブリック・オフィス計画他.

特集②=

大橋晃朗の家具

数多くの建築家と共同し, ユニークな家具を作り続ける大橋晃朗の全作品を紹介する.

●ザハ・ハディドのプロジェクト　文:ケネス・フランプトン
●つくば科学博'85ガイド
定価=1500円



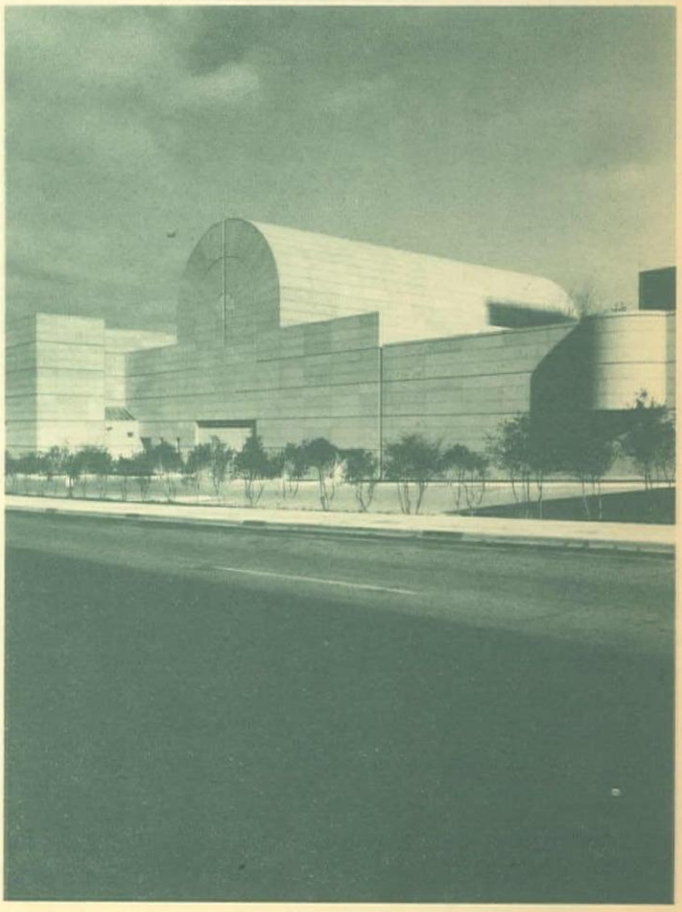
SD 7月号予告

特集=

Edward Larrabee Barnes
エドワード・ララビー・バーンズ

エド・バーンズは幾何学の詩を謳う.
鋭角に天を突くシルエット.
幾重にも続く大小様々の方錐体.
迷路のごとき動線を内包する完璧な立方体.
転変するデザインの潮流に身を委ねず, 飽くまでもシンプルでプライマリーな形態を追究し続けるエド・バーンズ.　その珠玉の作品を一同に公開.
そこに私達は, モダニズムの最良の質が現代に脈打つ姿を見ることができる.

文=エドワード・ララビー・バーンズ, 堀内正弘
作品=ダラス美術館, スケイフ・ギャラリー, ワットレー邸, ヘイスタック林間工芸学校, キャンプ・ヒドゥン・バレー, IBMワールド・トレード本部, IBMタワー, エマ・ウィラード校, ボードゥン・カレッジ視覚芸術センター, シカゴ植物園　他, 全22作品



ダラス美術館

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

近代建築ガイドブック

古い街に見えがくれする近代建築を見に行こう

さあ，見て歩こう！ 街は生きている博物館だ

〈全5巻〉

[関東編]

四六判 276頁 2,300円



東京建築探偵団著 顧問＝村松貞次郎＋山口廣 団員＝宍戸実＋植松光宏＋河東義之＋藤森照信＋堀勇良＋清水慶一＋高橋喜重郎

建築探偵団始末記——藤森照信

皇居一周コース／銀座・築地商店建築探訪コース／日本橋・兜町オフィス街コース／本郷・お茶の水大学街コース／上野公園コース／浅草六区映画館街コース／赤坂・麻布・六本木高級住宅街コース／三田・白金・高輪大邸宅コース／田園調布・成城コース／川巡り・橋巡り／横浜旧居留地コース／横須賀・猿島コース／関東環状別荘帯・湘南コース／関東環状別荘帯・箱根コース／関東環状別荘帯・軽井沢コース・信濃路巡遊コース／藤村式擬洋風建築コース／房総近代建築巡遊コース／駒杵勤治と茨城の建築コース／産業遺跡コースⅠ／産業遺跡コースⅡ／宇都宮・日光コース／那須野ヶ原プランテーション別荘コース／新発田・新潟・上越市コース

[北海道・東北編]

越野武＋坂田泉＝編

四六判 272頁 2,800円



北海道の近代建築——越野武

函館西部市街コース／函館東部市街・効外コース／小樽・山手コース／小樽・運河コース／札幌都心コース／札幌周辺コース／北海道開拓の村／石狩川流域コース／旭川コース／帯広・根室コース／北見・網走コース／いぶり・日高コース／追分そ～らんライン

みちのく有情——坂田泉

安積コース／会津コース／信夫・伊達路コース／仙台コース／仙北コース／岩手路コース／奥むつコース／津軽コース／米代川コース／秋田・日本海コース／雄物川コース／最上川コース／庄内コース

[関西編]

石田潤一郎＋沢田清＋柴田正巳＋中川理＋福田晴虔＋山形政昭＝共著

四六判 308頁 2,800円



はじめに——福田晴虔

船場コース／キタコース／ミナミコース／ニシコース／東天満・上町台地コース／なにわの名橋めぐりコース／堺・泉南コース／ステンショめぐりコース／三条・烏丸コース／東山コース／京都御所一周コース／七条コース／丹波・丹後コース／旧居留地・税関構内コース／山本通・北野町コース／海岸通・栄町通コース／須磨・塩屋・舞子コース／あめりか村コース／阪神間コース／産業施設と公共建築コース／滋賀コース／琵琶湖周遊ヴォーリズコース／紀州・灯台巡りコース／奈良県コース

[東海・北陸編]

飯田喜四郎＋瀬口哲夫＋竺覚暁＝編著

続刊



東海の近代建築——瀬口哲夫

官庁・東区コース／広小路商業建築コース／熱田・港コース／八事・覚王山住宅地コース／名古屋近郊・明治村コース／岡崎・豊田コース／豊橋・渥美コース／高山・飛騨コース／岐阜コース／多治見・瀬戸コース／伊賀・北勢コース／伊勢・熊野コース／浜松・遠州コース／静岡・駿河コース／勢海・伊東別荘地コース／伊豆コース

北陸の近代建築——竺覚暁

富山市近郊コース／高岡市近郊コース／新川・黒部コース／小矢部・砺波平野コース／金沢城周辺コース／兼六公園周辺コース／犀川左岸コース／能登半島コース／加賀平野コース／福井平野コース／丹南コース／嶺南コース

[西日本編]

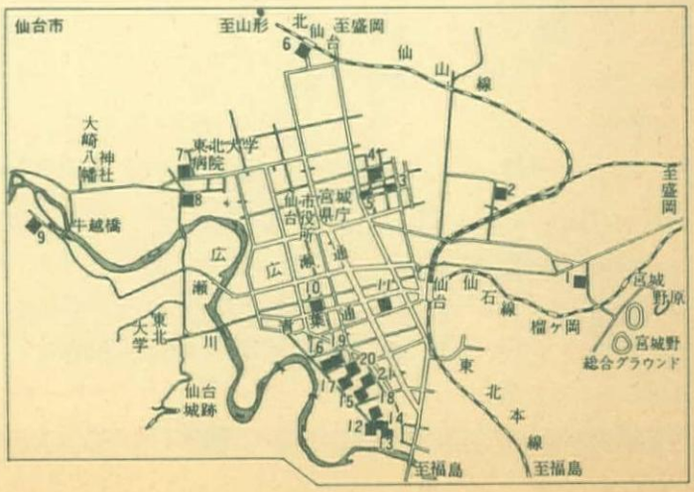
松葉一清＋宮本雅明＋片野博＋大森久司＋土田充義＋宮本達夫＋桑原三郎＋山口光臣＋村田明久＋阿久井喜孝＋川上秀人＋木島安史＋福原昌明＋伊藤行＋中力昭＋杉本俊多＋中川幸治＋小野木重勝＋山本忠司＋松村正恒＋四宮照義＋山本長水＝共著

四六判 280頁 2,800円



日没する国より——松葉一清

関門コース／洞海湾コース／博多天神コース／九大コース／筑豊炭鉱遺跡コース／有田・唐津コース／長崎市街地コース／南山手・東山手コース／軍艦島コース／五島教会堂建築コース／熊本コース／日豊本線コース／鹿児島コース／岡山・牛窓・和気コース／倉敷・児島・笠岡・高梁コース／津山を中心とした美作コース／広島コース／呉・江田島コース／岩国・柳井コース／山口・宇部・萩コース／山陰コース／香川コース／愛媛コース／徳島コース／高知の建築コース



明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

パタン・ランゲージ［環境設計の手引］

C.アレグザンダー他著　平田翰那訳

A5判　656頁　¥9,800

著者が前文で述べるように，パタンの多くは原型的であり，あまりにも物の本質に根ざしており，500年たっても今日と同様に，人間の本性や行動の一部であり続けるように思えるのである。

図版写真867点収録

本書を用いれば，家族とともに自分の家を設計したり，隣人とともに自分たちの町や近隣を改良することができる。さらにオフィス，作業場，公共建物などの設計や，実際に建物を施工する手引きとしても役立つ。

10年の沈黙の後，環境構造センターのクリストファー・アレグザンダーとその仲間たちは，3部作の形でその成果を発表した。それらは彼らの言葉を借りると，「建築と建設と計画に対するまったく新しい取り組み方の基本を示し，今日の考え方や実践に完全にとって代ることを，私たちは願っている」というものである。その3部作とは，『The Timeless Way of Building』，『オレゴン大学の実験』，そしてこの『パタン・ランゲージ』である。

これらの本の核心となる考え方は，人びとは自宅や街路やコミュニティを自らの手で設計すべきだというものである。このような考え方は急進的(建築関係の職能に急激な変革を迫るかも知れないが，それは単に，世界の美しい場所のほとんどが建築家以外の人びとによってつくり出されたという事実から生じるのである。

もうひとつの核心は，環境を設計する際には，人びとは普通言語のようなある種の「言語」に頼っており，一貫性の生れる一種の文法を用いて，デザインの無限の多様性を分化し，伝達することができるのである。

本書に示すのは，このような言語である。本書を用いれば，あらゆる建物や建設環境の設計が可能になるのである。

このランゲージの基本単位である「パタン」は，デザインのあらゆる問題に対する解答を示している。(窓台の高さはいくらにすればよいか。建物は何階建にすべきか。近隣内のどれだけの土地を草や木に提供すればよいか。)このパタン・ランゲージには，250以上のパタンがあり，各パタンは問題提起，イラスト付きの問題の検討，そして解答の3部分から構成されている。



自然の池や小川を保存し，都市内を通りぬけるままにしておくこと。それに沿って歩行路を設け，歩行者用の橋をかけること。小川が都市内の自然な障害物を形成するようにし，横断交通用の橋は多く架けないこと。

できれば，雨水はつねに開溝に集め，歩行路ぞいや家の前を流れるようにすること。自然の流水がない場合は，街路に泉をつくり出すこと。

〔パタン64　池と小川〕より

ストリート・ファニチュア

屋外環境エレメントの考え方と設計指針

西沢　健著　A5・240頁　¥2,900

都市街路や広場・公園の設備に関する資料が皆無に等しい中で，我が国で初めて全容が紹介された実務に役立つガイドブック。内容は極めて分り易く，デザイン・分類・設計指針，配置と実例に及んでいる。

環境の空間的イメージ

イメージマップと空間認識

ダウンズ，ステア共編　吉武泰水監訳　A5・450頁　¥9,300

都市計画へのデザイン手法の導入は，われわれの生活環境の質と位置とを考える上で重要である。イメージマップは，その空間認識において，有益なデザイン効果につながる新素材であろう。

人間のための街路

B.ルドフスキー著　平良敬一，岡野一宇共訳　A5・344頁　¥3,200

とらわれない眼で世界に現存する街路を観察するとともに，歴史の中の街路をも想起しつつ，街路のもつ人間にとっての豊かな意味性を考え，未来の街路のモデルへの示唆を示したユニークな文明批評の書。

環境のデザイン

R.P.ドーバー著　土田　旭訳　B5・334頁　¥5,500

建築よりも大きなスケールを対象とし，都市計画よりも総合的な環境デザインについて，著者ドーバーのアイデアを十分に生かして体系的に考察したもので，広い視野に立った事例研究の書である。

水辺の計画と設計

吉村元男・芝原幸夫共著　A5・240頁　¥2,900

河川・湖沼・港湾や海岸線など，水辺や親水性の空間に関するデザインやプランについて，幅広く全国各地の事例を総合的に把え紹介している。都市計画家，土木・建築関係者，造園家，自治体関係にすすめる。

新しい建築・都市環境デザインの方法

T.ムーア編　環境デザイン研究会訳　B5・444頁　¥6,900

世界各国の建築・都市計画・システム工学・心理学・社会学等，多方面の専門家の協力によりまとめられた〝人間環境の設計・計画についての新しい方法〟に関する最新の研究報告であり，かつ指針書である。

住居：その本質とプラン

A.ギュトン著　佐々木隆文訳　B5・256頁　¥5,800

エコール・デ・ボザールの定評ある講義録。I住居，II宮殿，III都市の住居（A私的な邸宅，B積層集合住宅）IV郊外住宅，V都市地域外の住居，VI住居の周囲：環境。豊富な写真，図面共4百点収録。

驚異の工匠たち

知られざる建築の博物誌

B.ルドフスキー著　渡辺武信訳　A5・436頁　¥3,800

〝みっともない人体〟に続いて読者に贈るルドフスキーの最近作。従来の建築史の視野の外にあった地方的，土着的建築物を再評価し，人類文明の多様性を積極的に肯定しようとするユニークな建築論。

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話 (03) 582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書:各四六判

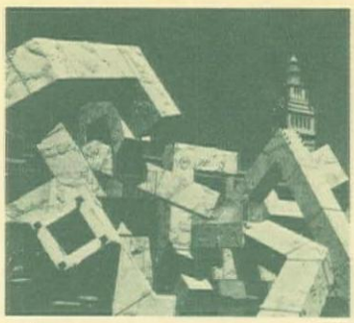
SD選書

■今日の造形文化に関心のあるすべての人びとにおくる，新しいタイプの選書 ■現代文明のあらゆる課題をあつかい，新鮮でダイナミックな視点を提供する選書 ■高度に細分化し，専門化した現代文明の各領域をつなぐかけ橋となる選書 ■写真・図版を豊富に入れて，ヴィジュアルに編集し，感覚と知性に富む読者のよき伴侶となる選書

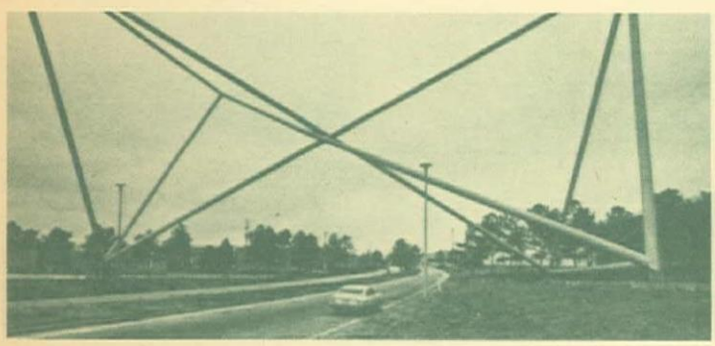
屋外彫刻 [オブジェと環境](SD選書192)

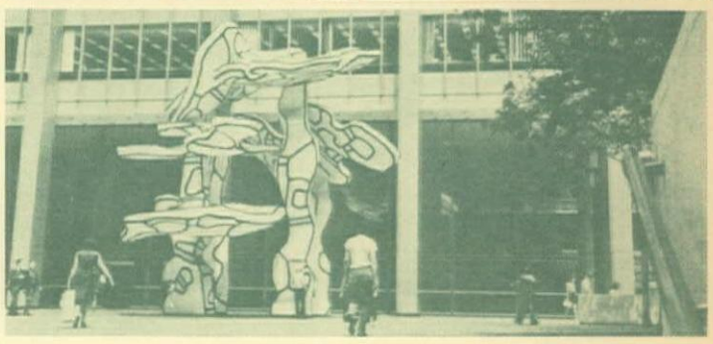
M.A.ロビネット著 千葉成夫訳 四六判208頁・¥1,500

本書は，彫刻作品が環境の中に置かれることが決まってから実際に設置されるまで，どのような経過を辿るものかを探ろうとするものである。これからの環境彫刻のあり方，考え方を記した初めての書。多数の実例を掲載。









136 都市憲章 磯村英一著 ¥980

137 巨匠たちの時代 R.P.バンハム著/山下 泉訳 ¥980

138 三つの人間機構 ル・コルビュジエ著/山口知之訳 ¥980

139 インターナショナル・スタイル ヒッチコック・他著/武澤秀一訳 ¥980

140 北欧の建築 S.E.ラスムッセン著/吉田鉄郎訳 ¥980

141 続建築とは何か ブルーノ・タウト著/篠田英雄訳 ¥980

142 四つの交通路 ル・コルビュジエ著/井田安弘訳 ¥980

143 ラスベガス—忘れられたシンボリズム ヴェンチューリ他著/石井・伊藤共訳 ¥1,500

144 ル・コルビュジエ C.ジェンクス著/佐々木宏訳 ¥1,500

145 デザインの認識 R.ソマー著/加藤常雄訳 ¥980

146 鏡—虚構の空間— 由木常雄著 ¥980

147 イタリア都市再生の論理 陣内秀信著 ¥980

148 東方への旅 ル・コルビュジエ著/石井 勉・他共訳 ¥980

149 建築鑑賞入門 コーディル，ケノン共著/六鹿正治訳 ¥1,500

150 近代建築の失敗 P.ブレイク著/星野郁美訳 ¥1,500

151 文化財と建築史 関野 克著 ¥1,200

152 日本の近代建築(上) その成立過程——稲垣栄三著 ¥1,200

153 日本の近代建築(下) その成立過程——稲垣栄三著 ¥1,200

154 住宅と宮殿 ル・コルビュジエ著/井田安弘訳 ¥1,200

155 イタリアの現代建築 V.グレゴッティ著/松井宏方訳 ¥1,200

156 バウハウス——その建築造形理念 杉本俊多著 ¥1,500

157 エスプリ・ヌーヴォー 〈近代建築名鑑〉 ル・コルビュジエ著/山口知之訳 ¥1,200

158 建築について(上) F.L.ライト著/谷川睦子・正己共訳 ¥1,200

159 建築について(下) F.L.ライト著/谷川睦子・正己共訳 ¥1,200

160 建築形態のダイナミクス(上) R.ルドルフ著/乾 正雄訳 ¥1,200

161 建築形態のダイナミクス(下) R.アルンハイム著/乾 正雄訳 ¥1,200

162 見えがくれする都市 槇 文彦・他共著 ¥1,500

163 街の景観 J.バーク著/長 素連・もも子共訳 ¥1,200

164 環境計画論 田村 明著 ¥1,500

165 アドルフ・ロース 伊藤哲夫著 ¥1,200

166 空間と情緒 箱崎総一著 ¥1,200

167 水空間の演出 鈴木信宏著 ¥1,500

168 モラリティと建築 D.ワトキン著/榎本弘之訳 ¥1,200

169 ペルシア建築 A.U.ポープ著/石井 昭訳 ¥1,500

170 ブルネッレスキ G.C.アルガン著/浅井朋子訳 ¥1,500

171 装置としての都市 月尾嘉男著 ¥1,500

172 建築家の発想—私の師匠たち 石井和紘著 ¥1,500

173 日本の空間構造 吉村貞司著 ¥1,500

174 建築の多様性と対立性 R.ヴェンチューリ著/伊藤公文訳 ¥1,500

175 広場の造形 カミロ・ジッテ著/大石敏雄訳 ¥1,500

176 西洋建築様式史(上) H.バウムガルト著/杉本俊多訳 ¥1,500

177 西洋建築様式史(下) H.バウムガルト著/杉本俊多訳 ¥1,500

178 木のこころ—木匠回想記— J.ナカシマ著/神代・佐藤共訳 ¥1,500

179 風土に生きる建築 若山 滋著 ¥1,500

180 金沢の町家 島村 昇著 ¥1,500

181 ジュゼッペ・テッラーニ ブルーノ・ゼーヴィ編/鵜沢 隆訳 ¥1,500

182 水のデザイン D.ベーミングハウス著/鈴木信宏訳 ¥1,500

183 ゴシック建築の構造 R.マーク著/飯田喜四郎訳 ¥1,500

184 建築家なしの建築 B.ルドフスキー著/渡辺武信訳 ¥1,500

185 プレシジョン(上) ル・コルビュジエ著/井田・芝共訳 ¥1,500

186 プレシジョン(下) ル・コルビュジエ著/井田・芝共訳 ¥1,500

187 オットー・ワーグナー 〈ウィーン世紀末から近代へ〉 ゲレーツェッガー著/伊藤・衛藤訳 ¥1,500

188 環境照明のデザイン 石井幹子著 ¥1,500

189 ルイス・マンフォード 木原武一著 ¥1,500

190 「いえ」と「まち」—住居集合の論理 鈴木成文・他共著 ¥1,500

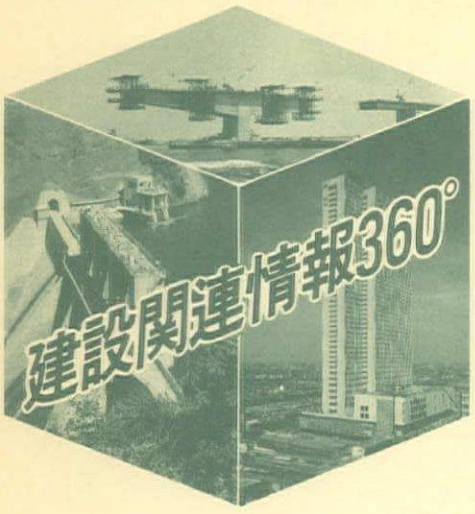
191 アルド・ロッシ自伝 アルド・ロッシ著/三宅理一訳 ¥1,500

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません



月刊 ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン

8505号 目次

話題分析 飛躍期迎えた異業種交流と建設業

●プロジェクト・展望●国際都市〝ヨコハマ〟の将来像

●ピック・アップ●ダンピングと建設業の将来

★視点★行く手は凪か荒波か民営NTT船出

建設業にみるエクセレントカンパニー〈大成建設〉

連載 建設業の生いたち＊職人から請負業者への道

●わいどあんぐる●通信事業開始へ、新規四社が申請／官民一体でダンピング追放の気運

●霞が関ホットライン●共同溝整備でマスタープラン／海外建設問題で官民の懇談会が

●タウンパトロール●〝孫悟空〟が飛んできた?!／明治の面影そのままに石塀を補強

●情報るうむ●民間約款・かし担保の改正を審議／国際グラフコンペで鹿島が1位に

●ハウジング●校倉造りのミニ木造住宅／〝松の湯〟など戸建て用一坪浴室

●地域レーダー●高槻市のイメージアップに景観懇／根室湾に10か年で海洋牧場を建設

●ローカルスポット●松江本町商店街を共同店舗で再生

DALTON EYE／らんきんぐ／海外トピックス／サイエンス／シリーズ〈自然〉

GOODS & GOODS／マガジンジャック／用語／他

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

●忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。

●これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

購読のお申し込みは今すぐに！
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先
〒107 東京都港区赤坂6-5-13
㈱鹿島出版会 情報システム事業部
ダルトンレポート読者係 ☎03(583)6050

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,800円(1冊当り400円)
（送料共） 3年購読(36冊) 9,600円(1冊当り266円)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。

DALTON REPORT 定期購読申込書

□新規購読申込 SD

フリガナ お名前			
ご自宅 〒 ☎ 住所			
お勤め先 （職種）	該当のものに○印を	ご専門	建築 土木 機械 電気 事務 ほか
		ご担当	設計 施工 管理 営業 経理 ほか
購読期間(☑印をつけてください)		□1年	□3年

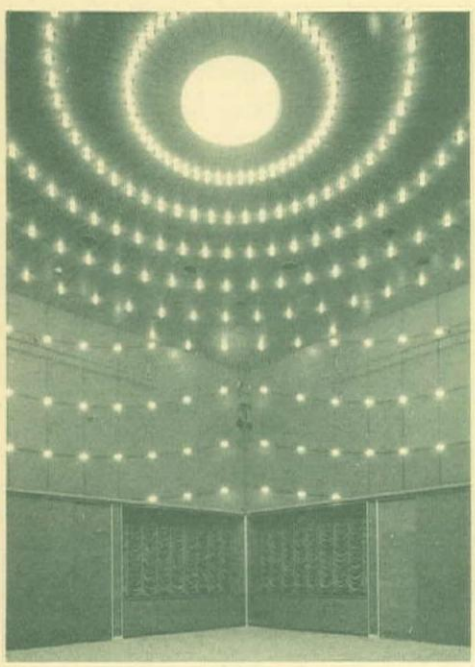
明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話(03)582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

ポスト・モダンの時代と建築

磯崎 新 対談 A5判 280頁 ¥2,300

ポスト・モダニズムに関しても最大の話題の主である磯崎新の，最近10年間（1975～84）の対談集。
内外の批評家17人と，日本も含めた世界の文化の具体的な状況，〈ポスト・モダン〉という時代の兆候について語っている。

（対談者）
多木浩二
東野芳明
中原佑介
武満 徹
村上陽一郎
鈴木忠志
勅使河原 宏
篠山紀信
横山 正
R.マイヤー
K.フランプトン
E.ソットサス
B.ラディエーチェ
三宅一生
浜野安宏
A.メンディーニ
N.バイク



建築および建築外的思考

磯崎 新 対談 A5判300頁 ¥2,200
シュトックハウゼン，東野芳明，原広司，丹下健三，篠原一男，スターリング，大岡信，高階秀爾らとの対談を再編集。

建築の一九三〇年代——系譜と脈絡

磯崎 新 対談 A5判250頁 ¥2,400
吉田五十八，生田勉，土浦亀城，吉武泰水，稲垣栄三，高山栄華，河野鷹思の7氏と語り，日本現代建築の系譜を探る。

建築の七つの力

鈴木博之著 四六判184頁 ¥1,800
連想，数，ゴシック，細部，模倣，地霊，過去——以上7つの力，建築を成立あるいは読解するうえでの力を論究する。

近代主義を超えて——現代建築の動向

松葉一清著 四六判228頁 ¥1,600
象設計集団，黒川紀章，木島安史，磯崎新，安藤忠雄，林昌二——6人の建築家を選んで現代の建築のあり方を問う。

磯崎 新 ①《現代の建築家》

SD編集部編 A4変・194頁 ¥3,000
SD7604号の保存本。28の作品への自註／新計画案：北九州市新総合展示場他／作品：福岡相互銀行佐賀支店…他／道程

磯崎 新 ②《現代の建築家》

SD編集部編 A4変・196頁 ¥3,800
SD8401の保存本。筑波学園センタービルを中心に，1976年以後の主要作品を網羅し，現在の磯崎新に迫る。論／作品…。

現代建築を担う海外の建築家101人

建築思潮の最前線

三宅理一＋森島清太＋榎本弘之編 A5判 244頁 ¥2,800
今日の建築思想は，近代主義の見直しという大きなうねりのなかで，ハイテック，レイトモダン，歴史主義，バナキュラー等，多彩な様相をみせている。本書はこういった状況の中で，90年代の建築デザインの動向を予測する代表的建築家，批評家，並びに周辺分野の人々を，ヨーロッパ，アメリカを中心に101人選び，彼らの理念，作品，行動を紹介。
現代建築の動向を俯観するうえで，学生・建築家のみならず，デザイナー等周辺の読者にとっても便利な一冊といえよう。



中国建築留学記

現代中国を痛快まるかじり

村松 伸著 四六判二〇〇頁 一、六〇〇円



北京の横町で鉄腕アトムを口ずさみ，上海ではナナハンライダーに変身する。少し風変わりで，ちょっぴりイキに描きだす新感覚のエッセイ集。
〈主な内容〉留学まで，もしくは悪夢の手紙のこと／僕は素敵な単位人間!!／当世清華大学学生気質洋と土／北京小組五，奮戦ス／私説梁思成伝／ペイ先生の大いなる誤算／北京住宅哀歌／中国旅行のすすめ／上海のナナハンライダー／四合院の中の鉄腕アトム／揺れる満州。

アスファルト防水

ＮＡシステム

静岡瀝青工業株式会社



静岡瀝青工業㈱では，今度Tex-Mastic社（米国）のアスファルト製品の輸入販売にともない冷工法アスファルト防水システム，ＮＡシステムを新発売した．　この工法は現在最も信頼性が高いアスファルト防水の施工上の問題点を解決し，安全に容易に確実な防水を可能にしたもので，ＮＡ工法は，熱アスファルトのかわりにTex-Mastic International社のアスファルト・コーティングを使い，ルーフィングには同社のストレッチ・ルーフィング，スーパーバードＴ35・Ｔ41またはグラスファイバー・ルーフィング，グラスバードを使っている．　この仕様に使われるアスファルト・コーティングやアスファルト・プラスチック・セメント（コーチング），アルミニウム・コーティング（シルバー）などはすべてTex-Mastic社の天然アスファルト製品で，すでに海外で多くの実績をもっている．

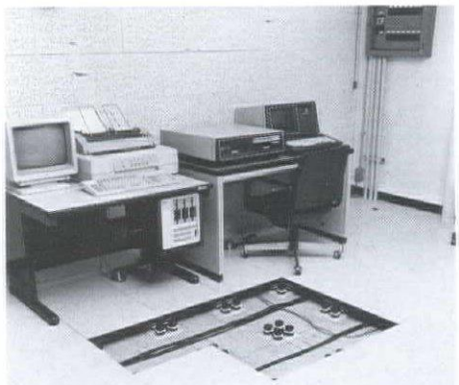
特長

①熱を使わず常温で施工できるため，安全で大型の道具がいらない．
②補修工事の際に旧防水層を取り除く必要がない．
③建物への荷重付加が小さいので，あらゆる構造の建物に使える．
④万一，漏水が起きても，補修は簡単にできる．

電子計算機室床

ケーブルフロア

株式会社ブリヂストン



㈱ブリヂストンでは，今度フリーアクセスタイプの低床式ＯＡ床，ケーブルフロアを新発売した．

特長

①施工後の着脱が自由に行え，必要に応じて配線内容の変更，レイアウトの変更ができる．
②仕上材は，カーペットとタイルの２種類があり，いずれも帯電防止仕様になっている．
③水平精度および施工性をアップするため，フロアパネルを設置する支持脚を４点独立調整方式にしている．
④フロアパネルの裏側には，支持脚との連絡を完全なものにするため，特殊ゴム製のカップリングピースを装備し，横ズレを防ぐため耐震性に優れている．
⑤フロアパネルの材質は，メラミン化粧紙貼りパーティクルボードを使用し，木口部分も防湿処理を施してあるので，耐湿安定性に優れている．

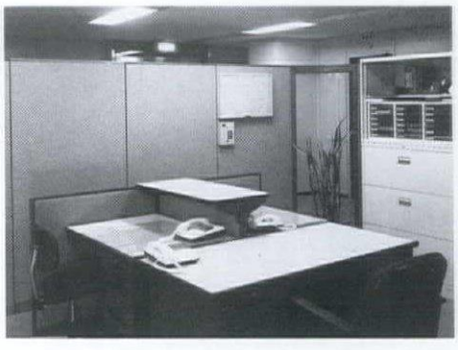
仕様・価格

寸法　450×450×30mm（仕上材含まず）
重量　4.3kg　　（　〃　）
適用高さ　100～160mm
Ｐタイル仕様　27,000円～28,000円/㎡
カーペット仕様　28,500円～29,500円/㎡

行先管理システム

行先管理システム

株式会社岡村製作所



㈱岡村製作所では，今度在・不在，行先，帰社時刻，現在時刻など，オフィス内での個人の動きをコンピュータで一括管理し，その情報を必要な場所に伝える，行先管理システムを新発売した．　これは64キロビットのメモリー（記憶素子）と双方向式のチャンネルを備えた中央コントローラー，各個人用（２タイプ有）または共用のローカルユニット（情報入力器），壁掛け式の表示板で構成されている．

特長

①ローカルユニットの入力方法は，必要な項目ボタンを押すだけでできる．
②個人用ローカルユニットは２タイプで，高性能タイプは在・不在，行先，帰社時刻が手元でも確認できる．
③行先表示板は６タイプがある．
④１本のコードに情報線２芯，電源線２芯がシールドされたケーブルが使用されているので，配線コードは１本ですむため，施工が楽で，レイアウト変更に伴う移設や追加工事も簡単である．
⑤機械的に動くところがないので，故障が少なく，メンテナンスにも手間がかからない．

静岡瀝青工業株式会社
静岡市新川２丁目６番４号
〒422　Tel 0542-85-5111

株式会社ブリヂストン　化成品企画部
東京都中央区京橋１丁目10番１号
〒104　Tel 03-567-0111

株式会社岡村製作所　オフィス家具部
東京都千代田区永田町２丁目14番２号
〒100　Tel 03-593-5619

●
シーリング材

シーカフレックス
15LMニューパッケージ

●
日本シーカ株式会社



日本シーカ㈱では，今度新しい包装体系で作業性，保存安定性，経済性に優れたシーカフレックス・15LMニューパッケージ（モノ・ソーセージ）を新発売した．従来のパッケージとしては，缶入り，カートリッジ入り，チューブ入りおよび一部ソーセージ入りが市販されており，湿気硬化型のシーリング材では，ソーセージは二重パッケージ方式が一般的に採用されているが，製造時のパッケージのコストアップと作業時における手間などの問題があった．　シーカフレックス・15LMニューパッケージは，従来の一般のソーセージがとっている二重パッケージ方式を打ち破り，アルミパッケージに直接材料が入ったモノ・パッケージ方式をとり，そのままガンに装填し，先端部をカットして施工できるので，専用ガンの必要はなく，一般吸入ガンで容易に使え，作業に伴う混合撹拌，材料ロスおよび清掃などがはぶけ，非常に作業効率を高めた作業者のための新しいパッケージになっている．

仕様

荷姿　400mℓ/本　20本入/箱

●
防虫・防蟻材

レミファルトT

●
日本舗道株式会社



日本舗道㈱では，今度床下の防湿・防白蟻兼用アスファルト常温合材，レミファルトTを新発売した．

特長

①レミファルトTの厚さ2cmは，コンクリート壁厚さ20cm以上の防湿効果がある．

②優れた殺蟻効力と効力持続性の高い薬剤効果で，長期間白蟻の床下侵入を防ぐ．

③特殊加工法で混合処理された安定した製品なので，万一床下浸水などで水にさらされても，特殊薬剤の溶出の恐れはなく，水質汚染の心配はない．

④居住者の人体に何等悪影響なく，公害の心配もない．

⑤白蟻損害賠償保険により，新築に限り10年間（5年再契約）の保証がつき，万一白蟻による被害が生じた場合，保証建物の修復費用を300万円を限度として支払ってくれる．

●
家具

リベロシリーズ

●
日本楽器製造株式会社



日本楽器製造㈱では，今度家具の新製品としてリビングセット，ダイニングセット，ベッドからなるリベロシリーズを新発売した．　これは個性的な暮らし方，快適な生活を求める20～30才代にターゲットを絞って開発したカジュアル家具で，目的に応じて使い分けができるユニークな可動機構と都会的なデザインからできている．　ワンタッチで楕円形から半円形に折りたため4人掛のテーブルやダイネット（朝食用）カウンター，バーカウンターとして利用できるダイニングテーブル，長椅子や座椅子，カウチ（昼寝用ベッド）に変化するリビング椅子など，暮らしの場面場面に応じて，LDKを快適に有効利用できるほか，独身から新婚，30代へのライフスタイルの変化にも十分対応できる．

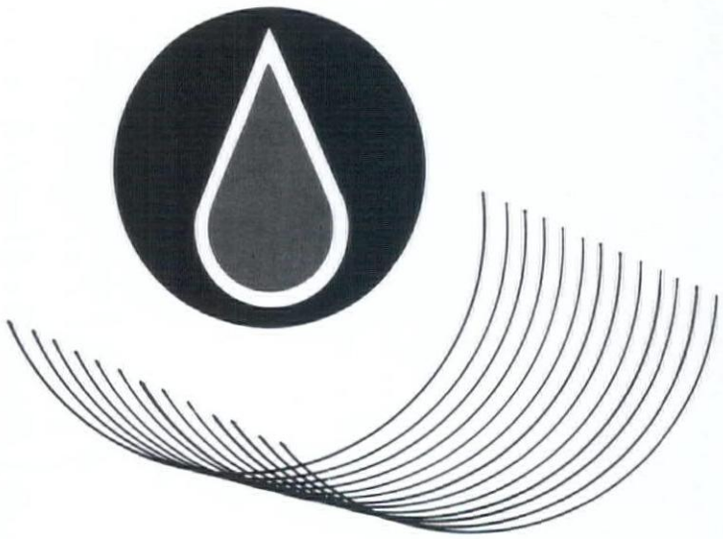
価格（写真タイプ）

テーブル　75,800円
椅子（1人掛）　57,800円
（2人掛）　97,800円

日本シーカ株式会社
東京都港区新橋4丁目2番1号
〒105　Tel 03-436-4131

日本舗道株式会社
東京都中央区京橋1丁目19番11号
〒104　Tel 03-567-8171（大代）

日本楽器製造株式会社　広報部
東京都中央区銀座7丁目9番18号
〒104　Tel 03-572-3111（代）



誠意と情熱

◎総合設備工事

ビル設備
空調・給排水衛生

工場設備
各種配管・公害防除

住宅設備
給排水衛生・給湯・暖冷房

ガス設備

◎環境整備工事

一般土木
上下水道・舗装・宅造

◎ガス機器関連販売

東横工業株式会社

取締役社長　根本　豊

横浜本店／横浜市西区平沼二丁目11番11号　TEL(045)323-2531

東京本社／東京都千代田区内幸町二丁目1番1号(飯野ビル)　TEL(03)593-0671

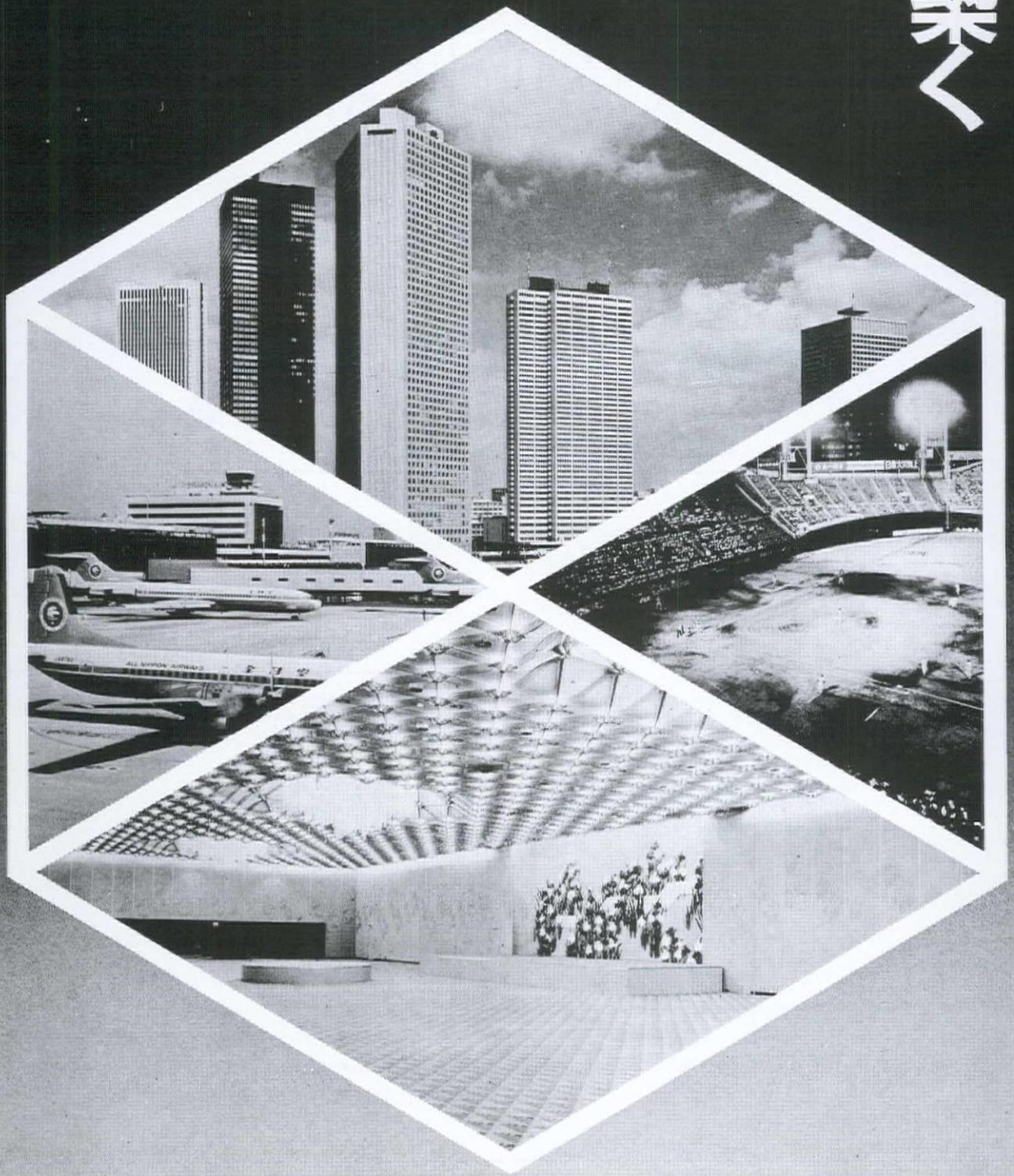
〈支　店〉　大阪・東北

〈営業所〉　北海道・岩手・福島・群馬・栃木・多摩・千葉
川崎・厚木・横須賀・湘南・静岡・福岡

豊かな生活環境を築く

量から質的な豊かさへの転換がせまられている'80年代——
人間がほんとうの人間らしさをとりもどすための環境づくりをめざして
私達は技術開発に新たな意欲をもやしております。
人間生活に真に価値ある革新をおしすすめてゆく企業
太陽工藤工事にご注文ください。

- ●電気工事
  ビル電気設備／工場電気設備／防爆電気設備
  外線・発・変電設備／架空送配電線／通信線
  地中送配電線
  鉄塔工事
- ●アンテナ工事
- ●プラント工事
- ●計装工事
- ●空調工事
- ●給排水・衛生・特殊配管工事
- ●土木工事
- ●損保代理店業務・右記に付帯する一切の事業



総合設備工事のパイオニア

太陽工藤工事株式会社

取締役社長　代谷正元
本社／〒553大阪市福島区福島7丁目22番8号
☎06(452)1151(大代)
東京／〒105東京都港区芝2～2～17
☎03(454)7311(大代)

良心的な

電気工事

- ゆたかな経験
- すぐれた技術



大正海上火災本社ビル　設計㈱日建設計

東光電気工事株式会社

取締役会長　松本福男　　取締役社長　菅保之

東京都千代田区西神田1－4－5　〒101　電話292－2111　大代表

新工法！プレノテクト吹付工法

陸屋根防水には
奥山式 特許 絶縁工法

カッパー防水帯

コーパータイト

OKUYAMA KAKOGYO
OAM
WATER・PROOF

✣オクロン防水帯

特許 奥山式熱工法・冷工法綜合防水層

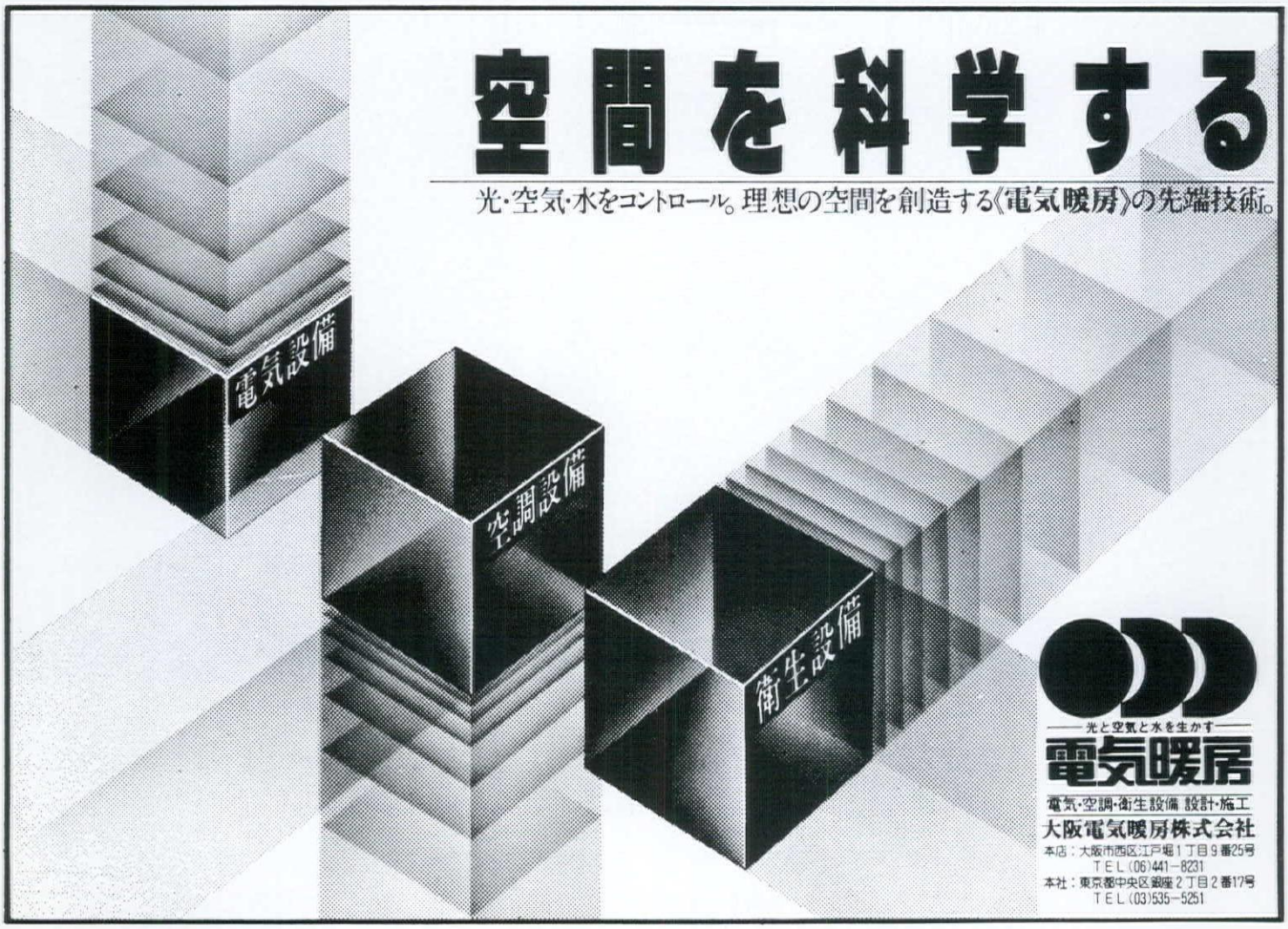
奥山化工業株式會社

本　　社	東京都中央区銀座8－4－9	電話 03（571）2703
厚木出張所	厚木市金田字宮畑259	電話 0462(21)6092
大阪出張所	大阪市都島区都島中通り2－3－1	電話 06（921）2497
名古屋出張所	名古屋市南区若草町3-3	電話 052(811)3660
九州出張所	佐賀県諸富町	電話 0952(47)2945

●お申込次第カタログ進呈

空間を科学する

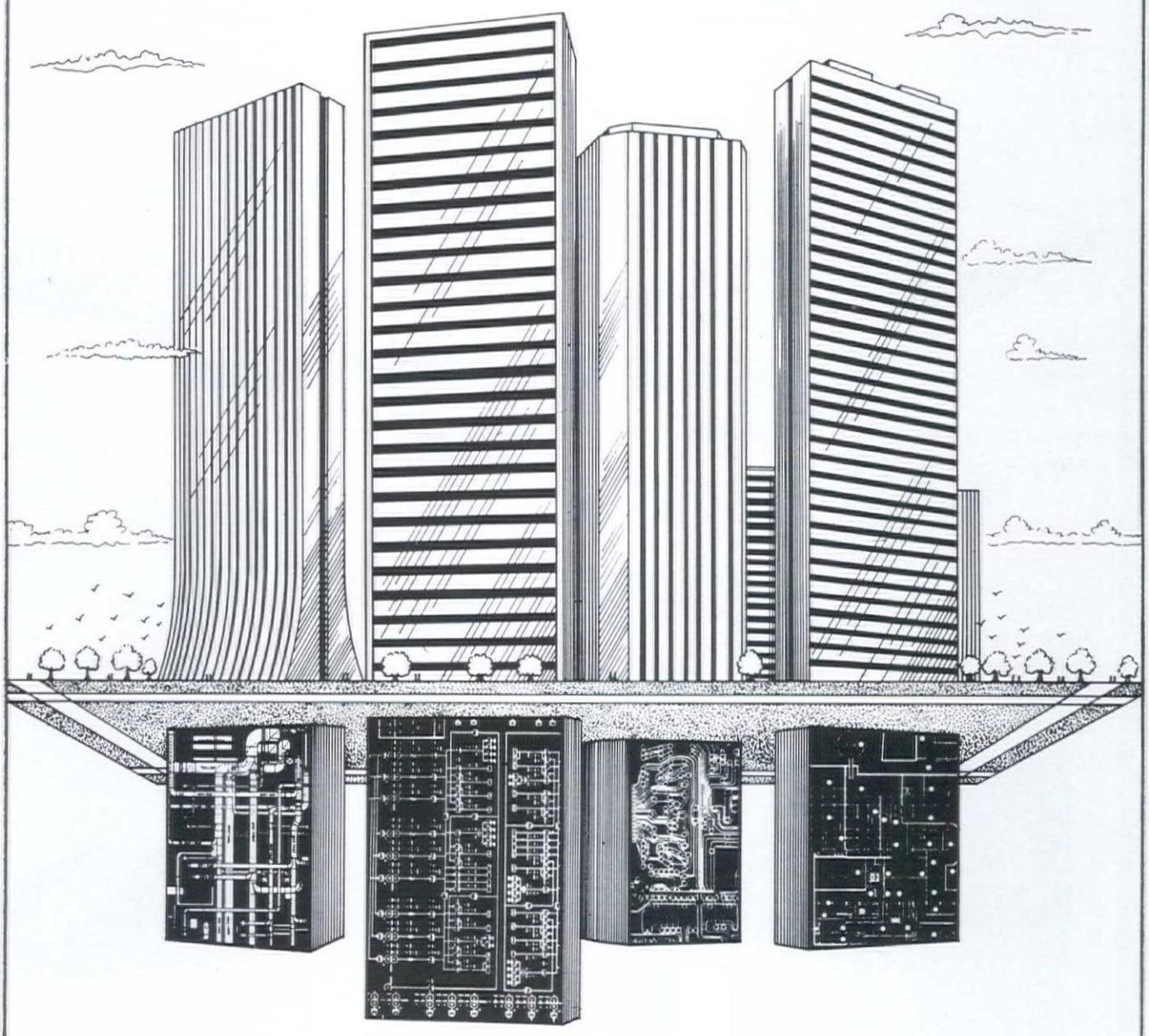
光・空気・水をコントロール。理想の空間を創造する《電気暖房》の先端技術。



光と空気と水を生かす
電気暖房
電気・空調・衛生設備 設計・施工
大阪電気暖房株式会社
本店：大阪市西区江戸堀1丁目9番25号
TEL（06）441－8231
本社：東京都中央区銀座2丁目2番17号
TEL（03）535－5251

情報世紀を照準する……
近電工のシステムエンジニアリング

高度情報社会へと展開する都市……
新しい世紀へ　活動し制御する全機能をきびしく構成する
近電工の総合技術と総合施工体制――



電気・計装・空調・管・防災・土木

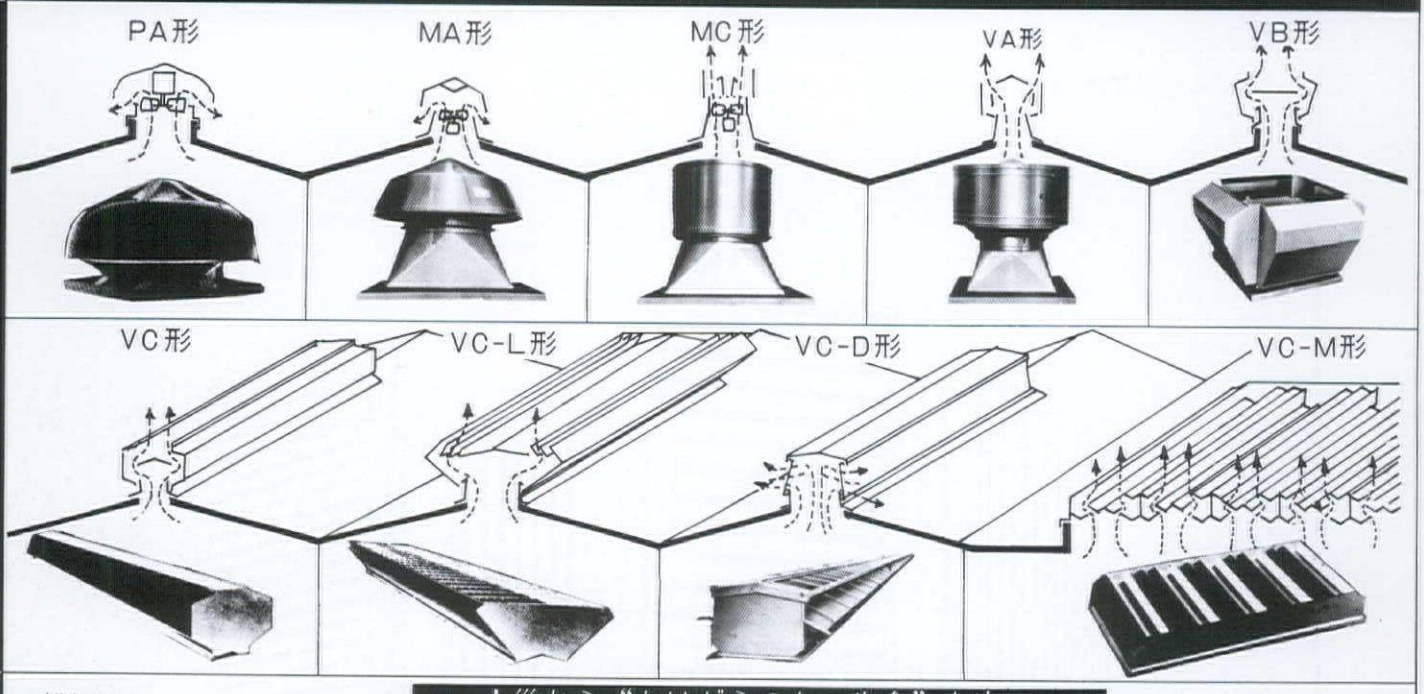
システムの信頼を高める
近電工

近畿電氣工事株式會社
大阪市大淀区本庄東2丁目3番41号　〒531　☎06(375)6000

坂本商会は創業68年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

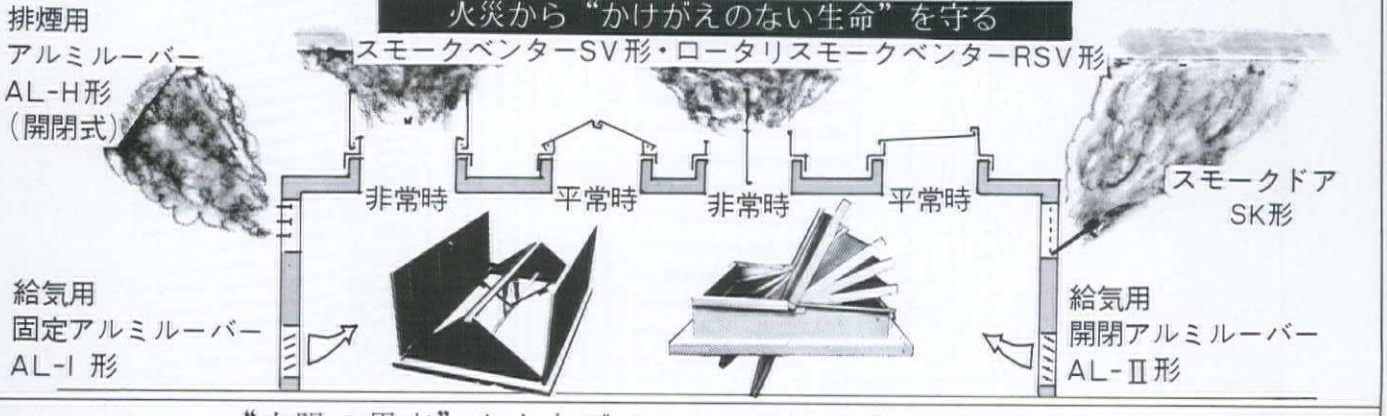
強制換気・自然換気装置

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群



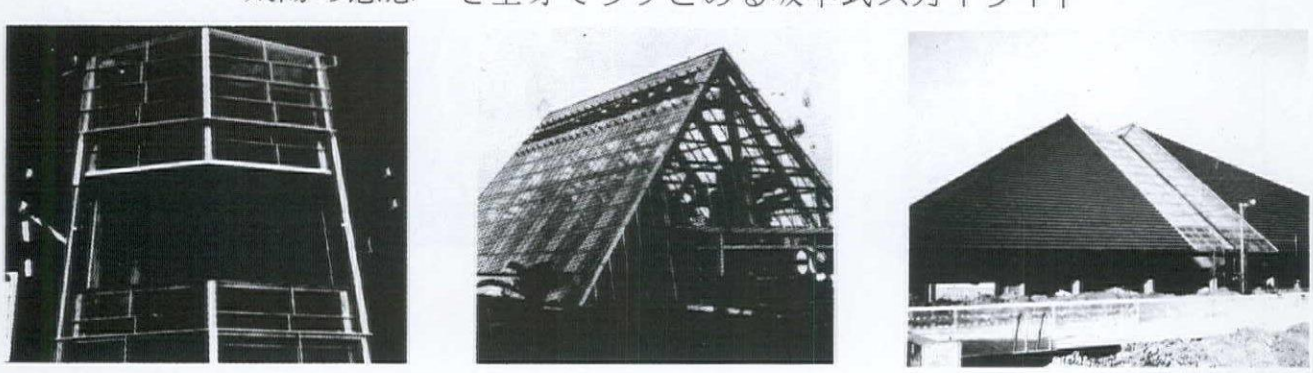
排煙・ルーバー装置

火災から“かけがえのない生命”を守る



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂本商会

本　　社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103	電話 東京 (03) 271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270	電話 松戸 (0473) 87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270	電話 松戸 (0473) 87－3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131	電話 東京 (03) 619－2221(代)

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

広告目次

SD誌に広告をお申し込みの際は

下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1
ニッタビル (572) 3381
FAX (572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル (362) 6515
FAX (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8
(818) 1961

大阪——大阪市東区淡路町1-12
昭栄ビル (231) 4548

●新建社

東京都中央区日本橋3-5-12
守尾ビル (271) 3271

●中外広業社

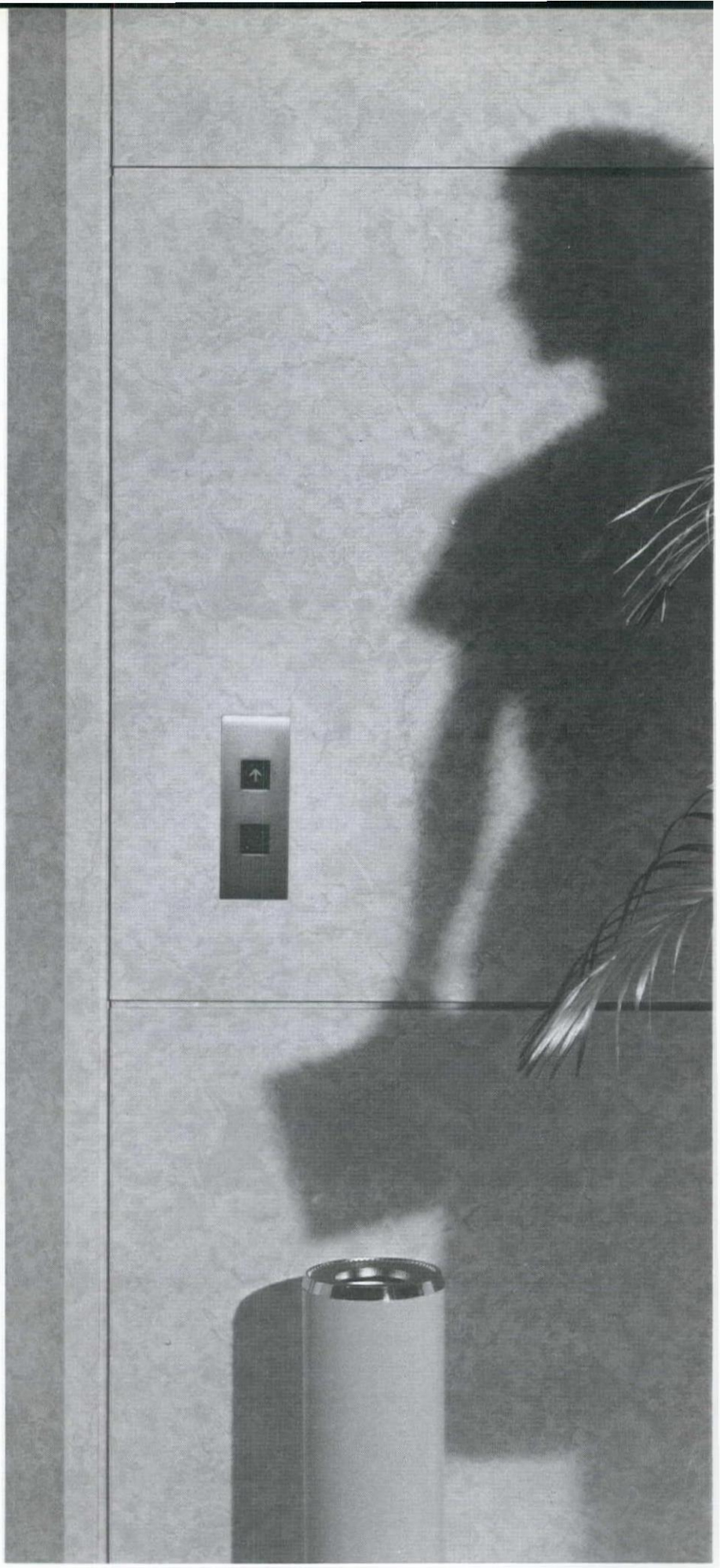
大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル (376) 1791

東京——東京都千代田区内神田1-11-1
酒井ビル (293) 0621

名古屋——名古屋市中区錦1-13-19
北辰名古屋ビル (221) 7641（代）

ア 旭電業㈱——006
旭硝子㈱——96
イ 岩城造園㈱——011
オ 奥山化工業㈱——018
大阪電気暖房㈱——018
カ 軽井沢ホテル鹿島ノ森——009
鹿島建設㈱——004
川崎電気㈱——105
キ 近畿電気工事㈱——019
コ 五建工業㈱——010
サ ㈱坂本商会——020
三機工業㈱——102
シ 新日本空調㈱——103
昭和電機工業㈱——84
篠原電機工業㈱——101
タ ギャルリーためなが——表2
高砂熱学工業㈱——表3
大成温調工業㈱——104
太陽工藤工事㈱——016
大興物産㈱——008
㈱大気社——106
ト ㈱東芝——022
東海電気工事㈱——010
東邦アート㈱——表2
東陶機器㈱——001
東京避雷針工業㈱——100
東横工業㈱——015
東光電気工事㈱——017
東洋熱工業㈱——116
ナ 中立電気㈱——007
ニ 日本楽器製造㈱——表4
日新製鋼㈱——107
ニチアス㈱——98
ヒ ㈱日立製作所——002
日立電線㈱——99
フ フジテック㈱——108
マ 松下電器産業㈱——003
ミ 三菱電機㈱——115
モ モビリア㈱——005
ヤ 矢崎総業㈱——012
ロ ロンシール工業㈱——93

TOSHIBA



「インバーター」が来た。

先端技術でなめらか走行。
規格形エレベーターも
インバーターの時代です。

かろやかに、なめらかに、新登場。
東芝インバーターエレベーター・セレブラムVF。
VVVFインバーターと
ベクトル制御の採用で
走行のすべてを緻密にコントロール。
かつてない、すばらしい乗り心地を実現しました。
それればかりか
省エネルギーでも飛躍的に前進。
エレベーター用電源設備容量が
従来の50%ですむうえ
消費電力も大幅に節減できます(当社ACVV方式比)。
制御マイコンの高級化
群管理情報の光ファイバー伝送など
すみずみまで東芝ならではの先端技術を駆使。
超音波ドアセーフティー、音声合成案内はじめ
オプションも多彩に用意。
充実の機能と装備で
エレベーターの新しい時代を拓きます。

東芝インバーターエレベーター(規格形)

●お問い合わせは
株式会社 東芝 昇降機事業部 〒105 東京都港区芝浦1-1-1(東芝ビルディング) TEL(03)457-4619

先端技術をくらしの中に…E&E(エネルギーとエレクトロニクス)の東芝